

☒大賢者☒と☒ガチャ☒を得た転生者の冒険譚

白の牙

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何処にでもいる人と同じように日々暮らしていた男に1通のメールが届く。そのメールが自分の人生を大きく変えることになる

ちよつと今までとは趣向を変えてみました

目次

設定（隨時更新予定）

序章

第01話

第02話

第03話

第04話

第05話

第06話

第07話

第08話

第09話

第10話

第11話

第12話

第13話

第14話

第15話

第16話

第17話

第18話

第19話

第20話

第21話

第22話

1

11

16

24

31

35

41

50

57

65

75

79

88

95

101

105

115

121

133

146

158

167

171

177

第 4 7 話	第 4 6 話	第 4 5 話	第 4 4 話	第 4 3 話	第 4 2 話	第 4 1 話	第 4 0 話	第 3 9 話	第 3 8 話	第 3 7 話	第 3 6 話	第 3 5 話	第 3 4 話	第 3 3 話	第 3 2 話	第 3 1 話	第 3 0 話	第 2 9 話	第 2 8 話	第 2 7 話	第 2 6 話	第 2 5 話	第 2 4 話	第 2 3 話
373	366	353	341	332	324	318	305	290	281	277	270	263	255	246	237	231	226	219	213	204	199	191	187	182

第
5
1
話



394

第
5
0
話



389

第
4
9
話



384

第
4
8
話



378

設定（随時更新予定）

八神飛羽真（とうま）

容姿 黒鉄一輝

神々が数百年に一度行う異世界転生の抽選に選ばれた男性。胡散臭い内容のメールを見て捨てようと思っていたが、無意識でボタンをクリックしてしまい、異世界転生をすることとなった。快活・素直な性格で誰にもフレンドリー接しているが転生先のとあるクラスメイト2名とその取巻きには嫌悪している。初の転生先は「ありふれた職業で世界最強」の世界だが、とある世界と混じった世界であり、中学3年の時にその世界の主要人物に巻き込まれる形で異世界転移を行っている。ガチャで得た能力を有効に扱うために小さいころから剣道場に通っており、道場の一人娘の八重樫雫とは幼馴染。中学は違うが交友は続いており偶にあつては愚痴を聞いたりしていた。転生特典で手に入れたトレーニングマシンを使って鍛えたおかげでパワーとスピードを兼ねそろえた身体へとなった。

戦闘スタイル 剣と魔法を併用した魔法剣士だが、剣のほうが主となっている

戦闘衣 賢者の孫のアルティメット・マジシャンズの戦闘服（上着の色は黒）

とある王国の城下町の洋裁屋と武器屋が協力して作って貰った飛羽真の戦闘衣。生地がガチャで手に入れたレアメタルを織り込んで作ったことにより、鎧にも負けない防御力を秘めている。さらに厳選された素材により軽量性、伸縮性も高く動きを阻害されることもない。

戦闘衣Ⅱ 仮面ライダーセイバーの富加宮賢人の服（初期）

知り合いの職人に新たに作って貰った飛羽真の新たな戦闘衣。ガチャで手に入れたコットン生地をベースに鉱石や飛羽真が大迷宮で狩った魔物の素材をふんだんに使って出来上がった服。耐久性、軽さ

等々全てにおいて最初の戦闘衣を凌駕している。施された最適化の魔法で自動で着る者の体格に合うようになっていく。更に各属性魔法への耐性に加え、防汚に防臭等も付与されている。

所有能力＋スキル＋魔法（オリジナル含む）

量子ボックス（盾の世界で獲得）

オーバードロードの武技（盾の世界で習得）

気闘法（盾の世界で入手）

全集中の呼吸＋常中（盾の世界で習得）

剣術LV00 スキルレベルが上がるたびに体力＋5、筋力＋2、俊敏＋1がステータスに加算されていく。尚、このスキルでの加算は本来のステータスとは別枠である。レベルが100になると同系統の新しいスキルへと進化する

格闘術LV00 スキルレベルが上がるたびに体力＋5、筋力＋1、耐性＋1、俊敏＋1がステータスに加算されていく。尚、このスキルでの加算は本来のステータスとは別枠である。レベル100になると同系統の新しいスキルに進化する。

瞬発力LV00 スキルレベルが上がるたびに筋力＋1、俊敏＋3がステータスに加算される。さらにレベルに応じて瞬発力にプラス微補正。

直感LV00 スキルレベルが上がるたびに直感力にプラス微補正

鋭利LV00 スキルレベルが上がるたびに筋力＋1、器用＋3がステータスに加算される。さらにレベルに応じて得物に斬れ味にプラス微補正

風脚 風で足場を作り、自由に宙を駆ける。足場に加速を付与することも出来る

破壊神ビルの力 1日2時間のみ使用可能

所有武器＋アイテム

斬神刀皇 異世界での初めてのガチャで手に入れた武器。本来なら大太刀だが飛羽真に合わせダウンサイズされ太刀となっている。

強度、切れ味共に高く、刃こぼれもしにくい。魔法伝導率が高く、魔力を込めることによって強度と切れ味が上昇する。

聖剣ソードドライバー＋火炎剣烈火

ワンダーライドブック（ブレイブドラゴン、ストームイーグル、西遊ジャーニー等）

星の杖（オルガノン）

二代鬼徹

闇夜の写し ガチャで手に入れた漆黒の大盾。『悪食』と呼ばれる何でも吸い込んでしまう能力があり、吸い込んだ物によって魔力が回復する。魔力が全開の時は、盾に魔力でできた水晶が浮かび上がり、それを砕くことで魔力を回復することが出来る。

グラールロケット 全状態異常を無効化するアクセサリー

闇黒剣月闇＋ジャアクドラゴン、ジャオウドラゴン

エクシードリング 俊敏を除いたすべてのステータスを上昇させる。

無の呼吸 五大流派の呼吸4つに加え、派生の呼吸と始まりの呼吸のを納めた独自の呼吸剣術。

水ノ型

風ノ型

炎ノ型

雷ノ型

花ノ型

霞ノ型

日ノ型

変幻無双流 異世界にて飛羽真が修得した流派。生命エネルギー（体力）を消費することによって自身を強化したり、外にある気を集めることでスタミナを回復することが出来る。

飛撃 変幻無双流の技で速く言えば飛ぶ斬撃。飛羽真は同じよう

な武技を修得しているが、威力は段違い。

ゼシカ・アルバート

異世界トータスで飛羽真が召喚した少女。召喚され飛羽真についてと複数の女性とかかわりがあると知った時は嫌悪したが、フェイト、木乃香、シルヴィアとの通話で飛羽真の人なりを教えられ、ここまで慕われ好意を抱かれていることに嫌悪はなくなり逆に興味を抱くようになる。魔法での戦闘を得意としているが鞭や短剣での戦闘も一通りこなせる

得たスキル

魔導 魔法の威力上昇、効果範囲拡大

杖術LV00 スキルのレベルが上がるとに体力+5、筋力+1、耐性+1、魔力+1がステータスに加算される。尚、このスキルでのステータスの加算は本来のステータスとは別枠である。

得た武器+アイテム

ブラックロッド

ワイズマンドライバー+ウィザードリング

シユテル・スタークス

見た目 漫画版リリなのINNOCENTSに出てきた大人版シユテル（なお着痩せする体質で胸部はフェイト並みにある）

飛羽真はトータスで召喚した少女。フェイト同様、ゲーム、劇場版、漫画などのすべて意識と記憶が一つになって召喚されたシユテル。性格は冷静沈着で卓越した頭脳を持っており、参謀も務めている。飛羽真のことは喚ばれた当初から興味を抱いている。取得したスキルで回復薬の作製や、薬草の育成等を行っている。束が来てからはその知識を買われ助手も務めている。

得たスキル

魔導 魔法の威力上昇、効果範囲拡大

杖術LV00 スキルレベルが上がるたびに体力+5、筋力+1、耐性+1、魔力+1がステータスに加算される。尚、このスキルでのステータスの加算は本来のスキルとは別枠である。

調合

指揮

鑑定

得た武器+アイテム

ゼイネシスクラッチ

メイジドライブ+ウイザードリング

ゼスト

容姿 新妹魔王のゼスト

飛羽真がガチャで召喚した魔族の女性。飛羽真が偶々持っていたメイド服を着て、炊事等をおこなうほか、戦闘も行う。召喚した時に自動で飛羽真との主従契約が結ばれている。飛羽真には忠誠と同時に愛も混じっている。魔法での戦闘を得意としており、土系統を主に使っている。

得たスキル

成長スキル 『奉仕』

成長スキル 『調理』

成長スキル 『格闘術』

篠ノ之束

容姿 ISの束

防護服兼ISスーツ フォーミュラスーツ type Kの色違

い（カラーは紫）

インナーは薄紫色

飛羽真がガチャで召喚した世紀の天災（誤字にあらず）科学者。本人曰く細胞レベルでオーバースペックらしく、生身で魔族のゼストと打ち合えるほどの身体能力を持っている。頭脳のほうも凄く、スクラップから最新のパソコンを凌駕するパソコンを自作出来るほど。ISのことを飛羽真達に話すと、女性にしか使えないのは難点だが、宇宙に行きたいという夢を理解してもらったことから飛羽真達のこと、特に飛羽真のことを気に入っている。シュテルの知識と協力の下、フォーミュラーシステムとヴァリアントシステムを開発した。

テイリス・ハウリア

容姿 問題児の黒ウサギ

種族 亜人（兎人）

ライセンス大渓谷で助けられたハウリア族の女性の一人。シアと同年齢の女の子で背は年齢に比べ低いがスタイルは抜群（俗にいうトランジスタグラマー）。襲われそうになった自分達をさっそうと現れ助けてくれた飛羽真に一目ぼれし、旅に着いて行くためにシュテルの課した試練を乗り切り、旅に着いて行く権利を勝ち取った。

エルザ・ランドール

容姿 Sランク冒険者である俺の娘達のエルザ（漫画版）

服装 異世界転生は2度目ですに出てくるエルカの服

盾の世界で飛羽真やフェイト、シルヴィア、木乃香とパーティーを組んでいた少女。戦災孤児で奴隷商に売られていたところを飛羽真に（正確には大賢者）才を見定められ買われた。最初はおどおどしていたが時が経つにつれ、それもなくなった。飛羽真達のこととは最初ご主人様と呼んでいたが、兄や姉と呼ぶよう言われ、兄上や姉様と呼ぶようになった。飛羽真と同じように呼吸剣術（風）、武技、変幻無双流を用いて戦う。飛羽真のことは兄のように慕っていると同時に異性

としても見ている。

原作キャラ

八重樫雫

原作キャラ。剣道場の一人娘で飛羽真の幼馴染にしてヒロインの1人。親友の香織にも滅多に見せない素の自分を飛羽真には見せている。小学生の頃に受けたいじめを飛羽真が救った以外、設定は原作通り。

南雲ハジメ

ご存じ原作の主人公。飛羽真とは中学の時から仲。仲は良く漫画やアニメ、ラノベ等の話をする。学業に励みつつ、将来の夢の為に両親の仕事を手伝っている。それ以外は原作通りだが、飛羽真に持たされたお守りのお陰で左腕は落とされてなく、右目も消失していない。

中村恵理

設定は原作通りだが、自殺しようとして、助けたのが光輝ではなくハジメ。ハジメの両親の協力の下、ネグレクト気味だった母親と暴行を行っていた父を告訴した。施設に行く予定だったが、南雲家が引き取り、一緒に暮らす事となった。自分のこと助けてくれたハジメに感謝しており、好意を抱いている。魔物の肉を食べたことから、身長が少し伸び、スタイルもモデル並みの体格になった。

ユエ

原作ヒロイン。設定は原作通り、違うのはハジメだけでなく恵理にも助けられたことと、恵理とハジメの正妻を巡って水面下で戦っていること。

園部優香

ヒロインの1人。初めて会ったのは中学3年の時。友人と共に不

良に絡まれていた時に助けられた。その後、高校で再開。再開してから飛羽真の事を異性として意識するようになった、友人にそのことを話したら「恋だね」と言われた。

オスカー・オルクス

かつて神に挑もうとしたが敵わず、反逆者と罵られた解放者の主要メンバーの1人。オルクス大迷宮を作った後、住居の3階の玉座で白骨死体として見つけられた。住処を一望できる場所に埋められ墓を立てられたが、飛羽真が手に入れた死者蘇生のカードによつて蘇った。飛羽真に旅に誘われたが、蘇った自分がある神にばれたら前と同じことになってしまうと言いつ断つたが、飛羽真の一喝で目が覚め、旅に同行することを決意する。

地球に居残り組

フェイト・T・ハラオウン

容姿 リリなののフェイト (sts)

飛羽真が転生してしばらくたった後、偶然とつた行動で手にいれたガチャで召喚した魔法少女。無印くForceさらにInnocent、Reflection、Detonation全ての時空のフェイトの意識と記憶が一つになって召喚されたフェイト。飛羽真の親の知り合いの子で家で預かっているという風に周囲には認知されている。飛羽真と共に異世界へと巻き込まれ、世界を守るための戦いへと身を投じた。飛羽真のことが好きで支えになろうと日々精進している。検事、弁護士両方の資格を持った弁護士になるのが夢で勉学に励んでいる。

所有武器＋スキル

ソードドライバー＋雷鳴剣黄雷

ワンダライドブック (ランブドアランジーナ、ニードルヘッジ)

ホッグ、トライケルベロス、ガトライクフォン)

飛羽真作成ミスリル製の片刃剣(見た目は DMCのレッドクイン)

オーバーロード 武技

近衛木乃香

飛羽真が2人目に召喚した少女。おっとりとした大和撫子でパーティーの回復役。天然かつおおらかな性格で突然呼び出されたことに驚いたもののすぐに順応するなど見た目とは裏腹に度胸が強い。快活で穏やかな飛羽真には出会った時から好印象で過ごしていくうちにそれは好意へと変わった。戦いの後は飛羽真と共に飛羽真の世界へと行き、一緒に暮らしている。将来の夢は決まっていないが焦らず自分のペースで決めようと思っている

得たスキル、魔法、武器

ドラクエの回復魔法(ベホマ) + 過剰回復魔法

家事スキル

飛羽真特性の鉄扇

シルヴィア・リユーネハイム

飛羽真が3人目に召喚した少女。まっすぐ、誠実な性格だが、仲間(特に飛羽真)の前では年相応の一面を見せる。歌を媒介に治癒能力を除いた事象をコントロールする事が出来る能力を持つ。試合ではない本当の命のやり取りの戦場で生き残るためとはいえ初めて命を奪った際は震えて動けなくなり、そこを突かれ殺されそうになったが、飛羽真に助けられた。それから数日の間、喋れずにいたが飛羽真のお陰で立ち直ることが出来た。そのことから好意を抱くようになった。戦後は飛羽真に着いて行く。期待の新人アイドル歌手とし

てデビューしている。

得たスキル、武器

音銃剣錫音

ワンダライイドブック（ヘンゼルナッツとグレーテル、ブレイメン
のロックバンド）

序章

「ん？何だこのメール？」

家で仕事をしていた青年の元に1通のメール届いた

「差出人不明。迷惑メールか？しょう・・・」

いつも通り迷惑メールをゴミ箱に捨てようとしたが何となく今までの迷惑メールと違うような気がし、メールを開いた

「何々？ おめでとうございます。貴方は神々の抽選により、異世界転生を行う権利を得ました。異世界転生を行う際は添付されたアドレスをクリックしてください。ご迷惑をおかけしますが本メールを消去してください”なんじゃこりや？”」

書かれていた内容に青年はあつけにとられた

「『異世界転生』。二次小説でよくみるワードだが現実的に考えて出来るわけねえだろう・・・消去だ消去」

馬鹿馬鹿しい内容に青年は送られてきたメールを消去しようとしたが、手を止め考えてしまった。もしこの内容が本当に自分が見ているアニメや漫画、ラノベの世界に行き、キャラと話したりすることができるなら”アニメ好きなら一度は考えることである。それは青年も例外ではなく無意識で添付されたアドレスをクリックしてしまった

「やべ!?!クリックしちまった!?!」

気づいたときには遅く、パソコンの画面が光り輝き、部屋を包み込んだ。そして、光が収まると部屋には誰もいなかった。数日後、このことはテレビや新聞に記載された

「う・う・う・うん。ここ・・は何処だ？」

青年が目覚ますとゲームなどでよく出てくる神殿にいた

「俺は確か家で仕事をしてて、差出人不明のメールが届いてそれを見て、間違って添付されたアドレスをクリックして、気が付いたらここ・・・。もしかしてあのメール内容、マジだった？」

迷惑メールだと思っていたメールの内容が本物だったと知り青年は驚く

「つとこういうことはもしかして俺・・あっちじゃ死んだことになってるのか？」

不本意とはいえ死んだことになった青年は嘆くがあまり悲しい気分にはならなかった。両親は幼いころに亡くなり、引き取ってくれた叔母夫婦の下で暮らしていたが高校に入ると同時に自立することを決め一人暮らしを始め、今に至る

「心残りなのは色々とお世話になった叔母さん夫妻に恩を返せなかったことかね」

青年が嘆いているとディスプレイが投影された

「ようこそ、八神飛羽真様。メールでも書かせていただきましたが、もう一度お祝いをさせていただきます。おめでとうございます、貴方は神々の抽選により、異世界転生を行う権利を得ました。まず初めに転生特典数を決めるルーレットを行います。好きなタイミンでディスプレイの停止ボタンを押してください。尚、数分すぎても押されない場合、自動的に止まります」

「特典を決める・・か。まあ、異世界転生のお約束だな。ルーレットって完全に運だよりだな。つて、もう回り始めてるし!？」

心の準備をする暇なく回り始めたルーレットを見て青年「八神飛羽真」は焦るも、心を落ち着け、ルーレットを見る

「(どうせ貰えるなら多いほうが断然いいよな。・・・最大特典数は見たところ15か。だとしたら狙うのは10以上。ゲーセンで鍛えたルーレットの腕を見せてやるぜ)」

飛羽真はルーレットをじっと見て、速さに目をならし、タイミングを見計らう。そして、

「(ここだ!)」

停止ボタンを押した。止まった数字は・・・9

「少し早かったか」

「八神飛羽真様の特典数は9に決まりました。では、次に特典を決めます。ルーレットと同じようにボタンを押してください」

「まさかのガチャ!？」

得点を決めるのがソーシャルゲームでおなじみのガチャなのに飛羽真はなお驚いた

「(これ完全に運だよりだな!?) ええ〜い、神様、仏様、どうか、どうか、いい特典が来ますように。・・・チエストオ!!」

飛羽真は祈りを済ませると何処ぞの体育会系ウルトラマンのような掛け声とともにボタンを押す。ガチャが始まり、数秒後9個の特典がディスプレイに表示された

- 1、肉体の限界突破
- 2、錬成
- 3、膨大な魔力
- 4、豪運
- 5、武芸がみにつけやすい
- 6、無制限異世界転生権利
- 7、岬越寺秋雨作トレーニングマツシーン
- 8、大賢者(転生したらスライムだった件)
- 9、ガチャ機能付きスマートフォン

「まじかよ、戦闘に役立ちそうなのが1つもないうえ、この中の一つは拷問機器だよな!？」

特典の内容を見た飛羽真は力なく崩れ落ちた

「もし転生先がバトル系の世界だったら簡単に死ぬぞこれ」

『告、その考えは不適切かと思えます』

「へ?」

飛羽真は頭に直接聞こえてきた声に驚き、辺りを見回すも誰もいない

「・・・気のせいか?」

『告、気のせいではありません。私は貴方の頭に直接語りかけているのです』

「俺の頭に直接？つーか、あんた誰よ？」

『告、私は先ほどあなたが特典で手に入れた “大賢者” です』

「大賢者：・ねえ。じゃあ、大賢者さん。不適切だっという理由を教えてください」

飛羽真は大賢者と名乗る謎の天の声に尋ねる

『解、まず “肉体の限界突破” はその名の通り、生物としての限界を突破する能力です。どれだけ鍛えようにも人間の肉体には限界というものがありませんが、この能力のおかげでほぼ無限に鍛えることができます。次に “錬成” は思い描いたものを作製することができます。材料さえあれば、銃なども作ることが可能です』

「ほうほう」

『魔力の説明ははぶきますが、錬成を行う際魔力を消費して行うので重要になるでしょう。豪運は後で説明する物に大いに役立つかと思われます。武芸が身につけやすいは剣術などの戦うすべを身につけるのが早くなります。トレーニングマシンは一步間違えればあれですが効率よく肉体を鍛え上げることが出来ます。そして “大賢者” こと私は思考加速、解析鑑定、並列演算、詠唱破棄、森羅万象、編集の6つの能力がありサポートに特化しております。そして、最後のガチャはポイント等を使用して様々な物、能力を得ることが出来ます』

「能力を得る？」

『解、例えば入手したガチャに “ウルトラマンゼロに変身できる能力” があればその名の通りゼロになることが可能です』

「なんですと!?!なら仮面ライダーになることも夢じゃないってことか!?!」

『解、その通りです。そして、ここで運アップの特典が役立ちます。ガチャの当たりは運と連動しており、運が良ければいいガチャが当たる確率が高くなります』

「ガチャの当たり次第では無限に強くなれるという訳か」

希望が出てきたことに飛羽真は喜ぶ

「大賢者、ガチャをするにはどうすればいいんだ？」

『解、入手したスマートフォンを起動してください』

「これか」

飛羽真はいつの間にかポケットの中に入っていた最新型のスマホを取り出し電源を入れる

「電源を入れたぞ。これからどうすればいいんだ？」

『解、画面に映っているガチャと書かれたアプリを起動してください』

「これか」

大賢者に言われた通り画面に表示されているガチャと書かれたアプリをタップするとアプリが起動すると「異世界転生先ガチャ」が表示された

「これを押せばいいんだな。では、新たな人生へGO」

第01話

「本当に残るんですか尚文さん？」

「一応な。便利なアイテムも貰ったから偶には戻るつもりだ」

「そうですか」

「お前は どうするんだ飛羽真？」

「俺は戻ります。あつちには放っておくと何でもしよい込んでしまうオカンの幼馴染もいますしね」

とある部屋で飛羽真と1人の青年が話をしていた

「そうか。戻ったら何かと大変だろうが頑張れよ」

「はい。尚文さんも頑張ってください。それとお世話になりました」

「世話になったのは俺のほうだ。じゃあ、元気でな」

飛羽真と青年「岩谷尚文」は握手を交わし、別れた

それから2年後

「チエスト!!」

剣道着を着、防具を身に着けた飛羽真が掛け声と共に振り下ろした竹刀は的確に相手の頭を叩いた

「一本！面有り！」

飛羽真ともう1人は所定の位置に戻ると竹刀を納め一礼する

「ぷはあ〜」

「お疲れ様」

面を外して、掻いた汗を拭いていると剣道着を着た少女が声をかけてきた

「はい」

「サンキュー雫」

少女の名は八重樫雫。飛羽真が幼いころから通っていた剣道場の一人娘であり飛羽真の幼馴染の少女でもある

「だけど、師範代にああも簡単に勝つだなんて本当に強くなったわよね飛羽真」

「まあ、色々あったからな。色々」と

雫から受け取ったスポーツドリンクを飲みながら飛羽真は2年前の出来事を思い出す

「さて、そろそろ上がるとするか」

「え？もう帰るの？」

「何だ忘れたのか？今日はシルヴィのライブの日だぞ？」

「あ!?! そういえばそうだったわね」

「ライブ前に差し入れを楽屋に届けたりするのも考えると丁度いい時間だろ」

「じゃあ、準備ができ次第、飛羽真に家に行くわ」

「おう。じゃあ、また後でな」

雫に挨拶を済ませると飛羽真は防具をしまい、家へと帰る

「ただいま」

「あ、おかえり〜飛羽真君」

飛羽真が家に入るとはんなりとした少女が出迎える

「ただいま木乃香。フェイトは？」

「フェイトさんなら法律関係の本を買いに本屋さんに行ってるで。」

行く前には帰ってくると思うんやけど」

「そうか。少ししたら雫が来ると思うから上げてやってくれ。俺は汗を流してくる。あ、あと小腹がすいてるから軽くつまめる物を作ってくれるとありがたいな」

「はいな〜」

少女“近衛木乃香”に頼みごとをすると飛羽真は風呂場へと向かい、シャワーで汗を流し始める。さきの話で出てきた少女達、フェイト・T・ハラオウン、近衛木乃香、シルヴィア・リユーネハイムは飛羽真がガチャで召喚した少女達だ。フェイトは小学生のころ偶々とした行動で手に入ったガチャで召喚して出会い、木乃香、シルヴィアの2人は異世界で召喚して出会った

「(つーか、召喚した日に自動的に戸籍が作られていたことには驚いた。しかも親も近所の家も知り合いの子を預かっているっていう風に認知してる。まあ、俺としては助かったんだけどな。問題だったのは雫への説明だったな〜。フェイトのことを説明するときなんか子供だつていうのにすげえ威圧感だったし、心なしか目からハイライトが消えていた気がしたんだよな〜)」

飛羽真は当時のことを思い出し、身震いする。そして、あの時から雫を怒らせるのは止めようとそれはそれは強く心に決めたのだ。

「ふう〜〜〜いい湯だった」

「もう上がったん？いくら何でもはやない？」

「そう時間をかけるわけにもいかにからな。雫が来て、フェイトが帰ってきたら直に行くと思うから今のうちに準備をすませておいたらどうだ？」

「そうやね。あ！おにぎりを作っておいたで〜」

作って貰ったおにぎりをほお張ろうとしたとき家のチャイムが鳴る。

「はいは〜い・・・ぴゅう」

ドアを開けると、制服で着る以外滅多にスカートをはかない雫がス

カートをはいて立っていた。

「今の口笛はなに？」

「いや、滅多にお目に掛かれない可愛い服を着た雫を見れたもんだからな。まあ、とりあえず上げられよ」

「うん、お邪魔します」

「雫ちゃん、いらっしやい」

「お邪魔するわね木乃香」

「ははは雫ちゃんのその服すごく似あってるええ」

「自分ではちよつとかわい過ぎると思ってるんだけどね」

「そんなことないで。そうやよね飛羽真君」

「ああ、木乃香の言う通りだ似合ってるぜ雫」

「あ、ありがとう」

雫はそつぽを向くが飛羽真に似合っているとわれ嬉しかったのか、顔は赤く染まっていた。

「ちよつと待ててな。すぐに着替えてくるわ」

「ねえ、どうして木乃香やシルヴィ、フェイトは別の高校に通っているの？」

2階に上がっていく木乃香を見送った後、雫が飛羽真に尋ねる。

「ん？最初は俺と同じ高校にしようと考えていたみたいだが、雫があのアホンだらも同じ高校を志望校にしてるって聞いたときに嫌な顔してるのを見たからな。嫌な思いをするよりは気分よく通える学校にしろって言って今の学校にしたんだ」

「あははそういうこと」

木乃香とシルヴィアは一度、雫の実家に来たことがありその時に飛羽真が毛嫌いの青年と鉢合わせしてしまい、無自覚で馬鹿なことを言っただけを怒らせてしまったのだ。その場に居合わせた雫もそのことを知っており、納得した表情となる。

「ただいま」

「お、お帰りフェイト」

「お邪魔してるわねフェイト」

「あ、雫、いらっしやい。木乃香は？」

「2階に上がって着替えてるぞ」

「じゃあ、私もすぐに着替えてくるね」

そういうとフェイトも準備をするために2階の自室へと向かった。そして、数十分後

「2人ともお待たせや〜」

「お待たせ」

着替えを終えた2人がリビングへとやってきた

「おお〜2人とも似合ってるぞ」

「えへへ、ありがとうなく〜」

「あ、ありがとう」

褒めてもらえたのがうれしかったのか2人も雫と同じように顔を赤くする

「そんじゃあ行くか」

全員の準備が整ったので4人はライブがおこなわれる武道館へと出発する

「八神さんに近衛さん、テストタロツサさん、八重樫さんでしょうか？」

「はいそうですけど」

バスに乗って1時間弱かけてライブ会場についた4人。待っているよう伝えられた場所で待っていると、眼鏡をかけた女性に声をかけられた

「私、シルヴィア・リューネハイムのマネージャーを務めさせてもらっている者です。こちらへ」

4人はマネージャーに案内され関係者用の出入り口から会場へと入り、シルヴィアがいる楽屋まで案内された

「それでは私はこれで」

「案内ありがとうございました」

案内してくれたマネージャーにお礼を言うと飛羽真はドアを数回

ノックする

「どうぞ〜」

「失礼しま〜す」

楽屋の主からの許可をとると飛羽真はドアを開けて中に入る。それに続くように木乃香、フェイト、雫も楽屋の中に入ると、紫髪の少女が座っていた

「飛羽真君、木乃香ちゃん、フェイトちゃん、雫ちゃんいらっしやい」
「調子は・・・いいみたいだなシルヴィ」

「うん、もうばっちり。初めて(こつちの世界では)のライブだから楽しみで楽しみでしょうがないよ」

「野外ライブなら何度か見たことあるんやけど、こういった武道館でのライブは初めてやからすっごく楽しみやわ〜」

「実は私も」

「私もよ」

「ならめいいっぱい楽しんでいてね。それはそうと、3人ともすごくかわいいよ」

「え〜〜シルヴィさんのほうが可愛いやん」

「ふふ、ありがとう。でもしばらく私服で可愛い服を着てないし、買っていないかな〜」

「ほんなら今度の休みの日に皆で買い物に行かへん？」

「そうね、そうしようか」

「(いい具合にシルヴィの緊張感をほぐしてるな)」

無意識に紫髪の少女「シルヴィア・リユースハイム」の緊張をほぐしている木乃香を見て苦笑いする

「待ち合わせ場所で待っている間、通り過ぎる観客の話声を聞いていたがすごく楽しみそうにしてたぞ。かくいう俺も楽しみにしてるけどな」

「ふふ、じゃあ私も楽しんで、みんなも楽しんでくれる最高のライブにしないとね」

自分のライブを楽しみにしてくれているファン達と見に来てくれた飛羽真達の為にも最高のライブにすることをシルヴィアは宣言す

る

「シルヴィア、最終リハの時間です。ステージのほうへ」

「はくくい。じゃあ、みんなまた後でね」

マネージャーに声をかけられ、シルヴィアはステージへと向かった

「ウチ等はどうする?」

「そうだな、近くに飲食店があったからそこに行って何か買って食っておくか。ついでにシルヴィアへの差し入れも買ってこよう」

「飛羽真、貴方来る前におにぎりを食べたっていうのにまだ食べるの?」

「腹が減っては戦は出来ぬっていうだろう?」

「そのことわざは飛羽真よりもシルヴィアのほうが絶対に合ってる気がするかな」

呆れる雫に飛羽真がことわざを言うがフェイトはステージで最終リハをしているシルヴィアにこそ合っている言葉だと苦笑いしながらいった

「皆くく今日は本当にありがとう!」

宣言通りシルヴィアは初のライブを最高のライブへし、歌を聞きに来てくれたファンの心をさらにわしづかんだ。そして、シルヴィアは一番前の席でライブを見ている飛羽真達に向けてウィンクしながら軽く手を振る。それに気づいた飛羽真達は軽く手を挙げて答えた。そして、ライブが終わると、飛羽真達は他の観客同様、いったん外にでて、関係者用の出入り口から中へと入り、シルヴィアの楽屋へと足を運ぶと、飛羽真が予約していた高級焼き肉店へと行き、初ライブ成功とお疲れさまパーティーを開いて大いに楽しみ、家へと帰宅した。寝る前にタロットカードで占いをしていた木乃香を見かけ、占ってもらうと、

「『運命の輪の逆位置』ねえ」

その日は確実に近づいてきていた

第02話

シルヴィアの初ライブが大成功した翌々日の月曜日。誰もが憂鬱になる曜日

「じゃあ、また後でな」

「うん」

「いってらっしゃい」

「授業中寝たらあかんからな」

高校生である飛羽真達も例外ではなく玄関前で別れるとそれぞれの学校へと向かっていった。1人登校していると見知った少年、少女が並んで歩いているのを見かけた飛羽真は声をかける

「南雲、中村」

「あ、八神君。おはよう」

「おはよう」

「おう、おはよう」

少年「南雲ハジメ」と少女「中村恵理」は中学の時からの中で3年間同じクラスでさらに高校もクラスも同じという一種の腐れ縁になっっている

「今日も仲良く登校か？お熱いことで」

「ちよ、からかわないでよ!？」

「す、住んでるところが同じなんだから一緒になるのはと、当然だも
ん」

飛羽真に言葉にハジメは慌て、恵理は顔を赤くしている

「中村、一緒の家に住んでいるからってあまり油断するなよ？もたもたしてるとあの天然女神様も狙ってるんだからよ。まあ、それがいじめの原因でもあるんだが」

「・・・いい迷惑だよ」

ハジメに聞こえないよう小さな声で話す飛羽真の言葉を聞いた恵理は不機嫌な顔で文句を口にする

「・・南雲、八神、中村」

「おお、清水」

「おはよう清水君」

「おはよう」

すると、後ろから少年「清水幸利」が3人に声をかけた。飛羽真を除くこの3人は小学生の時から仲らしく、色々あった2人をハジメが気にかけていたらしい

「それじゃあ、いつも通り、ここで別れよう」

学校に着く少し前のところでハジメが飛羽真、恵理、幸利に告げる

「ごめんな南雲。俺にもっと勇気があれば」

「はは、気にしなくていいよ清水君。こういうのには慣れてるから」
「慣れているってそういうのは慣れちゃいけないだろう」

ハジメの言葉に飛羽真は呆れ、ため息を吐く

「南雲君」

「大丈夫だよ恵理ちゃん」

自分を心配してくれる恵理に笑って答えるハジメ。そして、戸惑いながら行く恵理と申し訳なさそうな顔で歩いていく幸利を見送ると飛羽真に話しかける

「八神君は行かないの?」

「俺と一緒にほうが何かといいだろう?それに今日は秘密兵器もあるからな」

「秘密兵器?」

「クラスに行けば解る」という飛羽真の言葉に首を傾げるも気にするだけ無駄だと思ったハジメは深く考えないことにした

「じゃあ、そろそろ行くか」

「うん」

時計を見てころあいだと思った飛羽真に言葉に頷き2人は再び歩き始めた。数分と立たずに学校に到着し、クラスに入ると

「よお、キモオタ。また徹夜でゲームか？どうせエロゲーでもしてたんだろう？」

「うわっ、キモ。エロゲーで徹夜とかマジキモイじゃん」

4人の生徒がハジメに絡み馬鹿にし始める。恒例の行いだが

「そうやって馬鹿にしている奴ほどキモイんだよな」

「「あ？」」

4人に聞こえるように飛羽真が言うと4人は視線を飛羽真に移した

「おい、八神。てめえ今なんて言った？」

「馬鹿にしている奴ほどキモイって言ったんだよ。結構大きな声で喋ったのに聞こえないなんて、病院に行って耳見してもらったらどうだ？ ついでも頭も見てもらってこい」

「テメエ！」

飛羽真の言葉にカチンときたのか少年の1人が飛羽真に殴りかかるも、飛羽真は拳が掠るギリギリのところまで躲し、少年の腹部を殴った

「「ふ？」」

「「檜山！」」

「先に殴ってきたのはお前だ、クラスの全員が見てるし映像も取っている。ほれ」

そういうと飛羽真は4人に録画した映像を見せた

「あ〜〜そうそう。先週なんだけど俺、面白いもん見たんだよ。エロゲーをやっている奴をキモイと言ってた奴らがさゲーム屋でそれを置いているコーナーについて、気持ち悪い顔してどれを買うか悩んでたんだよな」

飛羽真に言葉に目の前にいる4人が震える。そんな4人を悪代官のような表情でみていた飛羽真はスマホをいじって、撮った写真を見せる

「「これ、お前らだよな？」」

映っていた写真には飛羽真に殴りかかった少年檜山大介“を筆頭に彼の取巻きである“齋藤良樹”、“近藤礼一”、“中野真治”の4

人が映っており、飛羽真が言った通り気持ち悪い顔でゲームを物色していた

「あゝ俺から携帯を奪って消しても無駄だからな？コピーは済ませてあるし、ボタン一つでSNSに配信されるようになってるから。タイトルは〃オタクを気持ち悪いと言っけいじめている奴らほど気持ち悪いよな〃だ」

飛羽真は檜山の胸倉をつかんで引き寄せると

「配信されなくなったら今後一切、ハジメを関わるな」

ドスの効いた声で言っけ、檜山を離すと、自分の席に着いた。授業が始まるまで音楽でも聴いていようとプレイヤーを取り出そうとする

「おはよう飛羽真。今日はいつにもまして凄かったわね」

雫が声をかけてきた

「おはよう。白崎は？」

「いつものところよ」

雫が指さすほうを見るとハジメに声をかけている少女と呆れている少年と少し馬鹿にしている少年がいた

「相変わらずだなあのバカと脳筋は」

飛羽真は自分の言っけしていること行っけしていることがすべて正しいと思っけしている少年とその青年がおこなうことはすべて正しいと信じてやまない少年を見て呆れる

「あの馬鹿を信望しない所と自分で考えようとするれば坂上はましなんだがねゝゝ」

「しようがないわよ」

〃天之河光輝〃と〃坂上龍太郎〃、2人と幼馴染である雫は半ばあきらめていけると時間になったのか先生が入っけきたことにより話は終わり雫は席に戻っけいった

そして、時は過ぎ昼休み

「いただきます．．．．．ちそうさまでした」

「いや、速すぎだろう」

鞆からinエネルギーチャージを取り出し、素早く飲むと眠ろうとするハジメに飛羽真がツッコんでいると

「南雲君、教室にいるの珍しいね。一緒にお弁当どうかかな?」

1人の少女が声をかけてきた。彼女こそ飛羽真が通っている学校で男女問わず絶大な人気を誇る少女“白崎香織”だ。意図しているわけではないハジメがはじめにあっている原因でもある。そんな絶大な人気を誇る香織だが、飛羽真は知っている幼馴染の雫でさえ知らない香織の秘密を。それは．．．また今度にしよう

「あー誘ってくれてありがとう白崎さん。でも、もう食べ終わったから天之河君達と食べたらどうかかな?」

「え!?お昼それだけなの!?だめだよちゃんと食べないと。私のお弁当分けてあげるね」

ハジメはinエネルギーチャージを見せながらやんわりと断ろうとするが、本気で心配した香織が自身の昼食を分けると言った時

「な、南雲君。私、間違ってお弁当を2つ持ってきたから一つ上げる」

「えっと．．．あ、ありがとう中村さん」

今朝、自分の分は作らなくてもいいと伝えておいたのに作って、持ってきてくれたの恵理の弁当を無下にすることもできず、ハジメはそれを受け取った

「香織、こっちで一緒に食べよう。南雲には中村さんが渡した物があるみたいだしさ。それにせっかくの香織の美味しい手料理を誰かに食べさせるだなんて俺が許さないよ」

「(また、あのアホは訳の分からないことを)」

「え?何で光輝君の許しがいるの?」

「ぶふ!」

聞き返した言葉に飛羽真と雫が同時に吹き出してしまった。笑いが止まった後、自分も食べようと飛羽真が弁当箱を取り出そうとした

とき

「や、八神」

「ん？園部じゃねえか、どうした？」

クラスメイトの少女『園部優花』が話しかけてきた

「こ、これ」

「・・・これは弁当？」

包みを手渡された飛羽真はその場で広げると弁当箱が中に入っていた

「こ、この前、不良に絡まれてたとき助けてくれたでしょう。そ、そのお礼よ」

「・・・弁当の中身見ていいか？」

「い、いいわよ」

優花からの了承を得た飛羽真は弁当箱をあけると、1段目はご飯、2段目は彩りよく盛り付けられたおかず。弁当箱も大きいのでボリュームも満点だった

「ほお〜うまそうだ。もしかして園部が作ったのか？」

「ま、まあね」

「確か園部の家って洋食店だっただけか？」

「え、ええ」

「つまり本職から直々に手ほどきを受け、作られた弁当ってわけか。こりゃあ楽しみだ。ありがとな園部」

「じゃ、じゃあそう言うことだから」

「さて、そんじゃあ頂きま・・・」

優花から受け取った弁当と木乃香、シルヴィア、フェイトの3人が合同で作った弁当箱（重箱）を取り出し食べようとしたとき

「これは」

教室の中が輝いた。クラス全員が慌てふためく中、飛羽真は2日前の占いの結果を思い出す

「（運命の輪の逆位置。良くないことが起こるってこういうことかよ）」

クラスが慌てふためく中、飛羽真はある物に手を伸ばす。そして、

光が教室を埋め尽くした

第03話

光が収まると飛羽真達はテレビ等で紹介される城の王の間らしき場所にいた。周りが慌てふためく中、飛羽真は冷静に周りを見回し、少しでも情報を得ようとしていると

「ようこそトータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様、歓迎いたします」

1人の老人の声が響き渡った

「私は聖教教会にて教皇の地位についております、イシユタル・ランゴバルトと申す者。以後、よろしくお願いいたしますぞ」

その老人の笑みを見たとき飛羽真は2年前の異世界での戦いで壊滅させたのちに邪教認定されるようになった国教の教皇を務めていた男と雰囲気似ていたため飛羽真は人知れず苛立ってしまった

そして、飛羽真達は大広間へと通され、席に着くと。メイド達が部屋に入ってきて、全員に飲み物を給士する。飛羽真を除くクラスの大半の男子がメイドを凝視し、その男子に女子が氷河期のような冷たい視線で見ている。ハジメも凝視しそうになったが悪寒を感じたのか正面に視線を固定していた。そして、飛羽真はというと、

「.....」

「八神！こんな状況で君は何をしてるんだ!？」

飛ばされる前に手に取った鞆から木乃香達作の弁当と優花がお礼と言つて渡してくれた弁当を取り出し食べ始めた。シリアスな雰囲気などお構いなしに食事を始めた飛羽真に光輝が言うも

「ああ？見ればわかるだろう。飯食ってるんだよ飯。こっちは腹が減って仕方がないんだよ。話なら飯を食いながらも聞けるから俺に構わずに始めてくれていいぞ、爺さん」

「八神、お前」

「で、では・・・」

目上の者にする態度ではないことに光輝は怒りをあらわにする。イシュタルも飛羽真の行動に思うところはあがあるが今後のことを考えると下手に刺激するわけにもいかなかったたのでそのままにし、話を始めた

イシュタルの話を要約すると、ここはトータスと呼ばれる世界で、「人間族」、魔人族、亜人族」と呼ばれる3つの種族が存在すること。その中でも「人間族」と「魔人族」は何百年も戦争を続けていること。「魔人族」は個の力で「人間族」は数の力で対抗していたが、互いの戦力は均衡しており大規模な戦争はここ数十年起きていなかったらしいが、その均衡が最近破られてしまった。「魔人族」が「魔物」と呼ばれる生物を大量に使役し始めたという。「魔物」とは野生の動物が魔力を取り込んで変異した存在で、個としての実力も高いうえに種族特有の魔法を扱うことが出来る。「魔物」は「人間族」だろうと「魔人族」だろうと関係なく襲い掛かり、使役することが出来ても1, 2体が限度だったのだが、その常識が覆されたのだ。数としての有利を失った「人間族」、そんな彼らにある神託が下った、それが勇者の召喚である

「貴方を召喚したのは「エヒト」様と呼ばれる我々人間族が崇める聖教教会の唯一神です。召喚された貴方はこの世界に人間に比べ上位の力を秘めています。ぜひその力を発揮し、エヒト様のご意志のもと、「魔人族」を打倒し我ら「人間族」を救っていただきたいのです」

「(あの表情、この爺さんはあの教皇と同類だ)」

弁当を食べ終え、爪楊枝で食べかすを処理しながらイシュタルのほうを見ていた飛羽真は恍惚するイシュタルの表情を見て、あの教皇と同類、あるいはそれ以上に危険な人物だと認識した

「ふ、ふざけないでください！結局、この子達に戦争をさせようってことでしよう!?そんなの許しません、先生は絶対に許しませんよ！私達を早く返してください、ご家族も心配しているはずですよ。それに、どんな大層な理由を並べようと貴方達のしていることはただの誘拐ですよ!!」

そんなイシュタルに抗議を上げる人物がいた。彼女の名は「畑山愛子」。飛羽真達のクラスの担任を務めている女性だ。皆からは「愛ちゃん」という愛称で親しまれており、飛羽真もその一人だ

「お気持ちはお察しします。ですが、貴方方の帰還は現状では不可能なのです」

「ふ、不可能ってどういうことですか!?喚べたのなら帰せるはずですよ!?!」

「先程も言った通り、貴方方を喚んだのはエヒト様です。我々ではエヒト様のような世界に干渉出来る魔法を扱うことができません。ですので、貴方方が帰還できるかどうかかもエヒト様のご意志次第ということです」

「そ、そんな」

イシュタルの言葉に愛子は脱力し、生徒もパニックに陥る。そんな中、大きな音がなった。生徒全員が音のなったほうを見ると光輝が自分の手をテーブルにたたきつけていたのだ

「皆、ここでイシュタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだってどうしようもないんだ。俺は・・・俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って放っておくなんて俺にはできない。それに人間を救済するために召喚されたのなら救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。だから、俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が、俺が世界も皆も救って見せる」

「(その自信はどこから来るんだ?)」

光輝の言葉を聞いて飛羽真は心底あきれ果てた。そんな飛羽真の心情をしらすか次々と光輝の意見に生徒達が賛同していった

「(はあ~~~~しやあない)」

『告。それを言うのは現状やめたほうがいいと思われます』

飛羽真は言葉を大賢者が止めた

「(なんでだ?)」

『解、今それを言つて、士気が下がれば行く当てもなくこの世界をさまようことになります。最悪の場合、殺される危険も』

「(一理あるな。行動するなら1人のほうが得策か)」

大賢者の言葉に納得した飛羽真は発言をやめ、今は従い牙を研ぐことにいた。自分達をこの世界へと喚んだ者へと突き刺す牙を

第04話

戦争への参加を決めた飛羽真達クラスメイトは力があるとはいえ戦いのたの字も知らないド素人（飛羽真を除く）であるため当然、戦いのすべを学ばなければならない。教会もそのことを当然視野に入れていたらしく、聖教協会と密接な関係にある“ハイリヒ王国”と呼ばれるエヒトの眷属であった人物が建国した国で生活をしながら教わることとなった。王国に到着し、その国の王や宰相、騎士団長等が紹介され、それが終わると晩餐会が開かれた。

「・・・ちそうさまでした」

異世界料理に皆が舌鼓を打つ中、さっさと食べ終えた飛羽真は1人席を立つ。

「おや、お口に合いませんでしたかな？」

「いえ、大変おいしかったです。色々とありすぎて混乱しているものですから、お先に失礼させてもらいます」

「そうでありましょうな。これ」

王が手を叩くと1人のメイドが前に出てき、そのメイドに案内され、用意された部屋まで行き、人の気配が無くなったのを確認するとスマホを取り出し、電話帳から1人選んで通話ボタンを押す。繋がらないのが普通なのだが、飛羽真のスマホは特別製で例え世界が違おうと。

『『飛羽真／君?!』』』

「うお!？」

普通に繋がるのである。

「大きな声出さなくてくれ、頭にくるし、誰かにばれちまう」

『集団で行方不明になったってテレビで放送されてるけど、大丈夫なの!?!』

「今のところは大丈夫だ。まあ、厄介なことに巻き込まれちまったけどな」

飛羽真はフェイト、木乃香、シルヴィアの3人に聞いた話をかいつまんで話、現状を伝える。

『じゃあ・・・飛羽真はまた戦争に参加させられるの?』

「機を見て抜け出し、帰れる方法がないか調べるつもりだ。それまではおとなしく言うことを聞いてるさ。まあ、俺を喚んだエヒトという神にも教会にも仕返しはさせてもらおうけどな」

飛羽真の脳内では自分達を喚んだエヒトもあの女神同様ろくでもない神だということになっており、仕返しはするつもりのようなのだ。

「しばらくの間、騒がしいかもしれないからシルヴィのマネージャーに頼んでマンスリーマンションを探してもらってそこに避難しておいてくれ」

『解った。それと絶対に、絶対に帰ってきてね』

『約束やからね』

『死なないでね』

「ああ、必ず戻る。約束だ」

その後、よほどのことがない限り必ず連絡することを約束すると飛羽真はベッドに倒れこむ。

「二度目の転生で2回も異世界に来ることになるなんてな〜。まあ、やることは前と何ら変わらない。何が何でも生き残る、それだけだ。・・・アイテムのチェックでもしておくか」

飛羽真はスマホを操作してこれまでガチャで手に入れたアイテムの個数を確認する。さらに親しい者に渡せそうなスキル、アイテム等がないかリストアップも同時に行う。一通りの作業を終えると、襲い来る睡魔に身を任せ、意識をなくした。

そして、翌日。大広間で朝食をとった後、飛羽真達は訓練場らしき場所に案内され、それぞれプレゼントカードぐらいの大きさの銀色のプレートが渡された。

「よし、全員に配り終わったな?このプレートはステータスプレートと呼ばれ、客観的な自分のステータス、職業を示してくれるものだ。最も信頼できる身分証明書でもあり、これがあれば迷子になっても平

「気だからなくすなよ？」

飛羽真達の訓練を担当することとなったハイリヒ王国の騎士団長「メルド・ロギンス」が自身のステータスプレートを見せながら飛羽真達に話す。

「プレートの一面に魔方陣が刻まれているだろうか？そこに、自分の血を一滴垂らすことで所有者が登録される。登録が終わったら「ステータスオープン」と言えばプレートに自分の現在のステータスが表示される」

「(尚文さん達、勇者しか見れなかった自身のステータスを見れるってわけか。だけど、どういう原理で動いてるんだ?)」

「ああ、原理と聞くなよ？そんなもの知らないからな。何せ神代のアーティファクトの類だからな」

「アーティファクト？」

飛羽真が疑問に感じていたことをメルドが答えにさらに首を傾げる。そして、メルドはアーティファクトについての説明を始めた。それを聞いた飛羽真は、

「(つまり勇者の武器や眷属器みたいなものか)」

1人に納得し、プレートと一緒に渡された針を指に軽く刺し、滲み出てきた血を魔方陣に垂らした。プレートが淡く輝き、そして、

八神飛羽真 17歳 男 レベル1

天職：剣士 錬成師 召喚師

筋力：500

体力：500

耐力：500

俊敏：500

魔力：200000

魔耐：145000

技能：剣術、錬成、召喚、格闘術、魔力操作、闘気、縮地、火属性
適正、土属性適正、風属性適正、気配感知、言語理解

「.....」

「全員見れたようだな。では説明を再開する。まず最初に「レベルがあるだろうか？それは各ステータスの上昇と共に上がる。上限は100でそれがその人間の限界を示す。つまりレベルはその人間が到達できる領域の現在値を示していると思ってくれ。レベル100ということは人間としての潜在能力を全て発揮した極地ということだからな。まあ、そんな奴はそうそういないがな。そして、ステータスは鍛練で当然上昇する、魔法や魔法具で上昇させることも出来る。また魔力の高い物は自然と他のステータスも高くなる。詳しいことは解っていないが、魔力が身体のスベックを無意識に補助しているのではないかと考えられている。それと、後でお前らように装備を選んでもらうから楽しみにしておけ。なにせ救国の勇者ご一行だからな。国の宝物庫大解放だぞ」

「(異世界から戻ってくる前に見たときはもっと高かったような)」

『(解。恐らく異世界に来たことにより弱体化したものかと思われるます)』

「(つまり、あの時と同じってわけか)」

「次に「天職」ってのがあるだろうか？それは言うなれば才能だ。末尾にある技能と連動していてその天職の領分にい置いては無類の才能を発揮する。天職持ちは少ない。戦闘系天職と非戦闘系天職に分類されるのだが、戦闘系は千人に一人、ものによっちゃあ万人に一人の割合だ。非戦系も少ないと言えは少ないが、百人に一人はいるな。十人に一人という珍しくもない物も結構ある。生産職は持っている奴が多いな」

「(じゃあ、天職を三つ持っている俺はどうなんだ?)」

召喚師ほどの部類に入るか分からないが戦闘職、非戦闘職、両方を持っている飛羽真は規格外の部類に入るのだろう。

「後は、各ステータスは見たままだ。大体レベル1の平均は10くらいだな。まあ、お前達ならその数倍から数十倍は高いだろうがな！全く羨ましい限りだ！あ、ステータスプレートの内容は報告してくれ。訓練内容の参考にしなくちゃいけないからな」

「(大賢者、ステータスの隠蔽って出来るか？あのバカに絡まれたく

ないんだ)」

『解。ツヴァイト・ファントムと唱えれば隠蔽可能です。それと、魔力操作も隠蔽することを進めます』

「(分かった) ツヴァイト・ファントム」

飛羽真はステータスプレートに手をかざし周りに聞こえないような小さな声で唱えると淡い光がステータスプレートを包み込み、光が無くなると飛羽真は再び自分のステータスを確認する。結果、

八神飛羽真 17歳 男 レベル1

天職：剣士 錬成師 召喚師

筋力：100

体力：100

耐性：50

俊敏：100

魔力：200

魔耐：145

技能：剣術・錬成・召喚・格闘術・闘気・縮地・火属性適正・風属性適正・気配感知・言語理解

と、なっていた。

「(そういえば南雲はどうなんだ?)」

ハジメのことが気になった飛羽真はハジメのほうを見ると、自分のステータスプレートを凝視しながら青い顔をしていた。そして、自身の正義感を刺激され、戦う意味も知らずに戦争への参加を決め、クラスメイトまで巻き込んだ馬鹿、もとい光輝が最初に自身のステータスを教え、周りを騒がし次々と自身のステータスを見せていくクラスメイト達。ハジメの番となりメルドが苦笑いしながらハジメの天職を説明した後、檜山がハジメに絡み始めた。

「おいおい、南雲。もしかしてお前、非戦闘職か？鍛冶職でどうやって戦うんだよ？メルドさん？その錬成師って珍しんっすか？」

「…いや、鍛冶職の十人に持っている。国お抱えの職人は全員持っているな」

「おいおい、南雲く。お前そんなんで戦える訳？」

メルドの説明を聞いた檜山はこれ見よがしに絡む。よく見ると他の男子（幸利除く）もにやにやと嘲笑っている

「さあ、やってみないと分からないかな？」

「じゃあさ、ちよつとステータス見せてみるよ。天職がしよぼい分ステータスは高い・・・っ!？」

メルドの説明と表情で察しているだろうに檜山はわざとらしくハジメにステータスプレートを見せるよう言おうとした時、強い衝撃と共に檜山は遠くに吹き飛び、地面に倒れた。慌てて取り巻きの3人が近づくと鼻血を流し、痛みで悶えていた。

「弱い者にしか強く出れねえ古典的な小物がそれ以上喋るな。耳障りだ」

それをやった人物、飛羽真は拳を突き出した状態で立っていた。

「ひ、檜山君、大丈夫ですか?! 八神君、どうして」

「南雲に関わるなって言ったのにちよつかいを出したからですよ。言っても解らない奴には身体で分からせるしかないでしょう? それと話を聞いて笑っていた男子共、今回だけは見逃してやる。だが・・・次はねえぞ?」

飛羽真は笑っていた男子たちを睨んで忠告すると、メルドに自分のステータスプレートを見せる。

「天職が・・・三つだ?!」

「珍しいことなんですか?」

「珍しいも何も、天職というのは一つが当たり前なんだ。しかし、この召喚師というのは・・・見たことがないな」

「つまりレアな天職ってことですか」

思い当たる節がある飛羽真だったが、ここは知らないふりをした。自身のステータスプレートを見せるのが終わり、戻ろうとすると、愕然としたハジメと慌てている愛子、心配そうに声をかける恵理と香織がいた。

「どういう状況だあれは?」

「愛ちゃんが南雲君に止めを刺しちゃったの」

見ていたであろう雫に尋ねると雫は苦笑いしながらそう答えた。

第05話

「わざわざ付き合ってもらってすみませんアランさん」

「団長の指示だからな。だけど、本当にやるつもりか？」

「ええ。こつちのほうの手取り早いんで」

訓練を始めて早6日。飛羽真はメルドに無理を言って魔獣と戦わせてくれと頼み込んだ。理由は勿論、ガチャを引く為だ。前に行った異世界では魔物を倒すことでガチャを引くための券をゲット出来ていた。ならばこの世界でも魔物を倒せば券をゲットできるのでないか：いやはずだ。それを確かめるためには魔物の討伐は必然。なので飛羽真はメルドに魔物との戦闘をさせてくれと頼んだ。最初は渋っていたメルドであったが、何度も頼んでくる飛羽真に折れ、了承した。

「だけど、変わった剣だな」

「俺達のいた国の剣です」

宝物庫に入って武器を見てみたが大賢者曰く、「すべてとは言いませんランクの低い武器ばかりです」と言われた。なので前から使っていた武器を使うことにしたのだが、ここで一つ問題があった。突然何も無い場所から武器が現れたら疑われてしまう恐れがあったため、同じ錬成師であるハジメと共に国お抱えの錬成師の下で錬成について学び、国で保管していた鋳物を使って作り上げたのがこの刀である。カモフラージュとはいえ、名刀に近い出来だと飛羽真は思っており、後で雫に渡そうと思っている。

「もう一度聞くんが、よほどのことがない限り俺は手を出さない。それでいいんだな？」

「はい」

「はあ~~~~無茶だけはしないように頼むぞ。大怪我でもされたら俺がメルド団長にどやされるからな」

「ははは、分かりました。んじゃ、行ってきます」

アランに一声かけると、飛羽真は魔物と戦ってガチャ拳を手に入れるために歩き出した

「……ここまでくれば大丈夫かな？」

飛羽真はアランが見えるぎりぎりの所まで来ると、

「アイテム・ウインド、オープン」

虚空に向け言うとゲームなどでよく見るウインドが宙に投影される。これはガチャの能力と一緒に手に入れた量子アイテムボックスで、ガチャで手に入れた装備、アイテム、スキルは自動的にこのボックス内へと送られる。”アイテムウインド・オープン”と唱えると宙にウインドが投影され、持っている武器、アイテム等の確認が出来る。アイテムはスマホでも確認することが出来る

「まずはこの刀をボックス内にしまつてつと」

飛羽真がボックスに入れと念じると持っていた刀が量子化して消え、ボックス内に保存された。それを確認すると、飛羽真はボックス内から武器を念じて取り出す。

「またお前を使うことになるなんてな”斬神刀皇”」

飛羽真が取り出したのは一振りの太刀。ガチャで手に入れた後、主装備として使い、幾度となく戦場で振るつた飛羽真の愛刀である。飛羽真は太刀を剣帯に差し込むと、ウインドを操作して今必要なアイテムがないかを探す。しばらく探していると、目当ての物を見つけ、念じて取り出す。

「相変わらずすごい匂いだなこれ」

飛羽真が取り出したのは魔物を引き寄せる事の出来る食べ物で、地面に置いて放置しておくとも染みついた匂いに釣られ魔物が寄ってくるのだ。

「まあ、こつちの世界の魔物に効くかどうかは知らないが」

飛羽真はその食べ物を適当なところに放り投げ、魔物が来るのを待つ。ただ待っているのも暇なので素振りをして待っていると、匂いに釣られ沢山の魔物が近寄っていた。

「ひい、ふう、みい、よお……これまた随分と来たな」

匂いに夢中の魔物達は飛羽真がいることに気づかず、匂いの下へと歩み寄っていく。そして、辿り着くと自分の物だと言わんばかりに餌に喰らい付く。

「さて・・・やるか」

意識を戦闘ように切り替えると大量の酸素を取り込み、血液の酸素濃度を高め、集中力と身体能力を上昇させる。ガチャで手に入れ死に物狂いで身に着けたスキル“全集中の呼吸”を発動させる。

「2年も使ってなかったから“常中”はきつそうだが、あの程度の魔獣相手なら問題ないだろう。・・・飛撃」

飛羽真は太刀を抜刀すると同時に斬撃を飛ばして餌の取り合いをしている魔物の1体を断ち切った。餌の取り合いをしていた魔物の1体が倒されたことで餌に群がっていた魔物達はやっと飛羽真の存在に気づき、唸り声をあげると一斉に襲い掛かる。

「無の呼吸 水ノ型 流流舞い」

襲い来る魔物達に焦ることなく飛羽真は水流の如く流れるような足運びで魔物を爪や牙を躲しながら、太刀を振るって魔物を倒していく。数分と立たずに餌に釣られてやってきた魔物達は全滅し、大量の死骸だけが残った。

「いくら俺が弱体化して、ブランクがあるとはいえ弱すぎないか？」

『解。餌の成分に微量ですがアルコールを感知しました。恐らくそれで酔ってしまったため動きが鈍くなっていったと思われます』

「(成程。つとなると別の方法で魔物を引き寄せせる必要があるな。

大賢者、何かいいアイテムはないか?)」

『解。現在所持しているアイテム内では魔物を呼び寄せせる物はありません』

「つと、なると地道にやるしかないってことか」

『グルルル』

「次の魔物が来たか。って、これまた随分とでかいな」

唸り声のするほうに振り向くと、熊の魔物が立っていた。

「餌に食いつかないってことは理性がまだあるってことか？」

『ガアアア!』

「おっと」

飛羽真は魔物が振り下ろした爪をバックステップで躲すと、太刀を鞘に納め居合の構えをとる。

「無の呼吸 雷ノ型 霹靂一閃」

そして、雷が落ちたと錯覚させる程の踏み込みで地を蹴って間合いを詰めるとすれ違いざまに太刀で一閃する。だが、

「つち、浅かったか」

野生の勘でまずいと思ったのか魔物を咄嗟に身体をずらすことで致命傷をさけた。そして、今の一撃で完全に理性を取り戻したのか、空に向かって遠吠えをした後、飛羽真に襲い掛かる。その速さは最初の時と比べ物にならないぐらい速い。弱体化しているとは言え、飛羽真にとっては紙一重で躲すことのできるほどののだが、2年というブランク、肉体が思考についていけず、傷を負っていく。

「ここまで訛っていただなんてな！『能力向上』」

「全集中の呼吸」だけではブランクを補えないと思った飛羽真はスキルで肉体能力を向上させる思考に追いついていなかった肉体が思考に追いつき、魔物の猛攻を紙一重で躲していく。

『『斬刃』。無の呼吸 炎ノ型 昇り炎天』

魔物の大振りの爪撃を躲すと猛炎の如き勢いで太刀を振り上げ魔物を斬ると、

「無の呼吸 炎ノ型 気炎万象」

返す形で太刀を振り下ろし魔物を斬り裂いた。

「ふい〜〜。何とか倒せたか」

太刀に付着した魔物の血を振るって飛ばし、鞘に納めようとしたら、森の奥から魔物がよだれを垂らしながら寄ってきた。

「一息つく暇もねえな」

それから昼食時になるまで飛羽真は魔物と戦い続け、数日かけてなくそうとしたブランクをわずか半日で6割近くまで取り戻すことに成功した。

「ああ〜〜〜疲れた」

「だ、大丈夫八神君？」

「ん？少し休めば大丈夫だ。はあく〜前はぶっ通しで戦っていたぐらい疲れることなんてなかったのによく〜」

魔物との戦いを終え、城へと戻ってきた飛羽真。道中、冒険者ギルドに寄って、冒険者登録と回収した魔物の素材を売って来たため、クラスメイトの中では一番の金持ちでもある。

「それより、そっちの作業はどうだ？」

「二応、試験品は出来上がったよ」

現在、飛羽真とハジメがいるのは王国に用意してもらった2人専用の工房。最初はハジメも訓練を受ける予定だったが、飛羽真が”南雲には戦闘訓練より天職である錬成師の腕を上げる方が一番いい”とメルドに真言し、身を守る護身術であれば時間があるときにも自分が教えると言って無理やり訓練への参加を止めさせた。その際、光輝や檜山、その取り巻きが言ってきたが、飛羽真が文句を言った4人に”男殺し”を繰り返して黙らせ、

『知識が豊富な南雲なら、この世界にはなく俺達の世界にあるアイテムを作ることが出来る。例えばスタングレネードとかな』

ハジメにしかできないことを告げ、この工房にてアイテムを作成中なのだ。さらに檜山とその取り巻きが隙を見てくる可能性も考慮して数人の騎士を見張りに立たせてほしいと進言。メルドも檜山らがハジメに取る態度を見てそれを了承した。

「じゃあ明日辺り、魔物相手に試してみるか」

「明日も行くつもりなの？」

「当然。そのためにあのアホ達の前だったのにも関わらず土下座して頼んだんだからな」

「はは、僕にはできそうにないかな」

「何言ってるんだ。南雲だって、中3の時に不良から老人と子供を

助けるために自分の財布の中身を渡し、なおかつ土下座してたじやねえか。助けないとって思っただけでも行動に移せる奴は中々いないもんだぜ?」

「そ、そうかな?」

当時に事を言われ、ハジメは照れたように頬をかいていると、2人の腹の音が工房に鳴り響いた。

「……………」

「南雲、お前もまさか。昼めし食ってないのか?」

「あはは、作業に集中してて…つい。そういう八神君は?」

「冒険者登録と回収した素材の鑑定に時間がかかってな。しゃーない、街にでも行って食ってくるか」

「でも、お金は……………」

「俺が持つてるから大丈夫だ。まあ、城の豪勢な料理には飽きてきていたところだったから渡りに船だな」

城にいるため出される料理は高級レストランのような料理ばかり。それが悪いとは言わないが、庶民である飛羽真からすればおふくろの味がする料理を食べたいのだ。食べ終えた後、鉾山に直接行けるよう準備をしていると、ドアがノックされる。

「誰だ?」

『雫よ。他に香織と優花、中村さんもいるわ。入ってもいいかしら?』

「……………いいぞ」

飛羽真はハジメに視線を向けると頷いたので入室の許可を与えた

「お邪魔するわ」

「「お邪魔します」」

入室の許可をもらおうと雫、香織、優花、恵理の4人が工房に入ってくる。

「おう、おそろいでどうした?」

「ちよつと…ね。それよりバタバタしているみたいだけど何処かに出かけるの?」

「鉾山に鉾石を取りに行くんだ。まあ、その前に酒場によって遅め

に昼飯を食うつもりだが」

「なら、丁度いいタイミングだったようね」

「どういう意味だ？」

雫の言っている意味が分からずに飛羽真が首を傾げると、優花と恵理がピクニックなどでよく使うバスケットを2人に見せる

「王宮の調理場を無理を言っただけで貸してもらって作ってきたわ」

「王宮で食べてる料理に比べたら豪勢でもないし、おいしくないかもしれないけど一生懸命作ったよ」

「ほお〜〜そりゃあ楽しみだ。王宮の豪勢な料理に飽き飽きしてたところだからな」

「うん・・・うまい。なんつーか、どことなく懐かしい味がする」

雫と優花作のサンドイッチを食べながら飛羽真は感想を言う。因みにハジメのは香織と恵理作の物で2人はハジメの隣に座って味の感想、何を作っているのかを尋ねていた。

「傍から見ると美女2人を侍らす男にしか見えないな」

「ちよつと、聞こえてるからね八神君!？」

飛羽真の言葉が聞こえたのかハジメが抗議の声を上げるが飛羽真は無視して食事を続ける。

「そう言えば鉱山に行くって言ってたけど」

「ああ。鉱石を取りに行くんだ」

「何で態々取りに行くのよ。国お抱えの錬成師がいるんだからその人達からもらってくればいいじゃない」

国王は城の者達に出来る範囲で飛羽真達の言うことを聞いてあげろと伝えている。

「最初の2日はそうしたが、試作品を作ったりすると大量に必要でな、だったら、自分達で取りに行くってことになったんだ。歩いて行くから体力も付くし、鉱石を取るためにつるはしを振るうから

筋力も上がる。帰りは取った鉱石を運搬車を使って戻ってくるから筋力と体力も付く。鉱石も手に入れられて、身体を鍛えることも出来る、一石二鳥だろう?」

「た、確かに!」

飛羽真の論に雫と優花は納得する。

「何なら雫と園部も経験してみるか?」

「・・・遠慮しておくわ」

「わ、私も」

その後、先に食べ終えた飛羽真はハジメが食べ終えるまで雫と優花と世間話をしながら待っていたが、香織がぐいぐいと詰め寄り、ハジメの食が進まないことにいら立ち、拳骨を落として『俺達の邪魔するなら出禁にするぞ』と言って黙らせた。

そして、その日の夜

「さて、引きますか」

ベッドに腰かけ、飛羽真はスマホのアプリをタップしてガチャを起動させる。

「今日の魔物との戦闘で手に入れた券は35枚か。30回は引けるな。よしまずは1回目」

飛羽真は『10回』のボタンを指でタップすると、ガチャが始まり得たリストがスマホに表示される

- 1 消費アイテム ハイポーシヨン (転スラ) 1ダース
- 2 人物召喚 ゼシカ (ドラクエ8)
- 3 食材 エア (トリコ)
- 4 武器 ゼイネシスクラッチ (PSO2)
- 5 消費アイテム マジックポーシヨン10個
- 6 食材 米1俵

- 7 調理スキル
- 8 幻獣の卵
- 9 食材?きののみ(ポケモン) 各種1箱(10個入り)
- 10 胃薬

「・・・これって当たりって呼んでいいんだよな? ってか 食材? ってなんだよ!」

ガチャで手に入れたリストを見て飛羽真は大声を上げるも、深呼吸を繰り返して心を落ち着かせ、ガチャをつづけた。残りのガチャで飛羽真が興味を引いたのは、

- ― エイムズショットライザー
 - ― プログライズキー 〃 シューティングウルフ
 - ― 身代わりのペンダント改×5
 - ― 人物召喚 シュテル・ザ・デストラクター (リリなの)
 - ― 収納バッグ(シオルダータイプ)×2
- の5つだ

「このエイムズショットライザーとプログライズキー、収納ポーチは機を見て南雲に渡すか。そしてこの 〃身代わりペンダント改〃は致命傷となる攻撃を5回だけ代わりとなって受けてくれるか。此奴も南雲にも渡しておくか。後、雫と園部、中村に清水にも渡しておく。残る問題は・・・これだな」

飛羽真はアイテムボックス内から一振りの刀を取り出す

「雫に渡そうと思ったが・・・渡して下手に何かあつたら困るんだよな・・・ やっぱり俺が持つてるしかないのかね・・・」

飛羽真が取り出した刀。一見普通の刀に見えるが、その正体は 〃妖刀〃。名を 〃二代鬼徹〃。

第06話

「オルクス大迷宮への遠征・・・ですか？」

「ああ。実戦経験を積ませるために明日から行くつもりだ」

光輝達への訓練を終えた足で飛羽真とハジメの工房にやってきたメルドが2人にそう告げる。

「この遠征は勇者一行全員が参加することとなっている」

「全員ってことは・・・僕もですか？」

「ああ。反対はしたんだが、上は連れて行けの一点張りだな。俺ではどうすることも出来なかった。本当に申し訳ない」

「あ、頭を上げてください」

申し訳なさそうに自分に頭を下げるメルドを見て、ハジメは頭を上げよう言う。

「でも、丁度いいかもしれないな」

「え？」

飛羽真の言葉にハジメとメルドがそろって飛羽真を見る

「飛羽真、お前はハジメが前線に立つのに賛成なのか？」

「まさか。俺がちょうどいいって言ったのは、南雲のことを馬鹿にしたクラスのアホ共に、南雲が、そして『錬成師』がどれだけ凄いかをわからせるのに、ちょうどいいって言ったんですよ」

そういうと、飛羽真は作業台に並べられている品々を見て笑みを浮かべる。そのあと、メルドは飛羽真とハジメから作っていた物を軽く説明され、驚き、2人を称賛すると、しっかりと準備しておくようにと伝えて工房から出ていった

「はあく〜とんでもないことになっちゃったな」

「そうだ、南雲お前にこれらを渡しておく」

飛羽真はちょうどいい機会なので、ハジメに渡そうと思っていたアイテムを量子ボックスから取り出し作業台に並べる。

「あれ？これって仮面ライダーの変身ツール？」

「さすがに知ってるか」

「うん。好きだから毎週見てるよ。でも、おもちゃを貰っても・・・」

「おもちゃじゃねえよ。持ってみろ」

「う、うん」

飛羽真に言われ、ハジメは変身ツール兼武器の拳銃を手に取ると違和感を覚えた。

「(あれ?これってこんなに重かったっけ?前におもちゃ屋さんで持った時は軽かったような)」

「次に両手で構えて、壁・・・は危ないから鉱石に山に向かって撃ってみろ」

「撃ってみろって・・・おもちゃなんだから何も・・・」

「いいから、いいから。ちゃんと踏ん張れよ」

「?」

からかわれているなど思いつつも、ハジメは言われた通り足に力を入れて踏ん張れる体制を整えると、トリガーを引く。すると、発砲音と共に銃口から弾丸が撃ち出され、鉱石を砕いた。

「うわぁ」

反動が強すぎたのかハジメは床に尻もちをつく。

「いたたた?何がどうなって・・・え?」

目の前の光景を見てハジメの時間が止まる。再起動したハジメは砕けた鉱石と銃を何度も交互に見る。

「もしかしてこれ・・・本・・・物?」

「ああ。本物だ」

「ど、ど、どうやって作ったの!?!見た目だけなら錬成を使って作れるだろうけど内部構造は・・・」

「どうどう。落ち着け南雲」

「お、落ち着けるわけじゃないじゃん」

今のハジメの状態を例えるなら、推しているアイドルの握手会に行って、握手をしてもらった時のファンが一番合うだろう。内気とまではないかないが積極的に話すハジメは見たことがない。まあ、それだけ興奮しているということだろう。

「はあ、はあ、はあ」

「落ち着いたか？」

「う、うん。ごめんね」

「はは、気にしてない。さて、南雲が落ち着いたところでさっきの質問に答えよう。俺の天職は知ってるよな？」

「えっと、剣士に僕と同じ錬成師、あとは召喚師だったけ？」

「ああ。召喚師で思い浮かぶのは悪魔やら、天使やらそういったものを召喚して使役するって言うの一般的な考えだ。実際俺もそう思ってた」

飛羽真は話を一旦やめるとスマホを取り出し、電源を入れたハジメに見せる。

「ステータスプレートを貰った日の晩。スマホの電源を入れてみたら見慣れないアプリがあつてな。押してみたたら課金ゲームでおなじみのガチャの画面が表示されたんだ。んで、好奇心に負けて押してみたら、ガチャが回り出して景品が出てきたんだ」

「な、なにが出てきたの？」

「何だったけなくスマホ用の魔力式バッテリーだったかな？電気じゃなくて魔力をチャージさせることでスマホを動かすことが出来るらしい」

「もしかして工房に入って最初に工具を作っていたのって」

「バッテリーを交換させるためだ。んで、バッテリーを交換した後、もう一回ガチャをしようとしたんだが、引くための券がなくてな引くことが出来なかった。最初に引けたのは初回サービスだったんだろう。んで、券を得るためにはどうすればいいか調べてみたら、魔物みたいなモンスターを狩るか、善行をすることで得ることが出来ることが分かったんだ」

「じゃあ、メルド団長に魔物との戦いをさせてくれって頼み込んでいたのは」

「券を集める為だな。勿論、魔物との戦いに慣れておきたいっていうのも事実だ」

飛羽真はハジメに真実と嘘を織り混ぜて話す。飛羽真の話にハジ

メは疑うことなくそれを信じた。

「んで、ガチャを引いて分かったことだけど、実際にある物だけじゃなく空想の産物も引けることが分かったんだ。例を挙げるなら南雲が持っているそれだな」

「・・・じゃあ、これは八神君が持っていたほうがいいよ。僕が持っていたって宝の持ち腐れだし」

「いやいや、さつきも言った通りそれは南雲にやるよ。剣士である俺が持っていたって猫に小判だからな。あと、これも渡しておく」

飛羽真は疑われないようにガチャで当てた収納ポーチから、シューティングプログライズキー、ハイポーション、身代わりペンダント改×3、収納バッグを取り出して作業台の上に並べる。

「そのバッグ・・・これだけの物が入る大ききじゃないよね？」

「これはド〇えもんでいう四次元ポケットと同じ能力を持っているバッグらしくてな。いくらでも物を収納できるらしい。渡す物の説明はこの紙に書いてある。ペンダントは後で中村と清水に渡しておく」

「本当にもらっていいの？」

「いいに決まってるだろう？そのためにお前を鉱山で鍛えたんだからよ」

「どういうこと？」

ハジメは解らずに首を傾げる

「さつき撃って分かった通り、その銃は公式サイトで説明された通り反動を軽減させる処置が施されてるが、生身で使うには反動が強い。だからその反動に負けないようにするために、踏ん張るための足腰と反動に負けない腕力が必要不可欠」

「僕にその耐性をつけさせるために、わざわざ行く必要もない鉱山に行つてたつてこと？」

「そういうことだ」

ハジメの答えに満足したのか飛羽真は笑って頷いた。

「後は、雫にこのペンダントと錬成で作った刀を渡すだけだな」

明日からの遠征に備え、各々が準備と心構えを行う中、飛羽真は雫と優花にガチャで当てたペンダントを渡すべく、彼女達の部屋に足を運んでいた。優花に「お守りだ」と言つてペンダントを渡した際、友人の2人に見られひと騒ぎあつたが、何とかその場を2人で治めた後、その足で雫の部屋に行つたのだがおらず、香織の部屋に行つていゝるのだと当たりをつけて行つたが誰もおらず、城内を歩いて探しているが一向に見つからない。

「何処に行つたんだ雫の奴。・・・最悪、明日の朝渡すか」

その際、一悶着ありそうだな〜と考えていると、微かに風切り音が聞こえてきた。飛羽真はもしかしてと思い、音を頼りに歩いていくと中庭にたどり着く。そして、そこで見たのは一心不乱で素振りを行う雫だった。飛羽真は量子ボックスから水とキャンプ用のポットとコンロ、マグカップ、アウトドアチェア、折り畳み式のテーブルを取り出すと広げ、湯を沸かしながら雫の素振りが終わるまで待つことにした。雫の素振りが終わるとのほぼ同時にお湯が沸き上がる。

「な、なに!?! って、と、飛羽真?」

「よー遠征の前だつてのに精が出るねえ〜」

驚く雫を他所に飛羽真はマグカップに緑茶の粉末をいれて、湯を注ぐとテーブルに乗せる。

「ほれ」

「きや!?!これって毛布?」

「風邪をひかないようにそれを羽織つておけ」

「う、うん。って、そんなことより!これは何!?!」

「何って見ればわかるだろう? キャンプ用品だ」

「それは見ればわかるわよ。私が聞きたいのは、なんでそのキャン

「用品がここにあることよ！」

「簡単にいえば俺の天職が関係してる」

騒ぐ雫に飛羽真はハジメにしたのと同じことを雫に話した。

「・・・チートにもほどがあるわね」

飛羽真の話を聞き雫は頭が痛くなってしまうた。

「このことは誰にも言うなよ？」

「何で？」

「嫉妬心からいじめを行う奴等や止めもしない奴等、本質も見ないで好きかっていう奴らの為に使う気はさらさらねえ」

飛羽真の言葉に雫は呆れる。

「雫、誰にも言わないでくれるのであればこれをやろう」

「そ、それは!?!」

飛羽真は収納バッグから猫のぬいぐるみを取りだし見せた。

「どうだ？」

「・・・解ったわ。誰にも言わない」

「交渉成立だな」

飛羽真は猫のぬいぐるみを雫に渡す。ぬいぐるみを受け取った雫は嬉しそうな顔をしながらそれを抱きしめる。

「日々のストレスが無くなっていく気がするわ〜」

「(あの表情、想像以上に溜め込んでたみたいだな)」

恐らく香織と自分、地球にいるフェイト、木乃香、シルヴィアの計5人しか、今の雫の緩んだ表情を目にした者はいないだろう。

「ふう〜すつきりしたわ」

心行くまでぬいぐるみを抱きしめた雫は緩み切った表情から一転、いつもの凜とした表情に戻っていた。

「さて、雫のストレスも抜けたことだし本題に入るか」

飛羽真は収納バッグから錬成で作った刀、脇差、ペンダント、ハイポーションの4つを取り出し、テーブルに置く。

「これって・・・」

「刀は俺が錬成を使って作った物だ」

「見てもいいかしら？」

「ああ」

飛羽真の許可を得ると雫は刀を鞘から抜き、刀身を見る

「前に行った村正展で見た刀身をイメージして作った。贋作だが、切れ味は保証する」

「改めて錬成師が凄いんだって思い知らされたわ」

「そうか。これはペンダントと薬の効果を書いたメモだ。寝る前にも読んでおいてくれ」

「解ったわ」

「んじゃ、夜の秘密のお茶会はこれでお開きだ」

淹れたお茶が全部無くなったので飛羽真は取り出した道具を収納バッグへとしまう。

「遅いし部屋まで送るわ」

時間も遅いので雫を部屋まで送り届けることにした飛羽真。部屋までの道中、どこかに行っていた香織と遭遇したが、その格好を見て雫が注意したが、逆になんで飛羽真と一緒にいるのか、手に持っているぬいぐるみは何処で手に入れたのか等々を聞かれ、飛羽真に助けを求めようとしたが、触らぬ神にやらず、巻き込まれる前に退散しており、一人で香織の相手をする事となった。

第07話

「これより、オルクス大迷宮での実践訓練を始める」

大迷宮がある宿場町「ホルアド」で一泊したあと、飛羽真達はメルドと数人の騎士と共にオルクス大迷宮内へと入っていった。中に入り、しばらく歩いていると二足歩行で上半身がムキムキのネズミに似た魔物「ラットマン」が複数出てきた。

「よし、光輝達が前に出る。他は下がれ！交代で前に出すから準備をしておけ！」

メルドの指示で光輝を中心としたパーティーが前に出る。雫もそのパーティーの一員だが、頬が引きつっていた。

「暗き炎渦巻いて、敵の尽く焼き払わん、灰となりて大地へ帰れ」
螺旋炎」

光輝、龍太郎、雫の3人が前衛で戦う間、香織と女なのにセクハラが好きなの心の中におっさんを飼っている少女「谷口鈴」が放った魔法によって襲ってきた魔物は灰となって絶命した。

「ああ〜うん、よくやったぞ！次はお前等にもやってもらおうかな、気を緩めるなよ！それと、今回は訓練だからいいが、魔石の回収も念頭に置いておけよ。明らかにオーバーキルだからな？」

メルドの言葉に香織と鈴はやりすぎだったことを自覚して頬を赤らめた。そして、交代しながら戦闘を行っていき、飛羽真、ハジメ、恵理、幸利の番となった。

「錬成」

ハジメ達に経験を積ませるためにあえて、差している太刀を抜かず、そこから辺落ちていた石を拾い、錬成で石の槍へと作り替えると、投擲して魔物の足を止める。ハジメが手をつけて地面を錬成し、動けないようにすると、数体は恵理と幸利が放った魔法で倒し、残りはハジメが剣で突き刺して倒した。

「ほう、面白い使い方をするな」

メルドや同行している騎士達は、ハジメの錬成を用いた戦い方に關心していた。

「見ててよかったOの錬金術師ってな」

「僕達のは鉱物とかそういった物限定だけどね」

そして、何の苦もなく目標としていた20階層へとたどり着いた一行。ここからは複数の魔物が混在、連携を組んで襲ってくるから油断するなと告げられた。その言葉通り、予想外のところから襲われたり、連携に苦戦させられる一行。飛羽真はというところ

「ほいっと」

武技『可能性知覚』で強化された直感を使って、魔物が行動するよりもはやく対処したり、ハジメ、恵理、幸利に指示を飛ばしたり、それとなく雫や優花のフォローもしていた。

「大丈夫か南雲？」

「はあ、はあ・うん。八神君に鍛えてもらってなかったら危なかったかもしれないかな。主に体力が」

ハジメは魔力回復薬を飲みながら答えた。

「天之河君でさえ息も絶え絶えだっというのに、八神君はまだまだ余裕そうだね」

「あの考え無しな馬鹿と比べられたくないんだがな」

「・・・いつも思うんだけど、何で八神君は天之河君にあんなに嫌悪してるの?」

「常に自分が正しいと信じてやまないこと、自分に都合よく物事を解釈すること、勝手に完結させること、言い出したらキリがねえ」

「あはは」

嫌な顔で悪態をつく飛羽真に、ハジメは飛羽真がどれだけ光輝のことを嫌っているのかを改めて知る。

「今回のことにしたってそうだ。巧みに誘導され抱いている正義感

「うわっ!？」

「きやあ!？」

ダメージこそ体にはないが、思わず硬直してしまう。　威圧の咆哮　“、ロックマウンツの固有魔法で、魔力を乗せた咆哮を発することで、一時的に相手を麻痺させることが出来る。動けない雫達を見たロックマウンツは突撃はせず、傍らにあった岩を持ち上げると、見事な砲丸投げのフォームで香織達後衛組に向かって投げた。

岩は動けない雫達の頭上を越え、香織達に向かう。後方にいたため咆哮の影響を受けずに魔法の準備をしていた香織達は、迎撃しようとして魔法陣が施された杖を向ける。そして、魔法を発動しようとした瞬間、衝撃的な光景に硬直してしまった。なんと、ロックマウンツが投げた岩は、投げたロックマウンツと同じように擬態していたロックマウンツだったのだ。空中で1回転すると両腕を広げて香織達に迫る。

“O・じ・こ・ちゃくん!”という声が地球組の脳内に響いた。しかも、目は妙に血走っており鼻息も荒い。後衛の香織と鈴は悲鳴を上げて魔法の発動を中断してしまう。そして、ロックマウンツが迫ろうとしたとき、後方より放たれた火球がロックマウンツの顔面にヒットし仰け反る。そしてー

『筋力増加』、『剛腕剛撃』

せりだす壁を利用して前に出てきた飛羽真が強化した拳でロックマウンツを殴り飛ばし、もう1体のロックマウンツと衝突させた。

「大丈夫か?」

「あ、ありがとう八神君」

助けてくれた飛羽真にお礼を言うも、香織と鈴の顔色は悪かった。相当気持ち悪かったのだろう。そんな香織達を見て、思い込みの激しい光輝がキレた。

「貴様・・・よくも香織達を・・・許さない!!」

顔が青ざめているのを死の恐怖だと勝手に解釈し、怒った光輝に手に持つ聖剣が呼応し、輝きだす。

「万象羽ばたき、天へと至れ・・・」

「あつ、こら、馬鹿者!」

「はあ」

光輝が何をするのか分かったメルドは止めようとし、飛羽真はため息を吐く。

「天翔閃」

メルドの声を無視して、詠唱により輝きを増した聖剣を振り下ろそうとした光輝だったが、振り下ろそうとした腕を飛羽真に掴まれ、止められた。

「何をするんだ八神！」

「……………」

吠えてくる光輝を無視して飛羽真は腰に差している2代鬼徹を抜く。呼吸による力を脚に集中させ一瞬でロックマウントとの距離を詰める。その速さは勇者である光輝ですら目で追うことが出来なかった。

「無の呼吸 日ノ型 烈日紅鏡」

ロックマウントとの距離を詰めた飛羽真は左右に素早く刀を振り、ロックマウント2体を同時に両断する。気配感知と武技『領域』を使用して擬態しているロックマウントがないかを確認し、もういないと解ると領域を解除して刀を鞘に納め、メルド達の下へと戻る。

「八神！なんで邪魔…………へぶう!？」

「この馬鹿者が！気持ちは分かるが、こんな狭い場所で使う技じゃないだろう。それと飛羽真に文句を言うのはお門違いだ！あいつは崩落の可能性も考えてお前を止めただ！」

戻ってきた飛羽真に光輝が文句を言おうとしたが、メルドの拳骨を喰らい、さらには飛羽真に助けられたと言う。

「やれやれ…………!？」

メルドに叱られながら自分を睨む光輝に飛羽真が呆れていると、体が痛む。

「(2週間ちよつとじゃ日ノ型を万全に使えるようにするには足りなかったか)」

「飛羽真?！」

「雫。大丈夫か?！」

「ええ。咆哮を受けて動けなくなっただけだから。それと、香織と鈴を助けてくれてありがとう」

「助けた後のあのバカの思考と、後先考えない行動には呆れたけどな」

「それは・・・光輝だからってことで納得するしかないわよ」

「・・・あれ、何かな？キラキラしてる・・・」

ロックマウントの咆哮で崩れたであろう壁の方に視線を向け、指を差す香織。全員が香織の指さす方に目を向けると、そこには青白く発光する鉱物が花咲くように壁から生えていた。インディゴライトが内包された水晶のようにキラキラと輝く鉱石。その美しい姿に女子全員がうっとりとした表情になる。

「ほお〜あれはグラランツ鉱石だな。大きさも中々。珍しい。」

「確か宝石の原石だったよな。効果は特にないが、涼やかで煌びやかな輝きが貴族の令嬢等に大人気で、アクセサリーに加工して贈ると大変喜ばしいって、城の工房長が言ってたな。ついでに求婚の際に選ばれる宝石としても有名だとも言ってたな」

「素敵」

飛羽真が城お抱えの錬成師に聞いた話を思い出していると、メルドの説明を聞いた香織が頬を染めながらうっとりとしている。そして、誰にも気づかれない程度に視線をハジメに向けていた。

「(プレゼントしてくれないかな〜って思ってるなありや)」

その視線に気づいていた飛羽真は香織の考えていることを当てる。隣にいる雫も香織の視線と考えが分かったのか、やれやれとため息を吐いた。

「だったら俺らで回収しようぜ」

「こら！勝手な行動をするな！安全確認もまだなんだぞ!!」

何を思ったのか檜山が唐突に動き出す。グラランツ鉱石に向けてヒョイヒョイと崩れた壁を登っていく。メルドが慌てて言うも、檜山は聞こえないふりをして登っていき、とうとう鉱石の場所までたどり着いてしまった。メルドは止めようと急いで檜山を追いかける。メルドが追いかけると同時に騎士団員の一人がトラップを見つけるこ

とのできる魔法で鉱石の辺りを確認して、その表情を一気に青褪めさせた。

「団長！・トラップです!!」

「っ!? 大介! それに触れる・・・」

団員の警告を聞いたメルドが檜山に告げるも一歩遅かった。檜山がグランツ鉱石に触れた瞬間、鉱石を中心に魔方陣広がる。鉱石の輝きに魅せられ不用意に触れた者に対する罠だったのだ。美味しい話には裏がある。まさにその言葉通りだ。魔方陣は瞬く間に部屋全体に広がり、輝きを増していく。まるでトータスに喚ばれた日を再現しているかのようだ。

「くっ、撤退だ! 早くこの部屋から出る!!」

「(こりや、間に合わないな)」

メルドの言葉に全員が急いで部屋の外に向かう中、輝きをなお増す魔方陣を見て間に合わないことを悟り、何があってもいいよう身構える。

部屋全体に光が満ち、全員の視界を白一色に染めると同時に一瞬の浮遊感に包まれる。空気が変わるのを感じる中、ドスンと言う音と共に地面に叩きつけられた。尻もちをついた他の者達と違って、何事もなく地面に着地した飛羽真は周囲を警戒する。遅れて立ち上がったメルドや騎士団員が同じように周囲を警戒する。

「(これまた凄いところに跳ばされたな)」

飛羽真は周囲を警戒しつつ、自分達がいる場所見て冷や汗を掻く。飛羽真達がいるのは石で造られた巨大な橋の上。長さは百メートル近くあり、天井は二十メートルはあるだろう。一番の問題は橋の下に川などは無く、深淵のごとき深い闇が広がっていた。橋には手すりどころか緑石すらなく、足を滑らせたりしたら一環の終わり。そんな橋の中央に飛羽真達はおり、橋の両サイドには奥へと続く通路と上へと登る階段があった。

「お前達! すぐに立ち上がってあの階段のある場所まで急げ!」

階段を確認したメルドは険しい表情をしながら雷鳴の如く轟いた号令を出す。その号令にハジメ達はわたわたと動き出す。だが、撤退

は叶わなかった。橋の入り口に魔方陣が現れ、その魔方陣から大量の魔物が出現する。そして、通路側にも魔方陣が現れ、一体の巨大な魔物が出現する

「・・・まさか・・・ベヒモス・・・なのか」

メルドの呻くような呟きが明瞭に響く。

第08話

檜山の迂闊な行動によって石橋の上へと強制転移させられた飛羽真達。一刻も早くその場から離れようとした矢先、上の階層へと戻る階段と奥へと続く通路に魔方陣が現れ、階段側からは骸骨の魔物、トラムソルジャーが現われ、通路からは十メートルはあり、トリケラトプスに似た巨大な魔物が現われ咆哮を上げる

「(大賢者、あの魔物についての情報をくれ)」

『了。あの魔物の名はベヒモス。かつて最強と言われた冒険者をして歯が立たなかった魔物だと伝えられています。推定ですが強さは“波”のボスと同じと思われます』

「(今の俺で倒せるかね)」

大賢者の説明を聞き、飛羽真は現在のレベルとステータスを思い出す。

八神飛羽真 17歳 男 レベル：18

天職：剣士、錬成師、召喚師 職業：冒険者 ランク：赤

筋力：970

体力：970

耐性：620

俊敏：950

魔力：200000

魔耐：150000

技能：剣術「+斬撃速度上昇」「+抜刀速度上昇」・錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+イメージ補強量上昇」・召喚・格闘術「+部分強化」・魔力操作「+魔力放出」・闘気「+身体強化」「+変換回復」・縮地「+無拍子」・火属性適正「+付与」・風属性適正「+付与」「+雷属性」・気配感知・言語理解

これが現在の飛羽真のステータスである。さらに“全集中の呼吸・常中”で体力、耐性、魔力、魔耐以外のステータスが2倍となっている。

「(無双活性と武技による身体強化を使えば行けるか？ 変身すれ

ば倒せるのは間違いないが)」

ベヒモスを倒す算段を考えていると、

「アラン！ 生徒達を率いてトラウムソルジャーを突破しろ！ カイル、イヴァン、ベイル！ 全力で障壁を張れ！ 奴を食い止めるぞ！ 光輝、お前達は速く階段に向かえ！」

「待ってくださいメルドさん！ 俺達もやります！ あの恐竜みたいな奴が一番ヤバイでしょう！ 俺達も……」

「馬鹿野郎！ あれが本当にベヒモスなら今のお前達では無理だ！ 奴は65階層の魔物。かつて『最強』と言わしめた冒険者をして歯が立たなかった化け物だ！ さっさと行け！ 私はお前達を死なせるわけにはいかないんだ！」

大賢者が教えてくれた説明をメルドが光輝に伝え、この場から逃げるよう鬼気迫る表情で言われ、一瞬怯んだ光輝だったが、『見捨ててなど行けない！』という無駄に高い正義感で踏みとどまった。

「力の差も解らないのかあいつは？ まさか、自分は勇者だから勝てると思ってるんじゃないだろうな？」

その通りである。

「雫、白崎と谷口を連れて階段に迎え」

「でも、光輝と龍太郎が……」

「話を聞かないガキのことなんて放っておけ」

「っ!？」

飛羽真の言葉に雫は眼を見開く。

「あの2人とお前、どっちを助け、どっちを見捨てるか？ そう聞かれたら俺はお前を選ぶ。幼馴染だからや手のかかる弟だとかは頭から捨てて、生き残ることだけを考えろ」

「……解ったわ」

しばし考えた後、雫は香織と鈴に声をかけて階段のほうへと向かった。3人が走り出したのを見送ると、ベヒモスに視線を向けると、咆哮を上げながらこちらに突進して来るのが見えた。

「『全ての敵意と悪意を拒絶する、神の子らに絶対の守りを、ここは聖域なりて、神敵を通さず！ 』 聖絶！！！！」

王国最強戦力が張った全力の多重障壁。1分だけの防御だが、張った障壁はベヒモスの突進を止めた。障壁とベヒモスの衝突したさいすさまじい衝撃波が発生し、ベヒモスの足元は粉碎し、石橋だということに大きく揺れた。撤退中のクラスメイトらは悲鳴をあげ、中には転倒する者もいた。

「(相当混乱してるな。まずいぞこれは)」

階段からくる ترامソルジャーに加え、後ろから迫る恐怖に全員が半ばパニック状態に陥る。隊列など無視して我先にと階段を目指して進んでいく。アランがパニックを抑えようとするも、目の前に迫る死の恐怖により耳を傾ける者は誰もいない。

いまだメルドと言い合う光輝とやる気を見せている脳筋の龍太郎をほつといて飛羽真も階段へと向かうと、後ろの1人に突き飛ばされ、転倒する優花を見つけた。そんな優花に1体の ترامソルジャーが剣を振り上げていた。

『疾風迅雷』

それを見た飛羽真は太刀を抜き、30秒という短い時間だが超高速移動が可能な武技『疾風迅雷』を使い、超スピードで優花の前まで移動すると、

「無の呼吸 雷ノ型 稲魂」

神速の5連撃を放ち ترامソルジャーを斬り裂いた。

「大丈夫か園部？」

「え、ええ。ありがとう八神」

飛羽真は優花の手を引っ張り立ち上がらせながら安否を尋ね、優花は少し頬を赤くさせながら飛羽真にお礼を述べた。

「優花、大丈夫!？」

「八神が助けてくれたから大丈夫よ」

「そう、よかった」

「・・・まずいな」

優花の答えを聞いてほつとする雫。一方、飛羽真はパニックになって滅茶苦茶に武器や魔法を振り回しているクラスメイトを見て顔をしかめる。率いていたアランが必死に纏めようとしているが誰も耳

にも届かず、いずれ死者が出るだろう。更に魔方陣から続々と増援が送られており、全滅もあり得る。

「(この状況を打破するには・・しゃくだがあいつの力が必要だな)」この危機的状況を打破することは飛羽真も可能だ。だが、一気にとなると飛羽真では火力不足なのである。だが、飛羽真には無理でも別の男にはそれが可能なのである。

「南雲君!?!」

「ちよ、香織!?!どこに行くの!?!」

「雫!?!つち!」

飛羽真と同じ考えに至ったのかハジメが光輝の下へと走っていく。それを見た香織が追いかけて、ハジメを追いかけていった香織を雫も追いかけていった

「ええい、くそ! もう持たんぞ! 光輝、早く撤退しろ! 龍太郎も早く行け!」

「嫌です!メルドさん達を置いていくわけにはいきません!絶対、みんなで生き残るんです!」

「くっ、こんな時にわがままを」

今だ自分の指示を聞かず、残っている光輝と龍太郎にメルドは苦虫を噛みつぶしたような表情になる。この限定された空間でベヒモスの突進を回避するのは難しい。その為、逃げ切るためには障壁を張り、押し出されるように撤退するのがベストだ。その微妙な匙加減はベテランだからこそ出来るのであって。今の光輝達には無理なことだ。その説明をかいつまんでだが、何度もしているのだが、光輝は「置いていく」と言うことがどうしても納得せず、また、自分ならベヒモスをどうにかできると信じてやまない目をしていた。

「(ええい。ここにきて戦闘素人である光輝達に自信を持たせよう

とほめて伸ばす方針が裏目に出るとは！」

「天之河君!!」

自分がした育成にメルドが舌打ちをしていると、ハジメが光輝の目の前に飛び込んできた。

「な、南雲!？」

「早く撤退を！ 皆のところに！ 君がいないと！ 早く!!」

「いきなりなんだ？それより、何でこんな所にいるんだ！ここは君がいていい場所じゃない！ここは俺達に任せて南雲は・・・」

「そんなこと言っている場合か!!」

「っ!？」

今まで見たことのない乱暴な口調で怒鳴るハジメ。苦笑いしながら物事を流す大人しいイメージとのギャップに光輝は硬直する。

「あれが見えないの!？」 皆パニックになってる。リーダーがいないからだ!!」

光輝の胸倉をつかみ、ハジメは ترامソルジャーに襲われ、右住左住しているクラスメイト達を指さす。

「二撃で切り抜ける力が必要なんだ！皆の恐怖を吹き飛ばす力が！それが出来るのはリーダーの天之河君だけでしょう！前ばかり見えないで後ろもちゃんと見ろ!!」

「……。ああ、分かった。直に行く！メルド団長、すみませ……」
「下がれー!!」

呆然と混乱に陥り怒号と悲鳴を上げるクラスメイトを見ていた光輝は頭を振るうと頷き、メルドに「すいません、先に撤退します」。

そう言おうとした瞬間、メルドの悲鳴と同時に障壁が砕け散った。暴風のように荒れ狂う衝撃波がハジメ達を襲う。咄嗟にハジメが前に出て錬成により石壁を作り出すがあっさりと砕かれ吹き飛ばされた。

『グオオオオオオオ!』

舞い上がる埃がベヒモスの咆哮で吹き払われた。そこには、倒れ伏し呻き声をあげるメルドと3人の騎士。衝撃波の影響で身動きが取れないようだ。光輝達も倒れていたが直に起き上がる。メルド達の

後ろにいたことと、ハジメの石壁が功を奏したようだ。

「南雲君！」

「南雲君！ 光輝君！」

香織と、香織と同じように追いかけてきた恵理がハジメ達に駆け寄る。光輝が苦しそうではあるが確かな足取りで前に出ようとしたとき、光輝の頭上を飛び越えて飛羽真が前に出てくると、地面に手をつけてジャンプしてギリギリ届く高さの石壁を錬成する。

「南雲！メルドさん達のところに行つて覆う形で石壁を作れ！他の奴等は耳をふさげ」

飛羽真は量子ボックスから1個の筒を取り出すと口でついているピンを外し、跳躍して石壁の向こうに放り投げた後、自分も耳をふさぐ。数秒後、爆発音と閃光が生じた。数秒間続いた閃光が止んだのを石壁越しで見ていた飛羽真は立ち上がるとメルド達のところに行く

「天之河、坂上、メルドさん達を連れて引くぞ」

「や、八神、今のは」

「俺が南雲と一緒に作ったスタングレネードだよ。そんなことより早くしろ！」

動けないメルド達に肩を貸し、撤退しようとしたところ、

「俺は大丈夫だ」

3人の団員と同じぐらい傷を負っていたはずのメルドがすっかりとした足取りで立ち上がった。よく見ると負っていた傷は治っていた。

「メルド団長、傷は？」

「ハジメに貰った薬を飲んだら治った。龍太郎、ベイルを頼む」

驚く光輝を他所にメルドは2人の団員に肩を貸し、残りの1人を龍太郎に任せると階段に向け早足で歩く。飛羽真は地面に捨てられていたからの瓶を見て自分が渡したハイポーションを飲ませたんだと瞬時に理解した。

「天之河、お前は先に行つて他の奴らを一つに纏めろ」

「君はどうするつもりだ八神？」

「殿を務める。足止め出来るのは俺か南雲だけだからな」

どうやってベヒモスの足止めをしようか飛羽真が考えていると、1人の少年と少女が隣に立った。

「南雲に中村!? お前らなんで!？」

「僕もベヒモスの足止めを手伝おうと思って」

「わ、私は南雲君のサポートをしようと思って」

「つたく、ほれ」

飛羽真は収納バッグから魔力回復薬を取り出しハジメに渡す。

「準備してきた分はもうないんだろう? やるよ。魔力だけならあの馬鹿以上にあるからよ」

「ありがとう」

ハジメは飛羽真から薬を受け取るとベヒモスの咆哮が聞こえ、飛羽真が錬成した石壁を崩してこっちに向かってきた。

「2人とも下がってろ」

「う、うん」

「(大賢者、タイミングは任せた)」

『解。了解しました』

飛羽真はハジメと恵理に下がるよう言う石を拾って石槍へと錬成させるとベヒモスに向け投擲する。たいしたダメージにはならなかったがベヒモスは石槍を自分にぶつけた飛羽真に標的にした。頭部の兜を焼けた鉄のように熱くさせると咆哮をあげ、突進、跳躍すると赤熱させた頭部を下に向け隕石のように落下してきた。

『告。今です』

「縮地」

ベヒモスをギリギリまで引き寄せ、大賢者の合図で飛羽真は縮地を発動して後ろに下がり、ベヒモスに向け跳躍、

『剛撃』

石橋にめり込んだ頭を抜き出そうとしているベヒモスの頭部にかかと落とし繰り出し、さらにめり込ませた。

「南雲!」

「っ! 錬成!!」

飛羽真に呼ばれたハジメがベヒモスに飛びつく。赤熱化の影響が

残っておりハジメの肌を焼く。肌が焼ける痛みを無視してハジメは何度も使ってきた魔法を唱える。ハジメが錬成を発動すると、さらに深く石中に埋まった頭部を抜こうとしていたベヒモスの動きが止まった。周囲の石を砕いて頭部を抜こうにもハジメが錬成して直してしまうのだ。

「錬成」

地面に着地した飛羽真も錬成魔法を発動し、ベヒモスの足元を石を柔らかくさせ1メートル以上、足を沈み込ませ、すぐさま錬成で足元を固める。ベヒモスのパワーはすさまじく、油断すると石畳に亀裂が入り抜け出そうとするが、2人はその度に錬成で直し、抜け出すのを阻止する。恵理はに自分の分と飛羽真から渡された魔力回復薬をハジメに飲ませ続けハジメの魔力が無くならないようサポートする。

「(あっちの立て直しは出来たみたいだな) 南雲、中村! あとは俺に任せて先に行け!」

「で、でも」

「魔法で援護があつたとしても、2人の足の速さじゃギリギリになるだろう。俺なら大丈夫だから行け!」

「・・・解つたよ。行こう中村さん」

飛羽真に言われ、ハジメは錬成を止めると恵理の手を掴んで階段のほうへと駆けだした。ハジメと恵理が走り去るのを見ながら飛羽真は魔法の詠唱の準備に入っているのを見た

「・・・ベヒモス。今回は引く。だが、今度会った時は斬る、必ずな」
数十度目の亀裂を錬成で直し、拘束したと同時に飛羽真は階段へ向け駆けだした。

「こいつはサービスだ」

そして、量子アイテムボックスから数個の手榴弾を取り出し、安全ピン取り外してベヒモスのほうへと投げる。5秒後、地面が破裂するように粉碎され、ベヒモスが咆哮と共に起き上がる。その目には憤怒の色が宿っており、無様な姿を晒させた怨敵を探し・・・逃げる、飛羽真、ハジメ、恵理の3人を捉えた。

怒りの咆哮を上げ、3人を追いかけてようと四股に力を溜めたたた

ん、飛羽真が置き土産に残した手榴弾が爆発した。そして、あらゆる属性の攻撃魔法が殺到する。色とりどりの魔法がベヒモスを打ち捉えるが、ダメージは入っていない。しかし、しっかりと足止めをしていた。

『疾風迅雷』

飛羽真は優花を助けに行く際に使った武技を使い超スピードで走り、ハジメと恵理を回収して階段まで駆け抜けよう考えた。あつという間にハジメと恵理に追いつき、回収しよと手を伸ばした瞬間、爆発と共にハジメの身体が後ろへと吹き飛んだ。

「何?」

手をつないでいたため恵理も爆発を受けたのか一緒に吹き飛んでしまった。飛羽真は急停止し、2人を回収しようと駆けだすが、『疾風迅雷』の効果が時間が過ぎてしまった。

「くそーこんな時に」

フラフラしながらも少しでも前に進もうと立ち上がる2人を見て、飛羽真は2人を回収するために駆けだす。それと同時にベヒモスの咆哮が鳴り響いた。見るとベヒモスは再度頭の兜を赤熱化させており、その赤熱化した頭部を盾のようにかざしながらハジメと恵理に向かって突進、跳躍する。

迫りくるベヒモスを見て2人はなけなしの力を振り絞って、その場を飛び退いた。直後、怒りの全てを集束したような激烈な衝撃が橋全体を襲った。ベヒモスの攻撃で橋全体が振動する。

「うお!」

さすがの飛羽真もその振動にバランスを崩し、倒れてしまう。

着弾点を中心に物凄い勢いで亀裂が走り、橋が悲鳴を上げる。そして遂に・・・橋が崩壊を始めた。度重なる強大な攻撃に晒され続けた石橋は耐久限度を超えたのだ。

『グウアアア!』

崩壊の中心地にいたベヒモスは崩壊から逃れようともがくが、意味をなさず奈落へと落ちていった。

『疾風迅雷』

起き上がった飛羽真は再度、武技を使用して2人の元へと駆ける。あと少して必死に這いずる2人の手に手が届く距離にたどり着く。だが、2人の手を掴もうとした瞬間、2人の足場が完全に崩壊し、飛羽真の手を虚空を掴んだ。

「っ!?! ちくしよおおお!?!」

2人を助けることが出来なかった飛羽真の悲痛な叫び声が部屋全体に響いた。

第09話

「くそつたれがー!!」

飛羽真は拳を何度も地面に叩きつけ、悔しがる。

『視覚・・・強化』

飛羽真は視覚を強化して悲鳴をあげたり、顔を青褪めたりしているクラスメイト達を見る。飛羽真は見たのだ、ベヒモスへと放たれていた無数の魔法。その内の1つであった、火球の軌道が曲がり、ハジメへと向かったのを。

「(あの火球は南雲を殺すために意図的に軌道を曲げた!誰だ!?!: : いったい誰が!)」

飛羽真は強化した視覚でクラスメイト全員の表情を見る。ほぼ全員が顔を青褪めている中1人だけ、笑っている者がいた。

「(あいつかあ!?)」

犯人を見つけ、顔の原型が無くなるほど殴りたい衝動に駆られる飛羽真だが、今優先すべきは迷宮からの脱出。飛羽真は怒りを心の内にしまうと立ち上がり、奈落の底を見る。

「(南雲、中村、必ず助けに行く。それまで無事でいてくれ)」

「飛羽真、他の皆は上に行ったわ。私達も行きましょう」

「ああ」

駆け寄ってきた雫に声をかけられ、飛羽真は振り返ると他のクラスメイト達を追いかけた。

先が暗闇で見えない程ずっと上方へと続いている階段。感覚では30階以上、上がっているはずだ。魔法による身体強化をしているも、そろそろ疲労を感じる頃である。先の戦いでダメージもある。薄暗く長い階段はそれだけで気が滅入るものだ。

「(そろそろ小休止を挟むか)」

生徒達の顔色を見てそうメルドが考え始めたとき、魔方陣が描かれた大きな壁が現れた。生徒達の顔に生気が戻り始める。メルドは駆

け寄り壁を詳しく調べ始めた。勿論、フェアスコープを使うのも忘れない。調べた結果、トラップの類ではないことが解る。魔方陣が刻まれた式は、目の前の壁を動かすための物。メルドは魔方陣に刻まれた式通りに詠唱を行い、魔力を流し込む。すると、忍者屋敷の隠し扉のように扉がクルリと回転し、奥の部屋への道を開いた。

扉を潜ると、そこは元の20階層の部屋だった。戻ってこれたことに安堵したり、泣き出したり、へたり込む者もいた。メルドも休ませてやりたい気持ちも確かにあった。しかし、まだ迷宮の中、低レベルとはいえ、いつどこから魔物が現れ、襲ってくるかも分からない。彼は心を鬼にし、

「お前達！座り込むな！ここで気が抜けたら帰れなくなるぞ！魔物との戦闘はなるべく避けて最短距離で脱出する！ほら、もう少しだ、踏ん張れ！」

生徒達を立ち上がらせた。視線で休ませと欲しいと訴える者が多かったがメルドは睨んでそれを封殺する。光輝がクラスメイトに声をかけ、率先して先に行く。

魔物との戦闘を極力さけ最短距離で地上へと行こうと考えていたメルドだが飛羽真に正規のルートで戻ってくれと頼まれた。安全のためそれは出来ないと言ったが、現れる魔物は全て自分が対処するからと言われ、悩むが飛羽真の内に秘める怒りを何となく察し、許可を出した。

メルドからの許可を得た飛羽真は阿修羅のごとき表情で襲い来る魔物を斬つてく。返り血が顔や服に付着するが、どうでもいいとばかりに無視して魔物を次々と斬っていく。その暴れぶりにクラスメイト達は当然だが、メルド達騎士も戦慄を隠せない。

地上にたどり着いたクラスメイト達は生き残ったことを喜んでいった。だが、一部の生徒・・・ハジメが奈落に落ちていったのを見て混乱し強制的に意識を奪われた香織ははまだ目を覚まさず、香織を背負った雫や光輝、その様子を見る龍太郎、鈴は暗い表情だ。そんな中、

飛羽真は檜山に近づき、他のクラスメイトにも聞こえるように大きな声であると言った。

「檜山、南雲に魔法を当てたのはお前だな？」

「っ!？」

『っ!?!』

飛羽真の確信めいた言葉に檜山を体を少し震わせ、話を聞いていたクラスメイトは視線を檜山に向ける。

「待て、飛羽真。ハジメと恵理に当たった、魔法は制御を離れ、誤爆したものだというのが？」

「ええ。俺は走りながらもベヒモスへと放たれている魔法はちゃんと見ていた。だが、無数に放たれる魔法の中で1つだけ軌道を曲げ、南雲へと向かっていったんですよ」

「八神、適当を言うんじゃない。もし君の言う通り、ベヒモスへと撃たれた魔法の一つが故意に南雲に向かったと仮定したとしてもそれが檜山の撃ったものとは限らないはずだ」

「そ、そうだ、それに俺に一番適性のあるのは風属性だ。あの状況で南雲にあたった火球を使うわけねえだろう」

光輝の援護にしめたとばかりに自分ではないという檜山。だが、檜山の口から出た言葉に飛羽真はにやりと笑う。

「へえくく火球・ねえ。何で南雲にあたったのが火球だってわかるんだ？」

「何でって、お、お前が言ったんだろう!」

「俺は『魔法』としか言っていない。そうだよな雫？」

「・・・ええ。飛羽真は一言も火球だなんて言っていないわ」

「っ!？」

「え?・・・っ!？」

飛羽真の言葉に檜山は少し前の会話を思い出し、飛羽真が火球という言葉を口にしていないことを思い出す。

「近くでそれを見た俺以外に、何の魔法が南雲に当たったのか知っている者が犯人。つまり、お前だよ檜山」

「あ、あ」

自分の口で犯人が自分であることを告げてしまった檜山の顔はほとんど青褪めていく。そんな檜山を無視して飛羽真は拳を鳴らした後、構え、

『筋力強化』、『豪腕剛撃』

武技で強化した拳で檜山を顔を思いっきり殴り飛ばした。殴られた檜山は声をあげることなく入り口付近の柱に激突した。

「や、八神！檜山になんてことをするんだ！」

「……庇うっていうのか？出す必要のなかった犠牲を2人も出したこの馬鹿を!？」

「そ、それは」

飛羽真の言葉に光輝はたじろぐ。

「ふん」

そんな光輝を無視して飛羽真は鼻が折れ、気を失った檜山の襟を掴むと、引きずってメルドのところまで行き、引き渡した。

「次、目にしたらうっかり殺しちゃいそうなので、ふんじばって俺の目の届かない場所でも置いておいてください」

「……解った。アラン、檜山を縄で縛って馬小屋に入れておけ」

「……いいんですか？」

「構わん」

「分かりました」

「カイル、イヴァン、ベイル。お前達は檜山と仲の良かった近藤達を見張っておけ」

「「はい」」

檜山を受け取ったアランは言われた通りにするため先にその場を離れ、他の3人もメルドに言われた通り檜山とつるんでいた近藤、中野、斎藤の監視を始めた。そして、メルドは20階層で発見したトランプとハジメと恵理の死亡報告をするため、憂鬱な気持ちで受付へと向かった。

第10話

「またこの戦闘衣を着ることになるなんてな」

檜山のお粗末な悪意によってハジメと恵理がオルクス大迷宮の奈落の底へと落ちていってから3日。ホルアドで1泊した後、飛羽真達は高速馬車でハイリヒ王国へと戻り、ハジメと恵理の檜山の犯したごととハジメと恵理が死んでしまったことを報告した。国王や国の重鎮、教皇などは勇者の同胞の者が死んでしまったことに驚いていたが、死んだのが勇者ではなく無能なハジメでよかったと語った。

その言葉に飛羽真が切れ、国の重鎮を半殺し、さらにかすり傷とはいえ国王と教皇に手を挙げたことから処刑という声も上がったが、生きて戻ってこれたのは彼のお陰であること、不躰な発言をしたこちらが悪いこと等々から城から出ることと今後、国や教会は飛羽真に援助をしないということで話が纏まった。

「半信半疑だったが、本当にピッタリなサイズになったな」

2年前、特注で作って貰った戦闘衣。飛羽真は地球に戻る際、それは置いて行こうと思ったが、戦闘衣を作って貰った3人にこの服には着ると自動でその者に合った大きさに変化する鉱石から作った魔法の糸を使っているから記念に持って帰れと言われ。渋々持って帰ってきた。あれから2年。2年で当然、背は伸び、体も鍛えていたことから体格もよくなっており着れるかどうか不安だったが着たとたん、今の飛羽真に最適のサイズへと変わった。

「改めて異世界の技術ってすごいなく。さて、追っ手がやってくる前に国から出ますか」

準備が整い、出ようとした矢先、部屋のドアがノックされた。

「誰だ？」

「私よ飛羽真」

「雫か。他に誰かいるのか？」

「優花がいるわ」

「・・・(大賢者)」

『告。外には2人の気配しかありません』

「入っていいぞ」

大賢者に頼み、確認してもらった後、飛羽真は2人に声をかけた。

「お邪魔するわね」

「お邪魔します」

飛羽真の許可を得て、部屋に雫と優花が入ってきた。

「こっちから行こうと思ってたが、余計な手間が省けてよかったぜ。聞いているんだろう、俺のこと？」

「さつき、メルド団長から聞いたわ。どうしてあんなことをしたの？」

「勝手に召喚しておいて、死んだのが勇者じゃなく、無能である南雲でよかった。そんな言葉を聞いて黙っていられるほど、俺は人間出来てないんだよ。まあ、メルドさんのお陰で城からの即刻退去と援助無しで済んだのはラッキーだ」

「八神はこれからどうするつもりなの？」

「オルクス大迷宮に行つて、南雲と中村を探す」

「でも、2人は」

「・・・2人にお守りだつて言つて渡したペンダントは覚えてるか？」

「ええ」

「う、うん」

飛羽真に尋ねられ、2人は貫つた首にかけているペンダントを見せる。

「それと同じペンダントは南雲に。そして南雲経由で中村にも渡している。落下によるダメージでどれだけ壊れるかは解らないが生きてはいるだろう」

「そう」

「だが、階層の魔物の強さが分からないのに加え、2人には食料もない。落ちてから3日・・・危険な状態なのは確かだろうな」

2人にはそう言ったが、飛羽真はハジメに渡した収納バッグにねんのため携帯食料をいれておいた。量は大体10日分。2人でそれらを普通に食べて5日、食べる量を調整しても10日が限度だろう。

「だから城からの即刻退去は俺にとってありがたいことなんだ。そ

れに、南雲と中村を探すのとは別にやることがあるからな」

「やること？」

「元の世界に帰るための方法探した。教皇は戦争が終えればエヒトとやらが帰してくれるだろうと言ったが、俺はそうは思えないんでな自分で帰る方法を探す。勿論、南雲と中村の搜索が最優先だけだな」

「飛羽真、私も・・・」

「悪いが連れて行くことはできない」

飛羽真は雫が言いたいことが分かったのかそれを断った。

「危険な旅になることはまず間違いないだろう。そんな旅に連れて行くことはできない。それに、雫がいなくなったら誰が白崎を支えるんだ？目を覚ましたっていう知らせは聞いてないが、目を覚まして話を聞いたら探しに行くって言いかねないぞ？」

「そ、それは」

飛羽真の言葉を聞き、雫は否定できなかった。ハジメを殺したのが檜山だと知れば、南雲君を殺しておいてのうのうと生きてるだなんて許せない”と言つて檜山を殺しに行く可能性も捨てきれない。

「国や教会の援助がなくても俺には召喚師としての能力があるからどうとでもなる。だけど、白崎を支えることが出来るのは雫、お前だけだ」

「・・・解ったわ。だけど約束して。絶対に死なないこと。そして南雲君と恵理を必ず見つけることを」

「約束する。そうだ、2人にこれを渡しておく」

雫の約束を交わすと、飛羽真は着ている戦闘衣の上着を量子ボックスから2着取り出し、2人に渡す。

「その服は俺が着ている物と同じで特殊な製法で作られた物だ。作るときに鉱物のかけらをふんだんに使つて織つたもので動きやすく、そして防御能力も高い、俊敏さを生かして戦う雫にはぴったりのはずだ。中々遠距離で戦う園部にはあまり必要ないかもしれないが着ておいて損はないはずだ。後、雫にはこれを、園部にはこいつを渡す」

飛羽真は量子ボックスから指南書と2枚1対の投刃を2つ取り出

し、指南書を雫に投刃を優花に渡した。

「その指南書には武技、 “戦士の魔法” と呼ばれた技能が書かれている。八重樫流を主に使う雫には必要ないかもしれないが覚えておいて損はないと思う。こっちの投刃は鋭い切れ味を誇る。ブーメランのように戻ってくる上、園部の意思である程度、操作可能だ」

「時間があるときにでも読んでみるわ」

「ありがとう」

「んじゃあ、そろそろ俺は行く」

「城の前まで送るわ」

「私も。何もできないけどせめて見送りだけはする」

使っていた私物をいれた袋を背負い、部屋を出る飛羽真。雫と優花は飛羽真を見送るため一緒に城門前へと一緒に歩いて行った。

「来たか」

「メルドさんに、団員の皆さん」

城門前までやってくると、メルド他、王国騎士団員がそろって飛羽真を待っていた。

「もしかして見送りですか？それとも教会に俺を始末しろとでも言われたんですか？」

「っ!？」

飛羽真の発言に見送りに来た雫と優花は飛羽真の発言に眼を見開く。

「・・・例え、上からそんな命令をされたとしても俺達はその命令を聞くつもりはない。お前とハジメがいなければ俺達はあの日、死んでいただろうからな」

メルドの言葉に遠征に行った面々は頷く

「ここでお前を待っていたのは見送りと、餞別を渡すためだ」

「餞別？」

メルドは飛羽真に近づくと布袋を手渡した。

「これは」

「俺達からの餞別だ。南雲達を探すにしろ、宿を止まるにしろ金銭は必要だ。少ないが持つて行つてくれ。」

「……ありがとうございます」

「達者でな。それと坊主と嬢ちゃんのことを頼む」

「はい」

国には死亡と報告したがメルドも2人が生きていることを願っており、動けない自分のかわりに思いを飛羽真に託す。それを理解した飛羽真は力強く返事を返した。

「……開門」

メルドの言葉に城の門が開く。

「……お世話になりました」

飛羽真はメルド達に一礼すると、城門を潜り城を出ていった。

「さて、そろそろいいかな？出て来いよ、いるのは解つてるんだ」
夜も遅いことから宿でも取つて朝一でホルアドに行こうと思つていた飛羽真だったが城を出たあたりから視線を感じ、宿ではなく外へと出て、門番が見えなくなる所まで歩くと足を止め、闇夜に向け話しかける。すると、

「我らの存在に気づいていたとは」

闇夜からローブを羽織つた仮面の集団が現れる。

「我らは聖教教会に従わぬもの、崇拜する神を愚弄するものを断罪する教会の影。教皇の命に従い、貴様の命を貫いに来た」

「暗部組織か。いいのか、俺に話して？俺が誰かに言うかもしれないぞ？」

「問題ない。貴様は今ここで死ぬのだからな！」

リーダーと思われる男が手を掲げると、後ろに控えていた6人が飛羽真へと襲い掛かる。

「飛撃、『六光連斬』」

飛羽真は太刀を鞘から抜刀し、飛ぶ斬撃を同時に6つ放ち襲い掛

かつてきた暗部を斬り捨てた。

「つな?」

リーダーは部下が殺されたこと、そして飛羽真が何のためらいもなく部下を斬ったことに驚く。

「生憎とお前らのような奴らを斬るのは慣れてるんだ。それと、お前らは俺を弱いと思ってるんだろうが俺は・・・勇者より何倍も強いぞ」

「つく!一斉に掛かれ!」

部下を失ったことよって冷静さを失ったのかリーダーが部下に指示を出す。

「おいおい、一番冷静さを失っちゃいけない奴が取り乱してどうするんだ?」

飛羽真は手を暗部達に向けると、

「ドライファ・ヘルファイア」

巨大な業火の玉を放ち、骨すら残らず燃やし尽くした。

「お前達!」

「殺す覚悟があるんだ、殺される覚悟も出来てるんだよな?」

「つ!?!おとおおとおお!」

飛羽真の気迫に一瞬、たじろいたリーダーだったが、声をあげながら飛羽真へと駆ける。それを見た飛羽真は太刀に手をかざすと、炎が太刀を覆う。

「緋焔刃、 武技『神閃』」

魔法剣となった太刀を高速を超えた神速の速さで振るい、リーダーを斬った。斬られた個所から太刀に纏われていた炎が移り、それがだんだんと体全体に広がっていき、リーダーを燃やし尽くした。

「・・・とりあえずあの6人は火葬しておくか」

最初に斬った6人をそのままにしておくのはまずいと思い、炎を飛ばして火葬した。

「予想通り過ぎる行動に笑えてくるわ。証拠も取ったし、教会が何か言ってきたりもこれを流すと言えば大人しくなるだろう」

飛羽真はスマホをいじり、会話がちゃんと録音されているかの確認

をした後、スマホをしまい、鞘に収まった剣の形をした物を取り出し、腰に当てると、ベルトが現れ自動で巻かれる。そして、飛羽真は1冊の本を取り出し、鞘の左のくぼみにその本を納めると

『増刊！・ディアゴスピーデー！』

本から音声で鳴り響く。飛羽真はそれを無視して剣を引き抜くと、『発車爆走！・ディアゴスピーデー！・タイヤを開け、真紅がボデイが目を覚ます！・剣がシンボル！走る文字！・毎号特別加速！・ディアゴスピーデー！』

音声で鳴り響き、本がバイクへと変形した。

「・・・いつも思うんだが、このメロディどうにかならないのか？」
ため息をつきながら、飛羽真はバイクへの変形と共に現れたヘルメットを被り、エンジンをかけるとアクセル全開でオルクス大迷宮があるホルアドへとバイクを走らせた。

バイクを走らせ大体2時間でホルアドへとたどり着いた飛羽真は遠征の時に泊まったのとは別の宿舎を選んで入り、3人部屋を取って、部屋に入り、ガチャを起動する。

「計35か。10連を2回やって。あとは前に引いてた人物召喚を使うか。出来れば搜索系のスキルか道具が当たってくれれば嬉しいんだが」

飛羽真は自分の運を信じてガチャを回す。引いたガチャの大半は食料等の必需品であったが、使えそうなスキルやアイテム、武器も何個か手に入れることが出来た。

― 調合

― 超命の木の実

― 超力の種

― 素早さの種

― ブラッククロッド

―パンチングゴングプログラミングズキー

―スキル 変換効率操作

この中で飛羽真が興味を引いたのは“変換効率操作”である。

「大賢者、この変換効率操作について教えてくれ」

『解。このスキルは強化率などを変化させる能力があります。例えば、武技『能力向上』の強化率を25〜50、75、100%などに操作することが出来ます。これは能力だけではなく、レベル、ステータスの上限、アイテムなどにも有効です』

「技能を倍にすることも可能なの？」

『解。可能です。ですが現状の倍率の最大値は5倍までです』

「5倍もあげれば十分だろう。搜索系の物は当たらなかつたが、いいスキルが手に入った」

飛羽真はスマホを操作し、スキルの項目をタップして手に入れた“変換効率操作”を押して、“使用しますか？”と表示されたので迷わず“はい”を押して、スキルを習得した。

「へえ〜なかなかいいわねこの杖。伸縮自在な上に魔力を吸収して打撃力に変える。さらに魔力を先端に集中すれば魔力の刃を作ることが出来る。気に入ったわ」

「そいつは何よりだ」

翌日の朝、大迷宮の入り口で昨夜、召喚した人物の1人である“ゼシカ・アルバート”は飛羽真から渡された杖“ブラックロッド”を振り回しながら満足していた。

「このマントもいいわね。着ているだけで力が湧いてくるわ」
「そいつは重畳。シユテル、そっちはどうだ？」

「問題ありません」

飛羽真は召喚したもう1人の人物“シユテル・スタークス”に尋ねると、彼女は手にした杖“ゼイネシスクラッチ”を片手に持って答える。

「幸いにも私が覚えている魔法はこの杖を使っても使用出来るようになるので足手まといにはなりません」

「そうか。それじゃあ行きますか」

「ええ」

「はい」

飛羽真はハジメと恵理の捜索を行うべき、召喚した新たな仲間2人と共にオルクス大迷宮内へと入っていった。

第11話

「喰らいなさい『双竜打ち』」

ゼシカが何処からともなく現われた2匹の竜の幻影と共に鞭を素早く2回振るい、魔物を倒す。

「パイロシューター」

シユテルは自分の周りに10個の朱色の球体が生成する。球体はシユテルが杖を振るうと魔物めがけて撃ち出され、魔物を撃ち抜いた。

「いや〜〜俺の出る幕ないな。まあ、2人の実力を考えれば当然と言えば当然か」

「当然よ」

「ありがとうございます」

飛羽真が2人の強さに感心すると、ゼシカは胸をはり、シユテルは貴族の令嬢のような仕草でお辞儀をする。

「それにしてもシユテルの魔法は面白いわね。私が覚えている呪文とは違うんだもの」

「私としては飛羽真やゼシカが覚えている魔法と呪文に興味があります。私達の世界で使える物の少ない系統魔法を2人は使えるのですから。適正次第ではほかの系統の魔法も覚えられる」

「なら、後で調べてやろうか?」

「調べられるのですか?」

「俺の相棒が調べてくれる」

「それが本当ならぜひお願いします」

「了解。だけど、それは後でな。早いところ20階層まで行きたいんだ」

後でシユテルの魔法の適性を調べる約束を交わすと、飛羽真は足早に先へと進んでいく。

「・・・焦ってるわね」

「焦っていますね」

昨夜、飛羽真に召喚されたときに最優先事項と旅の目的を教えられた。召喚したとはいえ、2人には意思があるので一緒に来るも、1人で旅をするも（その際には出来る限りの援助をすると約束した）好きにしたいと伝えた。2人とも少なからず飛羽真に興味を抱いていたので、行動を共にすると伝えた。

その後、3人は何の苦もなく目的の20階層へと辿り着き、因縁の場所へと辿り着いた。

「・・・2人とも、あの壁に埋め込まれてる鉱石が見えるか？」

「・・・綺麗な石ね」

「目を奪われる涼やかで煌びやかな輝きですね」

クラスの女子同様、2人もグランツ鉱石に目を奪われていた。

「あの鉱石に触ると、罾が発動して強制的に別の場所に飛ばされる。あそこの隠し扉を潜り、下へと続く階段を下りていけば同じ場所にたどり着ける。2人はそのルートで行ってくれ」

「飛羽真はどうするのですか？」

「俺は鉱石に触って、強制転移でその場へと行く。その場所でもリベンジと言うか、なんとと言うか・・・まあ、あれだ。俺の個人的な理由で2人を巻き込みたくないんだ」

階段を下りていけば確実にあの場所に辿り着ける。だが辿り着いた先で、あれが出てくるとは限らない。飛羽真は自分の個人的な思いで2人を巻き込むのは悪いと思い、階段を使って降りてきてくれと言う。

「はあ~~~~あなたって結構馬鹿よね？」

「へ?」

「私達は多少の無茶は経験済みなのよ?まあ、実際に体験したわけじゃなく記憶でつて話になるけど。でも、体験した私にできて、今ここにいる私にできないはずはないわ」

「貴方と共に行動する以上、いつかはそのようなことに巻き込まれるのは必衰です。違うのは遅いか、早いかだけです」

「・・・2人とも」

「そ・の・か・わ・り、無茶に着き合わせた埋め合わせは、後でちゃくんとしてもらおうからね」

「・・・ああ」

ゼシカの要求に啞然とするも、笑って了承した飛羽真は、武技で跳躍力を強化するとグランツ鉱石が埋まっている場所まで跳び上がり、タッチする。飛羽真がグランツ鉱石に触れると、罫が発動し、3人は強制的に転移させられた。

「まだ4日しか経っていないって言うのに、懐かしく感じるな」

4日前に訪れた場所にやってきた飛羽真は、懐かしく感じるとともに崩れていた石橋が治っている事に気づく。

「どうなってるんだ？」

飛羽真が混乱する中、階段側と奥に魔方陣が浮かび上がり、大量のトラウムソルジャーとベヒモスが召喚された。

「調べたりするのは後にしなさい」

「言われなくても。ゼシカ、シユテル。2人はあの骸骨騎士達の相手を頼む。俺は・・・あいつをやる」

咆哮をあげるベヒモスを見ながら飛羽真が2人に言う。

「しょうがないわね。まあ、どっちにしる今の私の能力じゃ、あのモンスターの相手をするのは厳しそうだから、貴方に任せるわ。そうかわ、シユテル。どっちがあのもンスターを多く倒せるか競争してみない？」

「面白そうですね。では負けたほうは勝ったほうの言うことを一つ聞くというのはどうでしょう？」

「乗ったわ」

「では。レディ・・・」

「「ゴー！」」

同時に声を出すと、2人はトラウムソルジャーの討伐を始めた。

「それじゃあ、俺達も始めようか。ベヒモス」

飛羽真は量子ボックスから以前手に入れた変身ベルト「聖劍ソードライバー」を取り出し、腰に当てるとベルトが自動で巻かれ、装着される。そして、1冊の本「ワンダーライドブック」と呼ばれる本を取り出す。

『ブレイブドラゴン』

『かつて、全てを滅ぼすほどの偉大な力を手にした神獣がいた』

本を開き、閉じた後、ベルトの右のスロットにセットすると、納まった剣を握り鞘から引き抜いた。

『烈火抜刀！』

剣を引き抜くと、どこからともなく真紅の竜が現れる。

「変身！」

『ブレイブ・・・ドラゴン』

掛け声と共に×を描くように剣を振るうと、炎の斬撃波が放たれる。真紅の竜が飛羽真の周りを渦巻くように飛び回り、炎が噴き出る。その炎の中で飛羽真はその身に甲冑ソードローブを纏い、現れた真紅の竜は甲冑の右側と一体となった。そして、先に放った炎の斬撃波が吸い込まれるように頭部と一体となり、目となった。

『烈火一冊！勇気の竜と火炎剣烈火が交わる時、真紅の剣が悪を貫く！』

「さあ、リベンジマッチと行こうか」

満を持してトータスに仮面ライダーセイバーが参上する。

『ガアアアアア!!』

「突進か、芸のない奴だな」

咆哮をあげながら飛羽真めがけて突っ込んでいくベヒモス。ベヒモスの行動に飛羽真は何処か呆れつつ、その場から動こうとせず、左腕を突き出す。飛羽真の考えなど知った事かとばかりに、ベヒモスは飛羽真に衝突した。

普通なら、6000以上の質量があり、速度が大体32km/hも出している物に衝突すれば、確実に死ぬだろう。だが、ライダーに変身した飛羽真は、ベヒモスの突進を前に突き出していた左腕だけで受け止めていた。

「はあ！」

飛羽真は剣を持って右手でベヒモスを殴り飛ばすと、刀身が赤い輝きを放つ剣でベヒモスへと斬りかかり、傷を負わせていく。自分に傷をつけた飛羽真に怒ったベヒモスは頭部の兜を赤熱化させる。

「させねえよ」

飛羽真は剣をベルトの鞘に納刀し、トリガーを引くと剣を引き抜く

『必殺読破！烈火抜刀！ドラゴン一冊斬り！ファイヤー！』

「はあ！」

飛羽真はベヒモスに駆け寄って跳躍すると、灼熱の炎の灯した剣で頭部の兜を斬り裂いた。

『グアアアアア!?!』

頭部を斬られ、苦痛の声をあげるベヒモス。

「これで終わりだ」

飛羽真は剣を再び鞘に納刀し、トリガーを2回引く。

『必殺読破！ドラゴン！一冊撃！ファイヤー！』

「はあああああ！」

飛羽真はその場で高く跳躍するとベヒモスに向け、灼熱の炎を纏わせた飛び蹴りでベヒモスに叩き込んだ。飛羽真の飛び蹴りを喰らったベヒモスは大きく吹き飛び、爆発、跡形もなく消滅した。

「2人の援護・・・に行く必要はないな」

ベヒモスを倒した飛羽真はゼシカとシユテルの援護に行こうと振り返ると、トラウムソルジャーの姿は何処にもなく、シユテルが召喚用の魔方陣を破壊していた。

「片付いたようだな」

「そつちも終わったみたい・・・って、何その格好!?!」

ゼシカは振り返り、話しかけてきた飛羽真の姿を見て驚く。

「これか？変身して戦うヒーローの鎧だな」

「変身ヒーロー?」

「そうか、ゼシカのいた世界にはそういうのはなかったな。てつとり早く言えば、おとぎ話や英雄譚に出てくる勇者だと思ってくれればいい」

「うーん」

飛羽真の説明にいまいちピンと来ないのか、ゼシカは首を傾げる。

「これは・・・レヴィが喜びそうな格好をしていますね

「シユテルは解るのか」

「ええ。私には様々な私の記憶がありますので」

シユテルは飛羽真の姿を見て、どういふものなのかをすぐに理解した。

「そういえば勝負はどっちが勝ったんだ？」

「・・・引き分けよ」

「引き分けです」

「それでこれからどうするの?」

「・・・南雲と中村は奈落の底に落ちていった。手早く探すのなら、俺達もここを降りていくしかないな」

「降りるって、底が全く見えないここを!」

「私は飛行魔法があるので大丈夫ですが、2人は・・・」

「そんな呪文覚えてないわよ」

「ゼシカは俺が連れて行くから問題ない」

飛羽真は赤いライドブックを取り出し、開く。

『ストームイーグル!』

『この大鷲が現れし時、猛烈な竜巻が起ると言い伝えられている』
飛羽真はライドブックを閉じてベルトの中央にはめ込むと、剣を抜刀した。

『烈火抜刀!竜巻、ドラゴン、イーグル!』

何処からともなく真紅の龍と炎の大鷲が現れて飛羽真の周りを飛ぶと、大鷲は甲冑の胴体と一体化する。

『烈火二冊!荒ぶる空の翼竜が獄炎を纏い、あらゆるものを焼き尽くす!』

「鎧が変わった?」

「大鷲の頭部を模していますね」

「今の俺は一体化した大鷲の力を使い、空を飛ぶことが出来る」

2人に新たに取り込んだ力についての説明をすると、飛羽真はゼシ

カをお姫様抱っこする。

「ちよ!？」

「行くぞー!」

「きゃあああ!？」

慌てるゼシカを無視して飛羽真は飛び上がり、奈落の底へと降りていく。

「少しゼシカが羨ましいと思ってしまうのは何故でしょう?」

飛羽真に抱えられたゼシカを見て、シユテルは全ての記憶を含め、感じたことのない気持ちになったが、それを心の内にしまい込み、飛行魔法を発動させると、2人を追うために奈落へと降下していった。

第12話

「つゝゝゝ寒い」

「確かに寒いですね」

飛羽真と共にハジメと恵理を探すために奈落の落ちていったゼシカとシユテルはタオルで身を包み、焚火の火で暖を取って冷えた身体を温めていた。

「まさか、ウォーターライダーのような構造になっていたとは驚きでした」

「飛羽真が持っていたカヤックだったかしら？それと防水服があれば大丈夫って思ってたけど、予想以上に滝がいっぱいあった上に水の流れが強かったから意味がなかったわ」

「それにしても飛羽真は何処まで行ったのでしょうか？」

2人の冷えた身体を温める準備を終えた後、飛羽真は『周囲を見てくる』と言っていないなくなった。そしていなくなってから、かれこれ1時間は過ぎただろうか？今だ戻ってこない。

「もしここに魔物がいて襲い掛かってきたら、いっかんの終わりね」ゼシカがそう呟くと奥へと続く道から何かが吹き飛んで、壁とぶつかった。

「な、なに!？」

「敵襲でしょうか？」

突然のことにゼシカとシユテルが警戒していると、

「つゝゝゝ!?!なんちゅゝ脚力だ。気を一点に手中して防御しなかったら死んでたぞー!」

「飛羽真!？」

「ん？おおゝゝゼシカにシユテル、今戻った。それとそこから絶対に動くな。いいな?」

飛羽真の言葉に2人が首を傾げていると、奥へと続く道から中型犬くらいの大きさの兎?がやってきた。

「なに・・・あれ?兎かしら?」

「・・・物凄く不気味な兎ですね」

兎の魔物は辺りを見回すとゼシカとシュテルを発見する。兎は異様に発達した両足に力を溜め、溜め終えると、残像を引きつれながら途轍もない速度で2人に突撃する。そして、ほぼ同時に兎の踏み込んだ音にも負けないほどの轟音が鳴り響く。一瞬でも目を逸らしたりすればまずい状況だと理解していた2人だったが、聞こえてきた轟音に目を閉じ耳を塞いでしまった。

ほぼ同時に地を蹴った飛羽真と兎だったが、飛羽真のほうが近い位置にいたため、兎より早く2人の前に辿り着くことが出来た。そして、

「武技『流水加速』。無の呼吸 炎ノ型 気炎万丈」

飛羽真は弧を描くように太刀を振り下ろし、兎を斬り裂いた。

「上に行く階段がない?」

「ああ。一通り、この階層内を回ってみたんだが、下へと続く階段は見つけたが、上に行く階段はなかった。それと、魔物が異様に強いことも分かった。単調な攻撃しかしてこないベヒモスよりよっぽど強いと俺は思った」

「それは厄介ですね」

飛羽真から探索で得た情報を伝えられるゼシカとシュテル

「恐らく下に行くごとに魔物の強さは増していくでしょう。私は身体強化の魔法を使えばステータスを伸ばせますが、ゼシカは・・・」
「そうはいかないでしょうね。はあ〜」

「ここは・・・ガチャに賭けてみるか? 探索中に結構魔物と戦ったから券は集まっている。パワーアップアイテムかゼシカでも使えそうな変身ベルトが引ければいいんだが」

「いいの?」

「ゼシカに死んでほしくないからな。勿論、シュテルもだが」

そういうと飛羽真はガチャのアプリを起動させ、ガチャを始めた。所持していたすべての券を使ったことが功を奏したのか色々と役立ちそうなアイテム、スキルを手に入れることができた。

―スキル『魔導』×2

―ワイズドライバー＋変身リング＋ウイザードリング

―メイジドライバー＋変身リング＋ウイザードリング

―成長スキル『剣術』×2

―成長スキル『格闘術』

―成長スキル『杖術』×2

―アクセサリー リボン（ファイナルファンタジー）×2

―アクセサリー グラールロケット（英雄伝説）

「成長スキル？これは一体？」

「俺も初めて見るスキルだ。いったい何なんだ？」

飛羽真の側によって、ガチャの景品と一緒に見ていたシュテルが尋ねるも、飛羽真も初めて引いた物なので首を傾げる。

「内容を見ることはできないの？」

シュテル同様、側によってガチャの景品を見ていたゼシカが飛羽真に聞く。

「それならできるな」

得たスキルの内の一つをタップして能力を確認すると、

スキル『魔導』 魔法の威力が上昇し、効果範囲の拡大。

成長スキル『剣術』 スキルレベルが1つ上がるごとに体力＋5、

筋力＋2、俊敏＋1がステータスに加算される。尚、このスキルでのステータスの加算は本来のステータスとは別枠である。

成長スキル『格闘術』 スキルレベルが1つ上がるごとに体力＋5、筋力＋1、耐性＋1、俊敏＋1がステータスに加算される。尚、このスキルでのステータスの加算は本来のステータスとは別枠である。

成長スキル『杖術』 スキルレベルが1つ上がるごとに体力＋5、筋力＋1、耐性＋1、魔力＋1がステータスに加算される。尚、このスキルでのステータスの加算は本来のステータスとは別枠である。

「……」

「この成長スキルってやつとんでもないな。いくつまで上がるか分からないが100まで上がると想定して剣術での最終ボーナス値である体力+500、筋力+200、俊敏+100がスタータスに加算されるってわけか」

「この『魔導』というスキルは魔法使い、魔導師にとってありがたいですね」

「この『杖術』っていうスキルも魔法使いにとってありがたいわね」「よし、じゃあ、この『魔導』、『杖術』のスキルはゼシカとシユテルに覚えさせて、手に入れたワイズマンドライバーはゼシカに渡す」

飛羽真は量子ボックス内からポーシヨン瓶を6本取り出し、ゼシカとシユテルに2本ずつ渡した。

「この瓶は？」

「瓶の中に入ってる液体を飲むとスキルを習得できる。原理は知らん」

シユテルの問いに答えると飛羽真は瓶の中身を飲む。

『告。新たに剣術、格闘術のスキルを習得しました。すでに覚えている剣術、格闘術のスキルと統合が可能です。統合をしましつか？』

「(Yes)」

『…告。剣術、格闘術のスキル統合が完了。スキル『剣術LV1』、『格闘術LV1』を習得しました』

「どれ」

飛羽真はステータスプレートを取り出し、どう変わったのかを確認する。

八神飛羽真 17歳 男 レベル：30

天職：剣士、錬成師、召喚師 職業：冒険者 ランク：赤

筋力：1125 「スキル加算+3」

体力：1125 「スキル加算+10」

耐性：800 「スキル加算+1」

俊敏：1090 「スキル加算+2」

魔力：200000

魔耐：150050

技能：剣術LV1「+斬撃速度上昇」「+抜刀速度上昇」・錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+イメーヅ補強量上昇」・召喚・格闘術LV1「+部分強化」・魔力操作「+魔力放出」・闘気「+身体強化」「+変換回復」・縮地「+無拍子」・火属性適正「+付与」・風属性適正「+付与」「+雷属性」・気配感知・言語理解

「まあ、今は大した数値じゃないがスキルレベルが上がるにつれて役に経ってくれるだろう。それと」

ステータスの確認を終えると飛羽真は量子ボックスからメイジドライバーとワイズマンドドライバーを取り出し、地面に置く。

「どっちを使うか自分で選んでくれ」

「では、私はこちらを」

「じゃあ、私はこっちね」

飛羽真が言うとしュテルはメイジドライバーをゼシカはワイズマンドドライバーを手に取り、腰に装着すると普通のベルトへと変わった。

「これで私達も変身できるというわけですね」

「試しに変身してみてもいいかしら？」

「いいんじゃないか？」

「では」

『ドライバーオン ナゥウ』

2人は右に中指にリングをつけてベルトにかざすことでベルトが本来の姿へと変わる。2人は左右のバックルレバーを上下に動かし、ベルトの中心“ハンドオーサー”の向きを左に変える。

『シャバドゥビタッチヘンシン シャバドゥビタッチヘンシン』

「変身」

『チェンジ、ナゥウ』

2人が変身用のリングをドライバーにかざすと、魔方陣が現れ、2人を通ると、2人は仮面ライダーメイジ、仮面ライダーワイズマンへとその姿を変えた。

「これが仮面ライダー。凄いわ、力がみなぎってくるのが分かる」

ゼシカは川へと手をかざす

「ヒヤドー！」

呪文を唱えるとかざした手から冷気が放出され、川の水を凍結させた。

「ただのヒヤドなのにヒヤダルコ並みの威力があつたわ」

「多分、取得したスキルとライダーの力の相乗効果で魔法の威力が倍近く上がったんだろう」

「では、次は私ですね」

『コネクト ナウ』

バツクルの左右を上下させ、ハンドオーサーの位置を変えたシユテルは空間をつないでゼイネススクラッチを取り出すと杖の先端を川へと向ける。

「パイロシユーター」

シユテルが唱えると杖から火の魔力球が5発凍った川へと放たる。

魔力球は川にあたると凍りを溶かし、元の川へと戻った。

「私のほうも魔法の威力が上がっています」

「これなら、この迷宮の魔物とも戦えるわね」

変身を解除し、足手纏いでなくなったことに安堵するゼシカ

「じゃあ、明日から南雲と中村の搜索と迷宮の探索を開始する」

明日からの予定を決めると飛羽真は魔物がここにこないよう錬成で道を塞ぎ、食事をとった後、早めに休んだ。

第13話

『エクスプロージョン ナウ』

「喰らいなさい」

バックルに手をかざした後、前に突き出すと、魔獣の周囲に魔方陣が現われる。そして、亜空間に圧縮された魔力が一気に解放され爆発を起こし、魔物を跡形もなく消滅させた。

「凄い威力ね。連続発動や複数同時発動もできる。私の使う魔法より性能がいいわ」

ライダーに変身したゼシカが魔法の威力、性能などに感心していると後ろから魔物が襲い掛かる。だが、

「伸びなさい、ブラックロッド」

ゼシカは振り返ると突き出した杖を伸ばし、魔物を貫いた。

「・・・この力があれば素の状態で戦う必要なんてないわね。でも、飛羽真は極力ライダーだったかしら？この力に頼らないようにしているみたいだし、私もこの力に頼らなくてもすむよう強くならんくちやいけないわね」

「それには同意します」

ゼシカの独り言に、メイジへと変身していたシユテルは同意すると、バックルの端を上下させ、リングをかざす。

『イエス サンダー アンダスタン』

シユテルの前に魔方陣が浮かび上がり、手を振るうと魔方陣から雷が放たれ、魔物を一掃した。

「シューー」

一方、飛羽真は生身のまま魔物と戦っていた。手に入れた成長スキルのレベルを上げるため、剣術と格闘術（特に足技）を使って魔物を倒して行っている。

「魔物を倒せば券も手に入り、ステータスの強化、スキルのレベル上げも出来る。一石二鳥、ならぬ一石三鳥だな」

「厄介な魔物が増えてきたわね」

小休止をするため錬成で作った仮の拠点内でゼシカがホットミルクを飲みながら、呟く。

「そうですね。先程の鳥の魔物は眼にしたものを石化させてしまおう。幸い、私達は手に入れたアイテムで石化を逃れることが出来ましたが」

シユテルは小休止に入る前に遭遇した鳥の魔物の能力を思い出す。

「……」

そして、飛羽真はというと2人との会話に参加せずに手を開いては握り、開いては握るという行為を繰り返していた。

「どうしたの飛羽真？」

「何、2日前に比べて動きのキレがよくなったような気がするんだよな。特別な何かをした記憶何てないんだがな」

「魔法を主に使っていたから気が付かなかったけど、言われてみれば私も杖を扱いがうまくなった気がするわね」

「……これは私の仮説ですが、成長スキルのお陰かもしれません」

「成長スキルの？」

「どういうこと？」

「私達が覚えたスキルはレベルが上がるとに能力値が加算されていきます。それと同時に僅かですが、それを扱う技術も上がっているのではないのでしょうか？」

「(どうなんだ大賢者?)」

『解。彼女の言う通り、スキルのレベルに応じて技術に微補正が掛かっています』

シユテルの仮説を聞いた飛羽真は大賢者の真相を尋ねるとシユテルの仮説が正しいことを教えた。

「(見てみるか)」

飛羽真はその目で確かめるべくステータスプレートを取り出し、表

示する。

八神飛羽真 17歳 男 レベル：38

天職：剣士、錬成師、召喚師 職業：冒険者 ランク：赤

筋力：1180 「スキル加算+75」

体力：1180 「スキル加算+250」

耐性：835 「スキル加算+25」

俊敏：1120 「スキル加算+50」

魔力：200000

魔耐：150050

技能・剣術LV25 「+斬撃速度上昇」「+抜刀速度上昇」・錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+イメーシ補強量上昇」・召喚・格闘術LV25 「+部分強化」・魔力操作「+魔力放出」・闘気「+身体強化」「+変換回復」・縮地「+無拍子」・火属性適正「+付与」・風属性適正「+付与」「+雷属性」・気配感知・言語理解

「・・・これからガチャで成長スキルが手に入ったら積極的に覚えていったほうがいいかもしれないな」

成長スキルの有能性に飛羽真は非常に満足した。

「無い物をねだってもしょうがないんだらうけどお風呂に入りたいわ」

ふと、ゼシカがそう呟く。

「飛羽真、そう言う系の物は持っていないの？」

「残念ながらないな」

「そう」

飛羽真の返答にゼシカが肩を落とす。

「いえ、何とかなるかもしれない」

「え？」

「変身して水をドラム缶のようなものに出し、焚火で缶ごと水を温めれば入れます」

「本当!？」

「ええ。ですが、水を入れる缶がないとでき・・・」

「それならあるぞ」

飛羽真は量子ボックスから錬成で作った五右衛門風呂を取り出し見せた。

「な、なんで」

「前に行った異世界では野宿が多かったからな、俺はまだまだも女子は風呂に入って綺麗にしたいだろうから作ったんだよ」

「でも、さつきはないって・・・」

「ぬか喜びさせたくなかったから言わなかったただけだ。入るには空間を広げて、換気用の穴も作らないとな」

そう言うと飛羽真は錬成で空間を広げ、湯気で場が曇らないよう通気口を作り上げた。

「後は薪だな。確かまだあったはず」

五右衛門風呂の設置が完了すると飛羽真は量子ボックス内に入っているアイテムリストを投影して在庫を確かめると取り出し、火を起こす準備を始める。

「ほれ。ぼさっとしてないで早く釜に水をいれろ、風呂に入りたいんだろう?」

飛羽真に言われるとシユテルは変身し、魔法で水を生み出し、釜一杯になるまで入れると、飛羽真が火を起こす。数十分待つと釜に入った水が温かくなってきた、湯気が立ってきた。

「入っていいぞ」

「入っていいぞっていうけど、飛羽真はどうするのよ?」

「どうするって、火の調整をしないといけないからここにいますぞ?のぞき見はしないから安心しろ」

「ゼシカ、飛羽真は簡易の五右衛門風呂を持っていたお陰でお風呂に入れるのですから、これ以上何かを言うのは」

「分かってるわ。飛羽真、絶対に見るんじゃないわよ?」

「分かってるっての」

ゼシカの念を押しに飛羽真は頷いて答えた。そして、ゼシカとシユテルは満足するまで湯につかり、疲れを取った。2人の入浴中、ちよつとしたハプニングが起こったが、どんなことが起こったのかは当人たちのみぞ知る。

第14話

「何で迷宮に密林があるんだ？」

ハジメと恵理の捜索を行いつつ、迷宮の探索を続ける飛羽真一行。何層進んだかは定かではないが降りるにつれ魔物も強くなっているが、何よりも厄介なのが、その階層の環境だった。

とある階層ではタールのような粘着性のある泥沼がそこからかしくこにばらまかれており、足が取られ動きにくかった。動きにくいだけならよかったが、そのタールはとある鉱石が融解したもので、100度以上の熱が加わると発火し、その熱は摂氏3000度になるという非常に厄介なものであった。さらに飛羽真の気配感知に引っかかる魔物がいたりと中々に厄介な階層であった。

またある階層では、階層全体が毒霧で覆われた階層で、呼吸もままならないうえ、飛羽真の「全集中の呼吸」も封じられる階層だったが、幸いにもガチャで手に入れた状態異常無効のアクセサリーのおかげで何とかだったが、毒のほかにも麻痺を与える鱗粉をばらまく蛾や毒を吐き出すカエルがいたりとこちらも厄介だった。

「うわぁ」

「気持ち悪いです」

現在、飛羽真がいる階層はジャングルのように蒸し暑く、鬱蒼とした階層で出てくる魔物は巨大なムカデと樹の魔物。

「もおー、何なのよこのムカデは!! 気色悪すぎよ!!」

「まるで台所にいると言われるあの・・・」

「それは言わないで!」

「(ドラクエの世界にもアレはいたんだな)」

巨大なムカデだけでも気持ち悪いというのに、体の節ごとに分離して襲ってくるものだから更に気持ち悪くなる。

「・・・飛羽真、お願いします」

ゼシカ同様、シユテルも生理的に無理なのかムカデの対処を飛羽真

に任せ、後ろに下がった。

「へえへえ。ふうくくく…無の呼吸 水ノ型 風」

一歩前に出た飛羽真は襲い掛かるムカデを前にその場から1歩も動かずに大量のムカデが自身の間合いに入ると、目にも止まらない速さで太刀を縦横無尽に振るい、ムカデを斬り刻んだ。

「変身してないのにあの強さ。人間かどうか疑うわね」

「同感です。目にも止まらない程の速さで繰り出される斬撃。変身してどうにか目で追える。もはや人外ですね」

「聞こえてるぞ2人とも」

勝手に人外扱いされ、飛羽真は拳を強く握って怒りをあらわにする。

「飛羽真だけに戦わせるのは酷ね。シュテル、私達はこの樹の魔物の相手をしましょう」

「了解です」

飛羽真が強く拳を握っているのを見た2人は樹の魔物の殲滅の為にそそくさとその場から離れていった。

「つたく」

『ギギ』

「鬱陶しい!」

再び、襲ってきた巨大ムカデを斬り刻み。飛羽真は下へ降りるための階段探しと、ハジメと恵理の搜索を続ける。

「んで?これは何だ?」

その日の晩?時計も何もないので分からないが。飛羽真が作った仮の拠点内でゼシカとシュテルが持ってきた果実を見て飛羽真が尋ねる。

「あの樹の魔物に実っていた果実です」

「美味しそうだったから、一杯取って持ってきたの」

「魔物に実っていた果実だろうか？これ、俺達が喰っても大丈夫なのか？」

城の図書室で魔物の肉は人にとって毒。そう本に書かれていた事を思い出し、飛羽真は口にするのを躊躇する。

「(大賢者、これ、食っても大丈夫なのか?)」

飛羽真は果実を手にして大賢者に尋ねる。

『解。これは食べても大丈夫です』

「・・・んじゃ、いただきます」

大賢者のお墨付きをもらった飛羽真は少し戸惑うも、意を決して果実を口にする。

「・・・うまい。甘くて、瑞々しい。これはリンゴ・・・いやスイカみたいだな」

「・・・本当、おいしいわ」

「フルーティーでおいしいです」

「シュテル、この収納バッグを渡しておく。見つけたら、果実をその中に入れてくれ。ほぼ無尽蔵に物を収納できる」

「分かりました。見かけたら倒し、果実を入れておきます」

シュテルは飛羽真からバッグを受け取り、肩にかける。

「所で飛羽真。ガチャは行わないのですか？」

「道中、結構な数の魔物を倒してきたから結構たまってるんじやない?」

「・・・言われてみればそうだな。ここ数日、スキルがどう成長しているかのチェックで見てなかった」

シュテルとゼシカに言われ、飛羽真は思い出したように量子ボックスからスマホを取り出し、アプリを起動させると2人の言った通り、結構な数の券が集まっていた。

「んじゃあ、引いてみるか」

飛羽真は貯まった券を使用してガチャを引く。ガチャが回され、手に入れたアイテムが表示される。飛羽真は手に入れたアイテム等を軽く見た後、特にレアなものが表示させる。

―成長スキル『鋭利』×3

―成長スキル『魔導具作成』

―成長スキル『指揮』

―人物召喚『ゼスト（新妹魔王の契約者）』

―成長スキル『直感』

―エイムズショットライザー＋ラッシングチータープログラムライズ
キー

―成長スキル『瞬発力』

―ホイポイカプセル（カプセルハウス×2、トレーニングハウス、
空のカプセル×2）

「成長スキルをかなり引けたな。そして、変身アイテムか・・・中村を見つけることが出来たらこいつを渡そう。このほかにめぼしい物は『鑑定』、『現代、アニメなどを含めた薬草と薬の調合が記された本』、『ゴージャスボール（空）』等々。いいものが当たったが、生身で使えない物もあったな、反動が20〜25Gって1発撃っただけで死ぬわ」

飛羽真は手に入れたとある武器を見て声を荒げた。

「引いた中でゼシカとシユテルに渡せそうなのはあまりないな」

「・・・飛羽真。手に入れた、『指揮』、『鑑定』、そして前に手に入れた『調合』を私にいただけないでしょうか？」

「別にいいが・・・一応理由を聞かせてくれるか？」

「ストックはまだありますが、魔力回復薬などは限りがあります。『調合』を覚えておけば自前で作っておけますし、お金の節約にもなります」

「成る程、『調合』が欲しい理由は分かった。『鑑定』は薬草や作った薬の効果を確かめるためだな？」

「はい」

「じゃあ『指揮』は？」

「それは私がこのパーティーの司令塔だと思っているからです。『指揮』を覚え、レベルを上げていけばより効率的な作戦、指令を出せると思っています」

シユテルの言葉に絶対の自信があることを飛羽真は話し方で悟っ

た。

「分かった」

飛羽真は量子ボックスから『調合』、『指揮』、『鑑定』のスキルを覚えることのできるポーシヨン瓶を取り出しシユテルに手渡し、さらに調合の仕方が記された本も一緒に渡した。

「調合を覚えるならこれもあつたほうがいいよな」

「ありがとうございます」

瓶の中身を飲み終えるとシユテルはさつそく本を開き、読み始めた。

「飛羽真、手に入れた人物召喚はどうするの？」

「そうだな・・・戦力は多いにこしたことはないし使っておくか」

「ふう〜〜〜今大体、何層だ？」

「50階層かと思われます」

今だ終わりの見えない迷宮探索と搜索活動。これまで到達したすべての階層をくまなく探しているがいまだ、ハジメと恵理を見つけることが出来ず。もうなくなっており、魔物に食われているのかもしれないという考えが飛羽真の脳裏に浮かぶ。

「ええ〜〜い」

脳裏に浮かんだ光景を忘れるように頭を振るっていると、

「飛羽真様、これを飲んで心を落ち着かせてください」

数日前に召喚した女性　ゼストが紅茶をいれたマグカップを飛羽真に手渡す。

「すまない。・・・うまい」

「ありがとうございます」

迷宮には似つかわしくないメイド服を着用しているゼスト。なぜ彼女がメイド服を着用しているのかと問われれば、召喚した時の服装にあつた。ゼストが着ていたのは女性新体操選手が着るレオタード

とスリングショットな水着を組み合わせたような服装で、思春期である飛羽真にとつてひっじょくくくに目のやり場に困る格好だったのだ。

その為、前の異世界で偶々手に入れていたメイド服を着てもらい、さらに必要なさそうな（飛羽真にとつて）成長スキル『奉仕』、『調理』を習得させた。そして、魔法使いにとつて苦手な接近戦の対策の為に『格闘術』のスキルを覚えさせた。因みに飛羽真達はガチャで手に入れたホイホイカプセルに入っていたカプセルハウスの中で休んでいる。

「飛羽真様。本日も指導をお願いして貰ってもよろしいでしょうか？」

「ああ。構わないぞ」

ゼストに誘われ、飛羽真はカプセルハウスから外に出る。ゼストの協力のもと作った仮拠点はかなり広く作られている（大体サッカー場の半分）。これだけ広ければ、以下に迷宮とはいえ崩落、崩壊の危険性があるが、ゼストが得意としている土系統の魔法で壁や天井を補強して崩れないようにしている。

「では、参ります」

着ていたメイド服からゼストにとつての戦闘服に着替え、軽い柔軟を行った後、ゼストは飛羽真に近づき、拳を突き出す。

2人が行っているのは組手。飛羽真から格闘技の手ほどきを受けることによつてゼストの格闘術のスキルレベル上げと習得が行われる。飛羽真にとつても組手を行いながらスキルレベルを上げることが出来るので双方にとつてメリットありの組手なのだ。この組手は毎日1時間ほど行われ、小休止を入れた30分2セットと1時間通しの組手を交互に行っている。

「何？この階層にあった異様な雰囲気を発していた扉が開いてる？」

「正確には開いたが正しいです」

50階層の探索を始めて数日。探索中に見つけた異質な場所。そこが気になった飛羽真はシュテルに頼み、サーチャーと呼ばれる小さな魔力球を使ってその場所を監視してもらっていたのだが、その扉が開いたという知らせを探索から戻ってきた飛羽真はシュテルから聞かされた。

「ほかに何か情報はないか？」

「そうですね、壁に半分ほど埋め込まれるように鎮座していた彫刻が魔物で、その魔物が所持していた魔石が扉の鍵になっていたこと。そして、その魔物を倒したのが人型の何かだということしか」

「……その人型の数は？」

「2人です」

「……行ってみるか」

たつぷりと時間をかけ考えた飛羽真はその場所に行くことを決めた。一種の望みを抱いて。

「ゼシカとゼストはここで待機してくれ。シュテルは俺と一緒に」

「分かったわ」

「飛羽真様、シュテル様、お気をつけて」

2人に見送られ、飛羽真とシュテルは50階層の開かずの間（飛羽真命名）へと向かった。

魔物と遭遇することなく開かずの間だった場所に辿り着いた2人は出来る限り気配を消して近づき、開かれた扉から中の様子を探るが薄暗く見えなかった。

「何も見えませんね。もういなくなっただけでしょうか？」

「……いや、かすかだが何か戦っている音が聞こえる。これは……銃声？」

飛羽真は耳を澄まして時折聞こえてくる聞き覚えのある炸裂音に鼓動が高まった。飛羽真は無言で量子ボックスからソードライバーを取り出して装着すると、ブレイブドラゴンを取り出し、挿入する。剣を抜く。

『烈火抜刀!』

「・・・変身」

『ブレイブ・・・ドラゴン』

『烈火一冊! 勇気の竜と火炎剣烈火が交わる時、真紅の剣が悪を貫く!』

「・・・なぜ、変身を?」

ベヒモスとの戦闘以来、変身してこなかった飛羽真が変身したのを見てシユテルが尋ねる。

「聞こえてきた音が本当に銃声だったなら。生身のままだと危ないからな」

「飛羽真は聴覚も人外の域に達しているのですね」

「まだ、人間を止めたわけじゃないんだが!」

シユテルの辛辣な言葉に飛羽真は悲しくなった。

「んん! そんなじゃあ行くぞ」

「はい」

気を取り直すと、飛羽真とシユテルは部屋の中に入っていく。中に入ると、かすか二しか聞こえてこなかった銃声はつきりと聞こえてくる。

「シユテル、部屋を明るくしてくれ」

「はい」

『ライト ナウ』

シユテルは指輪をはめた右手をバックルにかざした後、手を掲げると部屋全体が明るく照らし出された。

「うお!」

「何!」

「・・・まぶしい」

部屋が突然明るくなったことに先に部屋に入っていた者達が驚く。

その3人。1人は青と銀を主にした鎧を纏っており、1人は少し離れた場所で金髪の少女を守っていた。

「・・・はは」

それを見て飛羽真の口から笑い声が出る。だが、無粋にも部屋の中にいた巨大な蠍の姿をした魔物が鎧を纏った者に襲いかかる。

「させるかよ」

『西遊ジャーニー！ふむふむ・・・習得一閃』

飛羽真は猿が描かれたライドブックを取り出して剣に先端に当て、本の力を剣に宿らせる。

「はあ！」

飛羽真が剣を突き出すと剣が西遊記の孫悟空がもつ如意棒のような形となって伸び、蠍にヒットし体勢を崩すと、連続して剣を振るい、蠍を弾き飛ばす。

「・・・お前は」

「話はあとだ。此奴を使え」

蠍を弾き飛ばすと飛羽真は鎧を纏っている者に近づき、プログライズキーを渡す。

「その形態じゃ、装甲の硬いあの蠍には大したダメージを与えられない。倒すにはあの装甲を上回るほどのパワーを叩き込むしかない」

「・・・確かに一理あるな」

プログライズキーを受け取った人物(男)はキーの右上部のスイッチを押す。

『パワー』

「おおおおお！」

その男は開かない扉を無理矢理こじ開けるかのように強引に展開させると、腰に装着した銃にプログライズキーを挿入する。

『オーソライズ』

『Kamen Rider... Kamen Rider』

バックルから銃を引き抜き、前へ向けトリガーを引くと、

『ショットライズ』

「ふん」

1発の銃弾が撃ち出され、戻ってくる。男は裏拳の要領でその銃弾を砕くと、男が今装着している鎧の装甲が消え、代わりに弾丸に内包されていた装甲が装着される。

『パンチングゴング！Enough power to annihilate a mountain.』

第15話

「これは・・・力がみなぎってくる」

「『仮面ライダーバルカン・パンチングゴング』。その形態が持つ圧倒的パワーならどんなに硬い装甲を持つ相手だろうと関係なく叩き潰せるだろう」

「お前・・・まさか」

「・・・話はあとだ。まずはあの蠍型の魔物を倒す。俺が奴の気を引く。隙を見てデカいのを叩き込め」

男にそういうと飛羽真はライドブックを取り出し開く。

『西遊ジャーニー!』

『とあるお猿さんの冒険記、摩訶不思議なその旅の行方は』

ライドブックを閉じると飛羽真はその本を左のスロットに挿入して、鞆に納めた剣を抜く。

『烈火拔刀!奇跡の西遊ドラゴン!』

剣を抜くと何処からともなく真紅の竜と赤い赤い筋斗雲が現れ飛羽真の周りを回ると、甲冑の左腕と一体化した。

『烈火二冊!ウツキウキのお猿も加わり、火炎の剣が舞い踊る!』

「おおー!」

目の前で自分ではない他のライダーの派生変身を見た男は歓喜の声を上げた。その声に飛羽真は仮面の下で笑みを浮かべた後、飛羽真は『西遊ジャーニー』のライドブックをタップする。

『西遊ジャーニー!』

「っふ」

音声と共に赤い筋斗雲が何処からともなく現われる。飛羽真はその筋斗雲に乗って飛行し、蠍の魔物の意識を自分に向けるため、時に剣で斬り抜け、時に左腕の手甲から如意棒を伸ばして攻撃していく。

「西遊記に出てくる孫悟空そのものだな」

飛羽真の戦い方に男は感心しながらも攻撃のタイミングを見計ら

う。そして、

「(ここだ!)」

『パワー!』

バックルに装着し、銃に挿入してたプログライズキーの起動スイッチを押すと、音声が鳴り響く。そして、銃のトリガーを引く。

「うおおおお!」

『パワー パンチングブラストファイバー』

男は両腕を振り上げ、地面を殴り、波打ちように揺らして魔物を動きを邪魔すると、跳び上がり、魔物に向け両腕に装備している手甲を巨大化させたものをエネルギーを使って作り上げ、蠍の魔物に上から叩きつけた。

だが、パワーに特化した形態でも蠍の強固な装甲を完全に砕くことは出来なかった

「くそ!」

「まだだ」

『必殺読破!』

男が悔しがっていると、筋斗雲に乗っていた飛羽真が剣を鞘に戻し、剣のトリガーを2回引くと高く跳び上がる。

『ドラゴン!西遊ジャー!二冊撃!ファ・ファ・ファイヤー!』

「はあ!」

飛羽真は空中で1回転すると炎を纏わせた右足でエネルギーで形成された拳に飛び蹴りを喰らわせ、蹴りの威力を追加。蹴りの威力の上乗せした拳は蠍の強固な装甲を完全に砕き、粉碎した。

華麗に着地した飛羽真は無言で男に近づく。男も無言で飛羽真に近づき1mほどの間隔をもって止まった。

「.....」

無言で互いをじつと見る2人。数秒、数分に及ぶ沈黙、その沈黙を先に破ったのは飛羽真だった。ライドブックをベルトから抜き取り、ベルトを外して変身を解除し、生身の姿を見せる。

「.....」

飛羽真が姿をさらしたことにより男も変身を解除する。王国から

支給された見覚えのある服。だが、それを着ていた男は白い髪に赤い瞳。体格もよくなっており、飛羽真は半信半疑で必死に探していた者の名を呼んだ。

「南雲・・・だよな？」

「・・・ああ。久しぶりだな八神」

日数にして大体2週間とちよつと。飛羽真はようやく探していた人物と再会することが出来た。

「あ~~~~~」

ライダーに変身していた男もとい、ハジメは爺臭い声でキャンプ用の五右衛門風呂に入っている。

「湯加減はどうだ南雲？」

「あ~~~~丁度いい。やっぱり風呂はいいな~~~~疲れが飛んでいく気がする」

「・・・・・・」

「何だよ？人のことじつと見て？悪いが俺にそつちに趣味はないからな？」

「俺にもないわそんな趣味!?!はあ~~~~あのなよなよで草食系男子だった南雲がアスリート並みの体つきでワイルドな口調になっただなんて。中村も中村で出るところは出て引つ込むところは引つ込んでいる体系になってるしよ」

「・・・恵理はやらないからな」

「親友の彼女を寝取る趣味は俺にはねえよ」

蠍の魔物を倒した後、シユテルのテレポートを使って飛羽真の作った仮拠点へと戻り、互いに何があったのかを話した。そして、風呂の存在を知ると入りたいと鬼気迫る表情でお願いしてきたのだ。

「しっかし、魔物を肉を喰らってよく生きてられたな？」

「あく〜それは神結晶からでる神水のおかげだな。アレのお陰で死なずに済んだんだ。まあ、物凄い激痛で別の意味で死にそうになったけどな」

「それで、魔物の肉を喰らえばステータスを上げる事が出来ると同時に能力を得ることが出来ると知って、魔物の肉を喰らい続けた結果がこのステータスってわけか」

飛羽真はハジメから借りたステータスプレートを見て苦笑いする。

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：49

天職：錬成師

筋力：880

体力：970

耐性：860

俊敏：1040

魔力：760

魔耐：760

技能・錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+鉱物系探査」「+鉱物分離」「+鉱物融合」「+複数錬成」・魔力操作・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」・風爪・夜目・遠目・気配感知・魔力感知・気配遮断・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・言語理解

「あの馬鹿勇者より強いんじゃないか？」

「それを言うなら八神もだろう？」

自分のステータスプレートを見せる条件として飛羽真のステータスプレートを見せるように要求し、飛羽真のステータスを見たハジメは同じように苦笑いする。

八神飛羽真 17歳 男 レベル：48

天職：剣士、錬成師、召喚師 職業：冒険者 ランク：赤

筋力：1225 「スキル加算+311」

体力：1280 「スキル加算+735」

耐性：899 「スキル加算+73」

俊敏：1200 「スキル加算+297」

魔力：200000

魔耐：150050

技能・剣術LV74「+斬撃速度上昇」「+抜刀速度上昇」・錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+イメージ補強量上昇」・召喚・格闘術LV73「+部分強化」・魔力操作「+魔力放出」・闘気「+身体強化」「+変換回復」・縮地「+無拍子」・瞬発力LV50・直感LV32・鋭利LV40・火属性適正「+付与」・風属性適正「+付与」「+雷属性」・気配感知・言語理解

「もうお前が勇者でいいんじゃないか？つーか、何か知らないスキルもあるんだが？」

「国の言いなりになるなんてまっぴらごめんだ。スキルについてはガチャで手に入れた。これがすげえ役に立つんだよ、スキルのレベルが上がるごとにステータスが加算されるから」

「何だよそのチートスキル」

「所で一緒にいたあの金髪の子は誰なんだ？」

「・・・あの部屋に封印されていた吸血鬼だ。封印されるぐらいだ、面倒ごとに巻き込まれる可能性もあったから放置しようと思ったんだ。だけど、必死に懇願されてな。恵理と考えた結果、助けようって決めたんだ。んで、封印を解いたらあの蠍が襲い掛かってきたってわけ」

「・・・何で封印を解除した後には蠍が出てきたんだ？普通に考えたら封印を解く前に立ちをはだかるもんだと思うんだがな」

「・・・言われてみればそうだな」

飛羽真に言われハジメは蠍が出てきたタイミングが遅かったことにいまさら気づく。

「南雲の話だとあの子は裏切られあそこに封印された。だけど、俺にはそうじゃない気がする。まあ、これは俺の勘だ。頭の片隅にでもいれておいてくれ」

「・・・おう。所で」

「んっ」

「あの女子達は誰って言うか、1人はドクエに出てきたゼシカだよな？なんで空想上のキャラが現実にいるんだよ？」

「あゝゝ前に俺のガチャは空想の産物も引けるって話しただろう？それは物だけじゃなく、人物にも当てはめられていたんだよ」

「じゃあ、八神と一緒に来た女の子も、メイド服を着たあの女性も？」

「ガチャで召喚したってことだ」

「・・・お前のガチャの力、チートすぎだろう。そのうち神を殺せる能力でも手にするんじゃないか？」

ハジメは改めて飛羽真の召喚師としての能力が規格外なものだと理解した。

「神を殺せるかゝゝゝ・・・もしそんな能力があるなら見てみたいな」

ハジメの冗談めいた言葉に飛羽真は笑いながら答えた。後に冗談で語っていた能力を手に入れることになるが・・・それは後の話。

第16話

「……………」

「そんなにかきこまなくてもお代わりならまだあるからもうちよつとゆつくり食え。あ、ゼスト、飯お代わり」

「畏まりました」

2週間ぶりに風呂に入つてすつきりしたハジメと恵理はかきこむように白米を食べる。

「品のない食べ方ね」

「2度と食べることが出来ないと思つてた米が食べれているんだ、それくらいは大目に見てやってくれ」

「飛羽真様、どうぞ」

「お、サンキュー」

2人の品のない食べ方にゼシカが顔をしかめるが、飛羽真がそれをフォローし、ゼストから茶碗を受け取り、数日前に作ったイカの塩辛を乗せて食べる。

「う〜くん、カプセルハウスを引けてラツキーだったぜ。食材はあつても、それをいれておく冷蔵庫とかがないとこれは作れないからなく」

久々に食べる、塩辛をのせて食べる白米に飛羽真はご満悦の様子。

「……………」

「ユエ様？先程からあまりに食べておりませんが・お口に合いませんでしたか？」

「……そんなことはない、おいしい。でも、これよりももっと食べたいものがあるだけ」

ゼストの問いにハジメと恵理が助けた少女 ユエは首を軽く横に振つてこたえた。

「もつと食べたいもの。確か貴方は吸血鬼でしたね。なら食べたいものとは」

「……ん、血。ハジメと恵理の血が飲みたい」

シユテルの問いにユエが頷いて答えると、白米をかきこんでいた2人の動きが止まった。

「・・・2人の血はとても美味だった」

「び、美味って」

「わ、私達の体なんて魔物の血肉を取り込みすぎてまずそうな印象しかないんだけど」

「・・・熟成の味。何種類もの野菜や肉をじっくりと煮込んだスープのような濃厚で深い味わい・・・」

にじり、にじりと舌なめずりしながら近寄るユエに2人に後ずさる。

「・・・美味」

「勘弁して／くれ」

ユエの発言にハジメと恵理は魔物より厄介なものを解き放ってしまったのではないかとおもい、げんなりした表情で力なくつぶやいた。

「反逆者が作った迷宮?」

食事を終え、この迷宮に封印されていたユエにここがどの辺りなのか?ほかの地上への脱出の道はないのかを尋ねた飛羽真達だったが、ユエも分からず申し訳ない表情で答えた後、今いるこの迷宮を作ったであろう者達のことを語ってくれた。

「反逆者・・・神代に神に挑んだ神の眷属の事。・・・世界を滅ぼそうとしたと伝わってる」

ユエ曰く、神代に、神に反逆し世界を滅ぼそうと画策した7人の眷属がいたそうだ。しかし、その目論見は破られ、彼等は世界の果てに逃走した。その果てというのが現在の七大迷宮と言われている。このオルクス大迷宮もその内の一つで、奈落の底の最深部には反逆者の

住まう場所があるとされているのかなんとか。

「・・・そこなら、地上への道があるかも」

「神に反逆した者達・・・か」

脱出への道が見え、頬が緩んでいるハジメ達とは違って飛羽真はユエの語った反逆者という言葉が気になっていた。

「(世界を滅ぼすために神に挑んだ・・・本当にそうなのか?)」

手に入れたスキル『直感』がユエの言ったことが違うと言っており、飛羽真は何で神に挑んだのか不審がる。

「飛羽真?どうかしたのですか?」

「いや、何でもない。ああ、中村」

「何?」

「これをお前に渡しておく」

飛羽真は量子ボックス内からハジメの持っているショットライザーとベルト、ラッシンググーチータープログラムズキーを取り出し、渡す。

「これって、ハジメ君が持っているのと同じ」

「そう。俗にいう女性ライダーに変身するためのツールだ。まあ、南雲と違って生身でここまで戦ってこれたお前には必要ないかもしれないが」

「うん、ありがとう八神君。大事に使わせてもらうね」

その後、ハジメの予備のカプセルハウスを渡し、別れて夜を過ごした。

その翌日、メンバーが7人となった一行は大迷宮の最下層にある反逆者の住まいを目指し、探索を始めた。薄暗い場所では夜目を持つハジメと恵理を先頭にして進み、それ以外の場所ではハジメよりも高性能の気配探知を持つ飛羽真を先頭にして進む、さらにシユテルのサー

チャ―で階層内を調べることと効率よく下へ続く道を探し、あつという間に10階層ほど降りることが出来たのだが、

「・・・今度は樹海か」

「密林もあつたからそこまで驚かないが、本当に迷宮内なのか疑っちゃうな」

十メートルは優に超える木々に、男子高校生の平均身長ほどある雑草、うっとおしいにもほどがある。

「それに・・・」

地響きと共に巨大な爬虫類型の魔物が7人の前に現れた。

「ティラノサウルスだな」

「あの頭の上にある花は何だ？」

「・・・ちよつとかわいいかも」

「え？」

その言葉に飛羽真とハジメは恵理の感性を疑ってしまった。そんなことなど露知らずティラノは飛羽真達を食べようと口を大きく開けて迫ってくる。食べられるきは毛頭ないので斬ろうと飛羽真が太刀に手を添えたとき、ユエが前に出て手を掲げる。

「緋槍」

掲げた手の手元に現われた炎が渦巻に円錐状の槍となってティラノに撃ち放たれ、大きく開けていた口の中へと入る。槍は突き刺さつて、そのまま貫通。周囲の肉を容赦なく溶かして一瞬で絶命させた。

「相変わらずの凄い威力だな」

「やつぱりこっちの魔法は私の覚えている魔法より便利ね。落ち着いたら教えてもらおうかしら？」

「魔力が少なくなってもハジメ様と恵理様の血を吸うことで回復出来るとはいえ迂闊すぎですね」

「確かに世の中には限度という言葉がありますから。そういうことでユエ。今後、よほどのことがない限り、高位の魔法の使用は禁止です」

「・・・私、役に立つ」

無表情ながらどこか得意げな顔をするユエに、

「貴方が役に立つというのはここにいる全員が知っています。ですが、大分前に魔力が枯渇するまで魔法を使い、戦闘中だというのに倒れたことを忘れたのですか？ 偶々恵理が近くにいて、血を吸ったおかげで事なきを得ましたが、そんな偶然は何度も続きません。先程も言いました。魔力と同じで2人の血にも限度というものがあります。血を吸われすぎて戦闘中に2人が倒れてしまったらどうするつもりなのです？」

「……とつても困る」

「そうです。貴方にとつても私達にとつても困ることになるんです。なので言った通り、高位魔法の使用は控えてください、いいですね？」

「……ん」

シユテルに論破され、ユエは頷いて答えた。

「反論を言う暇すらなく論破した」

「シユテルは頭がいいからな反論させることなく相手を論破させるなんざ朝飯前だろう」

「見たところ、ユエ様はハジメ様と恵理様に依存しているように思えます」

「聞いた話じゃ300年間ずっと一人だったようだからな。動くことも死ぬことも出来ない地獄のような時間から解放してくれたんだ。依存してもおかしくない。それより……」

ゼストの言葉に飛羽真が自分の考えを言うと、太刀を抜く。

「(数は……10か。囲まれる前に1体を倒して有利な場所へ移動したほうがいいな) 囲まれる前に何体か倒して有利な場所に行くぞ」
生い茂った木の枝を太刀で切り払って飛び出すと、体調2m強の爬虫類、ラプトルに似た魔物がいた。そして、その魔物もさつき襲ってきたテイラノと同じで頭にチューリップを生やしていた。

「……流行りなのか？」

「知らん」

風貌に似つかわしくない花を頭上に生やしながら魔物は咆哮を上げながら飛羽真達に襲い掛かる。左右に散らばることによって魔物

のその鋭い鉤爪を躲す。だが、それだけでは終わらず、ハジメはここに来るまでに食した得た魔物の固有能力の一つである“空力”を使い、三角跳びの要領で魔物を頭上を取ると、ショットライザーではなく錬成で作った銃“ドンナー”を使って頭上の花を撃った。

花が四散すると、魔物は一瞬、痙攣したかと思うと、着地を失敗してもんどり打ちながら地面を転がり、樹にぶつかって動きを止めた。静寂が辺りを包む中、全員が一か所の集まって魔物と散った花を見る。

「死んだのかな？」

「いや、生きてるっぽいけど」

恵理の問いにハジメが答えると、ピクピクと痙攣した後、魔物はムクつと起き上がり、辺りを見回し始める。そして、地面に落ちている花を見つけると近寄り、親の敵と言わんばかりに踏みつけ始めた。

「何だ、この反応は？」

「悪戯されたのでしょうか？」

「いや、そんな背中に張り紙つけて騒ぐ小学生じゃねえんだから……」

「やけに具体的な例だね」

魔物の反応に飛羽真達が困っている中、魔物は一通り踏みつけて満足したのか、天を仰ぎ鳴き声を上げる。そして、ふと気がついたように飛羽真達のほうへ顔を向け驚き、硬直した。

「今気づいたのかよ」

「それだけ夢中だったってことなのかな？」

「……やっぱりイジメ？」

ツツコミをいれると共に呆れる飛羽真とハジメ。恵理はそれだけあの花に恨みがあったのだと理解し、ユエは同情したような眼差しで魔物を見る。暫く硬直していた魔物だったが、直に姿勢を低くして牙をむきだにして唸り、飛びかかってこようとするが、

「無の呼吸 水ノ型 水面斬り」

魔物が飛びかかるよりも早く、神速の踏み込みで魔物の懐に入り込み、太刀を振るって魔物の首を斬り落とした。

「やっぱり八神は人間をやめてるな」

「何度も言ってるが南雲、俺はまだ人間を超えていない」

「」「」「それはない」「」

「・・・泣いてもいいか？」

飛羽真の言葉に全員がそれを否定し、飛羽真は心に深いダメージを負う。魔物の包囲網がかなり狭まって着ているのを感じた飛羽真達は有利な場所を探し、移動していく。

程なくして直径5mはありそうな太い樹が無数に伸びている場所へと出る。隣り合う樹の太い枝同士が絡み合って、一種の空中回路のようであった。

「ここなら迎撃するのにぴったりだな」

「私とハジメ君はさつき使った空力で上がれるけど」

「・・・私は風魔法で飛ぶことが出来る」

「私は飛行魔法を覚えているので問題ありません」

「私もシュテル様と同じで飛べるので問題ありません」

「私はテレポートの魔法を使つて上に上がるわ」

「じゃあ、残る問題は」

全員の視線が飛羽真へと向く。

「大体、5mつて所か。この程度の高さなら行けるな。武技『能力向上』」

全員の視線を無視して飛羽真は武技で身体能力をさらに向上させるとしやがみ、ひと跳びで太い枝へと跳び乗った。

「」「」「・・・」「」

「ボーっとしてないで早く上がって来いよ。もう少しで魔物に集団がやってくるぞ?」

飛羽真に言われ、慌てて頭上の太い枝へとそれぞれの力や魔法を用いて飛び乗り、魔物の迎撃準備に入る。5分もかからないで次々と魔物が現われたのだが、その姿を見て飛羽真達は固まる。なぜなら、

「何でどいつもこいつも花つけてんだよ!」

「・・・ん、お花畑」

「ばか」

現れた全ての魔物は頭部に花をつけていたのだ。思わずツツコミを入れてしまったハジメの声に反応して魔物達が上を見上げる。そして、襲い掛かろうと跳躍の姿勢をとるが、

「ストーンエッジ」

「アル・ドライファ・ウインドカッター」

「・・・緋槍」

「パイロシューター」

ゼストが魔法で刃のようにとがった石を地面から隆起させ、魔物の足を貫き、動けなくさせそこに風の刃、火の槍、無数の火球を放ち、魔物達を一掃した。

「・・・八神、気づいてるか？」

「ああ。この迷宮の魔物にしては弱すぎる。単純な動き、他の魔物みたいな固有の攻撃も無し。殺気はあっても機械的で不自然な動き」
「それに花が取れた後の花に対するあの怒り。慎重に進んだほうがいいな」

「そうだな。・・・おいおい」

「どうかしたの？」

飛羽真の慌てようにゼシカが尋ねる。

「30、いや、40以上の魔物の大群がこっちに向かってこっちに向かってきてる」

「この動き、誰かが指示をだしているっぽいね」

飛羽真と同じように“気配感知”を持っている恵理は魔物に統一された動きに指示を出している者がいること悟る。

「・・・逃げる？」

「いや、この密度だとすでに逃げ道がない。一番高い樹を見つけて、天辺から殲滅するのがベターだろ」

「だな。シユテル、この周囲で一番高い樹は何処にある？」

「6時の方向、距離は10m先です」

「よし。行くぞ」

高い樹の場所を聞くと飛羽真達は高速で動いて、シユテルが見つけた樹へと向かい、天辺にある枝に飛び乗ると、飛羽真は斬撃を飛ばし

て魔物が登って来にくいように枝を斬り落とした。

「・・・来たな」

迎撃準備を終え、待っていると魔物の第1陣が登場する。

「ラプトル型に加え、ティラノ型もいるのか。あの巨体で体当たりされたらこの太い樹でもすぐに折れちまいそうだな。・・・ゼスト」

「お任せください」

飛羽真に言われ、ゼストは魔法で岩を隆起させ、城壁を作り上げる。ティラノは壁を壊そうと何度も壁に体当たりし、ラプトル型は仲間の背を使って跳躍して城壁を跳び越えるが、銃と魔法による狙撃で撃ち落とされていく。ティラノ型も壊そうとしている岩壁から鋭利に尖った岩が弾丸のように撃ち出され、ティラノ型を撃ち貫いた。

「まだ来るぞ」

1陣を倒し一安心と思った矢先、魔物の第2陣、続けて第3陣が登場する。

「・・・どうだ、中村、シユテル？」

「・・・もう少し」

「・・・ユエ、今です」

「ん！凍獄」

シユテルの合図でユエが魔法を発動。飛羽真達がいる樹を中心に眼下が一気に凍りつき、魔物の氷像が出来上がった。

「太古の昔に絶滅した恐竜もこんな風だったのかね」

「うーくん、どうなんだろう？」

そんなことを考えていると、

「・・・飛羽真」

「言わなくても解る」

「いくらなんでもおかしいだろう。たった今、全滅させたばかりだぞ？なのに・・・また、襲撃って・・・まるで強制されているみたいにな・・・

あの花・・・まさか」

「・・・寄生」

ユエの推測に全員が肯定するかのように頷く。

「だとしたら本体がどこかに居るはずね」

「だな。花を取り付けている何かを倒さない限り、俺達はこの階層の魔物全てを相手にすることになる」

ゼシカの言葉に飛羽真が頷く。

「・・・俺達が囷を務める。南雲、中村とユエを連れて操っている本体を探せ」

「・・・俺がそのまま恵理とユエを連れて下の階層に行くってことは考えないのか？」

「考えたが、お前はそうしなと思ってな。樹海まで存在するこの迷宮、生きて地上に出るために必要な戦力をやすやすと捨てるお前じゃないだろう？」

「・・・っは、お見通しってわけか。まあ、他の奴らならいざ知らず。八神を見捨てる気はさらさらねえけどな」

「何でだ？」

「・・・地球でもこっちでも俺の為に色々としてくれてたし、危険を承知で探しに来てくれたしな」

「・・・本体は任せた・・・ハジメ」

「あいよ。死ぬなよ、飛羽真」

返事を返すとハジメはユエを抱えて恵理と共に本体を探しに行った。

「1匹たりとも逃すつもりはないが、3人とも仕留めそこなったら倒してくれ。後、空を飛んでおくように」

飛羽真は樹の枝から飛び降り、地面に着地すると、量子ボックスから1本の杖を取り出した。

「使いどころが難しい武器だが、1対多の時にはこれが1番役に立つんだよな」

飛羽真が地面に降りてしばらくすると100体以上の魔物が登場し、飛羽真に襲い掛かる。

「・・・星の杖（オルガノン）」

シユテル達がちゃんと飛んでいることを横目で確認した後、飛羽真は小さくも力強い声で呟く。すると、杖に5重の光の環が浮かび上がり、飛羽真を中心に同心円状に広がる。空中でそれを見ていたシユテ

ル達は広がったあの円に一体何の意味があるのかと首を傾げるが、次の瞬間、100体いた魔物の半数とユエの氷魔法によつて氷像と化した魔物、さらには周りにあつたすべての樹が両断された。

「い、いったい何が」

「・・・見えない何かに斬られた・・・つとしか言いようがありませんね」

「分析をする前に飛羽真様の援護を・・・」

半数の魔物を一瞬で斬り捨てたとはいえ、魔物はまだ残っており、飛羽真へと襲い掛かっているのを見たゼストは援護しようとするが、それよりも早く、見えない何かが次々と魔物を斬って行く。かろうじて斬られなかつた魔物もいたが、飛羽真の間合いに入った途端、

「無の呼吸 水ノ型 打ち潮」

杖に仕込まれた刃でばらばらに斬り裂かれた。

「倒しても、倒しても湧いてきやがる。まるでGだな」

いくら斬ってもGのように湧いてくる魔物の軍団。疲労こそ少ないが精神的に参っていた。

「え〜と、これで何体目立つたけっか？300手前までは数えてたんだが・・・だめだ思い出せない」

飛羽真の周囲には斬られた魔物の亡骸が沢山あり、どれだけの数の魔物が押し寄せたのかを物語っている。

「飛羽真、また来たわよ」

「・・・少しは休ませて欲しいんだけどな」

ゼストが魔法で作ってくれた椅子で小休止を取っていると次の団体さんがやってきたとゼシカが伝えた。だが、

「あれ？」

「どうした？」

「魔物達についていた花が落ちていつてるわ。これつてもしかして」

「・・・そのもしかしてです。3人が魔物を操っていた本体を見つけ、倒しました」

サーチャーで様子を見ていたシユテルが無事に魔物を操っていた本体を倒したことを伝える。

「んじゃ、3人と合流したら、今日の探索は終わりにするか。さすがの俺も精神的に疲れた」

その後、無事にハジメ達と合流した飛羽真達。300体以上を1人で倒したことを話すとドン引きされ、心に深い傷を負うことになったが、シユテル達と電話で事情を知ったフェイト達の必死に慰めでどうにか持ち直すことが出来たとさ。

第17話

ハジメ達から人外認定を受け、飛羽真の心に深い、深い傷を与えた。更にハジメと恵理が人質に取られたユエごと魔物を操っていた植物型の魔物を撃ち殺し、ユエの機嫌を損ねた日から随分経つ。飛羽真は電話で事情を知ったフェイト達とさすがに言い過ぎたと思ったシユテル達の慰めのおかげで気を持ち直し、ユエはハジメと恵理の血を満するまで吸うことで機嫌を直すことに成功し、再び迷宮攻略に勤しんでいた。

そして遂に、次の階層で最初に流れ着いた階層から百階目になるどころまで来た。

「長い道のりだったな」

「そうだね。最初は何度も死ぬ思いをしたけど、どうにかここまでこれた」

百階層の一步手前の階層、九十九階層で作った仮の拠点でハジメは装備の確認と錬成で弾薬などの補充を行っており、恵理とユエはその作業を見てまったりとしていた。

「……………」

一方、飛羽真は禪を組んで精神統一を行っており、シユテルは回復薬や魔力回復薬等を調合、ゼシカはそのシユテルのサポート、ゼストは軽食を作っていた。

現在の飛羽真ステータスとスキルは

八神飛羽真 17歳 男 レベル：78

天職：剣士、錬成師、召喚師 職業：冒険者 ランク：赤

筋力：2250 「スキル加算+489」

体力：2280 「スキル加算+1040」

耐性：1545 「スキル加算+102」

俊敏：2169 「スキル加算+501」

魔力：200000

魔耐：150145

技能：剣術LV100↓剣帝LV2「+斬撃速度上昇」「+抜刀速度上昇」・錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+イメーシ補強量上昇」・召喚：格闘術LV100↓武王LV1「+部分強化」・魔力操作「+魔力放出」・闘気「+身体強化」「+変換回復」・縮地「+無拍子」・瞬発力LV85・直感LV79・鋭利LV94・火属性適正「+付与」・風属性適正「+付与」「+雷属性」・気配感知・言語理解

つと、なっている。スキル『剣術』が『剣帝』に『格闘術』が『武王』へと変わっていたのを見たとき、成長スキルとはこういうことなのかと理解した。因みにハジメと恵理のステータスは、

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：76

天職：錬成師

筋力：1980

体力：2090

耐性：2070

俊敏：2450

魔力：1780

魔耐：1780

技能：錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+鉱物系探査」「+鉱物分離」「+鉱物融合」「+複数錬成」・魔力操作「+魔力放出」「+魔力圧縮」「+遠隔操作」・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」・風爪・夜目・遠目・気配感知・魔力感知・熱源感知・気配遮断・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・金剛・威圧・念話・言語理解

中村恵理 17歳 女 レベル：76

天職：降霊術師

筋力：1970

体力：1990

耐性：1890

俊敏：2400

魔力：2540

魔耐：2540

技能・降霊術「＋降霊」 「＋霊視」・火属性適正「＋発動速度上昇」 「＋効果上昇」 「＋持続時間上昇」 「＋複数同時発動」 「＋連続発動」・閻属性適正「＋発動速度上昇」 「＋効果上昇」 「＋持続時間上昇」 「＋複数同時発動」 「＋連続発動」・魔力操作「＋魔力放出」 「＋魔力圧縮」 「＋遠隔操作」・胃酸強化・纏雷・天歩「＋空力」 「＋縮地」 「＋豪脚」・風爪・夜目・遠目・気配感知・魔力感知・熱源感知・気配遮断・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・金剛・威圧・念話・言語理解

つと、なっている。

「つうし、準備完了。飛羽真、俺の準備は終わったぜ」

「こちらも回復薬を含めた諸々の調合を終えました」

「……俺のほうも大丈夫だ」

ハジメとシユテルの準備が整うのと同時に、飛羽真の精神統一も完了した。

「皆様、軽食を作りました。出発する前にどうぞ」

「……何が待っているか分からないからな。しっかりと食べておくに越したことはないな」

「つてか、食べるの早いな!？」

ゼストが軽食に作ったおにぎりをいち早く食べている飛羽真にハジメがツツコミを入れた。

「食った、食った」

「1人で半分以上も喰いやがったぞこいつ」

結構な量のおにぎりを1人で食べた飛羽真にハジメは顔を引く付かせた。

「そんなに食べて大丈夫なの？途中で動けなくなったりしても知らないわよ?」

「問題ない。すぐにエネルギーに変換されるからな。さて、行くか」

準備を終え、腹も膨れた飛羽真達は階下へつ続く階段を使って最後の階層へと足を踏み入れた。その階層は無数の巨大な柱に支えられた広大な空間。柱に1本1本が直径5mはあり、1つ1つに螺旋模様と木の蔓が巻き付いたようか彫刻が彫られている。柱の並びは規則正しく一定間隔で並んでいる。天井までの距離も高く、30mはありそうだ。地面も荒れたところはなく平らで綺麗で、荘厳さを感じさせる空間だ。

「これは・・・凄いな」

その光景を見て飛羽真はそれしかいうことが出来なかった。言葉に出さないが他の面々も同じ考えなのか飛羽真の言葉に同意するかのように頷く。いつまでも見惚れているわけにもいかずその空間に足を踏み入れると、全ての柱が淡く輝き始める。柱は飛羽真達を起点に奥のほうへ順々に輝いていく。

しばし警戒をしていた飛羽真達だったが、特に何も起きる気配もなく先へ進むことにする一行。一行は慎重かつ、周囲への警戒を怠らずに道なりに歩いて行く。大体200mほど進んだ頃、前方に行き止まりを見つけた。

「行き止まり・・・か?」

「・・・いや、物凄いデカイ扉がある。どうやらあそこがこの迷宮の終点みたいだ」

飛羽真達は扉の60m手前で止まり、扉を見る。全長10mはある巨大な両開きの扉で周りには柱と同じように美しい彫刻彫られており、扉の中央にある七角形の頂点に描かれた何らかの文様が印象的だ。

「・・・これはまた・・・凄いな」

「うん。ただの大きな扉だっというのに芸術家の作品を見たときと同じ、うん、それ以上に魅了されちゃう」

「・・・叛逆者の住処?」

「ユエの言った通り、もしこの先が反逆者の住処だとしたら、その人物は芸術家だったのかもしれないね」

「芸術家…か。案外、そうなのかもしれないな。この細部にまでこだわった作りに均一に並べられた柱。俺やハジメと同じ錬成師なのかもしれないな」

「ありえそうだな。所で飛羽真、気づいてるよな？」

「もち、さつきから『今すぐここから逃げろ』って俺の本能が警報を鳴らしてるからな。だが、逆の俺の直感はこちらがゴールだって言うてる」

「なるほど。飛羽真の直感は当たるからな」

「ようやくゴールにたどり着いたね」

「ああ。んじゃ、いっちょド派手に来ますか」

「うん」

ハジメと恵理はショットライザーがはめ込まれたベルトを取りだし、装着する。

『バレット！』

『ダツシュー！』

「ふん」

2人はプログライズキーを取り出し、ボタンを押すとハジメはキーを展開してショットライザーに装填。恵理はハジメとは違いキーをショットライザーに装填してからキーを展開する

『オーソライズ！』

『Kamen Rider… Kamen Rider』

「変身」

『ショットライズ』

ハジメは銃を外して、構え、恵理はベルトに着けたまま銃のトリガーを引くと弾丸が放たれ、体に触れるとアーマーが展開され、装着、ライダーへと変身した。

『シューティングウルフ！The elevation increases as the bullet is fired』

『ラッシングチーター！Try to outrun this』

demon to get left in the dust』

「私達も行きましょう」

「ええ」

『ドライバーオン ナウ』

『シャバドウビタッチヘンシン シャバドウビタッチヘンシン』

「変身」

『チェンジ ナウ』

ゼシカとシユテルもそれぞれライダーへと変身する。

「ん？飛羽真、お前は変身しないのか？」

「ああ。ピンチになったら変身するから問題ない。・・・行くぞ」

戦闘準備を終えた飛羽真達は扉に近づくため一歩踏み出すと飛羽真達と扉の間に巨大な魔方陣が現れた。

「あの魔方陣は」

「ベヒモスやトラウムソルジャーが召喚され他のと同じ物だね。だけど」

「ベヒモスを召喚した魔方陣の倍近くあるな」

魔方陣から出てくる何かを倒さないと先へは進めないと理解した飛羽真達は気を引き締めなおす。魔方陣はいつそう輝きを増し、弾けるように光を放った。飛羽真達は咄嗟に腕をかざして目をつぶされないようにする。光が収まった時、その場にいたのは、

「[[[[クルウアアアン！]]]]」

体長30m、6つの頭と長い首、鋭い牙と赤黒い目の魔物。飛羽真達の世界で例えるなら神話に出てくる怪物“ヒュドラ”だった。

「っ!？」

「まさにラスボス・・・だな」

不思議な音色の絶叫をあげながら6対の眼光と壮絶な殺気が飛羽真達に向けられる。6頭の一つ、赤い紋様が刻まれた頭が口を開き火炎放射を放った。それは炎の壁と言うに相応しい規模である。

「散れー!」

飛羽真の合図で全員が左右の飛び退き、反撃を開始した。

「無双活性!」

飛羽真はかつて異世界で習得した流派の技が一つ。外にある気を取り込み、自身を強化する技「無双活性」を使い、身体強化を行うと、ヒュドラを斬るため駆ける。呼吸と気で肉体を強化した飛羽真は1発も被弾することなく青頭と緑頭が撃ち出す氷の礫の風の塊の弾幕の中を駆け抜け、跳び上がると、

「無の呼吸 炎ノ型 昇り炎天」

猛炎の如く、太刀を振り上げ、青頭の首を斬り落とす。

「風蹴」

咄くと飛羽真の足元に風で出来た足場が現れる。飛羽真はそれに片足を乗って体勢を立て直し、蹴って加速、緑頭のほうへと向かう。

「無の呼吸 水ノ型 水面斬り」

垂直に太刀を振るい、緑頭の首を斬り落とすと、再び作った風蹴を使つてその場から離脱し、地面に着地する。

「まずは2つ・・・いや3つだ」

飛羽真が斬り落とした2頭とハジメが撃ち落とされた1頭。残る頭は黄、白、黒の3つ。

「クルウアン！」

白頭が叫ぶと、吹き飛び、斬り落とされた3つの頭を白い光が包み込んだ。その光景を不思議そうに見ていた飛羽真達だったが、次の瞬間のその表情は驚愕へと変わった。

「再生した・・・だと!?!」

「回復魔法・・・いえ、それ以上の効果を持つ魔法ですね」

「ハジメ！まずはあの白頭から落とすぞ」

「おう！」

一声かけた後、飛羽真は地を蹴ってヒュドラに向かって駆ける。

「緋槍！」

「ロックブラスト！」

「ブラストファイヤー！」

「ベギラマー！」

ハジメと恵理の銃撃に加え、炎の槍、岩の弾丸、炎の砲撃、高熱エネルギーの塊が白頭へと同時に放たれる。誰もが直撃すると思つて

いた攻撃は射線に入り込み、一瞬で頭を肥大化させた黄頭によって防がれてしまった。

『『斬刃』』

数秒遅れて跳び上がった飛羽真が白頭に斬りかかるも、同じように間に入った黄頭によって防がれてしまった。空中で身動き出来ない飛羽真を喰わんと赤、青、緑、黒頭が口を大きく開けて襲い掛かる。飛羽真はグラスホッパーで足元に展開して、上へと高く跳び上がる。

「纏めて消し飛ばせ。ドライブア・ヘルファイヤー！」

天井ギリギリの高さまで跳び上がった飛羽真は一か所に集まった6つの頭を纏めて焼き尽くすべく、巨大な業火の玉を放つも、他の頭部守るべく間に入った黄頭によって防がれる。それを見た飛羽真は体勢を整える為、風蹴を使い一度ハジメ達のところへと戻った。

「くそ！攻撃に盾に回復、むかつくほどバランスがいいな！」

「ハジメ、あの白頭を倒すのはお前に任せる。黄頭は俺が斬る」

「斬るって・・・ついさっき、斬れなかったのを忘れたのかよ？それとも、もう一本の刀なら斬れるっていうのか？」

「五分五分ツて所かな？つま、何とかするさ」

「何とかって」

呆れるハジメを無視して飛羽真は二代鬼徹を抜き取り構えると三度、ヒュドラへ向け駆ける。今までの攻防で飛羽真が一番の脅威だと認識したヒュドラ達は飛羽真に攻撃を集中させる。

「「「「させるか／＼ない／＼ません／＼わよ」」」」

飛羽真を落とさせまいとハジメ達が銃と魔法で援護する。6人の援護もあつてかたやすくヒュドラまでたどり着いた飛羽真は全力で跳び上がる。

「クルウアン！」

やられるものかと黄頭が口を大きく開け、飛羽真を食べようとする。飛羽真は風蹴で素早くその場から離脱、離脱後、風蹴を使って黄頭の頭上まで移動する。

「無の呼吸 日ノ型 碧羅の天・二重」

そして、体全部を使って円を描くように両手に持つ刀を振るう。右

手に持つ斬神刀皇の刃が黄頭に触れた瞬間、左手に持つ二代鬼徹の刃が斬神刀皇の峰にあたり、黄頭の首に切れ込みが入る。

「おおおおおー！」

飛羽真はそのまま力を込めて2本の刀を振り抜き、黄頭の首を両断した。

「(まじかよ!?! レールガンと魔法が直撃しても傷一つつけられなかったあの頭部を斬り落としやがった!?)」

ハジメは飛羽真が黄頭の首を斬り落としたことに驚き、攻撃の手を緩めたが、すぐに気を取り直すと、白頭を仕留めるべくショットライザーをベルトにはめ、新たな武器を取り出す。

『Attache case open to release the incredibly powerful shotgun』

『ショットガンライズ!』

ハジメが取り出したアタツシケースの形状をした武器「アタツシウエポン」。ハジメが取り出したのは銃型。ショットライザーからプログライズキーを抜いたハジメはボタンを押すと、キーを装填できる場所にキーを入れる。

『バレット』

『Progrise key confirmed. Ready to utilize. ウエアウルフズアビリティ!』

「はあ!」

引き金を引くとオオカミ型のエネルギー弾が放たれ、白頭を撃ち抜いた。

「うし!これで面倒な回復要員はいなくなった。一気に畳みかけろ!」

白頭と黄頭が無くなったことで攻撃を防ぐ盾も傷を癒す術を亡くした残りの頭に恵理、ユエ、ゼシカ、シユテル、ゼストの魔法が放たれ、残った全ての頭が撃ち抜かれた。

「やったぜ」

“終わった”。誰もがそう感じ気を緩めるが、ただ1人、飛羽真だけは胴体だけになったヒュドラをじつと見ていた。

「……………」

「飛羽真?」

何も言わず、無言でヒュドラに亡骸に近づいた飛羽真は刀を逆手に持ち、ヒュドラの胴体に突き刺した。すると、

「グウアアアアア!」

胴体から隠れていた7つ目の首が悲鳴を上げながらせり上がった。

「倒したと思いきを緩めているところに現れて一網打尽にするつもりだったんだろうが残念だったな。これ(才牙)を使っている間、俺の感覚はより鋭くなっているな、俺を中心に範囲15km内までなら丸わかり何だよ」

刀を頭部に突き刺したため、せり上がった首に巻き込まれ、上に上がった飛羽真は悲鳴を上げる銀首にそう告げると、突き刺した刀を引き抜き、首を斬り落とそうとするが、痛みから銀頭はその長い首を大きく振りまわす。

「うお!」

さすがの飛羽真も支えも無しにその大きな揺れに耐えることは出来ず、頭部から落ちてしまい、さらに勢い良く振るっていた頭部にぶつかり、弾き飛ばされ、柱に衝突した。

「かは!」

「飛羽真!」

「ハジメ/君!」

柱と衝突した飛羽真の下に駆け寄ろうとしたハジメだったが、恵理とユエに声をかけられ、2人の指さすほうに顔を向けると、銀頭が予備動作も無しに口から極光を無差別に放っていた。極光が当たった場所は融解しており、一目でやばい物だと解る。

「くそー!」

このままだとまずいと思ったハジメはあの銀頭を撃ち抜こうにも首を大きく振るっているため照準を定めることが出来ずにいた。そして、無差別に放たれていた極光がついにハジメ達のいる場所へと放

たれた。

全員の盾となるべくハジメは咄嗟に前に出て、魔物から奪った技能“金剛”を発動して耐えようとした。その時、

「ハジメー!」

飛羽真から呼ばれ、振り向くと、飛羽真が何かをハジメへと投げ渡した。手を伸ばし、飛羽真が投げた何かを受け取るハジメ。ハジメが飛羽真から受け取ったのは、

「これは・・・盾?」

「それを前に出して“悪食”って言え!」

「わ、分かった!悪食!」

ハジメは盾を前に出し、飛羽真に言われた通り、悪食と叫ぶと、構えていた盾の一部が上下にスライドして迫りくる極光を飲みこんでいく。

「な!?!」

自分達を覆いつくすほどの極光が盾に飲み込まれていくのを見てハジメは驚く。全ての極光を飲み込むと、上下にスライドしていた個所が元に戻り、結晶が盾に浮かび上がった。

「何だこの盾は!?!あの光を飲み込んだぞ!?!」

「俺がガチャで手に入れた盾だ。人だろうと、武器だろうと、魔物だろうと何でも飲み込み込まう能力を持つてるんだ」

「魔物は解るが、人も武器も飲み込むって物騒すぎねえか!?!」

飛羽真の説明に盾を持つハジメの手が震える。

「んで?どうするあれ?」

「どうするって・・・他の頭同様、落とすしかないだろう。じゃないと永遠にあの扉の奥には行けないからな」

「・・・だよな。だけどどうやって落とすんだ?銃で撃ち落とそうにもあんなに激しく首を振り回されちゃ照準が定まらないぞ?」

「・・・やっぱり近づいて斬り落とすしかないか?」

「あの弾幕の中を・・・か?」

放たれるのが極光から無数の光弾へとかわり、安心?かと思われたが、融解する効果は失われておらず、どんどん足場がなくなっていく。

「ハジメ、パンチングゴングに変身して必殺技を撃て」

「それは構わないが当たる保証はないぞ?」

「撃ってくれるだけでいい。後は俺が何とかする」

「・・・解った」

『パワー』

ハジメはキーを取り出し、起動キーを押した後、ショットライザーに装填する

『オーソライズ』

『Kamen Rider... Kamen Rider』

『ショットライズ』

『パンチングゴング! Enough power to annihilate a mountain.』

「うし、じゃあ行くぞ!」

『パワー!』

別の形態に変身したハジメはキーのボタンを押して、両手で銃を構える。銃のエネルギーが溜まっていくのを見た飛羽真は盾を構え、走り出す。

「喰らえ!」

『パンチングブラスト!』

ハジメがトリガーを引くと、両腕に装備されている巨大な手甲がロケットパンチのごとく撃ち出される。

『告。今です』

ヒュドラに向かって走っていた飛羽真は、大賢者の言葉に従って跳び上がり、ヒュドラに向け撃ち出された手甲の上に乗った。

「まじか!」

サーフィンでもするかのように撃ち出した手甲の上に乗ってヒュドラへと向かう飛羽真にハジメは本日何度目かの驚き声をあげる。

無差別にばらまかれる光弾を盾で捌きながら、乗っている手甲でヒュドラに近づく飛羽真。ヒュドラまであと数mほどまで来たところで飛羽真は盾を量子ボックス内に戻し、手甲から跳び上がり、靴裏

に取り付けたスパイクで天井に張り着き、居合の構えを取る。

「無の呼吸 雷ノ型 霹靂一閃・・・神速」

そして、神速を超えた超神速の速さでヒュドラへと接近し一閃。ヒュドラの最後の頭を斬り落とした。

第18話

「おはようハジメ、恵理、ユエ」

「・・・何でバスローブを着てるんだ？」

「そりゃあ、風呂に入ってたからな。色々聞きたいことはあるだろうが、まずは隣の住居の1階ある風呂に入ってこい」

飛羽真は3人分のバスローブを投げ渡し、部屋から出ていった。

「んで？ここは何処で？あの後何があつたんだ？飛羽真がヒュドラに止めを刺したところまでは覚えてるんだが」

「私も」

「ヒュドラを倒した直後の気絶しちまったからな。んじや、まずはそこから話すか」

風呂に入っさっぱりした後、ハジメが飛羽真に尋ねると、飛羽真はヒュドラに止めを刺した後のことを話し出す。飛羽真がヒュドラに止めを刺すと、尋常ではない相手が倒れたことで張りつめていた糸が途切れ、飛羽真とゼストを除く全員が気を失い倒れたこと。ヒュドラが守っていた扉が勝手に開いたこと、安全確認のため余力のある飛羽真が扉を潜ると、広大な空間に住み心地の良さそうな住居があり、危険がないことを確認してから住居へと赴き、ベッドルームを見つけたので戻り、ゼストと協力してハジメ達を運び、寝かせたことを話した。

「そして、ここが何処かだが。十中八九、前にユエが言っていた反逆者、その住処だと俺は思ってる」

「そう・・・か。そのベッドまで運んでくれてありがとな」

「ありがとう飛羽真君」

「・・・ありがとう」

「ハジメを運んだのは俺だが、2人を運んだのはゼストだ。礼を言

うならぜストに言ってやってくれ」

「そういえば、ゼシカとシユテルはどうしてるんだ？」

ふと気になったのかハジメが飛羽真に尋ねる。

「2人は別の部屋で寝てる。2人が起きるまでもうしばらくかかりそうだし、その間に見回って来な。きつと度肝を抜かされると思うぞ？」

そういうと飛羽真は部屋から出ていった。その後、3人は飛羽真に言われた通り、見回るために部屋を出ると飛羽真の言った通り、目に映った光景に度肝を抜かれた。

「これが2人が気を失った後に起こったことだ」

「そうですか」

「魔王を倒した後の私もきつと今の私と同じだったのかもしれないわね」

目を覚ましたゼシカとシユテルにハジメ達に話したのと同じ内容を飛羽真は伝えた。

「気になる部屋もあったんだが、全員で行ったほうがいいと思ってな詳しくは調べなかった。この後、ハジメ達と合流していくつもりだが、その前に風呂に入ってこい」

「そうね。そうさせてもらうわ。行きましょう、シユテル」

「はい」

シユテルの手を引き、ゼシカが風呂に入りに行こうと部屋を出ようとするが。ふと立ち止まり、飛羽真のほうを向く。

「飛羽真も一緒にいる？」

「んな!？」

「冗談よ。もしかして本気にしちゃった？」

「っ!?!さっさと入ってこい!」

「うふふ、は〜い」

赤面する飛羽真が見れて満足したのかゼシカは今度こそシユテル

と共に風呂に入りに向かった。

「……ここで残念だつて思つて、一緒に入るところを想像した俺は悪くないよな？」

頭に浮かんだ光景を忘れようと頭を大きく振るつた飛羽真は、川に魚がいるかの確認をするため部屋から出ていった。

「説明するだけでなんでそんなに疲れてるんだ？」

「色々とおつたんだよ、いろいろとな」

何故か疲弊していた飛羽真にハジメが尋ねるも曖昧な返答が返ってきた。

「しっかりとしてくれよな。これから唯一入ることのできる部屋に行くんだからよ」

「分かつてる」

ハジメに言われ、飛羽真は頬を叩いて気を引き締めなおす。住居の1階を除けば、唯一開けることが出来た3階の一室。中に入れば直径7〜8mの魔方阵が中央の床に刻まれていた。

「飛羽真、あれつて」

「骸だな」

魔方阵にも注目がいったが、もつと注目したのは魔方阵の向こう側、豪華な椅子に座つていた骸だった。白骨化しており黒に金の刺繍が施されたローブを羽織つていた。

「お化け屋敷にあるオブジェつて言われると信じちやいそうだね」

「だな」

恵理の言葉にハジメが肯定して頷く。

「あの骸は何故この場所で朽ちて白骨化したのでしょうか？寝室やリビングではなく、この場所を選び、果てた意図は？」

「……もしかしたらこの場所に誰かが来るのを信じ、待っていたのではないのでしょうか？」

シユテルの問いにゼストが自身が思ったことを言う。

「・・・怪しい・・・どうするっ?」

「どうするって」

「地上への道を調べるには、この部屋が鍵なんだろうしな。俺や飛羽真の錬成も受け付けられない書庫と工房の封印・・・調べるしかないだろう」

「俺とハジメが先に行く。何かあったら頼む」

2人はそう言うのと魔方陣へと向かって歩き出す。そして、2人が魔方陣の中央に足を踏み込んだ瞬間、純白の光が爆ぜ部屋を真っ白に染め上げる。

「つく!?」

「何だ、これは!?!」

眩しさのあまり目をつむる2人。直後、何かが頭の中に侵入し、走馬灯のように奈落に来てからの事が駆け巡った。やがて光が収まり、目を開けた7人の前には黒衣の青年が立っていた。

「っ!?」

「待て、ハジメ」

「何で・・・」

「よく見てみる。あの骸が着ているのと同じローブ。それに人にしては薄い、恐らく立体映像だろう」

銃を抜こうとしたハジメを飛羽真が止め、現れた人影をよく見て自身の考えを言った。

『試練を乗り越えよく辿り着いた。私の名はオスカー・オルクス。この迷宮を創った者だ。反逆者と言えかわかるかな?』

「この人が反逆者」

何故だか分からないがこの人に話を聞けば自分の思っていた疑問が解ける気がする」と飛羽真は直感した。

『ああ。質問は許してほしい。これはただの記録映像のようなものでね、生憎君の質問には答えられない。だが、この場所に辿り着いた者に世界の真実を知る者として、我々が何のために戦ったのか：メツ

セージを残したくてね。このような形を取らせてもらった。どうか聞いてほしい。……我々は反逆者であって反逆者ではないことを」そして、反逆者「オスカー・オルクス」の話が始まった。それは、教会で教えられた歴史やユエに聞かされた反逆者の話とは大きく異なった驚愕すべきものだった。

それは狂った神とその子孫達の戦いの物語。

神代の少し後の時代、世界は争いで満たされており、人間、魔族、様々な亜人達が絶えず争っていた。争う理由は領土拡大、種族的価値観、支配欲、など様々な理由だが、その1番は「神敵」だからだ。今よりずっと種族も国も細かく分かれていた時代、それぞれの種族、国がそれぞれ神を祭っていた。その神からの神託で人々は争い続けていた。

だが、そんな何百年と続く争いに終止符を討たんとする者達が現われた。当時「解放者」と呼ばれた集団である。

彼等には共通する繋がりがあった。それは全員が神代から続く神々の直系の子孫であったということだ。その為か「解放者」のリーダーは、ある時偶然にも神々の真意を知ってしまった。何と神々は、人々を駒に遊戯のつもりで戦争を促していたのだ。「解放者」のリーダーは、神々が裏で人々を巧みに操り戦争へと駆り立てていること耐えられなくなり志を同じくするものを集めた。

彼等は「神域」と呼ばれる神々がいると言われている場所を突き止めた。「解放者」のメンバーでも先祖返りと言われる強力な力を持った7人を中心に、彼等は神々に戦いを挑んだ。

しかし、その目論見は戦う前に破城してしまう。何と、神々は人々を巧みに操り、「解放者」達を世界に破滅をもたらそうとする神敵であること認識させて人々自身に相手をさせたのである。その過程にも紆余曲折はあったのだが、結局、守るべき人々に力を振るうわけにもいかず、神の恩恵も忘れて世界を滅ぼさんと神に仇した「反逆者」のレットルを貼られ「解放者」達は討たれていった。

最後まで残ったのは中心の7人だけだった。世界を敵に回し、彼等は、もはや自分達では神を討つことはできないと判断した。そして、

バラバラに大陸の果てに迷宮を創り潜伏することにしたのだ。試練を用意し、それを突破した強者に自分達の力を譲り、いつの日か神の遊戯を終らせる者が現れることを願って。

長い話が終わり、オスカーは穏やかに微笑む。

『君が何者で何の目的でここに辿り着いたのかは分からない。君に神殺しを強要するつもりもない。ただ、知っておいてほしかった。我々が何のために立ち上がったのか。・・・君に私の力を授ける。どのように使うも君の自由だ。だが、願わくば悪しき心を満たすためには振るわないで欲しい。話は以上だ。聞いてくれてありがとう。君のこれからが自由な意思の下にあらんことを』

そう話を締めくくり、オスカーの記録映像はスツと消えた。同時に2人の脳裏に何かが侵入してくる。痛むが、それが言っていた魔法を掘り込んでいたためと理解できたので大人しく耐えた。

「大丈夫、ハジメ君？」

「大丈夫、飛羽真？」

「ああ、大丈夫だ。それよりも」

「何かどえらいこと聞いちゃったな」

「俺としては今の話で感じていた疑問が解けてすっきりしてる」

「・・・どうするの？」

ユエがハジメに尋ねる。

「うん？別にどうもしないぞ？元々、勝手に召喚して戦争しろとか言う神なんて迷惑としか思っていないからな。この世界がどうなろうと知った事じゃないし。地上に出て、帰る方法探して、故郷に帰る。それだけだ」

「・・・俺はするつもりだけどな神殺し」

「はあ!？」

飛羽真の言葉にハジメが驚く。

「おいおい。天之河みたく正義に目覚めちゃったのか？」

「それこそまさかだ。オスカー・オルクスの話が真実なら神々は人を駒にして遊んでいる。その神の目を盗んで地球に帰ったとしても、今回の召喚で神々はこの世界のほかに世界があることを知った。遊

戯感覚で争いを起こさせている神々が新しい遊戯盤となるかもしれない世界を知って黙ってると思うか?」

「・・・それは」

「俺達の世界は少し突っつけば争いになる火種がわんさかある。俺達が戻って生まれた道を使って神々が来る可能性は捨てきれない。だから、俺は狂った神々を斬る。まあ、これはあくまで俺の考えだからお前達は無理して付き合う必要はねえよ。帰れる手段が見つかったら地球に帰ればいい」

「私は飛羽真に呼ばれた身だから最後まで付き合うわ」

「私もです」

「私も、何処までお役に立てるか分かりませんが付き合います」

ゼシカ、シユテル、ゼストの3名は飛羽真の神殺しの旅に着いて行くことを告げる。

「それよりもハジメ。分かってるよな?」

「ああ。新しい魔法・・・神代魔法つてのを覚えたな」

「・・・ほんと?」

飛羽真とハジメの言葉にユエが信じられないといった表情になった。何せ神代魔法とは文字通り神代に使われていた現代では失伝した魔法なのだ。

「あの魔方陣だな。あの魔方陣が神代魔法を使えるように頭に直接、魔法の式を掘り込んだんだろう」

「・・・大丈夫?」

「おう、問題ない。しかもこの魔法・・・俺や飛羽真の為にあるような魔法だな」

「俺よりはハジメの為にある魔法じゃないか?」

「どんな魔法なのですか?」

「生成魔法って言って、魔法を鉱物に付与して、特殊な性質を持った鉱物を生成できる魔法だ」

『解。鉱物だけではなく、水などにも魔法を付与することも可能です』

「・・・アーティファクト作れる?」

「ああ、そういうことだな」

「生成魔法」は神代においてアーティファクトを作るための魔法だった。まさに「錬成師」のためにある魔法である。

「恵理達も覚えたらどうだ？何か魔方阵に入ると記憶を探られるみたいなんだ。オスカーも試練がどうのって言ってたし、試練を突破したと判断されれば覚えられるんじゃないか？」

「でも、私達はハジメ君や八神君みたいに錬成使わないし」

「確かにそうだが、せっかくの神代魔法だ、覚えておいて損はないだろう」

「・・・そうですね。後々、何かの役に立つかもしれませんし覚えておきましょうか」

錬成魔法を覚えていない恵理達に「生成魔法」は必要ない物だが、例え使えなくても何かの役に立つかもしれないと飛羽真に言われ、魔方阵の上に立つと飛羽真とハジメの時同様、記憶を探られ、試練をクリアしたと判断されると、

『試練を乗り越えよく辿り着いた。私の名はオスカー・オルクス・・・』

再びオスカーが現われ、さっき聞いたのと同じ内容が語られ始める。

「どうだ？修得したか？」

「ん・・・した。でも・・・アーティファクトは難しそう」

「私達もそうね」

「私は適性がありました。飛羽真様やハジメ様に比べると見劣りしますが」

「魔法である以上、相性と適性があるのかもしれないな。それにしても・・・」

恵理、ユエ、ゼシカ、シュテルの4人に適性がなかったのに対してゼストは飛羽真やハジメまでとがいかないが生成魔法への適性があった。

「(それにしてもシユールだな)」

何もない空間にはほほ笑みながら話しているオスカーを見て、飛羽真

は苦笑いする。

「あゝゝ取り合えず、あの死体を片付けるか。ここはもう俺らの物だし」

「ん．．．畑の肥料．．．」

ハジメとユエの慈悲の無さにオスカーの骸が風もないのにカタリと頂垂れた。

「あほ」

「っ!？」

ユエの言葉に飛羽真が拳骨を落とす。ユエはあまりの痛さに悶絶する。痛みが引くと飛羽真を睨むが、

「死人にたいして失礼なことを言ったユエが悪い」

「確かに今のはユエが悪いな」

「そうだね」

「っ!？」

味方をしてくれると思っていたハジメと恵理に言葉にユエはショックを受けた。

「オスカーが創ったこの住処を一望できる場所を探して、そこに墓を立てるか」

「そうだね。肥料扱いはさすがに可愛そうだもん」

3階の部屋から出た飛羽真達は別れてオスカーが創ったこの住処を一望できる場所を探した。そして、そこに墓石を立て、埋葬した。

オスカーの埋葬を終えると住居に戻る。

「入れるといいんだが」

飛羽真はオスカーの骸を埋葬する際、彼が嵌めていた指輪に刻まれていた文様が書斎や工房にあった封印の文様を同じだったのに気づき、持ってきていたのだ。

「必要なものかもしれないからな。断じて墓荒らしではない」

「誰に言ってるの?」

「いや．．．何か言わなきゃいけないような気がして」

「?」

飛羽真は咳をして気持ちを切り替えると、指輪を書斎の扉に近づけ

る。すると、扉に施された文様と指輪の文様が共鳴し、施された封印が解除され、中に入れるようになった。

中に入った飛羽真達は一番の目的である地上への道を探るべく、書棚の中を調べていくとこの住居の施設設計図らしきものを見つけた。通常の青写真ほどしつかりとしたものではないが、何処に何を作るのか、どの様な構造にするのかということがメモのようにつづられていた。

「うし、見つけた!」

設計図を見ていたハジメが歓喜の声を上げる。

「見つけたのかハジメ?」

「ああ。3階のあの魔方陣がそのまま地上に施した魔方陣と繋がっているらしい。オスカーが嵌めていた指輪を持っていないと発動しないようになってるみたいだ」

「・・・貰っておいてよかったぜ」

「それと面白いもんも見つけた。一定期間ごとに清掃をする自律型のゴーレムが工房の小部屋にあつたり、天上の球体が太陽光と同じ性質を持っていて作物の育成が可能らしい」

「やけに綺麗だったのはその清掃用のゴーレムのおかげってことか。この世界に人工知能なんてものはないはずなのに・・・どうやって作ったんだ?」

科学が発達していないこの世界でそのようなものを作れたことに飛羽真が不思議がる。

「おまけに工房にはオスカーが生前に作っていたアーティファクトや素材が保管されてる。此奴は武器を創つたり強化したりするのに使えそうだ」

「道具は使ってなんぼだが、感謝して使うぞ?」

「分かってる」

「飛羽真、これを」

他の資料を探しながらハジメの話を聞いていた飛羽真にシユテルが1冊の本を飛羽真に渡す。

「これは・・・手記か? 解放者の仲間、中心となっていた7人との何

気ない日常について書かれてるみたいだが……ん？」

手記を見ていた飛羽真はその内の一節を見てページをめくっていた手を止め、内容をよ……く読む。

「ハジメ、このページの一節を読んでみる」

「ん？何か重要なことでも書かれてたのか？……これは」

「オスカーと同じように試練の意味を創った迷宮。その迷宮をクリアすれば創設者達の神代魔法が手に入れることが出来る。生憎とどの迷宮でどんな魔法が手に入れることが出来るかまでは書かれていないが、回っていけば……」

「……地球に帰える方法が見つかる」

「……今後の方針ができたな」

「ああ。でも、飛羽真のほうはいいのか？神殺しをするって言うのだが」

「何処にいるかもわからん神を探すために放浪するより帰る手段を見つけるのが先だ」

その後、飛羽真達は迷宮の正確な場所が示された資料を探すが見つけられず、現在確認されている「グリューエン大砂漠の大火山」、「ハルツィナ樹海」、目星をつけられている「ライセン大峡谷」、「シユネー雪原の氷雪洞窟」から調べていくしかないだろうが、

「魔人領内にある【シユネー雪原の氷雪洞窟】は最後だな」

「んじゃ、次は工房に行くか」

これ以上、めぼしい物は出てこないだろうと判断した飛羽真達は工房へと移動した。指輪で扉の封印を解除して中に入る。工房内にはいくつもの小部屋があり、その全てを指輪で開くことが出来た。中には、様々な鉱石や見たこともない作業道具、理論書などが所狭しと保管されており、錬成師にとって楽園が見紛う程である。

「……」

「どうかしたのハジメ君？」

腕を組んで思索するハジメに恵理が尋ねる。

「……飛羽真」

「しばらく此処に留まって学び、他の迷宮攻略のための準備をした

いんだろう?。」

「よくわかったな」

「俺も同じこと考えてたからな。神と戦うことを想定して最後に戦ったヒュドラを軽く倒せるほどまでには強くなっておかないと神殺しなんて夢のまた夢だからな。ゼシカ達はどうだ?。」

「あなたが残るっていうなら私も残るわ」

「私も残ります。ここなら薬草の育成や薬の調合もしやすいですし」

「主が残る以上、従者の私も残ります」

「恵理、ユエはどうする?。」

「ハジメ君が残るなら私も残るよ」

「・・・ハジメと一緒にならどこでもいい」

7人はオスカーが作ったこの住処に残り、可能な限りの鍛練と装備を充実を図ることになった。

第19話

飛羽真達が「反逆者」改め「解放者」オスカー・オルクスの創った住処に辿り着き、留まつてから早2ヶ月。この2ヶ月で7人の実力や装備は以前とは比べ物にならないくらいに充実していた。例えば、飛羽真、ハジメ、恵理のステータスは現在こうなっている。

八神飛羽真 17歳 男 レベル：100

天職：剣士、錬成師、召喚師 職業：冒険者 ランク：赤

筋力：18000 「スキル加算+2020」

体力：18500 「スキル加算+4320」

耐性：12500 「スキル加算+408」

俊敏：17900 「スキル加算+1884」

魔力：200000

魔耐：150145

技能：剣術LV100↓剣帝LV100↓剣神LV39 「+斬撃速度上昇」「+抜刀速度上昇」・錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+イメージ補強量上昇」「+鉱物融合」「+圧縮錬成」・召喚・格闘術LV100↓武王LV100↓武神LV27 「+部分強化」・魔力操作「+魔力放出」・闘気「+身体強化」「+変換回復」「+放出」・縮地「+無拍子」・瞬発力LV100↓瞬身LV 100↓瞬神LV10・直感LV100↓見透LV86・鋭利LV100↓斬鉄LV100↓断空LV15・火属性適正「+付与」・風属性適正「+付与」「+雷属性」・闇属性適正「+付与」・気配感知・言語理解

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：???

天職：錬成師

筋力：10950

体力：13190

耐性：10670

俊敏：13450

魔力：14780

魔耐：14780

技能：錬成「＋鉱物系鑑定」「＋精密錬成」「＋鉱物系探査」「＋鉱物分離」「＋鉱物融合」「＋複数錬成」「＋圧縮錬成」・魔力操作「＋魔力放出」「＋魔力圧縮」「＋遠隔操作」・胃酸強化・纏雷・天歩「＋空力」「＋縮地」「＋豪脚」「＋瞬光」・風爪・夜目・遠目・気配感知「＋特定感知」・魔力感知「＋特定感知」・熱源感知「＋特定感知」・気配遮断「＋幻踏」・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・恐怖耐性・先読・金剛・豪腕・威圧・念話・追跡・高速魔力回復・魔力変換「＋体力」「＋治癒力」・限界突破・生成魔法・言語理解

中村恵理 17歳 女 レベル：???

天職：降霊術師

筋力：10830

体力：13100

耐性：10670

俊敏：13430

魔力：16540

魔耐：16540

技能：降霊術「＋降霊」「＋霊視」・火属性適正「＋発動速度上昇」「＋効果上昇」「＋持続時間上昇」「＋複数同時発動」「＋連続発動」・闇属性適正「＋発動速度上昇」「＋効果上昇」「＋持続時間上昇」「＋複数同時発動」「＋連続発動」・魔力操作「＋魔力放出」「＋魔力圧縮」「＋遠隔操作」・胃酸強化・纏雷・天歩「＋空力」「＋縮地」「＋豪脚」・風爪・夜目・遠目・気配感知「＋特定感知」・魔力感知「＋特定感知」・熱源感知「＋特定感知」・気配遮断「＋幻踏」・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・金剛・豪腕・威圧・念話・追跡・高速魔力回復・魔力変換「＋体力」「＋治癒力」・生成魔法・言語理解

っと、見ただけで完全なチートな存在になっている。ハジメと恵理のステータスの上昇は魔物の肉の恩恵だ。一方、飛羽真の成長限界は普通なら筋力、体力、俊敏が3000、耐性が2000までなのだが、レベルが100に到達したというのにここまで上がっているのはひ

とえに転生時に特典で得た“肉体の限界突破”のお陰だ。これにより、飛羽真のステータスは上がり続ける。

たった2ヶ月でここまでステータスを上げることが出来た理由はガチャのお陰だ。“〇〇年ボタン”という特殊なアイテム。このアイテムの効果は年数を設定した後、ボタンを押すことで特殊な空間に移動し、そこで設定した年数を過ごすことが出来るのだ。そのアイテムのメリットは歳を取らないことと、終わった後、空間内での成果がそのまま反映されるのだが、当然デメリットも存在する。それは精神が崩壊することだ。

だが、飛羽真はそのリスクを承知でそのアイテムを使い、設定した年数を過ごした。何もなく、誰もいない空間で飛羽真は鍛練と修練を積んだ。途中、心が折れ、精神が崩壊しそうになったが根性で耐え、見事、乗り越えたのだった。

「いや〜〜あれはきつかった」

「キュル？」

飛羽真は腹部に乗っている小さな竜を撫でながらその時のことを思い出す。感傷にふけていると、遠くから地響きが聞こえてくる。

「・・・ピナ、危ないから飛んでろ」

「キュルル〜」

だんだんと大きくなってくる地響きに飛羽真は腹部に乗っていた竜“ピナ”に飛ぶようというと、ピナは渋々と翼を広げて空に飛び上がった。そして、

「と〜〜〜く〜ん!!」

頭にうさ耳型のカチューシャを身に着け、不思議の国のアリスのよな服を着た女性が何処ぞの世界的大泥棒のように飛羽真めがけてダイブする。

「はりや？」

「いつも言っていますが束様、その飛び込みは危ないので止めてください」

すると、何処からともなく現われた2本の砂の腕がその女性を掴み取った。

「ぶくくこれは束さんなりの愛情表現何だよ？」

「限度というものを知ってください」

ゼストが魔法で操作し作り出した砂の腕に体を拘束され、ぶくくたれる女性。彼女の名は『籐ノ之束』。飛羽真が人物召喚で呼び出した自称天才（災）科学者だ。

「キュルルく」

空に避難していたピナが飛羽真の頭部に乗る。まずはピナから紹介しよう。ピナは前に飛羽真がガチャで手に入れた幻獣の卵から孵った竜だ。ドタバタしていたためその場では孵すことが出来なかったが、一息ついたためボックスから取り出し、孵したのだ。孵ってから2ヶ月ちよつとなので戦闘力は低いと思われがちだが、本当のオルクス迷宮の魔物にも引けを取らない強さを持っている。常に飛羽真と一緒におり、飛んでいないときは飛羽真の頭に乗っている。

次に籐ノ之束。インフィニット・ストラトス、通称ISと呼ばれるマルチフォーム・スーツを一人で開発した天才科学者。宇宙での活動用に作られたISだったが、高性能なことから軍事転用が始まった。

「俺はそのISを使って空を飛んだり、宇宙に行ってみたいな。世界の果てならぬ、宇宙の果てってやつと一緒に見てみたい」

「俺はパワードスーツって所がいいなロボットもそうだが、そういうのは男の夢だからな」

束の話を聞いた飛羽真とハジメは頭の自分の夢をけなした学者と同じように笑ったが、その笑みはISのあり方、開発技術を素直に褒めてでた笑顔だったのだ。宇宙という言葉とあまり接点がないゼシカとユエは首を傾げたが、魔法等といった超常現象を使わずに人が空を飛ぶことが出来ると知ると感心し、恵理、シユテル、ゼストも束の開発技術を褒める。そのことから束は7人を気に入る、特に飛羽真には抱き着く程に気に入っている。

「むくくくくふん！」

砂の腕を飛羽真の動きを見、理論等を教えてもらって覚えた変幻無双流で解くと、束は飛羽真に抱き着く。

「3日ぶりのとくくくんの体温と匂いだ」

「東さんは3日間眠りっぱなしでしたもんね」

「細胞までオーバースペックなこの東さんでもあの魔物との戦いはきつかったからね」

今から11日前、東は生成魔法を受け取る資格を得るために飛羽真とピナと共にオルクス大迷宮の攻略を行った。これは東の専用機「群咲（むらさき）」と開発した装備の試運転も兼ねていたのだ。2回目の攻略と新装備のおかげ、何の滞りもなく進むことが出来たが、やはり最後のヒュドラは別格で、チートな存在となった飛羽真がいたというのに苦戦を強いられた。

最終的に変身した飛羽真と試作品の武器で倒すことに成功したが、精魂尽きたのか東は死んだように3日間眠り続けていたのだ。

「それで神代魔法は？」

「さつき覚えてきたところだよ。付き合ってくれてありがとうねとーくん」

「いいっすよ。俺もこれの試し斬りと鬼徹にちゃんと魔法が付与できるかの確認もしたかったですし」

「・・・よくそんな危ないオーラただ漏れの刀なんか使おうなんて思うね？」

量子ボックスから取り出した2代鬼鉄を少し怯えた表情で見る東

「俺以外使える奴はいないですからね。本当は幼馴染に渡そうと思っただけですけどさすがに妖刀を持たせるわけにはいきませんから」
「それで自分が使ってるってわけ？呪いに殺されるかもしれないんだよ？」

「じゃあ、試してみますか？俺の運とこいつの呪い。どっちが強いのかを？」

「ふえ？」

飛羽真は鬼徹を抜くと、真上に放り投げ、横に腕を伸ばすと刀が落ちてくるのをじっと待つ。東もゼストも目を見開き、止めようとするが何故か足が動かず、見守ることしかできなかった。放り投げられた刀は回転しながら落ちてくる。鋭利な刃が飛羽真の腕を捉えるところにいる誰もが思ったが、刀は不可思議な軌道で腕を避けるように

すり抜け、地面に深々と突き刺さった。

「・・・俺の勝ち・・・だな」

不敵な笑みを浮かべる飛羽真。一方、束とゼストは力が抜け地面にぺたりと座り込む。

「腰・・・抜けちゃった」

「・・・私もです」

「これで分かってくれたか束さん。こいつ（鬼徹）は俺を主として認めているんだよ」

突き刺さった鬼徹を引き抜き、鞘に納め飛羽真は鬼徹が自分を認めてくれている事を語るが、束もゼストも安心していただけ、聞こえていなかった。その後、正気に戻った2人からしこたま説教を受けた飛羽真であった。

「ハジメ、入るぞ」

飛羽真はノックをした後、工房内に入る。中に入ると、机の上でハジメが作った装備の最終チェックを行っていた。

「おう、飛羽真。何でそんなに疲れてるんだ？」

「ちよつと、やんちゃをしちまってな。さつきまで束さんとゼストの説教を受けていたんだ。それより、調子はどうなんだ？」

「ああ。部分展開も含めて随分とスムーズに出来るようになった」

飛羽真の問いにハジメは体全身に機械で出来た鎧を装着することで答えた。

「束さんが開発したISを元に開発したパワードスーツ。宇宙での活動を前提としたISと違って完全な戦闘用のスーツ。まんまアイコンマンだな」

「それを模して作ったからな。束さんのお陰で夢にまで見たパワードスーツを作って動かすことが出来て俺は大満足だ」

「じゃあ、バルカンに変身するためのツールはもう必要ないな?・・・冗談だ。だからレーザーを撃とうとするのは止めろ」

飛羽真に手を向け、掌の中央にはめ込まれた球体にエネルギーが集約されているのを見て、飛羽真は両手を上げ、冗談だという。

「…それより、八重樫に渡す予定の新しい刀の使い勝手はどうだったんだ？」

「硬度、切れ味、生成魔法で付与した魔法の数々。雫なら使いこなせるはずだ」

飛羽真は量子ボックスから全てが白で作られた刀を取り出し、使った感想を言う。この刀は大迷宮で手に入れた鉱物と飛羽真がガチャで手に入れた鉱物等を使って飛羽真が作成、ハジメが持っている技能で使えそうなものをスキルで付与して出来上がった合同作なのである。

「刀身には50階層のサソリの外殻に使われていたシユタル鉱石。鉱石には俺の魔力をふんだんに込め、この世界で最高の硬度の鉱石と言われている『アザンチウム鉱石』をも超える硬度にし、ガチャで手に入れたダマスカス鋼と融合させ、錆びないようにした後、鉱石を圧縮して作った」

「それに俺が得た技能『風爪』を生成魔法で付与。同じ製法で作った鞘には『纏雷』を付与。特注の帯刀ベルトには『身体強化』を付与。サービスしすぎじゃねえか？」

「心配をかけさせちまつてるからな。そのわびも兼ねてるんだよ」

「ふくくん。名前はもう決めてるのか？」

「そうだな・・・和道一文字とでも名づけるか」

「おい。それって思いつ切り著作権の侵害なんじゃ・・・」

「空想上にしか存在しない物に侵害何てねえだろう」

「・・・確かに」

飛羽真の言葉にハジメは納得してしまった。

「そうだ、ガチャの券、溜まつてるだろうし引いておくか」

「っお！ガチャを引くのか？」

「ああ。出発前の景気づけに1回、回しておこうと思ってな」

スマホを取り出した飛羽真を見てガチャをするのだと分かったハジメは興味津々で画面を見る。

「さてさてさくくして、何が当たるかなくく?」

飛羽真はドキドキしながらガチャのボタンを押す。数秒後、ガチャの景品が表示される。

―闇黒剣月闇+ワンダラーライドブック 〓ジャアクドラゴン〓

―破壊神ビルスの力(1日2時間のみ使用可能)

―ワンダラーライドブック 〓ジャオウドラゴン〓

―魔法カード死者蘇生(1回のみ使用可能)×2枚

―ジュエルミート

―ワンダラーライドブック 〓デイケイド世界旅行記〓

―i P S再生槽の設計図

―ウルムⅡマナダイト

―プログライズキー 〓ライトニングホーネット〓

―ポケモンの卵

「………」

「……飛羽真、これは」

「言うな。俺もどんな反応をすればいいか困ってるんだ」

とんでもない内容の景品の数々に飛羽真はどんな反応をすればいいか困り果てる。

「とりあえず、このプログライズキーは中村に渡して、この再生槽の設計図とやらとウルム・マナダイトは東さんに、肉はゼストに渡して、出立前の晚餐にでも出して食べるとして」

「卵はどうするんだ?」

「俺が育てる。闇黒剣と本は俺が持つとして問題は死者蘇生のカードと破壊神とやらの力だが」

「回数制限と時間制限があるがどっちもやばいな」

「だが、この破壊神の力は神々を滅するのに役に立つだろうから覚えておくか」

得た景品を捌き、能力を得た後、3回目になるヒュドラで得た能力を試したところ、白頭が亡くなった他の頭を再生させようとしたが、再生することが出来ず、口をあんぐりとしていたのが印象的だったと飛羽真は語った。

そして、それから10日後。準備を整えた終えた飛羽真達はいよいよ地上へと出る。3階の魔方陣を起動させながら呟く。

「皆、分かっているとは思いますが俺達に武器や力は地上では異端だ。教会や国が黙っているということはないだろう」

「だろうな」

「兵器類やアーティファクトを要求されたり、戦争参加を強制される可能性も極めて大きい」

「うん」

「教会や国だけならまだしも、神を自称する狂人共も敵対するかもしれない」

「望むところだよ」

「世界を敵に回すかもしれない旅になる。命がいくつあっても足りないぐらい」

「「「「「「今さら」「」「」」」」」」

7人?の言葉に苦笑いする飛羽真。

「んじゃあ、行きますか。神殺しを兼ねた地球へ帰るための手段を探す旅に」

旅の目的を語った後、飛羽真達は魔方陣が放つ光に包まれた。

第20話

魔方陣の光に満たされた視界、何も見えなくとも空気が変わった事は実感した。奈落の底の澱んだ空気とは明らかに異なり、新鮮さを感じる空気に全員の頬が緩む。

やがて光が収まり目を開けた8人?の視界に写ったものは・・・洞窟だった。

「なんでやねん」

魔方陣の向こう側は地上だと無条件に信じていたハジメは、代り映えない光景に思わず半眼になってツツコミを入れた後、眼鏡をかけた男性を睨む。

「秘密の通路とは隠すのが道理だろう?」

「反逆者の住処への直通の道が分かる場所にあつたら、話で聞いた神の使徒とやらが乗り込んでくる可能性もあるからな」

「そうか。そうだよ・・・な。悪い、久しぶりの地上だから浮かれてたみたいだ」

「君の気持は分からないでもないよ。地上に出るのは僕も久しぶりだからね」

眼鏡をかけた男性を眼鏡を軽く上げながら話すと、緑光石で作ったランタンを何処からともなく取り出し、先を歩く。道中、封印が施された扉やトラップ等があつたが、持っていたオルクスの指輪が反応して尽く勝手に解除されていく。1人を除き警戒をしていた飛羽真達だったが拍子抜けするほど何事もなく洞窟内を進み、遂に光を見つけた。外の光だ。ハジメと恵理ととしては数ヶ月、ユエに至っては30年間求めてやまなかつた光。

3人はそれを見た瞬間、立ち止まり、互いの顔を見合わせ、笑みを浮かべると、求めていた光に向かって駆けだした。

「よっしやああああー!!戻ってきたぞ、この野郎おおー!!」

「んっー!!」

飛羽真達が少しばかり遅れ、外に出ると抱きしめあつた3人がくるくと廻つていた。

「……………」

「何年ぶりになるかは知りませんが、久々に地上に出て感想はどうですか・オスカー・オルクス？」

何も言わず、じつと空を見上げる青年　オスカー・オルクスの隣に立つた飛羽真が彼に尋ねる。

「そうだね。いろんな思いが混ざつて何とも言えないが、これだけは言える。本物の空はやっぱいいなつて所かな」

何故、亡くなつたはずのオスカーが生き返っているのか？答えは簡単、飛羽真が10日前のガチャで手に入れた『死者蘇生のカード』。それを使つて復活させたのだ。一見便利そうに見えたが調べたところ、ある2つの条件を満たさないと蘇生できないことが大賢者から教えられた。

1つ、蘇生させる者の魂を呼ばなければいけないこと。

2つ、蘇生させるものの遺骨がなければならぬこと。

この2つの内、1つは条件を満たしていたが、もう1つの条件はクリアされていなかった。なのでオスカーの蘇生は無理だと思われたが、その場には天職に【降霊術師】を持つ恵理がいたため、その条件もクリアできたのだ。もつとも、オスカーの靈魂を呼び出すのに何十回もかかったが。

「それと、地上では僕のことをオルクと呼んでくれ。何処である狂つた神が見ているか分からないからね」

「分かりました。それで、本当にこの【ライセン大渓谷】に大迷宮があるんですか？」

「ああ。僕たちはそれぞれゆかりの場所に大迷宮を作つたんだ。ここにあるのは間違いないだろうが、何処に大迷宮への入り口があるのかは分からない」

「つととなると、当初の予定通り、樹海を目指したほうがいいかな。それにして……」

今後の予定を考えていた飛羽真は後ろから聞こえてくる銃声と魔

物の鳴き声に苦笑いする。

「ゲームで言う無双プレイだな」

襲ってくる魔物を斬るため、刀に手を添えると、隣から銃声が鳴り響く。

「オス．．いやオルクさん」

「ここは僕に任せてくれないかな？少しでも戦いの勘を取り戻しておきたいし、君達の話聞いて作り上げたこの新しい黒傘の性能を確かめておきたいんだ。君はその間、どういうルートで回るのかを決めておいてくれ」

「．．．分かりました」

オスカーの頼みを受けた飛羽真は後ろに下がり、超小型衛星を飛ばそうとしている束に近づいた。

「．．．じゃあ、やろうか」

オスカーは眼鏡を軽く上げると、武器である傘を魔物に向ける。傘の手元に作ったトリガーを引くと、傘の石突から銃弾が放たれ、魔物の頭を吹き飛ばした。傘から放たれる銃弾で次々と魔物を撃ち殺していくオスカーだったが、弾薬が尽きたのかトリガーを引けども弾が発射されない。弾が放たれないのを好機と感じたのか魔物が一斉にオスカーに襲い掛かる。

「．．．．．」

オスカーは慌てることなく、玉留め近くの手元に取り付けたマガジンを取り外し、新しいマガジンを取り付けると、トリガーを引き、魔物を撃ち抜いていく。

オスカーが使っている黒傘は生前から使用している武器の一つで、アザンチウム鉱石を使って作られ、生成魔法で様々な能力、魔法を付与した自前のアーティファクト。そのアーティファクトに飛羽真やハジメ、束から得た知識を加えた改良品。西洋傘と和傘が合わさった傘で手元はマガジンをはめ込むため普通の物より長くなっており、中軸は和傘を参考に手元と同じぐらいの太さになっている。銃弾が通るため中軸の中は空洞になっている。接近戦には使えないとおもわれがちだが、圧縮したアザンチウム鉱石を使って作っているため、そ

う簡単に壊れはしない。

「ふむ、上出来だ」

新・黒傘の性能にオスカーは満足そうに頷く。

「はくくしい、この世界の地図が出来たよくく」

束の声に全員が束に近寄り、画面に映し出された映像を見る。

「この赤く点滅しているのが現在、私達がいる場所だよ。崖を登れば砂漠を横断してグリュウエン大火山がある方面にいけるね。そして、このまま溪谷を道なりに進めばフェアベルゲンっていう樹海に行くことが出来るよ。樹海の近くには街もあるね」

「・・・じゃあ、大迷宮の入り口を探しつつ樹海方面に進もう」

「決まりだな」

予定を決めるとハジメはオスカー作の【宝物庫】と名づけられた指輪から魔力で動かす魔導駆動二輪を取り出す。

「じゃあ、私達も」

ハジメがバイクを取り出したのを見ると束は量子空間から大型のキャンピングカーを取り出し、乗り込み。そして、ハジメを先頭にして、溪谷を進み始めた。

第21話

ハジメが運転する魔導バイクを先頭に溪谷を進む飛羽真達一行。現われる魔物はハジメと一緒にバイクに乗っている恵理が銃で撃ち殺すか、束が製作した大型キャンピングカーに搭載された兵装で撃ち抜かれていた。

「キャンピングカーという名の装甲車だなこれは」

映し出される映像を車の中で見ていた飛羽真が呟く。ガチャでゲットした卵を膝に乗せて、撫でており、偶に卵に乗っているピナの事も撫でる。

「おまけにオルクさんの覚えていた『空間魔法』。それのお陰で40人は余裕で入れる空間になった。あれだなスーパー戦隊の一つの拠点兼足に使っていた車の強化改修版だな」

「でも、こういう場所は揺れると思ってたんだけどそうでもないのね？」

「本来なら揺れる。だが、車体底部に作った錬成機構が悪路を整地しているんだ」

「成程、だから揺れないのね」

飛羽真の説明に納得したゼシカはカップに淹れられたお茶を一口飲むと、テーブルにおいているチェス盤を見る。

「それ持ってきたのか？」

「ええ。娯楽があったほうが気晴らしにもなるだろうし。それに、負けたままなのは嫌なもの」

ゼシカが真剣に見ているのはオスカーが生前作ったチェスだ。駒がやられるたびに昼ドラのような愛憎劇や骨肉の争いが起こるがそれ以外は至って普通のゲームなのだ。

「オルクさん、何であんなゲーム作ったんですか？」

「最初は実際の戦争をモチーフにした物だったんだが、うちのリーダーが余計な設定を追加して今のドロドロなストーリーが練り広げられるようになってしまったんだ」

飛羽真は製作者である本人に尋ねると、オスカーはため息をつきながら答えた。

「およ？魔物の咆哮が聞こえてきたね？」

打ち上げた衛星と同時に世界へとばらまいた小型のスパイロボから送られてくる映像と情報を処理していた束が聞こえてきた咆哮に作業の手を止める。

『こつちでも聞こえた。放たれる威圧からして、この谷底の魔物の中で上位に位置するのかもしれないな。30秒もしない内に会敵するな』

「・・オルクさん。あの崖を回り込んだら車を止めてください。シユテルはランチャーをいつでも撃てるよう準備しておいてくれ」

「了解だ」

「解りました」

先に先頭を走っているハジメが崖を回り込む。それに続くように車が崖を回り込み、停車すると、大迷宮で対峙したティラノサウルス型の魔物がいた。1つ違うとすればその頭が1つではなく2つだということか。

更にその魔物の近くには、

「・・何だあれ？」

ぴよんぴよんと跳ね回りながら半泣きで逃げ惑うウサミミを生やした少女がいた。

「・・・・・兎人族？」

「何でこんなところに？兎人族って谷底が住処なの？」

「・・・・・聞いたことない」

ユエがその少女の種族を言い当てると、恵理が何でその種族がここにいるのかを尋ねるも、ユエ自身も何でいるのか分からなかったらしい。

「犯罪者として落とされたのかもしれないね。元々、ライセン大渓谷は重罪を犯した者達を処刑するために使われていたからね」

「・・・・・悪鬼？」

車から降りてハジメ達と逃げ回る兎人を見ていたオスカーがライ

セン大溪谷の事を話すとユエが小さく呟いた。

どうしたものかと飛羽真達が悩んでいると、少女が飛羽真達を発見する。双頭ティラノに吹き飛ばされ、岩陰に落ちた後、四つん這いになりながらほうほうのていで逃げ出し、その格好のまま飛羽真達を凝視する。

そして、再び双頭ティラノが爪を振るい隠れた岩事吹き飛ばされ、地面を転がると、その勢いを殺さず猛然と飛羽真達の方へと逃げ出した。それなりに距離があるのだが、少女の必死の叫びが溪谷に木霊する。

「だずげでぐだぎ〜い！ひっ〜、死んじやう！死んじやうよお！だずけてえ〜、おねがいしますう〜！」

「うわ、モンスタートレインかよ」

「・・・迷惑」

少女が連れてきた双頭ティラノに全員が嫌な顔をする。

「彼女を助けるかい？」

「無視してもいいんですけど、何処までも追つて来そうな気がするんですよね〜。付きまとわれるのも嫌ですし、斬っておきますか」

「キュル〜」

「ピナ？」

双頭ティラノを斬るため飛羽真が刀に手を添えたとき。頭に乗っていたピナが飛羽真の額を叩いて何かを訴えてくる。

「キュル、キュルル〜」

「お前が倒すつていうのか？」

「キュル」

飛羽真の言葉にピナが鳴きながら頷く。飛羽真はしばし考えた後、「分かった。念のために俺の魔力を少し送る」

飛羽真とピナは見えないラインのようなもので繋がっている。ラインを通して飛羽真の魔力をピナに送ることが出来、能力を上げたり、放つ技の威力を上げることが出来るのだ。

「(このぐらいでいいかな?) 行け、ピナ」

「キュル！」

飛羽真の指示にピナはその場で大きく息を吸い込む。そして、

「キュル〜!」

可愛い鳴き声と共にレーザー如きブレスが放たれ、少女に追いつき、食そうとその大きな口を開けていた双頭ティラノの口内を突き破った。

「っへ?」

自分を食べようとしていたティラノの片方の頭が亡くなったことに少女が目丸くする。そして、力を失った片方の頭が地面に激突、慣性の法則に従い地を滑る。双頭ティラノはバランスを崩して地響きを立てながらその場にひっくり返った。

その衝撃で、少女は再び吹き飛ぶ。そして、狙いすましたように飛羽真の下へと向かっていく。

「きゃああああああ! た、助けてください〜!」

眼下の飛羽真に向かって手を伸ばす少女。その格好はボロボロで女の子としては見えてはいけない場所が盛大に見えてしまっている。例え、酷い泣き顔でも男なら迷いなく受け止めるだろう。

「.....」

いつでも服を変えることが出来るとはいえ外に出て早々着替えるのは面倒だと感じた飛羽真は1歩横にずれた。

「ええー!?!」

受け止めてもらえると置いていた少女は驚愕の悲鳴を上げる。来るであろう痛みには少女は目を瞑るが、いつまで経っても痛みはこぼれ、何かに受け止められ、浮遊感を感じ取った。恐る恐る、少女が目を開けると地面に座っていた。

「.....おお」

「おみ〜!」

少女は目を閉じていて知らないだろうが、少女が地面と衝突する数秒前、飛羽真は片腕で少女を受け止めると、コマのように回転して勢いをこらし、少女を地面に座らせたのだ。その動きにユエと恵理は思わず拍手をした。

一方、双頭テイラノは絶命した片方の頭を、何と自分で喰い千切りバランス悪目な普通のテイラノになった。テイラノはその眼に激烈な怒りを宿して咆哮を上げる。その叫びに座っていた少女は跳びはね、直立で着地すると涙目になりながら、素早い動きで飛羽真の後ろに隠れた。

「人を盾にするな！服を掴むな、離せ！」

「い、いやです！今、離したら見捨てるつもりですよね！」

「何で、余計な騒動を連れてきた見ず知らずのウザギを助けなきやならないんだ」

「そ、即答!?何が当たり前ですか！貴方にも善意の心はありますでしょう！いたいたいけな美少女を見捨てて良心は痛まないんですか！それに、見ず知らずというなら、あそこにいる私と同じ兎人族を助けているんですから、今更でしよう！」

飛羽真の服を掴み、しがみつきなから少女は束を指さす。

「残念だが、あの人は人間だ。あの頭に着けているうさ耳はアクセサリーみたいなもんなんだよ。つうか、自分で美少女言うなよ」

「な、なら助けてくれたら・・・そ、その貴方のお願いを、な、何でも一つ聞きますよ?」

頬を染めて上目遣いで迫る少女。あざとい、実にあざとい仕草だ。涙や鼻水とかで汚れてなければ、さぞ魅力的だっただろう。並みの男なら、例え汚れていても堕ちるだろう。だが、

「いらねえよ。ていうか汚い顔を近づけるな。服が汚れるだろう」

飛羽真には全くと言っていいほど効果がなかった。

「き、汚い!?言うことかいて汚い！あんまりです！断固抗議しまつ『グウガアアア!』ヒィー!お助けえく!」

少女が飛羽真の言葉に反論しようと声を張り上げた瞬間、〃無視すんじゃないねえ!!”とでも言うようにテイラノが咆哮を上げて突進しようとして身をたわめた。

「飛羽真様が動くことが出来ません離れてください」

「絶対に離しませえくくん！」

情けない悲鳴を上げながら掴む力を更に強める少女。ハジメがい

るため問題はないだろうが、何が起こるか分からないのが戦場。見かねたゼストが少女を飛羽真から引きはがそうとするが、引きはがされたら終わりと思っっている少女は死に物狂いで飛羽真にしがみついているため引きはがすことが出来ない。

その様子を見てコケにされていると感じたティラノは一層怒りを宿した眼光で飛羽真達を睨み、遂に突進を開始した。

「(しゃーない) 星の杖(オルガノン)」

少女が腰にしがみついているため刀を抜きづらいことを知ると、飛羽真は量子ボックスないから杖を取り出し、起動した。すると、突撃してきたティラノがばらばらに斬り裂かれ、肉片が地面に落ちる。

「し、死んでます・・・あのダイヘドアが一瞬で」

自分を食べようと追いまわしていた双頭ティラノ「ダイヘドア」の死骸を呆然としたまま硬直してみる少女。その間、飛羽真にしがみ付いており鬱陶しく感じた飛羽真は少女の脳天に手刀を叩き込む。

「へぶう!?!」

呻き声を上げ、両手で頭を抱えて地面をのたうち回る少女。それを冷たく一瞥した後、飛羽真はハンドサインで先に行くぞとハジメ達に合図を送る。ハンドサインを見たハジメはバイクに魔力を注ぎ、他の面々は車に乗り込む。

その気配を察したのか、今まで地面を転がっていた少女は物凄い勢いで跳ね起き、再び飛羽真の腰にしがみついた。

「(此奴、打たれ強すぎないか?)」

「先程は助けて頂きありがとうございます! 私は兎人族ハウリアの1人、シアと言いますです! 取り合えず私の仲間も助けてください!」

そして、中々に凶太かった。

第22話

「私の家族も助けてください！」

渓谷に少女改めシア・ハウリアの声が響く。どうやら自分1人だけではなく、仲間も彼女と同じ様、窮地に陥っているようだ。

とつと先に進みたいと思っているハジメはこのままでは拉致があかないと思い、シアのウサ耳を握ると「纏雷」を行った。

「アババババババアバババ!」

シアのうさ耳が「ピンツ」と立ちうさ毛が「ゾワツ」と逆立っている。ハジメが「纏雷」を解除すると、痙攣しながらずると崩れ落ちていった。

「……………」

「行こうぜ飛羽真」

「お、おう」

容赦ないハジメの行動に飛羽真は引きつった笑みで返事を返し、車に乗り込もうとすると、

「に、にがしませんよ〜」

痙攣していたシアがゾンビの如く起き上がり飛羽真の脚にしがみつく。

「お、お前、ゾンビみたいな奴だな。それなりの威力を出したんだけど…………何で動けんだよ?」

「本当は兎人族じゃなくて、ゾンビだったりして」

「…………不気味」

「うう〜何ですか!その物言いは!さつきから、手刀とか電撃とかちよつと酷すぎると思います!断固抗議しますよ!お詫びに家族を助けてください!」

怒りながら、さらりと要求を突きつけるシア。案外余裕そうである。

「ハジメ、このままじゃ埒が明かないから話だけでも聞いてやろうぜ」

このままでは先に行くことが出来ないと思った飛羽真が話だけでも聞こうと提案する

「……分かったよ」

「つと、言うことだ。話を聞いてやるからいい加減離れる。つか、さり気なく俺の服で顔を拭くな!」

話を聞くと言われ、笑顔になるシアは、これまたさり気なく飛羽真のコートで汚れた顔を綺麗に拭っていた。いい性格をしているシアにイラつときたのか、飛羽真は本日2度目の手刀をシアの脳天に叩き込んだ。

「はぎゅん!?ま、また殴りましたね!父様にも殴られたことがないのに!よく私のような美少女を、そうポンポンと……もしや、殿方同士の恋愛にご興味が……だから先も私の誘惑をあつさり拒否したんですね!そうでっあふんっ!」

「誰がホモだウザウザサギ。って言うか何でそのネタを知ってるんだよ。ユエと言ってお前と言いつつ、どっから仕入れてくるんだ?」

「飛羽真、話が脱線するからそれは取り合えずおいておけ」

「そうだな。お前の誘惑だがギャグだが知らんが、誘いに乗らないのは、お前より遥かにレベルの高い女子が6人もいるからだ。俺としてはこの6人を見て堂々と誘惑出来るお前の神経がわからん」

「で、でも!胸なら私が勝ってます!そっちの女の子はペツタンコじゃないですか!」

「ペツタンコじゃないですか!」

「ペツタンコじゃないですか!」

ユエを指さしながらシアが言った言葉が溪谷に木霊する。前髪で表情を隠したままユラリとサイドカーから降り、ゆっくりと歩み寄るユエ。

「あゝあ」

「いっちまっしたな」

命知らずなシアの発言にハジメは天を仰ぎ、飛羽真と共に無言で合掌する。見た目からは解らないがユエは着やせするタイプで、それなりにある。だが、他の面々に比べると少々控えめで、夜な夜な恵理か

ら教わったバストアップマツサージを行っているらしい。

「あ、あ、あ」

震えるシアのうさ耳に囁くようなユエの声がやけに明瞭に響いた。

「…………お祈りはすませた?」

「…………謝ったら許してくれた?」

「…………」

「死にたくなあい!死にたくなあい!」

「嵐帝」

「あつー……!?!」

突如発生した竜巻に巻き上げられ錐揉みしながら天に打ち上げられるシア。彼女の悲鳴が溪谷に木霊し、きっかり10秒後に飛羽真達の眼前に墜落した。

「…………まるで犬〇家だね」

恵理は映画にもなった推理小説の人物と同じことになっているシアを見てそう呟く。

「完全にギャグだな」

その神秘的な容姿とは相反する途轍もなく残念な少女であるシアを見て飛羽真はそう呟く。遠目で軽い修羅場となっているハジメとユエを眺めながら、犬〇家になっているシアを助けようと動こうとしたとき、痙攣していたシアの両手が地面を掴み、ふるふる震えながら懸命に頭を引き抜こうとしていた。

「アイツ動いてるぞ…………本気でゾンビみたいなやつだな頑丈とかそう言うレベルを超えている気がするんだが…………」

視線をさまよわせていたハジメもそれに気づき、軽く引いてしま

う。
「うう…………ひどい目に遭いました。こんな場面見えてなかったのに」

涙目で、しよぼしよぼとボロボロになった布を直すシアは、意味不明なことを言いながら飛羽真達の下へ這い寄ってきた。

「(まるでホラー映画だな)」

シアのことを見ながら飛羽真はため息を吐き、量子ボックスから夕

オルケットを取り出し、シアに被せる。

「え？」

「色々と目のやり場に困るし、約1名、お前のとある部分を見て睨んでるからな羽織っておけ」

「あ、ありがとうございます」

飛羽真の優しさに涙を流しながらお礼を言うシア。

「はあく、お前の耐久力は一体どうなってるんだ？尋常じゃないぞ・・・何者なんだ？」

ハジメの胡乱な眼差しに、ようやく本題に入れると居住まいを直すシア。飛羽真達の前で座り込みまじめな表情となる。話を聞かため車からゼシカ達も降りてくる。

「改めまして、私は兎人族ハウリアの長の娘シア・ハウリアと言います。実は・・・」

それからシアは自分達のことを語りだした。

シア達、ハウリアと名乗る兎人族達は「ハルツィナ樹海」にて数百人規模の集落を作りひっそりと暮らしていた。聴覚や隠密行動に優れているものの兎人族は他の亜人族に比べればスペックが低くと、突出した物がないので亜人族の中でも格下と見られていた。性格は温厚で争いを嫌い、一つの集落全体を家族として扱う仲間同士の絆が深い種族だ。また、総じて容姿に優れており、エルフのような美しさとは異なった、可愛らしさがあるので、帝国等に捕まり奴隷にされた時は愛玩用として人気の商品となる。

そんな兎人族の一つ、ハウリア族に、ある日異常な女の子が生まれた。兎人族は基本的に農紺の髪をしているのだが、その子の髪は青みがかった白髪だったのだ。しかも、亜人族にはないはずの魔力まで有しており、直接魔力を操る術と、とある固有魔法まで使えたのだ。

当然、一族は大いに困惑した。兎人族として、いや、亜人族としてあり得ない子が生まれたのだ。魔物と同様の力を持っているなど、普通なら迫害の対象となるだろう。しかし、彼女が生まれたのは亜人族一、家族の情が深い種族である兎人族だ。百数十人全員を一つの家族と称する種族なのだ。ハウリア族は女の子を見捨てるという選択肢

を持たなかった。

しかし、樹海深部に存在する亜人族の国「フェアベルゲン」に女の子の存在がばれば間違いなく処刑される。魔物とはそれだけ忌み嫌われており、トータスに住む全種族にとって不？戴天の敵なのである。過去にわざと魔物を逃がした人物が追放処分を受けたと言う記憶がある。また被差別種族と言うこともあり、魔法を振りかざして自分達亜人族を迫害する人間族や魔人族に対してもいい感情等持っていないのだ。

故に、ハウリア族は女の子を隠し、16年もの間ひっそりと育ててきた。だが、先日とうとう彼女の存在がばれてしまったのだ。その為、ハウリア族はフェアベルゲンに捕まる前に一族事、樹海を出たのだ。

行く当てもない彼等は、一先ず北の山脈地帯を目指すことにした。山の幸があれば生きていけるかもしれないと考えたからだ。未開地ではあるが帝国や奴隷商に捕まり、奴隷に墮とされてしまうよりはマシだ。

しかし、彼らの試みは、その帝国により潰えた。樹海を出てすぐに運悪く帝国兵に見つかってしまったのだ。巡回中だったのか訓練だったのかは分からないが、一個中隊規模と出くわしたハウリア族は南に逃げるしかなかった。そして、女子供を逃がすために男達が追っ手の妨害を試みるが失敗し、半数以上が捕らわれてしまい、全滅を避けるために逃げ込んだ溪谷では魔物に襲われ、溪谷の奥へと逃げるしかなかった。

「．．気が付けば、60人いた家族も、今は40人程しかいません。このままでは全滅です。どうか助けてください!!」

最初の残念な感じとは打って変って悲痛な表情で懇願するシア。どうやらシアはこの世界の例外と言う者らしい。特に、ユエと同じ、先祖返りと言う奴なのかもしれない。

話を聞き終えたハジメは、飛羽真達が何かを言う前に、

「断る」

っと、特に表情を変えることなく端的に答えた。

第23話

「断る」

ハジメの言葉が静寂をもたらした。何を言われたのか分からない、と言った表情のシアは、口を開けた間抜けな姿でハジメをマジマジと見つめた。そして、一方的に話を終らせたハジメがバイクに跨ろうとしたところで我を取り戻したシアが物凄い勢いで抗議の声を張り上げた。

「ちよ、ちよ、ちよつと！何故です！今の流れはどう考えても『なんて可哀想なんだ、安心しろ！俺が何とかしてやる！』とか言つて爽やかに微笑むところですよ！さすがの私もコロつといつちやうところですよ！何、いきなり美少女との出会いをフィにしてるんですか！」

「(あの馬鹿勇者ならいいそうな台詞だな。でも、助けられるかどうかって聞かれたな答えは限りなくNOに近いだろうな)」

シアの抗議の言葉を聞いていた飛羽真は、王国にいる後先考え無しの馬鹿勇者を思い出す。そして、同じ考えだったのか飛羽真も車に乗り込むため歩き出す。

「つて、無視して行こうとしないでください！逃がしませんよう！」

シアの抗議の声を無視して行こうとする飛羽真の脚に再びシアが飛びつく。さっきまでの真面目で静謐な感じは微塵もなく、形振り構わない残念ウサギへと戻った。

足を振つても微塵も離れる気配がないシアに、飛羽真は溜息を吐きながら睨む。

「はあ~~~~お前等を助けて、俺達に何のメリットがあるんだ？」

「メ、メリット？」

「帝国から追われ、樹海から追放された、お前は厄介の種、俺達にとってはデメリットだらけだ。仮に溪谷から脱出出来たとして、その後どうするんだ？また帝国に捕まるのが関の山だ。で、それを避けるためにまた俺達を頼るんだろ？今度は、帝国兵から守りながら北の山脈地帯まで連れて行って欲しい」つてな」

「うっ、そ、それは・・・でも！」

飛羽真の言葉に凶星を突かれたシアは一瞬たじろぐ。

「お前達の境遇には同情する。だが、俺達にだって旅の目的があるんだ。そんな厄介事を抱える余裕はないんだ」

「そんなあ・・・でも、守ってくれるって見えましたのに！」

「見えた・・・か。さつきもそんなこと言っていたが、それは話に出ていたお前の固有魔法と関係あるのか？」

さつきから気になる発言をしていることが気になった飛羽真がシアに尋ねる。

「え？あ、はい。『未来視』といいまして、仮定した未来が見えます。もしこれを選択したら、その先どうなるのか？みたいな・・・後、危険が迫っているときは勝手に見えたりします。まあ、見えた未来が絶対と言うわけではないですけど・・・。っ！そ、そうです！私、役に立ちますよ！『未来視』が有れば危険とかも分かりやすいですし！少し前に見たんです！貴方方が私達を助けてくれていた姿が！実際、ちゃんと貴方方に会えて助けられました！」

「・・・そんな凄い能力を持ってって、何でばれたんだ？危険を察知できるなら追放される未来も見えたんだろう？」

「うっ!？」

飛羽真の指摘に唖った後、シアは目を泳がせてぽつりと呟いた。

「じ、自分で使った場合は暫く使えなくて・・・」

「ばれた時、既に使った後だったと・・・何に使ったんだよ？」

「ちよ、ちよ・・・とですね、友人の恋路が気になりました・・・」

「ただの出歯亀じゃねえか！」

「貴重な魔法をそんなことに使ってしまったとか、完全に自業自得だろ」

「うう・・・猛反しておりますう・・・」

ハジメと飛羽真のぐうの音もでない正論にシアは小さくなる。

「やっば、駄目だな。もうちよつとマシな理由だったら助けてやってもいいと思ったが、お前がダメだわ。この残念ウサギが」

呆れたようにそつぽを向く飛羽真にシアが泣きながら縋り付く。

いい加減引きすぎつてでも出発しようと考え出した矢先、意外な所から援護が来た。

「……皆、連れて行こう」

「ユエ？」

「!?最初から貴方のこといい人だと思っていました!ペツタンコつて言つてゴメンなつあふん!」

ユエの言葉にハジメは訝しそうに、シアは興奮して目をキラキラして調子のいい事を言う。ついでに余計な事も言い、ユエのビンタを貰い、頬を抑えながら崩れ落ちた。皆にシアを連れて行こうと言った訳を話そうとすると、

「……樹海の案内に丁度いいつと思つたからだろうユエ君?」

話を聞いていたオスカーがかわりに理由を告げた。

「あゝゝ」

亜人族が住む、樹海は多民族から身を守るため、森全体に方向感覚等を惑わせる霧などがあり、そこで暮らす亜人族以外は必ず迷う言われている。

「確かに兎人族がいれば、考えていた対策をしなくて済むが……でもなあ」

シア達、ハウリア族はあまりに多くの厄介事を抱えているため逡巡するハジメ。

「俺はユエの意見に賛成だ。確かにハウリア族を助けることで他の亜人族や帝国兵ともめるかもしれない。だが、ベストな道が目の前にあるのに敵の存在を理由に避けるなんてあり得ないだろう。それに人という領域を超えていない奴等に俺達が負けるわけがないだろう?」

「……そう……だな。つて言うか飛羽真。人外だつてこと認めたな?」

「何の事かな?つと言うことだ、残念ウサギ。お前らを樹海の案内に雇わせてもらう。報酬はお前等の命だ」

ヤクザや悪徳業者のような物言いをする飛羽真に全員が苦笑いする。逆にシアは溪谷において強力な魔物を片手間に屠れる強者達が生存を約束してくれたことに喜び顔にした。

「あ、ありがとうございます！ううううよがっただよお、ほんどによがったよお」

嬉し泣きするシア。しかし、仲間のためにもグズグズしていられないと直に立ち上がる。

「あ、あの、よろしくお願いします！そ、それで皆さんのことは何と呼べば・・・」

「ん？そう言えば名乗ってなかったか・・・俺はハジメ。南雲ハジメだ」

「私は中村恵理だよ」

「・・・ユエ」

「八神飛羽真だ」

「ゼシカ・アルバートよ」

「シユテル・スタークスです」

「ゼストと申します」

「世紀の大天才篠ノ之束だよ」

「オルクだ」

「ハジメさん、恵理さん、ユエちゃん、飛羽真さん、ゼシカさん、シユテルさん、ゼストさん、束さん、オルクさんですね」

「・・・さんを付けろ。残念ウサギ」

「ふえ!？」

全員の名前を何度か反芻し覚えたシアだったが、ユエの不満顔、更にはからぬ命令口調に戸惑う。外見から年下と思っていたが、吸血鬼族で遙かに年上と知ると土下座する勢いで謝罪した。

「(ユエの機嫌かなり悪くないか?)」

「(まあ、何となく理由は分かる)」

シアの体の一部を憎々しげに睨んで見ていることでユエの機嫌の悪さの理由は察することが出来るが、ハジメはあえて何も言わない。

「・・・案内をさせるのに車に乗せる訳にはいかないな。シアはユエを抱えるようにしてサイドカーに乗ってくれ」

「は、はい」

仲間の元に案内させるため、バイクに乗るよう飛羽真はシアに指示

を出した。見たことのない物であるため戸惑うシアだったが、取り合えず何らかの乗り物であることは分かるのでシアは恐る恐る、サイドカーに乗り込む。シアが座ったのを確認するとユエがシアの膝の上に座り、コンマ数秒で立ち上がった。

「・・・ユエ？」

いきなり立ち上がったユエにハジメが声を掛けるも、ユエは何も言わず絶望した表情をしながら器用にハジメの前へと潜り込んでいった。

第24話

樹海の案内を頼む見返りとして兎人、ハウリア族の護衛を引き受けた飛羽真達一行はシアの案内の下、彼女の部族が隠れている場所へと向かっているのだが、遠くからでも分かるほどの悲鳴と怒号が溪谷に木霊する。

「・・・やばい状況みたいだな」

開けていた窓から聞こえてくる悲鳴と怒号を聞き、飛羽真はシアの家族が危機に瀕しているのを理解すると、バイクと車の速度を上げる。そして、走ることに2分。最後の大岩を迂回した先には、今まさに襲われようとしている数十人の兎人族達があった。

「あ、あれは、ハ、ハイベリア」

上空を旋回しているワイバーンによく似た魔物「ハイベリア」を見たシアは声を震わせながら名を口にした。

「獲物の品定めをしているみたいだな。行動を起こすのも時間の間・・・あ」

上空のハイベリアの対処を考えているうちに6匹のうちの1匹が遂に行動を起こした。大きな岩の間に隠れていた兎人族の下へ急降下すると空中で1回転し遠心力がたつぷりと乗った尻尾で岩を殴りつけた。轟音と共に岩が粉碎され、兎人族が悲鳴と共に這い出ている。ハイベリアは待っていたと言わんばかりに、その顎門を大きく開け、無力な獲物を喰らおうとする。狙われたのは2人の兎人族。ハイベリアの一撃で腰が抜けたのか動けない子供に男性の兎人族が覆いかぶさって庇おうとしている。

廻りの兎人族がその様子を見て瞳に絶望を浮かべた。誰もが次の瞬間には2人の家族が無残にもハイベリアの餌になる所を想像しただろう。しかし、それはあり得ない。何故なら、この場には彼らを守ると契約した、奈落の底より這い出た化物達とかつて神に挑むために立ち上がった解放者の1人がいるのだから。

溪谷に2発の乾いた破裂音が響くと同時に2条の閃光が虚空を走

る。そのうちの1発は、今まさに2人の兎人族に食らいつこうとしていたハイベリアの眉間を狙い違わずに貫き、頭部を爆散させ、蹲る2人の兎人族の脇を勢いよく土煙を巻き上げながら滑り、轟音を立てながら停止する。同時に後方で凄まじい咆哮が響いた。呆然とする暇もなく、そちらに視線を向けた兎人族が見たものは、片方の腕が千切れ大量の血を吹き出しながらのたうち回るハイベリアの姿。

「い、一体何が」

子供を庇っていた男の兎人族が呆然としながら、目の前の頭部を碎かれ絶命したハイベリアと、後方でのたうち回っているハイベリアを交互に見ながら呟いた。

すると、更に発砲音が聞こえ、のたうち回っていたハイベリアを幾条もの閃光が貫いていく。最後に甲高い咆哮を上げたハイベリアは地響きを立てながら崩れ落ち動かなくなった。

仲間の死に激怒したのか、残りのハイベリア達が一斉に咆哮を上げる。それに身を竦ませる兎人族達の優秀な耳に、今まで1度も聞いたことのない異音が聞こえた。甲高い上記が噴出するような音に今度は何事かと音の間こえる方へ視線を向けた兎人族達の目に飛び込んできたのは、見たこともない黒い乗り物に乗って、高速でこちらに向かってくる4人の影と、荷車よりも大きな物。

4人の影の内、1人は見覚えがありすぎる者だった。何故ならそれは今朝がた、突如姿を消し、ついさっきまで一族総出で探していた女の子だからだ。

「みんなく〜く助けを呼んできましたよお〜〜!」

「「「「「シア!?!」」」」」」

その聞きなれた声音に、兎人族が一斉に彼女の名を呼んだ。兎人族がシアの名を呼んだと同時に、車の屋根から1つの影が砲弾の如く、上空で怒りの咆哮を上げているハイベリアへと突っ込んでいった。

「無の呼吸 水の型 水車」

ハイベリアへと突っ込んでいた1つの影 飛羽真は空中で1回転し、遠心力も加わった一閃で正確にハイベリアの首を斬り落とすと、魔力で足場を作って着地し、方向転換。足場に付与されている加速の

恩赦で一氣に加速する。そして、

「武技『六光連斬』」

6つの斬撃を同時に放ち、残りのハイベリアを斬り捨てた。瞬間に残っていた全てのハイベリアを斬り捨てた飛羽真は絶妙のタイミングで落下地点にやってき、停止した車の屋根に危なげなく着地すると、刀を振るって刀身に付いたハイベリアの血を拭くと刀を鞘に納めた。

断末魔を上げる暇すらなく、力を失って地に落ちていくハイベリア。シアを襲っていた双頭のテイラノモドキ「ダイヘドア」と同等以上に、この谷底では厄介な魔物と知られている彼らが、何の抵抗もできずに瞬殺された。有り得べからざる光景に、硬直する兎人族達。

「いつまでボオーっとしてるんだ、さっさと正気に戻れ」

「・・・っは!? シ、シア! 無事だったのか!!」

「父様!」

いつまで経っても正気を取り戻さない兎人族達にイラついたのか、ハジメが空に向かって銃を発砲する。その発砲音で真っ先に正気を取り戻した、濃紺の短髪にウサミミを生やした初老の男性だった。

「(うさ耳を生やしたおっさんって、誰得だよ)」

シユールな光景に微妙な気分になっていると、その間にシアと父様と呼ばれた兎人族の話が終わったようで、互いの無事を喜んだ後、飛羽真達の方へ向き直った。

「ハジメ殿に飛羽真殿で宜しいか? 私は、カム。シアの父にしてハウリアの族長をしております。この度はシアのみならず我が一族の窮地をお助けいただき、何とお礼を言えればいいか。しかも、脱出まで助力してくださるとか・・・父として、族長として深く感謝致します」

そう言うと、カムと名乗ったハウリア族の族長は深々と頭を下げた。後ろには同じように頭を下げるハウリア族一同がいる。

「まあ、礼は受け取っておく。だが、樹海の案内と引き換えなんだ。それは忘れるなよ?」

「それより、随分あっさりと俺達のことを信用するんだな? 亜人は

人間族にいい感情を持っていないだろうに……」

亜人族は被差別種族である。実際、渓谷に追い詰められたのも人間族のせいだ。にもかかわらず、同じ人間族である飛羽真達に頭を下げ、しかも助力を受け入れるという。あまりにもあっさりとしているというか、嫌悪感のようなものが全く見えないことに疑問を抱く飛羽真。

「シアが信頼する相手です。ならば我らも信頼しなくてどうします。我らは家族なのですから……」

カムは、それに苦笑いで返した。

「感心半分呆れ半分ですね。1人の女の子の為に一族事故郷を出て行くくらいですから情の深い一族だとは思っていましたが、初対面の人間族相手にあっさり信頼を向けるとは警戒心が薄すぎます」

「はは、昔の彼らを見ている気分になるよ」

警戒心の薄さにシユテルが呆れ、オスカーは昔の仲間を思い出し笑みを浮かべた。

「えへへ、大丈夫ですよ、父様。飛羽真さんは女の子に対して少し容赦がないし、対価がないと動かない人ですけど、約束を利用したり、希望を踏み躪る様な外道じゃないです！ちゃんと私達を守ってくれますよ！」

「はっはっはっ、そうかそうか。つまりは照れ屋な人なんだな。それなら安心だ」

生暖かい眼差しで飛羽真を見ながら頷く他の兎人族。

「(尚文さんもこんな気持ちだったのかね〜)」

かつて共に旅をした本物の勇者だと思っている人も今、自分に向けられている視線を浴び、自分と同じ思いを感じていたのかと考える。

「ほれ、世間話はそこまでにしてさっさと移動するぞ。また魔物が集まってきたら面倒だからな」

向けられる視線に耐えきれなくなったのか飛羽真は足早にその場から離れる。そんな飛羽真の背を苦笑いで見つめながら一行はライセン大渓谷の出口目指して歩を進めた。

第25話

樹海の案内を頼む対価として渓谷からの脱出と護衛を引き受けた飛羽真達一行は42人の兎人族を引きつれて渓谷内を歩いていた。

歩いて渓谷を脱出すると言った際、シアが飛羽真達が乗っていた車に面々を乗せて行けばいいのではないかと提案するが、空間魔法で内部を広くしているとはいえ42人も乗せる事は出来ないと言い、歩いていくこととなったのだ。

引きつれて歩いていれば数多の魔獣が当然のように絶好の獲物だと思い、こぞつて襲ってくるのだが、ただの1匹もそれが成功したものはいなかった。例外なく、兎人族に触れることすら叶わず、接近した時点で閃光が飛び頭部を粉碎されるか、頭部と胴体が分かれるからである。

乾いた破裂音や雷が落ちた際に鳴り響く踏み込みから音と共に閃光が走り、気が付けばライセン大渓谷の凶悪な魔物が為すすべなく絶命していく光景に、兎人族達は啞然として、次いで、それを成し遂げている人物であるハジメと飛羽真に対して畏敬の念を向けていた。もつとも、小さな子供達は総じて、そのつぶらな瞳をキラキラさせて圧倒的な力を振るう2人をヒーローだとも言うように見つめている。

「……………」

「ふふふ、飛羽真さん。チビッコ達が見つめていますよ、手でも振ってあげたらどうですか？」

前の世界で似たような眼差しを受けたことのある飛羽真は心を無にしてやり過ぎそうとしていた所に、実にウザイ表情でシアがちよっかいを掛ける。

「……………(ピキ)」

そのちよっかいにイラついた飛羽真は額に青筋を浮かべ、量子ボツクスから特性のゴムボールを取り出してシアに向けて投げた。直線のため戦闘経験のないシアでも簡単に避けることが出来たのだが、飛

羽真が取り出したボールの真骨頂は此処からだ。大迷宮内の中でも特に弾力性に優れた魔物の素材を使って作られたこのボールは跳ねれば跳ねるほど速度が上がっていくのだ。

「あわわわわわわっ!？」

少しづつ速くなっていくゴムボールをワタワタと回避するシア。道中何度も見られた光景に、シアの父、カムは苦笑いを、ハジメ達は呆れを乗せた眼差しを向ける。

「た、たすけてえ〜」

「はっはっは、シアは随分と飛羽真殿を気に入ったのだな。そんなに懐いて・・・シアももうそんな年頃か。父様は少し寂しいよ。だが、飛羽真殿なら安心か・・・」

「すぐ傍で娘が攻撃されてるのに・・・呑気だね〜」

「・・・ズレてる」

「天然も入ってるじゃない?」

何処かズレているハウリア族に呆れる飛羽真達一行。その後も、同じような事が何度かあったが、遂にライセンス大渓谷から脱出できる場所に辿り着いた。「遠見」で見たハジメ曰く、岸壁に沿って壁を削って作ったであろう階段は、50?ほど進む度に反対側へと折り返すタイプで、階段のある岸壁の先には樹海も薄らと確認できたそう
だ。

「帝国兵はまだいるでしょうか?」

シアが不安そうにハジメに話しかける。

「ん?どうだろうな。もう全滅したと諦めて帰っている可能性も高いが・・・」

「そ、その、もし、まだ帝国兵がいたら・・・飛羽真さん達は・・・どうするのですか?」

「?どうするって何がだ?」

「今まで倒した魔物と違って、相手は帝国兵・・・人間族です。皆さんと同じ。・・・敵対できますか?」

意を決したようにシアが飛羽真達に尋ねる。周囲の兎人族も聞きウサミミを立てている。

「残念ウサギ、お前、未来が見えていたんじゃないのか？」

「はい、見ました。帝国兵と敵対する皆さんを」

「だったら、何が疑問なんだよ？」

「疑問というより確認です。帝国兵から私達を守るということは、人間族と敵対することと言っても過言じゃありません。同族と敵対しても本当にいいのかと・・・」

シアの言葉に周りの兎人族達も神妙な顔つきで飛羽真達を見ている。小さな子供達はよく分からないといった顔をしながら不穏な空気を察してか大人達と飛羽真達を交互に忙しなく見ている。

「それがどうかしたのか？」

「え？」

「俺としては今さらそんな質問をされるとは思わなかったな」

疑問顔を浮かべるシアにハジメと飛羽真は特に気負った様子もなく世間話でもするように話を続けた。

「だから、人間族と敵対することが何か問題なのかって言ってるんだ」

「そ、それは、だって同族じゃないですか・・・」

「お前等だって、同族に追い出されてるじゃねえか・・・」

「それは、まあ、そうなんですが・・・」

「大体、根本が間違っている」

「根本？」

シアや周りの兎人族は首を傾げ、疑問顔を浮かべる。

「いいか？俺達は滞りなく樹海探索をする為にお前達を雇った。目的を達成するまで死なれちゃ困るから守るんだ。断じて、お前らに同情してとか、義侠心に駆られて助けているわけじゃない。まして、今後ずっと守ってやるつもりは毛頭ない。忘れたわけじゃないだろう？」

「うっ、はい・・・覚えています」

「だから、樹海案内の仕事が終るまでは守る」

「それを邪魔する奴は魔物だろうが人間族だろうが関係ない。道を阻むものは敵、敵は殺す。それだけのことだ」

「な、成程」

ハジメの物騒な考えに苦笑いしながら納得するシア。

「はっはっは、分かりやすくもいいですな。樹海の案内はお任せくだされ」

カムは快活に笑う。正義感を持ち出されるよりもギブ&テイクな関係のほうが信用に値したのだろう。

ハジメを先頭、飛羽真を最後尾に一行は階段を順調に登っていく。帝国兵からの逃亡を含めて、ほとんど飲まず食わずだったはずの兎人族だが、その足取りは非常に軽かった。

そして、遂に階段を上りきり、飛羽真達はライセン大渓谷からの脱出を果たす。そんな彼らが最初に見たのは、

「おいおい、マジかよ。生き残ってやがったのか。隊長の命令だから仕方なく残ってただけなんだがなあ〜こりやあ、いい土産ができうだ」

30人の軍服を着た兵士だった。

「小隊長！白髪の兎人もいますよ！隊長が欲しがってましたよね？」

「おお、ますますツイテルな。年寄りには別にいいが、あれは絶対に殺すなよ？」

「小隊長〜、女も結構いますし、ちよつとくらい味見してもいいつつすよねえ？こちとら、何も無いところで3日も待たされたんだ。役得の1つや2つ大目に見てくださいいよお〜」

「つたく。全部はやめとけ。2, 3人なら好きにしろ」

「ひやつほ〜、流石、小隊長！話が分かる」

言動と怯える兎人族の覚えようからして目の前にいるのが話していた帝国兵なのだど理解する。すると、兎人族だけ見ていた小隊長と呼ばれていた男はようやく、飛羽真達の存在に気づいた。

「ああ？お前等誰だ？兎人族・・・じゃあねえよな？」

「ああ、人間だ」

飛羽真が一行を代表して答える。

「はあ〜？何で人間が兎人族と一緒にいるんだ？しかも渓谷から。」

ああ、もしかして奴隷商か？情報掴んで追っかけてきたと？そいつあまた商売魂がたくましいねえ。まあ、いや。そいつら皆、国で引き取るから置いていけ」

勝手に推測し、勝手に結論付けた小隊長は、自分達の言うこと聞いて当たり前と信じ切った様子で飛羽真達に命令したが、

「「「「断る／わ／りします」」」」

その命令を飛羽真達はばつさり断った。

「・・・今、何て言った？」

「断るって言ったんだよ。国に帰った仲間同様、さっさと国に帰れ」返ってきた不遜な物言いに、小隊長の額に青筋が浮かぶ。

「・・・口に利き方には気を付けろよ。俺達が誰か分かっているのか？」

「知らないし、興味もない」

飛羽真の言葉に表情を消す小隊長。周囲の兵士達も剣呑な雰囲気。飛羽真達を睨んでいるが、飛羽真とハジメの後ろにいる恵理達を見て、女性の兎人族に向けていた下卑た笑みを浮かべた。

「ああ〜成程、よく分かった。てめえらが唯の世間知らずな糞ガキ共だっことがな。ちよいと世の中の厳しさってやつを教えてやる。くつくつく、そっちの嬢ちゃん達もえらい別嬪じゃねえか。てめえらの四肢を切り落とした後、目の前で犯して、奴隷商に売っぱらってやるよ」

「・・・つまり敵になるってことでいいんだな？」

「ああ!?まだ状況が理解できてねえのか！てめえらは、震えながら許しをこッ!？」

最後まで言うことなく1発の銃声と共に小隊長の眉間が撃ち抜かれ、そのまま後ろに倒れた。

何が起きたのかも分からず、呆然と倒れた小隊長を見る兵士達に追い打ちが掛けられた。ハジメのクイックドロ―で6人の帝国兵が小隊長と同じように眉間を撃ち抜かれ倒れる。

突然の小隊長を含めた仲間の謎の死に半ばパニックになりながらも飛羽真達に武器を向ける兵士達。

「無の呼吸 日の型 日暈の龍・頭舞い」

兵士達が行動を起こすよりも早く、幾つもの円を繋ぎ龍がうねるような動きで駆け巡った飛羽真、たった1人を除いて残りの兵士達をすれ違いざまに斬り捨てた。

「ひ、ひい!!」

抵抗をする暇もなく自分を除くすべての仲間が一瞬で殲滅された光景を見た兵士はその場にへたり込み、それを行った飛羽真とハジメと目が合うと、体を震わせ、這いずるように後退る。だが、

「はい、動かないでね」

いつの間にか兵士の後ろに移動していた恵理が笑顔で威圧しながら兵士の眉間に銃を突きつける。

「い、嫌だ。し、死にたくない。だ、誰か！助けてくれ!!」

自分の額に突きつけられているのが仲間達を撃ち抜いたのと同じものだど解ると命乞いをする。よほど怖いのか、股間からは液体が漏れてしまっていた。そこに飛羽真とハジメも合流し、情報を聞き出すためわざと殺さなかった最後の兵士に銃口を向け、首筋に刀を添える。

「た、頼む！殺さないでくれ！な、何でもするから！頼む！」

「何でもか・・・か。なら、他の兎人族がどうなったのかを教えてくださいませんか？結構な数がいたはずだが・・・全部、帝国に移送済みなのか？」

飛羽真が質問したのは、100人以上居たはずの兎人族についてだ。結構な数な為、移送にはそれなりに時間が掛かるだろう。もしまだ近くにおいて道中でかち合うようなら序に助けようと思ったからだ。

「・・・は、話せば殺さないか？」

「貴方、自分の立場を分かっている？別に、どうしても欲しい情報じゃないんだよ？今すぐ他の兵士さんと同じ末路をたどらせてあげようか？」

「ま、待ってくれ！話す！話すから！・・・多分、全部移送済みだと思おう。人数は絞ったから」

恵理の威圧に恐怖した兵士は話した。

「絞った・・・ねえ」

それは、つまり老人など売れそうにない兎人族は殺したということだろう。兵士の言葉に、悲痛な表情を浮かべる兎人族達。その様子をチラッとだけ見た3人は直に視線を兵士に戻す。

「他にも何でも話すから！帝国のも何でも！だから、だから・・・」
必死に命乞いをする兵士。そんな兵士に飛羽真が問いかけた。

「じゃあ、この質問に答えてみる。今のお前と同じように必死に命乞いをしてきた兎人族にお前らは何て答えた？」

「・・・へ？」

飛羽真の問いかけに兵士は呆然したのち、他の兵士と同じように、恵理に眉間を撃ち抜かれ、絶命した。

「これが答えだよ」

息を飲む兎人族達。あまりに容赦のない行動に完全に引いているようである。その瞳には若干の恐怖が宿っていた。

「あ、あのさっきの人は見逃してあげても良かったのでは・・・」

それは飛羽真達に声をかけたシアも例外ではなくおずおずと尋ねた。

「・・・1度、剣を抜いた者が、結果、相手のほうが強かったからと言って見逃してもらおうなんて都合がよすぎ」

「そ、それは・・・」

「・・・そもそも、守られているだけの貴方達がそんな目をハジメ達に向けるのはお門違い」

「・・・」

ユエは静かに怒っているようだ。守られておきながらハジメ達に向ける視線の負の感情を宿すなど許さないと言わんばかりである。

「ふむ、飛羽真殿、ハジメ殿、恵理殿、申し訳ない。別に、貴方達に含むところがあるわけではないのだ。ただ、こういう争いに我らは慣れておらるのでな・・・少々、驚いただけなのだ」

「ハジメさん、飛羽真さん、恵理さん、すいません」

シアとカムが代表して3人に謝罪する。3人は気にしてないという様に手を振った。すると、飛羽真は無傷で手に入った馬車や馬を

見ていう。

「せっかくだ有効活用させてもらうか」

束に頼んで馬車を車を連結させて貰うと。馬に乗る物と馬車に乗る物に別れて貰い、一行は樹海へと進路をとった。因みに帝国兵の死体は飛羽真とゼシカ、シュテルの火魔法で焼却し、残った骨はゼストの土魔法で地面に穴を開けて、そこに埋めた。

第26話

ライセンス大渓谷から脱出し、待ち構えていた30人の帝国兵を殺害した後、飛羽真達はハルツィナ樹海へと進路を取った。ハジメが運転するバイクを先頭に飛羽真達が乗る車。その車に牽引される大型馬車2台と数十頭の馬がそれなりに早いペースで平原を進んでいた。

「……」

「キュル〜」

飛羽真が車内に設置されたソファアーベッドに寝っ転がりながら外の景色を見てみるとシユテルに預けていたピナが飛羽真のもとへと飛んでき、腹部に降りると体を丸めて眠り始めた。

「ピナ、返り血を浴びていないとはいえ今の俺は斬った帝国兵の血の匂いが染みついてるから臭いぞ？寝るならシユテルかゼシカのところ……って、もう寝てるし」

数秒も断たずに眠り始めたピナを起こさないよう優しくその体を撫でる飛羽真。そんな飛羽真に、

「とーくん、何でハーちゃんと2人だけで戦ったの？」

先の帝国兵との戦いについて束が尋ねた。

「ハジメのほうは多分実験と自分を好いてくれる中村とユエの2人を犯すって言葉にキレて絶対に自分の手で始末するとでも考えたんじゃないか？」

「じゃあ、飛羽真は？」

「言動と強者なのをいい事に傲慢な振る舞いにむかついたから。後は……」

「……後は？」

「……ハジメと同じ理由で俺の大事な皆を目の前で犯すっていったから、身の程を分からせてやったまでだ」

「とーくん！」

3つ目の理由が嬉しかったのか束が飛羽真に抱き着いた。他の3

人も嬉しかったのか頬を赤くする。

「(南雲君もそうだが、後ろから刺されない事を祈ろう)」

「キュルラー!!」

「ごめんピナちゃん!謝るから許し……にや~~~~!!」

それから数時間、平原を走り続けた一行は遂に目的地であるハルツィナ樹海と平原の境界に到着した。

「ただの鬱蒼とした森にしか見えないな」

「だろうね。だが、一度中に入ると霧に覆われ感覚を狂わされ、気づけば森の外に出ていた、なんてこともあるぐらい厄介な森さ」

遠目ではなく、近くで樹海を見たハジメが感想を漏らすとオスカーが森の実態を告げた。

「……何で束はボロボロなの?」

「色々あつてね〜。それより戻ってきたみたいだよ?」

ユエの問いを曖昧な返答で答えた束は物は試しと数分前に森に足を踏み入れ、戻ってきた飛羽真を指さす。

「どうだった?」

「駄目だ。森に入って最初の数分は普通に進めてたんだが、霧が濃くなっていくにつれ感覚が起こしくなっていくって気が付けば目印を付けた木の場所に戻ってた」

飛羽真はお手上げだという風に両手を上げる。

「それと、予想してた通り、樹海は大迷宮とは関係ない。歩いてる途中、何度か魔物に襲われたが、はつきり言って弱かった」

「んじゃあ、予想通り大迷宮の入り口は……」

「カムが言っていた『大樹』にあると思う」

飛羽真とハジメは当初、「ハルツィナ樹海」そのものが大迷宮のかと思っていたが、それだと新のオルクス大迷宮の魔物と同レベルの魔物が彷徨っている魔境ということになり、とても亜人族が住めるような場所でないだろうと思った。なのでオルクス大迷宮と同じでどこか

に本当の大迷宮へと続く入口があると推測した。

「飛羽真殿、ハジメ殿、そろそろ宜しいでしょうか?」

「ああ、すまない。出発しよう」

「では、中に入ったら決して我々から離れないで下さい。万一はぐれると厄介ですから。それと、行き先は森の深部、大樹の下で宜しいですか?」

「ああ」

言葉を聞くとカムは周囲の兎人族に合図をして飛羽真達の周りを固めた。

「皆様、出来る限り気配を消してもらえますかな。大樹は神聖な場所とされておりますから、あまり近づくものはおりませんが、特別禁止されているわけでもないので、フェアベルゲンや、他の集落の者達と遭遇してしまうかもしれません。我々は、お尋ね者なので見つかる厄介です」

「解った」

カムの言葉を聞き、ハジメと恵理は「気配遮断」を使い、他の者はそれぞれの方法で気配を薄くした。

「っ!?これは・・・また・・・ハジメ殿、恵理殿、出来れば他の皆様と同じくらいにしてもらえますか?」

「ん」

「えっと、このぐらいかな?」

「はい、結構です。さっきのレベルで気配を殺されては、我々でも見失いかねませんから。いや、全く、流石ですな!」

「・・・当然」

カムは、人間族でありながら自分達、兎人族の唯一の強みを凌駕され、もはや苦笑いし、ユエは自慢げに胸を張っている。

「それでは、行きましようか」

カムの号令と共に準備を整えた一行は、カムとシアを先頭に樹海へと踏み込んだ。

道ならぬ道を突き進むと、直に濃い霧が発生し視界を塞いでくる。しかし、カムの足取りに迷いは全くなかった。現在位置も方角も完全

に把握しているようだ。

「(亜人族のみが進むことのできる森・か。オルクさん、何でそういう仕組みになってるんですか?)」

「(僕たちがまだ生きていた時代。この森は教会に攻められていたんだ。1人でも多くの同胞を守るために、1人でも多くの兵士を倒せるようにとこの森の女王が張った魔法だよ)」

「(その想いは、何百年経とうとも途切れることなく子孫を守っている・・・つか)」

オスカーから何故霧が出るのか、その理由を聞いた飛羽真はオスカーの仲間の想いの強さに心の中で拍手した。

順調に進んでいたのもつかの間、突然カム達が立ち止まり、周囲を警戒し始めた。魔物の気配だ。当然、飛羽真達も感知している。樹海に入るにあたって、貸し与えたナイフを構える兎人族達。本来なら、その優秀な隠密能力で逃走を図るのだそうだが、今回はそういうわけにはいかない。皆、一様に緊張の表情を浮かべている。

「.....」

その様子を見たハジメは肩をすくめると、パワードスーツの左腕のみを展開する。そして、左手を素早く水平に振るった。すると、微妙に何かを射出する音が連続で響く。直後、

「「キィィィ!?!」」

何かが倒れる音と、悲鳴が聞こえてきた。そして、慌てたように霧をかき分けて、腕を4本生やした体長60cm程の猿が3匹踊りかかってきた。

「「風刃」」

その内の1匹に向けてユエが手をかざし、囁くように魔法名を呟くと、風の刃が高速で飛び出し、空中にいる猿を上下に分断した。

残りの2匹は地面に足をつけると2手に分かれ、1匹は近くの子供に、もう1匹はシアに向かって鋭い爪の生えた4本の腕を振るおうとする。シアも子供も、突然のことに思わず硬直し身動きが取れない。咄嗟に、近くの大人が庇おうとするが、猿たちの動きはピタリと止まると、仰向けになって地面に倒れた。

「?」

訳が分からずに警戒を維持したまま一人の兎人族が猿に近寄ると、猿の頭部に兎人族達が持っているナイフに似た刃物が深く突き刺さっていた。

「視界が悪いのによくあてれたな?」

「勘(と、大賢者の言葉)に従っただけだ」

ハジメはそれを行った人物、飛羽真に声をかけた。

「あ、ありがとうございます飛羽真さん」

「お兄ちゃん、ありがとう!」

シアと子供(男の子)が窮地を救われ礼を言う。飛羽真は笑みを浮かべながら子供の頭を軽く叩いた。男の子の飛羽真を見る目はキラキラだ。反対にシアは、突然の危機に硬直するしかなかった自分がガツクリと肩を落とした。

その様子に、カムは苦笑いするも、ハジメから促されて、先導を再開した。

その後も、ちよくちよく魔物に襲われたが、飛羽真達が静かに片付けていく。樹海の魔物は、一般的には相当厄介なものとして認識されているのだが、真のオルクス大迷宮を攻略した飛羽真達にとっては雑魚に等しく、何の問題もなく討伐していった。

しかし、樹海に入って数時間が過ぎた頃、今までにない無数の気配に囲まれ、飛羽真達は歩みを止めた。数も殺気も、連携の練度も、今までの魔物とは比べ物にならない。カム達は忙しなくウサミミを動かして索敵をしている。

そして、何かを掴んだのか苦虫を噛み潰したような表情を見せた。シアに至っては、その顔を青褪めさせている。

「厄介なのが来たみたいだな」

その表情で何に囲まれているのかを察した飛羽真は溜息を吐いた。その相手の正体は・・・

「お前達・・・何故人間という!種族と族名を名乗れ!」

虎模様の耳と尻尾を付けた、筋骨隆々の亜人だった。

第27話

大迷宮の入口があると思われる大樹へと向かう飛羽真達とハウリア族の周囲を虎の亜人族が包囲する。彼等の手には拔身の剣が握られており、いつでも攻撃できるよう身構えている。

「あ、あの私達は……」

カムが何とか誤魔化そうと額に冷や汗を流しながら弁明を試みるが、その前に虎の亜人の視線がシアを捉え、その目が大きく見開かれた。

「白い髪の兎人族だと……？……貴様ら……報告にあつたハウリア族か……亜人族の面汚し共め！長年、同胞を騙し続け、忌み子を匿うだけではなく、今度は人間族を招き入れるとは！反逆罪だ！もはや弁明など聞く必要もない！全員この場で処刑する！総員かっ！」
虎の亜人が問答無用で攻撃命令を下そうとした瞬間、銃声と共に二条の閃光が彼の頬を掠めて背後の樹を抉り飛ばし樹海の奥へと消えていった。

「……」

理解不能な攻撃に凍り付く虎の亜人とその部下達。そこに、気負った様子もないのに途轍もない圧力を伴ったハジメと恵理の声が響いた。

「今の攻撃は、刹那の間に数十発単位で連射できる」

「周りにいる人達の場所も距離も全て把握してるよ。貴方達がいる場所は、僕達のキルゾーンだよ」

「な、なっ……詠唱がっ……」

「まあ、当然の反応だな」

「(詠唱も無しで魔法と同等かそれ以上の攻撃が放たれるですから、当然と言えば当然の反応ですね)」

「(しかも他の仲間の居場所もバレバレだって言われれば吃りもするわね)」

自然な動作で抜いた銃をとある方向に向けるハジメを見て言った

言葉がハツタリではないと知り吃る虎の亜人。

「殺るといふのなら容赦はしない。約束が果たされるまで、此奴らの命は俺が、俺達が保証しているからな……ただの1人でも生き残れると思うなよ?」

「(冗談だろ!こんな、こんなものが人間だというのか!?まるつきり化物じゃないか!?)」

威圧に加え、殺意も加わる。あまりに濃厚なそれを真正面から叩きつけられている虎の亜人は冷や汗を大量に流す。恐怖心に負けないよう内心で盛大に喚く。

「だが、この場を引くというのなら追いもしない。敵でないなら殺す理由もないからな。さあ、選べ。敵対して無意味に全滅するか、大人しく家に帰るか」

銃を構えたまま、言葉を続けるハジメ。

「やめんか」

そんなハジメの頭を飛羽真は鞘に納めた刀で叩いた。

『つ!』

あまりに命知らずな行動に恵理等を除いた全員が目をこれでもかと見開いてみる。

「……なにすんだよ飛羽真?」

『何すんだ』つじやねえよ。威嚇をするなどは言わないが限度を考える限度を。気絶させて先を行けばいいっていうのに、無駄に威圧してさらに殺意を乗せちゃったからこの樹海に住んでいる他の亜人族の連中に俺達のことばれちゃったよ」

「今のでか?」

「動物っていうのは、俺達人間に比べてそういうのに敏感なんだ。だからこそ大自然の中で生きていけるんだよ」

それは世界を揺るがすほどの戦争に参加し、生き抜いてきた飛羽真だから解ること。実際、*“波”*と呼ばれる現象が起こる間際、それを察知した動物が逃げたり隠れていたりするのを何度か目撃したのだ。

「すまない隊長さん。だが、こいつがさつき言った通り、この森を案内してもらおう代わりに命を助けるっていう契約を結んでいる以上、

殺させるわけにはいかないんだ。ハジメの威圧と殺気で実力差は分かったんだろう？分かったうえで、俺達を殺そうって言うのなら……容赦なく斬り捨てる」

「!!？」

飛羽真はハジメの殺気も混ざった威圧にも負けないほどの殺気を隊長格の虎の亜人にのみ放つ。

「……その前に、一つ聞きたい」

「どうぞ」

「……何の目的でこの樹海へと来た」

虎の亜人の質問は端的だった。

「(返答次第ではここを死地と定めて身命を賭す覚悟があるっていう顔だね)」

「(そうっすね)」

虎の亜人の不退転の意思がこもった眼にオスカーと飛羽真は感心する。

「樹海の深部、大樹の下へ行きたい」

「大樹の下へ……だと？何の為に？」

予想外の返答に虎の亜人は目を丸くする。亜人を奴隷にするため等という自分達を害する目的なのかと思っていたからだ。

「そこに、本当の大迷宮の入口があるかもしれないからだ。俺達は七大迷宮の攻略を目指して旅をしている。ハウリアは案内の為に雇ったんだ」

「本当の迷宮？何を言っている？七大迷宮とは、この樹海そのものだ。一度踏み込んだが最後、亜人以外は決して進むことも帰る事も叶わない天然の迷宮だ」

「それはないな」

「何？」

虎の亜人の言葉を飛羽真が否定した。

「大勢で入る前に俺だけこの樹海に足を踏み入れたが、方向感覚をくるわされ、気が付けば森の入り口に戻っていた。それに……」

「大迷宮というには、この魔物は弱すぎる」

飛羽真が言おうとしたことをハジメが引きついで答えた。

「弱い？」

「そうだ。大迷宮の魔物つてのは、どいつもこいつも化物揃いだ。少なくとも『オルクス大迷宮』はそうだった。それに……」

「なんだ？」

「大迷宮は『解放者』と呼ばれる者達が考えた試練だ。亜人族は簡単に深部へと行ける。もしこの樹海そのものが大迷宮というのなら試練としては簡単すぎるんだ」

「……」

ハジメと飛羽真の話聞き終った虎の亜人は困惑を隠せないでいた。2人の言っていることが分からないからだ。普段なら『戯言』と切って捨てていただろう。だが、圧倒的優位に立っている飛羽真達の言葉を虎の亜人は否定することが出来なかった。

「……お前達が国や同胞に危害を加えないというのなら、大樹の下へ行くくらいは構わないと、俺は判断する。部下の命を無意味に散らすわけには行かないからな」

本当に亜人やフェアベルゲンには興味がなく大樹自体が目的なら、さっさと目的を果たさせて立ち去ってもらうほうがいい。そこまで瞬時に判断する虎の亜人。その言葉に、周囲の亜人達が動揺する気配が広がった。侵入してきた人間族を見逃すという異例の行動をとったのだから当然と言えば当然だ。

「だが、一警備隊長の私如きが独断で下していい判断ではない。本国に指示を仰ぐ。お前達の話も、長老方なら知っている方もおられるかもしれない。お前達に、本当に含むところがないというのなら、伝令を見逃し、私達とこの場で待機してもらいたい」

ゆえに虎の亜人は提案を飛羽真達に持ちかけた。

「(どう思う、飛羽真?)」

「(あっちからすれば限界ギリギリの譲歩つて所だろうな。周りにいる連中の慌てようから察するに樹海に侵入した者は問答無用で殺してたんだろう。内心は、俺達を殺したくて仕方ないが、そうすれば間違いなく返り討ちにあつて全滅。それを避け、かつ、俺達という危

険を野放しにしないためのギリギリの提案つてところだろうな。こ
こはあつちの提案を受けよう」

「(解った) いいだろう、さっきの言葉、曲解せずにちゃんと伝えろ
よ?」

「無論だ。ザム!聞こえていたな!長老方に余さず伝えろ!」

「了解!」

虎の亜人の言葉と共に、1つの気配が遠ざかっていった。それを確
認したハジメは銃をホルスターに納め、〃威圧〃を解いた。重苦し
かった空気が一気に弛緩する。あつさりと警戒を解いた飛羽真達に
虎の亜人は訝しい眼差しを向け、中には臨戦態勢に入っている亜人も
いたが

「……」

無言で刀を抜いた飛羽真が斬撃を飛ばし、木を斬り捨てる。

「今のはわざと外したが……次は当てる」

「……全員、武器を納めろ。これは命令だ!」

虎の亜人の一言で臨戦態勢に入っていた亜人達は渋々、武器を納め
た。

「……今のはこちらに非があるので何も言わないが、次は動かさせ
てもらおう」

「解つてるよ」

飛羽真は刀を鞘に納めると、ボールからピナを呼び出し、量子ボツ
クス内にいれていた卵を取り出すと、〃元気で生まれてきてくれ〃と
いう思いを込めながら撫で始めた。

暫くの間、重苦しい雰囲気周囲を満たしていたが、じつとしてい
ることに飽きたのか恵理とユエがハジメに構つて欲しいとちよつか
いを出し始めたのを区切りに少しずつ、場の雰囲気が変わっていき、敵
地のど真ん中で、いちやつき始めたハジメに呆れの視線が突き刺さつ
た。

「マイペースな奴らだな」

「キュル」

「とーくんもはーくんのこと言えないけどね〜」

人前だろうといちやつくハジメに飛羽真は呆れるが、束が飛羽真もハジメと同じだという。飛羽真の背にもたれかかって本を読むシュテル、飛羽真の膝を枕にして寝つ転がる束、飛羽真の右腕に背を預けシュテルと同じように本を読むゼシカ、飛羽真から1歩離れたところで立って控えているゼスト。自分も構って欲しいとアピールするシア。ハジメのようにいちやついていないが他者から見れば4人の女性をはべらかしている男に見えること間違いないだろう。

「げせぬ。そして目の前をウロチョロするな。ウザウザギ」

「へぶ!?」

ハジメ以上に突き刺さってくる視線に飛羽真が納得できずにいたが、目の前をウロチョロするシアが鬱陶しく感じ、ゴムボールを取り出して思いつ切り投げた。すると、急速にこちらへと近づいてきている気配を痛みで悶えているシア以外の面々が感じ取った。

霧の奥から、数人の亜人達が現われた。目を引くのは中央にいる初老の男。

「ふむ、お前さん等が問題の人間族かね? 名を何という?」

「八神飛羽真だ」

「ゼシカ・アルバートよ」

「シュテル・スタークスです」

「私はね、篠ノ之束だよ」

「オルクだ」

「……中村恵理」

「ハジメ、南雲ハジメだ。あんたは?」

ハジメの言葉遣いに周りにいる亜人が騒ぎ立て、憤りを見せたが、男はそれを片手で制した。

「私は、アルフレリック・ハイピスト。フェアベルゲンの長老の座を一つ預からせてもらっている。さて、お前さん等の要求は聞いているのだが……その前に聞かせてもらいたい……『解放者』という名を何処で知った?」

自己紹介を済ませるとアルフレリックと名乗った亜人が飛羽真達に質問をする。

「うん？オルクス大迷宮の奈落の底、解放者の1人、オスカー・オルクスの隠れ家だ」

目的などではなく。解放者の単語に興味を示したアルフレリックの問いに訝しみながらハジメが返答した。

「ふむ、奈落の底か……聞いたことがないが……それを証明できるものはなにかあるか？」

「「「「「「……」」」」」」

証明できるかと問われ、事情を知らないハウリア族を除いた全員の視線が蘇生したオスカーの下へと行く。その視線の意味を理解したオスカーだったが、自分がオスカーだといったところで信じてもらえないはずがない。

「南雲君。彼に隠れ家で手に入れた指輪を見せてあげてくれ」

「指輪を？」

オスカーに言われ、ハジメは言われた通り指輪を見せた。指輪に刻まれている紋章を見たアルフレリックは目を見開いた。そして、気持ちを落ち付かせるようにゆっくりと息を吐いた。

「なるほど……確かに、お前さん等はオスカー・オルクスの隠れ家に辿り着いたようだ。他にも色々気になるところはあるが……よろう。取り合えずフェアベルゲンに来るがいい。私の名で滞在を許そう。ああ、勿論ハウリアも一緒にな」

アルフレリックの言葉にこの場にいる全亜人族が驚く。かつて、フェアベルゲンに人間族が招かれた事など無かったのだから。虎の亜人を筆頭に猛烈に抗議の声が上がると。

「彼等は客人として扱わねばならん。その資格を持つているのである。それが、長老の座に就いた者にのみ伝えられている掟の1つなのだ」

「待て！何勝手に俺達の予定を決めてるんだ？俺達は大樹に用があるのであって、フェアベルゲンに興味はない。問題ないなら、このまま大樹に向かわせてもらおう」

「いや、お前さん。それは無理だ」

「無理？それはどういう意味だ？まさか、追放された亜人は行くことが出来ないのか？」

大樹の下へ行くのは無理だと言われたので飛羽真はその理由をアルフレリツクに尋ねる。

「いや、追放されてようともこの樹海で育った亜人ならば大樹へと行ける。だが、大樹の周辺は特に霧が濃くてな、亜人族でも方角を見失うのだ。一定期間で、霧が弱まるから、大樹の下へ行くにはその時でなければならん。次に行けるようになるのは10日後だ。・・・亜人族なら誰でも知っているはずだが・・・今すぐ行つてどうする気だ？」

アルフレリツクから聞かされた事実には飛羽真達はポカンとした後、カムを見た。見ればアルフレリツクもカムを見ていた。そのカムはと言えば、

「あつ」

まさに、今思い出したという表情をしていた。

「カム？」

「あ、いや、その何と言いますか・・・ほら、色々ありましたから、つい忘れていたといいますか・・・私も小さい時に行つたことがあるだけで、周期のことは意識してなかったといいますか・・・」

額に青筋を浮かべ自分を見るハジメにカムはしどろもどろになつて必死に言い訳をするが、全員からのジト目に耐えられなくなり、

「ええい！シア、それにお前達も！何故、途中で教えてくれなかったのだ！お前達も周期のことは知っているだろう！」

逆ギレしだした。

「なっ!?父様、逆ギレですか!?私は、父様が自信たっぷりに請け負うから、てつきり周期だったのかと思つて・・・つまり、父様が悪いです！」

「そうですよ、僕達も『あれ？おかしいな？』とは思つたけど、族長があまりに自信たっぷりだったから、僕達の勘違いかなつて・・・」

「族長、何かやたら張り切つてたから・・・」

逆ギレしたカムにシアが更に逆ギレし、他の兎人族達も目をそらし

ながら、さり気なくカムに責任を擦り付ける。

「……飛羽真」

「やっていいぞ」

このパーティーのリーダー（渋々）である飛羽真にユエが声をかける。何のために自分に声をかけたのか理由を察した飛羽真は許可を出す。許可を得たユエは互いに責任を擦り付けているハウリア族に近づくと、

「〴〵嵐帝〴〵」

風魔法を発動し、ハウリア達を天高く舞いあげた。

同胞が攻撃を受けたというのに、アルフレリックを含む周囲の亜人達の表情に敵意はなかった。むしろ、呆れた表情で天を仰いでいた。

第28話

ハウリア族への制裁を終えた飛羽真達はギルと呼ばれる虎の亜人の先導で濃霧の中を進む。行き先は亜人族が暮らす町、フェアベルゲン。

「(かれこれ1時間は歩いてるな。伝えに行つた亜人は相当な俊足だったみたいだな)」

しばらく歩いていてると、突如として霧が晴れた場所へと出た。晴れたと言っても全ての霧がなくなったわけではなく、まっすぐな一本道が出来ただけで、霧で出来たトンネルだ。

「ん?」

不思議がり、周りを見ていたハジメは道の端に誘導灯のように青い光を放つ拳大の結晶が地面に半分埋め込まれていたことに気づく。

「あれは、フェアドレイン水晶と言うものだ。あれの周囲には何故か霧や魔物が寄り付かない。フェアベルゲンも近辺の集落も、この水晶で囲んでいる。まあ、魔物の方は“比較的”という程度だが」

「四六時中霧の中じゃ気も滅入るもんね」

「・・・ん」

話を聞いていた恵理が納得したように頷き、ユエもどことなく嬉しそうにしていた。

そうこうしている内にフェアベルゲンへと入ることのできる門の前へと到着した。ギルが門番と思しき亜人に合図を送ると、重そうな音を立てながら門が僅かに開いた。周囲の樹の上から飛羽真達に視線が突き刺さる。

「(何で人間が招かれているのかって視線だな。あのアルフレリックと呼ばれた長老がいなければ確実に一悶着あつたな)」

突き刺さる視線と長老自ら出てきた理由を何となく察しながら門をくぐる飛羽真。そして、門をくぐつた先で見たのは芸術だった。直系数十メートル級の巨大な樹が乱立し、その樹の中に住居があるようで、ランプの灯りが樹の幹に空いた窓と思しき場所から溢れていた。

神の事を聞かされたのに顔色一つ変えなかったアルフレリックにそのことを問うと今の言葉が返ってきた。聖教協会の権威もないこの場所では信仰心などあるわけがなく、あるとすれば自然への感謝の念のみだとのこと。

「では、私が知っていることを話そう」

飛羽真達の話聞き終えたアルフレリックはフェアベルゲンの長老の座に就いた者にのみ伝えられる掟の話をし始めた。

いわく、この樹海の地に七大迷宮を示す紋章を持つ者が現われたらそれがどのような者であれ敵対しないこと。そして、その者を気に入ったのなら望む場所に連れて行くことという何とも抽象的な口伝だった。

「この樹海にある大迷宮の創始者であるリューティス・ハルツィナは自分が『解放者』という存在であることは伝えていたがそれが何なのかを教えるはいなかったそうじゃ」

「まあ、賢明な判断だろうな。もし教えていたら、この樹海は神や狂信者達によつて燃やされ、試練どころじゃなくなるからな」

「うむ、お主たちの話を聞き、何故教えなかったのか私も理解した所だ。話を続けるぞ、彼女は自身のことと仲間の名前を共に教え、掟としたのじゃ。その掟はこの地に住んでいた一族が延々と伝えられ、フェアベルゲンが出来た後もずっと伝えられているのだ」

「最初の敵対せずって言うのは・・・」

「大迷宮の試練を超えた者の実力が途轍もないことを知っているからこそその忠告じゃろう」

「俺達が資格を持つているというのは何で分かったんだ？」

「お主たちが目指そうとしていた大樹の根元には七つの紋章が刻まれた石碑があるのじゃ。その指輪の紋章はその石碑に刻まれたものと同じ、だからこそ掟に従いお主たちをこの国に招き入れたのだ」

「成程」

話を聞き終え、何故自分達を亜人族の本拠地に招き入れた理由を理解した飛羽真達。今後の話を使用した矢先、階下が騒がしくなった事に気づいた。

飛羽真達が今いる場所は最上階にあたり、階下にはシア達ハウリア族が待機している。騒ぎの原因が何なのかを理解した一行は同時に立ち上がり、階下へと赴く。

階下に着くと、熊、虎、狐、鳥、ドワーフの亜人達が剣呑な眼差しでハウリア族を睨みつけていた。

「アルフレリック・・・貴様、どういうつもりだ。何故人間を招き入れた？こいつら兎人族もだ。忌み子にこの地を踏ませるなど・・・返答によつては、長老会議にて貴様に処分を下すことになるぞ」

部屋に入ると熊の亜人が拳を振るわせながら尋ねる。やはり、亜人族にとって人間族は不？戴天の敵なのだろう。しかも、忌み子であるシアと彼女を匿った罪があるハウリア族まで招き入れたのだ。熊の亜人だけでなく他の亜人達もアルフレリックを睨んでいる。

「何、口伝に従ったままだ。お前達も各種族の長老の座にあるのだ。事情は理解できるはずだが？」

しかし、アルフレリックはどこ吹く風といった様子で答えた。

「何が口伝だ！そんなもの眉唾物ではないか！フェアベルゲン建国以来一度も実行されたことなどないではないか！」

「だから、今回が最初になるのだろう。それだけのことだ。お前達も長老なら口伝に従え。それが掟だ。我ら長老の座にあるものが掟を軽視してどうする」

「なら、こんな人間族の小僧共が資格者だとも言うのか！敵対してはならない強者だと！」

「そうだ」

あくまで淡々と返すアルフレリック。熊の亜人は信じられないという表情でアルフレリックを、そして飛羽真達を睨む。

「・・・ならば、今、この場で確かめてやろう!!」

そう言うと、いきり立った熊の亜人がハジメに向かって突進する。あまりに突然のことでアルフレリックを含む周囲は反応できていない。一瞬で間合いを詰め、身長2？半はある脂肪と筋肉の塊のような男の豪腕が、ハジメに向かって振り下ろされた。

シア達ハウリア族と傍らのユエ、飛羽真達以外の亜人達は皆一様に

肉塊になるハジメを幻視してしまった。だが、次の瞬間には、有りえない光景に凍り付いた。

「なん・・・だと」

「・・・随分と温い拳だな」

衝撃音と共に振り下ろされた拳は、パワードスーツの左腕のみ展開したハジメにあっさりとは掴まれ、止められてしまったのだ。

「殺意を持って攻撃してきたんだ。覚悟は出来てるだろうな？」

「ぐう！離せ！」

展開した左腕を魔力で操作し、少しづつ握力を高めながら淡々と言うハジメ。一方、熊の亜人は危機感を覚え、必死に伸ばした腕を引き戻し、距離を取ろうともがくが、ハジメはビクともしていない。

「・・・」

ハジメは無言で更に魔力を左腕に注ぎ、握力を一気に高めた瞬間。熊の亜人の腕から鳴ってはいけない破壊音が鳴り、部屋全体に鳴り響いた。

「っ!？」

痛みと驚愕に硬直している熊の亜人の隙を見逃すハジメではない。掴んでいた拳を離すと、空手の正拳突きのように引き絞り後ずさる熊の亜人の懐へ一気に踏み込む。

「ぶっ飛べ」

とある魔物の固有魔法「豪腕」を発動しながら左腕で突きを放つ。それと同時に、肘の部分から衝撃が発生し、飛び出した葉莢が宙を舞う。強力な力が宿った拳がさらに加速し、破壊力を増大させる。絶大な威力を込められた拳が遠慮容赦なく熊の亜人の腹に突き刺さろうとした瞬間、2人の間に1つの影が入り込み、ハジメの拳を受け止めた。その場に衝撃波が発生し、何人かの亜人が吹き飛んだ。

「何の真似だ・・・飛羽真？」

ハジメは自分の拳を受け止めた人物、飛羽真に怒気を含んだ声で尋ねる。

「いくら殺意を向けられたとはいえやりすぎだ。俺達は話し合いに来たのであって亜人達と戦うために来たんじゃないんだぞ？」

飛羽真は溜息を吐きながら答えた。

「き、貴様」

「助けてやったつてのにまだ上から目線か？俺が間に入ってなかったらお前は間違いなく死んでたんだぞ」

力の差を身をもって解らせたというのに牙を向こうとする熊の亜人に飛羽真は心の底から呆れる。

「そんなことはない！人間の拳を喰らって死ぬことなど・・・」

「はあ~~~~」

熊の亜人の態度にあきれ果てた飛羽真は何を思ったのか、刀に手を添え、少しだけ刀身を鞘から出す。

「無の呼吸 雷の型 稲魂」

ほんの少し出していた刀を鞘に納め、鏗なり音が鳴ると、熊の亜人の周りに5つの斬撃痕が刻まれた。

「っ!？」

一瞬で自分の周りに刻み込まれた斬撃痕に熊の亜人は目を見開いた。

「俺達が本当に伝えられていた敵対してはならない強者なのか知りたかったんだろう？さつきハジメに返り討ちにあいそうになり、今の攻撃に反応も出来なかった。これでもまだ、足りないっていうんなら・・・今ここでアルフレリックを除いた、他の奴等の首を切り落として証明してやろうか？」

『っ!？』

敵対するのであれば待っているのは“死”。それを解りやすく伝えるために飛羽真はアルフレリックを含めた全ての長老に向け殺気を放ち、死のイメージを見せた。

その後、熊の亜人の怪我の治療を終えてから飛羽真達は長老たちと今後のことを話し合った。結果から言えば追放されたハウリア族は飛羽真達の身内とみなされ、敵対はしないがフェアベルゲンや周辺の集落への立ち入りを禁ずる。以降、飛羽真達一行に手を出した亜人がいた場合、全て自己責任という風に決まり、飛羽真達はハウリア達を連れて早々にフェアベルゲンを後にした。

第29話

「お前等には戦闘訓練を受けてもらう」

フェアベルゲンを去り、大樹の近くに簡易の拠点を作り、一息着いた後、飛羽真がハウリア族全員に向けて言う。まあ、拠点と言ってもハジメとオスカーがさり気なく盗んできたフェアドレン水晶を使って結界を張っただけなのだが。

「え、えつと、・・・飛羽真さん、戦闘訓練というのは・・・？」

「文字通りそのままの意味だ。どうせ10日間は大樹へは辿り着けないんだ。ならその間を有効活用し、お前達、ハウリア族を鍛えあげることにした」

「な、なぜそのようなことを？」

ハウリアを代表してシアが尋ねるとハジメの据わった目と全身から迸る威圧感にハウリア達は震える。

「何故？何故と聞いたか？残念ウサギ？」

「あう、まだ名前で呼んで貰えない・・・」

シアの問いにハジメが威圧しながら答える。

「いちいち威圧するなハジメ。話がちつとも進まんだろうが」

「・・・なら、後は任せた」

「任せるなら最初から出しゃばるな。俺達がお前達と交わした約束は案内が終るまで守るというものだ。じゃあ、案内が終ったあとは？それをお前達は考えているのか？」

ハジメに話させると一向に進まないと思ったのか飛羽真が続きを話す。

「その表情を見るに考えてなかったんだろうな。まあ、考えたところで答えなんて出ないしな」

「お前達は弱く、悪意や害意に対しては逃げるか隠れる事しかできない。そんなお前らはフェアベルゲンという隠れ家すら失った。つまり、俺達の庇護を失った瞬間、再び窮地に陥るといっわけだ」

飛羽真の言葉にハウリア族達は皆一様に暗い表情で俯く。飛羽真

の言う通りだからだ。

「貴方たちに逃げ場はない。隠れ家も庇護もない。だけど、魔物も人もそんなことは知らないとばかりに弱い貴方たちを狙ってくる」

「このままじゃ、全滅は必定・・・それでいいのか？弱さを理由に淘汰されることを許容できるのか？運よく拾った命を散らすのか？どうなんだ？」

「そんなものいいわけがない」

恵理と飛羽真の問いに重苦しい空気が辺りを満たすが、誰かが零した一言に触発されたのかハウリア族が顔を上げた。

「その通り、いい訳がない。なら、どうするか？答えは簡単だ、強くなるしかない。自分を大切な者達をその手で守れるぐらいに」

「・・・ですが、私達は兎人族です。虎人族や熊人族のような強靱な肉体も翼人族や土人族のような特殊な技能も持っていません。・・・とても・・・そんな」

自分達は兎人族は弱い。その常識が否定的な気持ちを生む。どんなに足掻いても自分達では飛羽真の言うように強くなかなれないと思っっているからだ。

「・・・俺はかつての仲間達から『無能』と呼ばれていた」

すると、話を飛羽真達に任せていたハジメが静かに語り出した。

「・・・え？」

「『無能』だ『無能』。ステータスも技能も平凡極まりない一般人。仲間内の最弱。戦闘では足手纏い以外の何者でもない。故にかつての仲間達は俺を『無能』と呼んでいたんだよ。実際その通りだったからな」

ハジメの告白にハウリア族は例外なく驚愕を顕わにした。凶悪なライセンス大渓谷の魔物を苦も無く一蹴したハジメが『無能』で『最弱』など信じられなかったからだ。

「だが、そんな俺を飛羽真や恵理、ごく一部の仲間は見捨てず強くなるよう付き合ってくれた。特に飛羽真は当時の俺にしかできないことを教えてくれた。そのかいあって、『最強』とまではいかないが、条件次第では一蹴出来るまでには強くなれた。そして、俺がここ

までの強くなれたのは奈落に落ちてからだ。奈落へと落ちた俺は強くなるために行動した。『出来るか』、『出来ないか』そんなことは頭にはなかった。出来なければ自分も一緒に巻き込まれた恵理も『死ぬ』・・・そう思っていたからな。その瀬戸際で自分の全てを賭けて戦った。そして、気が付けばこの有様さ』

淡々と語られた内容、しかし、ハウリア族にとっては壮絶な内容だった。

「お前達の状況は、かつての俺と似ている。約束の内にある今なら、絶望を打ち砕く手助けぐらいは出来る」

「自分達には無理だっていうならそれでも構わないよ。でも、その時は今度こそ確実に全滅する。私達は約束が果たされた後まで助けるつもりは毛頭ないからね?」

「・・・それで、どうする?」

ハジメの問いにハウリア族達は直には答えられなかった。自分達が生き残るには言う通り強くなる以外方法がないことは解っている。解ってはいるのだが、温厚で平和的、心根が優しく争いが何よりも苦手な兎人族にとつて、ハジメ達の提案はまさに未知の領域に踏み込むに等しい決断だった。

「やります。私に戦い方を教えてください!もう弱いままは嫌です!」

「わ、私も教えてください」

そんな彼らを尻目に、先程からずっと決然とした表情を浮かべていたシアともう1人の兎人族の少女が立ち上がって樹海の全てに響けと言わんばかりに叫んだ。

不退転の決意を瞳に宿したシアと震えながらも真っ直ぐに飛羽真を見る少女。その様子に啞然として見ていたカム達ハウリア族は、次第にその表情を決然としたものに変えて、1人、また1人と立ち上がっていく。そして、男だけでなく、女子供も含めてすべてのハウリア族が立ち上がったのを確認するとカムが代表して一歩前へ進み出した。

「皆さま・・・よろしく頼みます」

いるのだが、

『ああ、どうか罪深き私を許してくれえ〜』

『ごめんなさい！ごめんなさい！それでも私はやるしかないのをお！』

つと、魔物を倒すたびに昼ドラさながらのドラマが繰り広げられているのだ。

「「「「「「「「「「」」」」」」」」

「そろそろハジメの堪忍袋の緒が切れそうな気が・・・あ！ついに切れた」

映像の向こうではとうとうハジメがキレ、周りにある花などを容赦なく散らしていき、更には、言うてはいけない単語を復唱しながらハウリア達を追い詰めていく。

「「「「「「「「」」」」」」」

3人はこれ以上見ていると頭がおかしくなりそうな気がしたのでハジメの訓練の様子を映している映像のみ切った。

「・・・俺、ハジメの後であいつ等（ハウリア）を鍛えるの嫌になってきた」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」

「いや、変りすぎだろう」

ハジメの訓練が終わり、とうとう飛羽真がハウリア達を鍛える日がやってきた。気が乗らない飛羽真を余所に、まるで軍人のように姿勢をただし、整列するハウリア達。数日前までのおどおどしていた面影はなく歴戦の戦士のような面構えに飛羽真はそれしか言えなかった。

「訓練を始める前にお前達がどれだけ成長したのかを見せてくれ。そうだな・・・各自魔物を10体倒してこい」

「「「「「「「「「」」」」」」」」

飛羽真の指示を聞くとハウリア達は忍者の如く散らばっていった。そして、15分後、ハウリア達は飛羽真のノルマを見事こなし戻って

きた、のだが、

「数が多くないか？」

飛羽真がハウリア達に命じたのは各自10体の魔物を倒してくること。なのに、彼らが持ち帰ってきた戦利品は明らかに10体以上はあつたからだ。

「生意気にも殺意を向けてきやがったので丁重にお出迎えしたんです。なあ？皆？」

不敵な笑みを浮かべながらカムが後ろにいる皆に尋ねると全員がカムと同じような笑顔で頷いた。

「(はあくく恨むぞハジメ)」

飛羽真はハウリア達をここまで豹変させたハジメを恨み。彼等の訓練を行いつつ、変ってしまった精神を出来る限り元に戻すことを決めた。

「お前達の力は大体わかった。それではこれより訓練を開始する。お前達には俺が習得した武術、《変幻無双流》を覚えてもらう。この武術は弱者が理不尽な強さを持つ強者を倒す為に生まれたものだ」

「弱者が強者を、我々にぴったりな武術ですね」

飛羽真の話聞きカムは自分達が覚えるのにぴったりなものだと歓喜する。

「この武術を覚えるに至って重要なことが1つある。それは《気》を扱えなければならないということだ」

「《気》でありますか？」

聞き覚えのない単語にハウリア達は首を傾げる。

「《気》とはすべての生命が持ち、発するエネルギーの事だ。俺達人間は勿論、亜人であるお前達、周りにある草や木、花、大気といったものが発している。才のある者でも見えるようになるまで時間がかかるが、お前達なら直に、とは言えないが習得するのにそう時間は掛からないと俺は思っている」

「どういうことですか？」

「常に自然と共に生きてきたお前達なら：な。それでは訓練を始める」

こうして飛羽真によるハウリア魔改造＋性格の修正が始まった。

第30話

「いや〜〜本当に数日で“氣”を習得するとはなあ〜〜」
「教えたお前が驚いてるんじゃないよ!」

飛羽真の発言に隣にいたハジメがツッコミを入れた。

「師匠(せんせい)! いかがだったでしょうか」

「うむ、ばつちりだ! だが、お前達は入口に立ったに過ぎない。今後
も精進するように」

「「「はいー」「」」」

飛羽真は砕かれた大岩や切り倒された又は折られた木を見て、全員
が氣を習得し、使いこなせるようになったことに満足し、精進するよ
うに言った。

「じゃあ、これから最終試験を始める。内容はこの樹海に存在する
上位の魔物を1チーム1体狩ってこい」

「は! 行くぞお前達!!」

「「「おおおお!!」「」」」

ハジメの指示を受けたカムは雄叫びを上げる同胞と共に森の奥へ
と消えていった。

「はあ〜〜完全とまでは行かないがなんとか修正することが出来
たか」

「飛羽真、その、何だ・・・迷惑かけたな」

「まったくくだ。あそこまでののに俺がどれだけ氣を使ったこと
か・・・こいつは貸しだからな」

「物凄い高い貸しになりそうだな」

「お前は後何個、俺に貸しを作るんだろうな?」

溜息を吐くハジメを飛羽真は悪代官のような笑みを浮かべた。す
ると、

「ん?」

「戻ってきたみたいだな」

別の場所で特訓を行っていたユエ達に戻ってきた。

「……そちらはまだ終わっていないのですか？」

「さつき、最終試験に行ったところだ。10分ぐらいで戻ってくる
と踏んでいる。そっちは終わったみたいだな？」

「ええ。それで報告したいことがあるの」

ゼシカがそう言うのと一歩横にずれ、シアと一緒に特訓を受けていた
ハウリア族の少女が1歩前に出る。

「君は確か……」

「テイ、テイリス・ハウリアです。えつと、その……」

「わ、私達も皆さんの旅に連れて行ってください！」

ハウリアの少女「テイリス・ハウリア」とシアは意を決すると頭を
下げながら自分達の思いを告げた。

「：成程、シユテル達に特訓の相手を頼んだのはこういうことだっ
たってわけか」

ゼシカ達、女性陣に直々に特訓を着けてほしいと頼みこんでいた時
点で何かあると思っていた飛羽真は2人の言葉を聞き、このためだっ
たのかと理解した。

「ついで？鍛えた本人たちの意見は？」

「そうですね、最初は無謀だと思いましたが、必死に訓練を受ける彼
女達を見て本気だと言うことが見て取れましたので、根を上げず最後
までやり遂げることと、私達個人から出す最終試験に突破すれば口添
えをしてあげると約束しました」

「結果、2人は最後まで根を上げることなく特訓をやり遂げ、私達が
出した試験も突破しました」

シユテルとゼストの発言に飛羽真は目を見開く。何故ならシユテ
ルの考えた特訓内容を記したメモをチラ見したからである。

「でも、魔力を直接操ることのできるシアは兎も角、そっちの子は身
体能力をいくら上げようと魔法が使えないんじゃない？」

「使えるようになりましたよ」

「……はっ！」

シユテルの言葉に飛羽真は間の抜けた声を上げる。

「使えるようになったって、亜人は魔法を使えないんじや」

「ええ。私もそう思っていました。シアのように突然変異でもしない限り。ですが、オルクさんに聞いたところ、彼のかつての仲間の1人である亜人族の女性はシアと同じで魔法が使えていたそうです。その話を聞き、私は1つの仮説を立てました。亜人族が魔法を使えないのは魔力をつかさどる器官、私で言う“リンカーコア”が目覚めていないからではないかと」

シユテルは自分が立てた仮説を飛羽真に説明する。

「もしそうだとしたらどうやって目覚めさせればいいのか？色々ありますが、一番簡単なのは外部から内部へと刺激を与えることです」

「外部から内部に？・・・まさか？魔法を当て続けたのか？」

「そんなことはしません。魔力を彼女の内部へと流し器官を目覚めさせたのです。勿論、テイリスの合意のもと行いました」

「結果、シユテルの仮説は正しかったってわけか」

「はい。シアのように直接魔力を操作することは出来ませんが、詠唱を行うことで魔法を使うことが出来ます」

「貴方とハジメ、オルクにアーティファクトを作って貰えば即戦力にはなれるはずよ」

「・・・」

ゼシカの言葉を聞き、飛羽真はしばし考えるとシアとテイリスに話しかける。

「シア、そして、テイリスって言ったな？2人の覚悟は解った。だが、何で俺達の旅に同行したいんだ？」

飛羽真は何故自分達の旅に同行したいのかを2人に尋ねる。

「そ、その・・・さんの・・・たちたいから？」

「何だって？」

「・・・と、飛羽真さんの役に立ちたいからです!!す、好きになつてしまったから／＼んです!!」

「・・・は？」

2人の告白に飛羽真は鳩が豆鉄砲でも喰らったかのようにポカン

となつてしまった。

「飛羽真のことを一目見た際に体に電流が走つたそうよ?」

「いわゆる一目ぼれというものですね」

「え〜〜」

まさかの理由に飛羽真は何と言えない表情になる。

「動機がなんであれ、それだけ彼女達が本気だということではないのでしょうか?」

「う〜〜ん…2人とも俺達の望みは故郷に帰ることともう一つ、とある奴を滅することだ。下手を討てば世界中の奴らに命を狙われることになる危険な旅だ。それでも、一緒に旅をしたいのか?」

「はい!」

「…はあ〜〜勝手にしろ。シユテル」

「何でしょうか?」

「特訓中に使わせていた武器は何だったんだ?」

「シアはハンマー、フィリスは長物ですね」

「長物…つてことは、槍、薙刀、三節棍辺りか?」

シユテルから特訓中に2人が使っていた武器を聞いた飛羽真はどの様な武器を作るか頭の中で案を考えながら歩いていると、ハジメが歩み寄ってきた。

「飛羽真、2人を連れて行くつて本気か?」

「本人たちの強い希望でな」

「大丈夫なのかよ?」

「シユテルを含む女性陣全員が大丈夫つて言うんだから大丈夫何じゃないか?」

話を聞いていたハジメが信じられないような目で言ってきたが、女性陣が認めたと言って納得させる。

「覚悟を決めた女つてのは強いからな。今は早急に2人の武器を作らないといけない」

「んじゃ俺は師匠と束さんを連れてくる。2人で考えるより4人で考えたほうが早く済むしな」

シアとテイリスの武器について話している2人の後ろではシアと

テイリスが手を握りあつて旅に着いて行けることを嬉しがっていた。だが、2人は知らない自分たち以外の家族が変貌を遂げていることを。そして、変貌した姿を見る時が着々と迫ってきていることを。

第31話

「やっぱり飛び道具は必要だろう。近接だけでやっていけるほど戦いは甘くねえ」

「いや、それは俺も分かるがいくら何でもミサイルはないだろう、ミサイルは」

旅についてくることとなったシアとフィリスの為に作る武器について互いに案を出し、談話する飛羽真とハジメ。考えた物を作り出せることが出来るようになってからロマン武器の開発に精を出すハジメと実用性を重視する飛羽真。

「そもそも、一度撃つたら使用出来なくなるって機能なんてあっても意味ないだろう」

「ああ!?!ロマンってのは無駄からしか生まれないんだよ!」

「駄目だ。この世界に来てから一度鳴りを潜めたハジメの厨二病が蘇っちまった。まあ、見た目からしても厨二病なんだが」

厨二病を再発させたハジメをどうしようかと悩んでいると複数の者達が茂みから飛び出ると飛羽真とハジメの前に片膝をつけて着地し、

「……ただいま戻りました、ボス、師匠」

揃って飛羽真達に頭を下げながら言った。

「ボ、ボス? 師、師匠? と、父様? それに皆も何だが口調が……と
いとか雰囲気か」

父親と他の皆の言動に戸惑うシアをさらりと無視してカム達は樹海に生息する上位の魔物の牙やら爪やらを取り出し、バラバラと地面に落としていく。

「……俺達は1体でいいと言ったと思うんだが?」

ハジメの問いにカム達は飛羽真が鍛える前に言ったのと同じ不穏な発言をする。飛羽真がなんとか修正したのだが、深いところまで刻み込まれていたようだった。

「・・・誰？」

物騒な報告をする、カム達をみてシアとテイリスはそれしか言うことが出来なかった。

「ど、どういうことですか!? ハジメさん、飛羽真さん！ 父様達に一体何が!？」

「ハジメのせいだ。割合で言うなら99, 9%」

「ほぼ100%じゃねえか！」

「間違えた・・・100%だった」

「言い直すな!!」

シアの追及に飛羽真は全てハジメが悪いと言うとハジメが喰っかかるがその通りのためツツコムことしかできない。

「すうくくはあくくく・・・別に、大して変わってないだろう？」

「貴方の目は節穴ですか!? 見て下さい！ 一部の人は筋肉隆々になって、素手で大岩を壊しているんですよ!？」

「それは飛羽真のせいだ」

「武人に目覚めただけだろう」

「飛羽真さんも関わってるんじゃないですか!? まあ、あれはいいでしょう。でも、あの人を見て下さい！ さつきからナイフを見つめたままウツトリしているじゃないですか! あっ! 今、ナイフに『ジュリア』って呼びかけた!? ナイフに名前つけて愛でてますよ!? 普通に怖いですく〜」

変わり果てた家族を指さしながら凄まじい勢いで事情説明をするようハジメと飛羽真に詰め寄るシア。ハジメはというと、どことなく気まずそうに視線を逸らしながらのらりくらりと尋問を躲し、飛羽真は『我関せず』といった態度を取っている。ファイリスはというと親のあまりの変わりようにシヨックを受け気絶してしまった。

らちが明かないと判断したシアは矛先をカム達に向ける。

「父様！それに皆も！一体何があったのです!?まるで別人ではないですか！さつきから口を開けば恐ろしい事ばかり・・・正気に戻ってください！」

「何を言っているんだ、シア？私達は正気だ。ただ、この世の真理に目覚めただけさ。ボスのおかげでな」

「し、真理？な、何ですか、それは？」

ギラついた表所を緩め前の温厚そうな表情に戻りながらも訳の分からないことをいうカムに頬を引きつかせながら尋ねたシアにカムは自信に満ちた様子で、

「この世の問題の9割は暴力で解決できる」

そう宣言した。

「やっぱり別人ですくく！優しかった父様は、もう死んでしまったんですく!?うわあくくん!!」

シヨツクのあまりシアは泣きべそを掻きながら踵を返し樹海の中に消えて行こうとするが、霧に紛れる寸前で小さな影とぶつかってしまった。

「はうう!?!」

「・・・気が動転してたとはいえ咄嗟にバランスを整えることも出来ないなんて情けない」

情けない声を上げながら尻もちをついたシアにユエは溜息をつく。シアと違いバランスを整え転倒せず持ちこたえた小さな影は倒れたシアに手を差し出した。

「あ、ありがとうございます」

「いや、気にしないでくれ、シアの姐御。男として当然のことをしたまでさ」

「あ、姐御?」

呼び方に戸惑うシアを無視して小さな影の正体であるハウリア族の少年はハジメと飛羽真の前まで歩み寄ると、惚れ惚れするような敬礼を行う。

「ボス！師匠！手ぶらで失礼します！報告と上申したいことがあります

ます！発言の許可を！」

「（もう完璧に軍人だな）」

「お、おう？何だ？」

歴戦の軍人もかくやという雰囲気、飛羽真は溜息をつき、やりすぎたかもしれないと若干どもるハジメ。そんな2人の心情などお構いなしに少年は報告を続ける。

「は！課題の魔物を追跡中、完全武装した熊人族の集団を発見しました。場所は大樹へのルート。おそらく我々に対する待ち伏せかと愚考します！」

「・・・やっぱり来たか。俺は即効でくるかと思ってたんだが」

「目的を目の前にして叩き潰そうって腹だな。いい性格してるじゃねえか」

少年の報告を聞き、やっと来たのかという表所をする飛羽真とハジメ。

「・・・で？」

「は！宜しければ奴等の相手は我らハウリアにお任せ願えませんでしょうか！」

「うーん。カムはどうだ？こいつはこう言ってるけど？」

「お任せいただけるのであれば是非。我らの力、奴らに何処まで通じるのか・・・試してみたく思います。なくにそうそう無様な姿は見せやしませんよ」

話を振られたカムは不敵な笑みを浮かべながら頷く。そして、カムの言葉に周囲のハウリア族が全員同じように好戦的な表情を浮かべた。

「・・・出来るんだな？」

「肯定であります！」

最後の確認をするハジメに報告に来た少年が元気よく返事をした。目を閉じ、深呼吸するハジメを見て嫌な予感があったのか飛羽真は両手で耳をふさいだ。

「聞け！ハウリア族諸君！勇猛果敢な戦士諸君！今日を以てお前達は糞蛆虫を卒業する！お前達はもう淘汰されるだけの無価値な存在

ではない！力を以て理不尽を粉碎し、知恵を以て敵意を捻じ伏せる！最高の戦士だ！私念に駆られ状況判断も出来ない。『ピー』な熊共にそれを教えてやれ！奴等とはや唯の踏み台に過ぎん！唯の『ピー』野郎どもだ！奴等の屍山血河を築き、その上に証を立ててやれ！生誕の証だ！ハウリア族が生まれ変わった事をこの樹海の全てに証明してやれ！」

「[[[[[Sir, yes, sir!!]]]]」

「答えろ諸君！最強最高の戦士諸君！お前達の望みは何だ!!」

「[[[[[殺せ！殺せ！殺せ！]]]]」

「お前達の特技は何だ！」

「[[[[[殺せ！殺せ！殺せ！]]]]」

「敵はどうする！」

「[[[[[殺せ！殺せ！殺せ！]]]]」

「そうだ！殺せ！お前達にはそれが出来る！自らの手で生存の権利を獲得しろ！」

「[[[[[Aye, aye, sir!!]]]]」

「いい気迫だ！ハウリア族諸君！俺からの命令は唯一つ！サーチ&デストロイ！行け！」

「[[[[[Y A H A A A A A A A A A!!]]]]」

「4日に及ぶ俺の努力は何だったんだ？」

「うわあ〜ん！やっぱり私の家族は皆死んでしまったです〜」

ハジメの号令に凄まじい気迫を以て返し、霧の中に消えていくハウリア族。一瞬で特訓をつける前に戻ってしまった彼らに飛羽真は黄昏、シアは変わり果てた家族を再度目のあたりにし、崩れ落ちた。

「.....」

「飛羽真？どうしたん...だ!？」

無言でハジメに近づいた肩を掴んだ飛羽真はおもいつきりハジメの腹部を殴った。

「な、何しやがる!？」

「何しやがるだど？それはごつちのセリフだお前があんなことを言うから元のあいつらに戻っちまったじゃねえか」

「・・・あ」

何も言わず自分を殴った飛羽真に怒鳴るハジメだったが、飛羽真の話を聞き、自分が何をしたのかを思い出す。

「これからお前をボコボコにするがいいよな？ 答えは聞いてない！」

「じゃあ、聞くな・・・ぎゃあああああああ!？」

樹海にハジメの悲鳴が響き渡った。尚、ハジメloveなユエは愛しいハジメを殴り続ける飛羽真を止めようとするが、恵理や他の女性陣、オスカーにそれを止められ、泣き続けるシアを慰めることにした。

第32話

「滅兔（めつと）拳」

「がああああ!?!」

「「「族長!?!」」」

大岩をも砕くカムの渾身の拳を受けた熊人族の長であるジン・バン
トンは樹とぶつかりめりこんでしまった。それを見た他の熊人達は
長であるジンがやられたこととそれをやったのが最弱と言われてい
た兎人であることから2重の意味で驚いていた。

「なんなんだこれは・・・一体どうなってるんだ!?!」

ジンと共にハウリアや飛羽真達を殺そうとやってきた次期族長と
噂の高い熊人「レギン・バントン」は次々と蹂躪される仲間を見て絶
叫を上げる。それもそうだろうなせなら、

「ほらほらほら! 気合い入れろや! 刻んじまうぞ!」

「アハハハハ、豚のように悲鳴を上げなさい!」

「汚物は消毒だ! ヒヤハハハハ!」

亜人族の中でも底辺、脆弱という評価を受けていた兎人族が、最強
種の一角に数えられる程戦闘に長けていた熊人族を蹂躪していると
いう有り得ない光景が広がっているからだ。

「ちくしょう! 何なんだよ! 誰だよ、お前等!?!」

「こんなの兎人族じゃないだろう!?!」

「うわああああ!?! 来るな!?! 来るなああああ!?!」

致命的な斬撃が無数に振るわれ、何処からともなく飛来する正確無比
な矢や石、認識を狂わせる巧みな気配の断ち方、高度な連携。そして
何より狂的な表情と哄笑! その全てが激しい動揺を生み、スベックで
上回っているはずの熊人族に窮地を与えていた。

「レギン殿! 族長を連れて撤退を!」

「だが!?!」

「このままでは全滅です。殿は私が務めまうクペ!?!」

「トント!?!」

一時撤退を進言してくる仲間には、族長であるジンを倒され、他の仲間まで殺られて腸が煮えくり返ってやることから逡巡するレギン。その判断の遅さを自称ハウリアーのスナイパー「必滅」のバルドフェルドが逃すわけなく、撤退を申し出、殿を申し出たトントと呼ばれた熊人のこめかみを矢で貫いた。

動揺し陣形が乱れたのを好機とみたカム達が一斉に襲い掛かかる。暫くの間、抗戦を続けたものの混乱から立ち直る前に満身創痕となり武器を支えに何とか立っている状態だ。抗戦を続けながらなんとか気を失ったジンを回収したレギン達だったが、連携と絶妙な援護攻撃に休む間もなく、全員が肩で息をしている。そんなレギン達を大木の後ろにまで追い込み、取り囲むカム達。

「どうした。ピー」野郎共！この程度か！この根性無しが！

「最強種が聞いて呆れるぞ！この。ピー」共が！それでも。ピー」
付いてるのか！

「さっさと武器を構えろ！貴様ら足腰の弱った。ピー」か！

「「（ほんとに此奴らに何があつたんだ!?）」」

兎人族とは思えない罵倒に戦慄の表情を浮かべる熊人族達。中には既に心が折られた者もいたのか頭を抱えて震えている者もいた。

「クッククック、何か言い残すことはあるかね？最強種殿？」

「ぬぐう」

あくどい表情を浮かべ、皮肉な言葉を投げかけるカムにレギンは苦虫を噛みつぶしたような表情を浮かべる。しばしの間考えこむと、

「・・・俺はどうなつてもいい。煮るなり焼くなり好きにしろ。だが、仲間と族長は見逃して欲しい」

「なっ!?レギン殿!？」

「レギン殿！それは・・・」

レギンの発言に生き残った熊人族達がざわつき始めた。レギンは自分の命と引き換えに生き残った仲間とジンの存命を図ろうとしたのだ。その時、

「レギン、その必要は・・・ない」

「「「族長!？」」」

気を失っていたジンが目を覚まし、待ったをかけた。

「・・・頭に血が上り目を曇らせ、多くの同胞を失うことになったのは私の責任だ。兎人・・・いや、ハウリア族の長殿。勝手は重々承知している。私の命を渡す。だから・・・どうか、生き残ったこの者達の命だけは助けて欲しい！この通りだ」

跪いてカムに頭を下げるジン。最強種と呼ばれていた誇りを捨て、自分達を存命させるために頭を下げたジンにレギン達は何も言うことが出来なかった。

「だが断る」

頭を下げ続けるジンにカム達ハウリア族の出した答えは「否」だった。カムは拒否の言葉と共にナイフをジンに投擲する。

「族長！」

後ろに控えていたレギンがジンの身体を咄嗟に後ろに引つ張り殺されることはなかったが、カムの投擲を合図に間合いの外から一斉に矢や石等が高速で撃ち放たれる。

「何故だ!?!」

呻くように声を搾り出し、問答無用の攻撃の理由を問うジン。

「何故? 貴様らは敵であろう? 殺すことにそれ以上の理由が必要か?」

「ぐ、だが!」

「それに何より・・・貴様等の傲慢を打ち砕き、甦るのは楽しいのであるあ! はははは!」

「な!?! おのれ!?! こんな奴等に!」

初めての人族、それも同胞たる亜人族を殺したことで心のタガが外れてしまい、暴走状態になってしまったカム達ハウリア族。ジン達は身を寄せ合い陣を組んで必死に耐えるが攻撃は少しづつ苛烈差を増していく。

「(致命傷は何か避けているが全員満身創痕。次の掃射は・・・)」

「(っと思っているだろうな、奴は)」

ジンが考えていることをカムも感じ取っていた。そして瀕死の熊人族に止めを刺すため、カムは口元を歪めながら腕を掲げる。狂的な

眼で矢や石をつがえるハウリア達。ジンはここが死に場所かと無念を感じながら体の力を抜く。そして、心の中で扇動してしまった部下達に謝罪をする。

カムの腕がジン達の命を狩り取る死神の鎌の如く振り下ろされると同時に一斉に放たれる矢と石。スローモーションで迫りくるそれらをジンとレギンは「せめて目を逸らしてなる物か」と見つめる。そして、

「いい加減に・・・しなさいっ！！」

巨大な丸太と風を纏った棍が全てを吹き飛ばす光景を目のあたりにした。

「・・・は？」

思わず間拔けな声を出してしまうジンとレギン。何せ、死を覚悟した直後、忌み子と罵った青白い髪の少女と薄紫髪の少女が丸太と棍と共に天より降ってきた挙句、それらを地面に叩きつけ、その際に発生した衝撃波で矢や石をまとめて吹き飛ばしたのだから無理もないだろう。

「もう！本当にもうっですよ！父様も皆も、いい加減正気に戻ってください！」

「シア、それにフィリス、何のつもりか知らんが・・・そこを退きなさい。後ろの奴等を殺せないだろう？」

「いいえ退きません族長。これ以上は駄目です」

驚愕で硬直していたカム達だったが、我を取り戻すと責めるような眼差しを2人に向けながら退くよう言うが、フィリスの返答に目を細める。

「ダメ？まさかシア、フィリス、我らの敵に与するつもりか？返答によつては・・・」

「いえ、この人達は別に死んでも構わないです」

「いいいのかよ?」

2人の答えに虐殺を止めに来てくれたのかと思っていた熊人族達は、2人の言葉に思わずツツコミをいれた。

「当たり前です。殺意を向けて来る相手に手心を加えるなんてこと

をしたら逆にこっちがやられてしまいました」

「ふむ、では何故我々を止めたのだ？」

「そんなの決まっています！父様達が壊れてしまうからです！墮ちてしまうからです！」

「壊れる？墜ちる？」

シアの返答に訳が分からないという表情をするカム達。

「そうです！」

「思い出してください。飛羽真さん達は敵には容赦しません。ですが、魔物でも人でも殺しを楽しんだ事はなかつたはずですよ。訓練でも敵は殺せと言われても楽しめとは言われなかつたはずですよ！」

「い、いや、我等は楽しんでなど……」

「……(思いつ切りのしんでただろうが!!)……」

フィリスの発言にカムは否定するが、熊人族は心の中で肯定していた。

「今、父様達がどんな顔をしているか解りますか？」

「顔？いや、どんなと言われても……」

「……まるで、私達を襲ってきた帝国兵みたいです」

シアの言葉に互いの顔を見合わせるカム達。そんなカム達にシアとフィリスは一呼吸置くと、静かな、しかし、よく通る声ではつきりとカム達が今、どんな表情をしているのかを告げた。

「っ!？」

衝撃だった。宿った狂気が吹き飛ぶほどに。自分達の家族の大半を嘲笑と愉悦交じりに奪った者達と同じ表情。その光景を実際に目の当たりにして来たからこそ、その醜さが分かる。

「シ、シア、フィリス、私は……私達は……」

「……少しは落ち着いたみたいだな」

動揺しているカム達に霧の向こうから現われた飛羽真が安堵する。

「し、師匠」

「戦いを教えた者よりも家族の言葉が一番効くからな。まあ、取り合えず……お前ら全員、歯を食いしばれ」

その言葉と共に飛羽真は三節棍を取り出すと、振り回してシアと

ファイリス以外のハウリア全員を殴り飛ばした。

「し、師匠」

「・・・俺がお前達に教えた変幻無双流の理念を言え」

「は？」

「聞こえなかったのか？変幻無双流の理念を言えと言ったんだ！」

「「じゃ、弱者が理不尽な強さを持つ強者を倒すために生まれた流派です!!」」

飛羽真の怒号に地に伏していたハウリア全員は飛び起きると姿勢を正し、大声で告げた。

「そうだ。俺は身を守るためにお前達に変幻無双流で重要な気の扱い方を教えた。決して殺しを楽しませるために教えたわけじゃない」
「まあ、その原因を作ったのはハジメさん何ですよねえ。まったく、戦える精神にするというのは解りますが、あんなのはやりすぎですよ！戦士どころかバーサーカーの育成じゃないですか！」

カム達を豹変させた原因を作ったハジメに対し怒るシア。ハジメに文句を垂れるシアは無視して飛羽真は三節棍を構え、跳躍すると、
「どさくさに紛れて何逃げようとしてんだコラ？」

こっそりと逃げ出そうとしていたジン達に向けて振り下ろした。振り下ろされた棍の先端はジンの顔面すれすれで通り過ぎて地面に当たり、小さなクレーターが出来上がる。

「話が終るまで正座して待ってろ」

「「・・・」」

飛羽真の言葉を受けても尚、逃げ出そうと周囲の様子を確認している熊人族に飛羽真は一人だけ残して他は気を失わせたほうが早いと思いい、行動を起こそうとした。その時、

「「っ!?!」」

熊人族が体を震わせる。

「飛羽真が言ってたよな？話が終わるまで正座して待ってろって？最強種である熊人族は言われたことも満足にできないのか？ああ？」
霧の奥から銃を構えたハジメが「威圧」を発動しながら現われた。

「ボ、ボス?!なぜそんなにボロボロなのですか!？」

カム達はハジメの姿を見て目を見開く。それもそうだろう自分達が主と仰ぐハジメがボロボロになっただけだからだ。

「……気にするな」

「し、しかし」

「気・に・す・る・な」

「は、はい」

気まずそうに視線を彷徨わせていたハジメだったが、飛羽真に睨まれ観念したようにカム達に向き直り、

「あゝゝ、まあ、その、何だ、悪かったな。自分が平気だったもんですっかり殺人衝動つてのを失念していた。完璧に俺のミスだ。すまなかつた」

謝罪の言葉を口にした。

「ボ、ボス!? 正気ですか!? 頭打ったんじゃ!」

「メデイーク! メデイーク! 重傷者1名!」

「ボス! しっかりして下さい!」

ハジメが素直に謝罪の言葉を口にしたことに口を開けて目を点にするシカム達。だが、返ってきた反応にハジメは青筋を浮かべ、口元をヒクつかせる。今回のことは流石のハジメも本心から自分のミスだと理解しており、謝罪の言葉を口にしたというのに、

「(こいつらは)」

返ってきた反応は正気を疑われるというものだった。

「つま、常日頃から『殺す』って言っていた罰があたってたってことだな。さてと……」

キレるべきか、日頃の態度を振り返るべきか迷っているハジメを飛羽真は諦めると肩に手を置いて言う。そして、ちゃんと正座して待っているジンの元へ歩み寄ると、刀を抜刀し、首元に刃を添える。

「分かっていると思うがお前達の生殺の与奪は俺達が握ってる。普通なら容赦なく斬るところなんだが、特別に選ばせてやるよ。潔く死ぬのと、生き恥を晒して生き残るの、どっちがいい? それと、2つ以外の答えを選ぶようであれば容赦なく……斬る!」

言っていることが冗談ではない事を教えるために威圧しながら言

う飛羽真。

「冗談・・・ではなさそうだな」

「生憎、こういうことで冗談は言わない主義だ。望むのであれば帰ってもいい。但し、条件付きでだけどな」

「条件？」

「何、そんなに難しい事じゃない。帰ったら他の長老衆にこう言つて欲しいだけだ」

条件という言葉にジンや他の熊人族は戦々恐々になるが、飛羽真の出した条件に目を見開いた。

「『フェアベルゲンに対して貸し1つ』、『熊人族に対して貸し1つ』、『計2つの貸し』だとな」

「っ!? 貴様! それは!?!」

「で? どうする? 引き受けるか? 引き受けないか? 俺達も暇じゃないんでな出来れば早く決めてほしいんだが?」

言伝の内容の意味を察したジンは怒鳴りそうになる。そんなジンとは裏腹に飛羽真はどこ吹く風でジンの選択を待っている。どうすべきかジンが思い悩んでいると、

「それと、追い打ちをかけるようだが、アンタの部下の死の責任はアンタ自身にあることもしっかり周知しておけよ? 最弱種と呼んでいた兎人族に惨敗した事実と一緒にな」

「ぐう!?!」

「5秒やる。5秒経っても決まらないのであれ、気は乗らないが1人づつこれで殴る」

飛羽真はしまつていた三節棍を取り出し、少し離れた場所に向け振り下ろして地面を砕き、その威力を再度、熊人族に見せる。

「わ、分かった、我らは帰還を望む!」

「・・・そうか。お帰りはあつちだ」

ジンの回答を聞いた飛羽真は首元に添えていた刀を鞘に納めると、帰り口を指さした。

「ああ、そうそう、伝言は間違つたり、嘘は言わないで置けよ? もし、間違つたことを言つたり、約束を違えるような時は・・・容赦なくお

前達（フエアベルゲン）を斬る」

飛羽真の体から剣気と殺気が混じり合った威圧に熊人族は体を震わせ、何度も頷いた。それを見た飛羽真は威圧を解くと、もう話すことはないのかハジメ達の元に歩いて行った。のだが、

「取り合えず、全員一発殴らせろ！」

蜘蛛の子を散らすように一斉に逃げ出すハウリア族と、お尻を突き出し、体を震わせるシア。そして、般若の形相で逃げるハウリア達を追うハジメ。

「・・・一体、何があつた？」

状況が分からず混乱する飛羽真をよそに、怒号と悲鳴が響き渡っていった。

第33話

「『4つの証』と『再生の力』、『紡がれた絆の道標』か」
飛羽真は大樹で得た情報を思い出す。

「『4つの証』とは大迷宮攻略の証。『再生』とは神代魔法の1つ。『紡がれし絆』とは亜人族との関係であることは間違いないでしょう。石碑の裏に記されていた3つの条件の内、1つは達成されています」

「長い旅になりそうね」

「でも、東さんとしては嬉しいかな。色々な所をまわれるもん」

「急がば回れ。まずはライセン大渓谷の何処かにある大迷宮の入口を探し出して攻略することだな」

当面の目的を決めた飛羽真達は金銭や食料といった必要なものを揃える為に大渓谷の近くにある町を目指して平原を疾走している。

「……」

「いつまでしょぼくれてるんだシア」

「だ、だって、一緒に行こうってフィリスちゃんと約束……」

「そのフィリスが自分で『残る』って決めたんだ。他人がどうこう言ったってしょうがないだろう?」

一緒に飛羽真達の旅に行こうと約束していたフィリスが豹変してしまった皆を放っておくことが出来ないことと、再び暴走した時に1人だけでも止めることが出来る者がいたほうがいいと思えば森に残ると言ったのだ。

「ううう……恨みますよハジメさん」

「そんな調子では飛羽真の横に立つことなんて永遠に不可能ですよ。それどころかフィリスに先を越されるかもしれないですね」

「ど、どうしてですか?」

フィリスに越されると聞いてシアがシユテルに尋ねる。

「森を出る際、彼女にいない間の訓練メニューを考えてほしいと頼まれました。再会した時、飛羽真の横に立てるようにと」

「フィリスちゃん。．．．．っ！」

シユテルからの話を聞いたシアは気合いを入れなおすために両ほほを強く叩いた。そんなシアを見て笑みを浮かべると飛羽真達は中断していた話を再開した。

そして、話を終えるのを見計らってシアがおずおずと飛羽真に尋ねる

「あ、あの飛羽真さん。な、何で首輪を嵌めないといけないんですか？これじゃあまるで．．．」

「奴隷みたいだっけ？他の人間達にそう思わせるために着けるんだよ」

「奴隷でもない亜人族、それも愛玩用として人気の高い兎人族が町を普通に歩けば10分も経たずに目を付けられ、人攫いの嵐になります」

「そういった面倒ごとを避けるには俺の奴隷だっけことを示して置いたほうがいいんだ。首輪って言っても拘束する力は備わっていない。あくまで俺の奴隷だっけ言う証明の為の首輪だから自由に取り外せる。少し窮屈かもしれないが町とか人目が多い場所では出来るだけ首輪を付けておいてくれ」

「．．．分かりました」

飛羽真とシユテルからの説明を受けたシアは渋々しながら頷いて答えた。すると、疾走していた大型車の動きが停止する。

「町のほうから視認できるギリギリの所まで来た。ここからは徒歩で町に向かおう。このまま行ってしまうと騒ぎになってしまうからね」

「確かに」

オスカーの言葉に頷いた飛羽真達は車から降りる。外に出るとハジメ達もバイクから降り、*“宝物庫”* にバイクをしまっていた。全員が車から降りたのを確認した飛羽真は車を量子ボックス内にしまい、徒歩で町へと向かう。町の入り口までやって来ると、

「止まってくれ。ステータスプレートを。後、町に来た目的を教えてください」

門の脇にあった小屋から武装した男が出てきて、ステータスプレート
の提示と町に来た目的を聞いてきた。

「お仕事お疲れ様です。この町には食料の補給の目的で来ました」
飛羽真は門番の質問に答えながらステータスプレートを取り出し
て渡した。ハジメも飛羽真と同じようにステータスプレートを取り
出し、門番に渡す。

「ありがとう。次の者、プレートの提出を・・・」

飛羽真とハジメのプレートを確認した終えた門番はプレートの提
出を求めようとゼシカ達に視線を向け、硬直した。そして、みるみる
と顔を真っ赤に染め上げ、ゼシカ達を見る。

「(当然と言えば当然の反応だな)」

「おほん」

門番の反応に苦笑いする飛羽真をよそにハジメがわざとらしく咳
払いをする。それにハツつとなって慌てて視線を飛羽真とハジメに
戻す門番。

「実はここに来る道中、魔物に襲われてしまって俺とコイツ、あの子
以外は失くしてしまっただけです。んで、こっちの兎人族は・・・分
かりますよね？」

飛羽真のその言葉に門番は納得したのか、恵理にプレートの提出を
求める。恵理からプレートを受け取った門番は、

「それにしても随分な綺麗所を手に入れたな。白髪の兎人族なんて
相当なレアなんじゃないか？あんたらって意外に金持ち？」

恵理にプレート返ししながら女性陣をチラチラと見る門番。羨望と
嫉妬が入り混じった表情で飛羽真とハジメ、オスカーに尋ねる門番。
その問いに3人は肩を竦めただけだった。

「まあいい。通っていいぞ」

「どうも。素材を換金したいんだが冒険者ギルドが何処にあるか教
えて貰えませんか？」

「ギルドだったら、中央の道を通り直ぐ行けばいい。店に直接持ち
込むのならギルドで聞くといい。簡単な町の地図をくれるはずだ」

「どうも」

門番に礼を言うと飛羽真達は門をくぐり町へと入っていく。

「へえ〜結構活気がある町だな」

「露店も結構出ているわね」

2ヶ月もの間、居住区があったとはいえ地下に籠っていた飛羽真にとつて聞こえてくる喧騒は新鮮にさえ思わさ、「さらに気分を高揚させるものだった。

「とーくん、とーくん。あそこのお店で売ってる食べ物おいしそうだよ。買って食べよう」

「食べたいのは山々だけど、まずはギルドに行つて、持っている素材を換金するのと泊まる宿を探すのが先ですよ」

「え〜〜！束さんは今食べたいんだけど」

「我慢してください」

「ぶ〜〜〜」

むくれる束をスルーして一行は門番から教わった通り、中央の道を進んでいくとこの世界で何度も見た看板を見つけると、迷わずに中に入つていった。

「イメージしてたのと全然違うな」

「どんなイメージしてたんだよ？」

「薄汚れた場所で昼間つから酒を飲んで騒がしくして、喧嘩が絶えないでいるイメージだな」

「私もそんな風に思ってた」

初めて冒険者ギルドに足を踏み入れたハジメと恵理は自分達が思っていたイメージと違うことに驚き、飛羽真は苦笑いしながら周囲の様子を見ると、施設内にいるほとんどの者の視線が女性陣に向かっている事に気づいた。感心の声を上げる者もいれば門番のように見惚れている者、更には女冒険者に殴られている者もいた。

「ちよっかいをかけてくる奴がいると思つたんだが、意外と理性的なんだな」

「観察してるんだよ。まあ、俺はちよっかいをかけられたけど」

飛羽真は王都のギルドに初めて行った時のことを思い出す。

「へえ〜〜〜っで？どうしたんだ？」

「ん？勿論ぶっ飛ばしたぜ」

ハジメの問いに答えると飛羽真はカウンターへと向かう。飛羽真に続くようにハジメもカウンターに向かう。カウンターには大変魅力的な……笑顔を浮かべたおばちゃんがいた。

「……………」

「両手に花を持っていないのに、まだ足りないのかい？残念だったね、美人の受付じゃなくて」

受付が美人だという幻想を抱いていたハジメはその現実には落胆する。そして、読唇術でも持っているのかおばちゃんはニコニコと好ききのする笑みで飛羽真達を迎えた。

「いや、そんなこと考えてないから」

「あははは、女の勘を舐めちやいけないよ？男の単純な中身何て簡単に分かつちまうんだからね。あんまり余所見ばつかして愛想付かされないようにね？」

「…………肝に免じておこう」

「(成程、ここにいる冒険者が大人しいのはこのおばちゃんが原因みたいだな)」

周りの冒険者の反応と表情を見て、この町のギルドが静かなのはカウンターにいるこのおばちゃんのおかげなのだと思いは理解した。

「さて、じゃあ改めて……冒険者ギルド『ブルック支部』によるこそ。ご用件は何かしら？」

「素材の買取をお願いしたいんですが」

「素材の買取だね。じゃあ、ステータスプレートを出してくれるかい？」

「ん？買取にステータスプレートの提示が必要なのか？」

ハジメの問いにおばちゃんが目を丸くする。

「そういえばハジメは知らなかったな。買取にステータスプレートは不要なんだが、冒険者と確認できれば1割増で売れるんだよ」

「そうだったのか」

「初めて知った」

飛羽真の説明にハジメと恵理が感心する。

「他にもギルドと提携している宿や店は1〜2割程度は割引してくれるし、移動馬車を利用するときも高ランクなら無料で使えたりするね。どうする？登録しておくかい？登録には千ルタが必要だよ」

「せっかくだから2人共登録しておけ」

飛羽真にそう言われ、ハジメと恵理は冒険者登録をすることを決めた。

「そつちの子もだけど男なら頑張つて黒を目指しなよ？お嬢さん達にカッコ悪い所見せないようにね」

「飛羽真にカッコ悪いところはあまりありませんので問題ないです」

「そうね」

「飛羽真様ならすぐにでも黒になれます」

「そうそう。何たってとーくんは最強だからね」

「愛されてるね〜」

「ははは。さつき言った通り買取をお願いしたいんですが」

「おつとそうだったね。それじゃあ素材を見せてくれるかい？」

「査定する人と呼ばなくていいんですか？」

「あたしは査定資格も持っているから問題ないよ」

「（優秀なおばちゃんだな）じゃあ、お願いします」

受付だけでなく買取品の査定までできるおばちゃんの優秀さに舌を巻きながら飛羽真は量子ボックスからバツクに入れ替えていた素材を取り出す。

「こ、これは!?!」

受け取り用の入れ物に次々と入れられていく素材を見ておばちゃんが驚愕の表情をする。

「とんでもない物を持ってきたねアンタ達。これは……樹海の魔物だね？」

「ええ」

素材を恐る恐る手に取り丹念に確かめ終えた後、おばちゃんは溜息を吐きながら飛羽真達を買取に出した素材の場所を言い当て尋ねる。その問いに飛羽真は正直に頷いて答えた。

「……ハジメ君、また変なこと考えていたでしょう？」

「……あんたも懲りないねえ」

テンプレ的な事を考えていたハジメに恵理が冷ややかな視線で尋ねる。女の勘で考えていたことが分かったのかおばちゃんも呆れた視線をハジメに向ける。

「何のことか分からないな」

「樹海の素材は良質なものが多いからね、売って貰えるのは助かるよ」

何事もなかったかのように話を続けるおばちゃんにハジメは感謝した。

「やっぱり珍しいんですか？」

「そりゃあねえ。樹海の中じや人間族は感覚を狂わさられるし、一度迷えば二度と出てこれないからハイリスク。好き好んで入る人はいないねえ。亜人の奴隷持ちが金稼ぎに入るけど、売るならもつと中央で売るさ。幾分か高く売れるし、名も上がりやすいからね」

そう言いながらおばちゃんはチラリとシアを見る。何かを察したのかおばちゃんはその後何も言わず残りの素材の査定を続け、査定を終えると飛羽真達に金額を提示した。

「買取額、48万7千ルタか」

「結構な額だね」

「中央ならもう少し高くなるだろうけど」

「いや、この額で構いません」

提示された金額に満足した飛羽真はおばちゃんから51枚のルタ通貨を受け取ると、袋に入れ懐にしまった。

「所で門番の人にこの町の簡易な地図を貰えるって聞いたんですが」

「ああ、ちよつと待つといで……ほら、これだよ。おすすめの宿や店も書いてあるから参考にしなさいな」

「おいおい、いいのか？こんな立派な地図を無料で？十分金が取れるレベルだと思うんだが」

「構わないよ、あたしが趣味で書いているだけだからね。書士の天

職を持つてるから、それくらい落書きみたいなもんよ」

「これは落書きっていうレベルじゃないだろう」

おばちゃんから手渡された地図は、精巧で有用な情報が簡潔に記載されていた。その地図を落書きだというおばちゃんに飛羽真達は啞然とし、おばちゃんが思っていた以上の人なのだと察した。

「そうか。まあ、助かるよ」

「いいってことさ。それより、金はあるんだから少しはいいところに泊まりなよ？ 治安が悪いわけじゃないけど、その7人なら関係なく暴走する男連中が出そうだからね」

「(最後まで気配りの聞くいおばちゃんだな) そうさせてもらいます」

おばちゃんにお礼を言うのと飛羽真達はギルドから出ていった。

「最初の宿もよかったけど、この宿もいいっすね」

「そうだね」

あの後、地図というよりもガイドブックと称すべきものを見て決めた宿に泊まろうとしたのだが、開いている部屋が2人部屋と3人部屋しかなく話し合いの末、ハジメ、恵理、ユエの3人がその宿に泊まり、飛羽真達はその宿と同じように防犯がしっかりしており風呂に入れる宿へと向かい宿泊することが出来た。

「(そう言えば、忙しくてガチャを回してなかったな)」

ふとガチャの事を思い出した飛羽真は携帯を取り出してガチャのアプリを起動する。券は20枚程溜まっていたので飛羽真はボタンを押してガチャを回す。そして出てきたのは、

― レジエンドライダーワンダーライドブックセット

― ヒューマギアの設計図

― 仙豆(一壺)

― 国産黒毛和牛2キロ

― スキル「自動回復」

― カレイジャスIIの設計図

―魔石（拳大）

―コットン生地

―ステータスアップの果実セット

―スキル 〃超回復〃

―（中々いいのが引けたな）

「今のが君が前に教えてくれたガチャというものかい？」

「ん？ええ。武器、食料、スキル等といったものを引くことが出来る能力です。運が高い程、レアなものが当たります。今回は豊作ですね」

飛羽真は景品を見ながら笑みを浮かべる。それは、

「（これがあれば自由に世界を渡れるな。戦力の増強、武装の強化。色んなことが出来る）」

〃“デイケイド異世界旅行記”と〃“デイケイド異世界旅行記NEO”〃。

第34話

ハルツィナ樹海を出てブルツクの町へと辿り着いた日の翌日。早く起床した飛羽真は暗黒剣月闇の能力を使ってオルクス大迷宮のオスカーの居住へとやって来た。

「さてつと。アイテム・ウィンド、オープン」

月闇を量子ボックス内へとしまおうとウィンドを投影し、スキル項目をタップ、人差し指でウィンドを操作して目当てのスキルを探す。

「あった、あった」

スキルを見つけた飛羽真はタップしてスキルの効果を確認する

―自動回復―

体力、魔力、傷等が自動で回復される

―超回復―

体力、魔力、自己治癒といった回復力が上昇する

―成長スキル「威圧」

対象に圧をかけ抑止させることが出来る。レベルが上がるごとに
修正される

追加効果 レベルが上がるごとに 体力+10 筋力+1 器用

+1

「昨日はワンダーライドブックにばかり目がいつていたが回復系のスキルと動けなくするスキルを引くことが出来たのは大きいな」

飛羽真は画面を操作して3つのスキルが納められた瓶をボックス内から取り出し、中身を飲む。

「確認するか」

ちゃんとスキルを習得できているのかを確認するため飛羽真はステータスプレートを取り出し、ステータスを確認しようとしたところ
でふと思ひ出す。

「そういえば、自分のステータスを見るの久しぶりな気がするな。
さてさてさくして、どうなってることやら」

八神飛羽真 17歳 男 レベル：???

天職：剣士、錬成師、召喚師 職業：冒険者 ランク：赤

筋力：18075 「スキル加算+2261」

体力：18575 「スキル加算+4910」

耐性：12525 「スキル加算+440」

俊敏：17950 「スキル加算+2063」

魔力：200000

魔耐：150600

技能：武芸百般「+習得速度上昇」「+攻撃速度上昇」・剣術LV100↓剣帝LV100↓剣神LV60「+斬撃速度上昇」「+抜刀速度上昇」・錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+イメージ補強量上昇」「+鉱物融合」「+圧縮錬成」「+高速錬成」・召喚・格闘術LV100↓武王LV100↓武神LV35「+部分強化」・魔力操作「+魔力放出」・闘気「+身体強化」「+変換回復」「+放出」・縮地「+無拍子」「+重縮地」・瞬発力LV100↓瞬身LV100↓瞬神LV15・直感LV100↓見透LV100↓予知LV1・鋭利LV100↓斬鉄LV100↓断空LV20・威圧LV1・自動回復・超回復・火属性適正「+付与」「+威力上昇」・風属性適正「+付与」「+雷属性」「+威力上昇」・闇属性適正「+付与」・気配感知・言語理解

「はあく〜とんどん人から離れていくな」

人外の領域に足を踏み入れている事実には飛羽真は愕然とする。

「さて、始めるか」

ここに来た目的を思い出した飛羽真は気を取り直し、量子ボックス内から2つのワンダラーライドブックを取り出し、その内の1つの起動する。

「エグゼイド医療日誌!」

「ステージセレクト!」

本に内包されている力が発動し、居住区が平原へと変わった。そして、もう一つのワンダラーライドブックを起動する。

「2011フォーゼオデッセイ」

「GAME START!」

音声と共に忍者のような恰好をした戦闘員「ダスタード」と歌舞伎の鏡獅子のような恰好をした強化戦闘員「レオ・ダスタード」が何

処からともなく現われた。

「わお」

飛羽真は戦闘員と強化戦闘員が出てきたことよりもその数に驚いていた。

「合わせて60ぐらいか？こりやあ最初から全開で行かないといけないな。・・・抜刀」

飛羽真は全集中の呼吸と共に習得した、反復動作を行う。これを行うことにより全ての感覚が一気に開き、集中力を一瞬で極限にまで高めることが出来るのだ。

「無の呼吸 風の型 塵旋風・削ぎ」

力強い踏み込みと共に飛羽真は横向きの竜巻と共に地面を抉りながらダスタードの軍勢に突進、数体を斬り刻み、背後へと回った。技を放った後の硬直を狙って数体のダスタードが襲い掛かってくるが、

「無の呼吸 霞の型 霞散の飛沫」

回転斬りでまとめて斬り払われた。

「っ・・・っ!？」

次のダスタードを倒すために動こうとした時、嫌な予感がした飛羽真はその場から離れる。その数秒後、飛羽真が立っていた場所が爆発した。

「おいおい、爆弾なんて当たっちゃったら死んじゃまうじやねえか」

爆弾を投げたダスタードを見て威圧して動きを阻害させようと試みたが、効果はなかった。そして、飛羽真が威圧している間にダスタード達は飛羽真を囲うと炸裂弾を手にし、飛羽真へと一斉に投げつける。

「ドライファ・フレアアクセル」

飛羽真が魔法を唱えると、踏み込みと同時に両足から炎が噴射。噴射した炎を推進力へと変え一瞬でダスタードとの距離を詰める。そして、

「無の呼吸 炎の型 不知火」

最小限の動きで力強く地を踏みしめた後、刀を横一閃し、ダスタードを数体纏めて斬り払った。

「二応、呼吸剣術はほぼ全部使えるようになったが、やっぱり一番しつくりくるのは炎の型だな」

『解。恐らくマスターに一番適していたのが炎の呼吸だったからではないかと思われませう』

「そうなのかも・・・な！」

大賢者の回答を聞いた飛羽真は納得しながら振り向きざまに刀を振るい、背後から斬りかかろうとしたダスタードを斬る。

「まだいっぱいいるな1体1体はそこまで強くないけど、こうも同じ奴が沢山いるとな。1匹いたら100匹いると思えのあいつみたいで嫌だな。しゃーない、経験値を稼がせるという意味で任せてみるか。・・・出て来い、ピナ」

「キュル〜〜」

飛羽真はモンスターボールに入れていたピナを呼び出し、戦わせることにした。

「ピナ。目の前にいる忍者の格好をした奴らを倒せ。人間じゃないから手加減は無用、思いつ切り暴れて来い」

「キュル！」

飛羽真の言葉に力強く頷いたピナは大きく息を吸った後、ダスタード達に向けビーム型のブレスを吐き出し、ダスタード達を薙ぎ払う。そして、小さいながらも咆哮を上げながらダスタード達に突っ込んでいった。

「ピナの奴張り切ってるな。張り切りすぎて倒れなきやいいんだが・・・おっと」

張り切っているピナを心配そうな表情で見ていた飛羽真だったが、危機を感じとりその場でしゃがむと、金属同士がぶつかる音が鳴り響いた。

「あ〜〜〜そういえばお前らもいたんだったな」

自分を攻撃してきたレオ・ダスタードもいたのだと思ひ出す飛羽真。2体のレオ・ダスタードは長槍と刺又は振り上げ、飛羽真へと振り下ろそうとするが、

「無の呼吸 風の型 昇上砂塵嵐」

飛羽真はしやがんだ体勢のままレオ・ダスターード達に向け舞い上がる砂塵の様な斬撃を連続で繰り出し、武器を壊すと同時にダメージを与える。だが、ダスターード達と違いレオ・ダスターードは消えることはなかった。

「流石、ライダー史上最強の戦闘員と呼ばれているだけはあるな」

今の攻撃で倒せなかったことに飛羽真は残念がるも直に気を取り直し刀を構える。壊れた武器を捨てると大型の双剣を逆手で持ち、飛羽真に襲い掛かる2体のレオ・ダスターード。普通のダスターードならまだしも怪人並みの強さを持つレオ・ダスターードに変身していない今の飛羽真では倒すことは不可能。最初は飛羽真もそう思い、隙を見て変身しようと考えていたのだが、

「(動きについていけない?)」

2体の動きについていけないのだ。

「(何で……って理由は一つしかないか。俺が人知を超えた領域に踏み込んでいるからか) うお!」

着いていけている理由を察した飛羽真は何とも言えない気持ちになる。その一瞬の隙を付き、レオ・ダスターード達が畳みかけてくるが、

「無の呼吸 日の型 幻日虹」

捻りを加えた高速の回避技で猛攻を回避し、少し離れた場所へと移動する飛羽真。

「危ねえ、危ねえ。ピナの方もそろそろ終りそうだし、俺も終らせるか」

刀を鞘に納めると飛羽真はソードライバーを取り出し、装着する。

『ブレイブドラゴン』『ストームイーグル』

『烈火抜刀!』

「変身」

『竜巻ドラゴンイーグル!』

「この後の予定もあるからな、速攻で片付ける」

セイバーへと変身した飛羽真は速攻で終らせるために烈火をドライバーに納刀し、トリガーを1回引いて、再び抜刀する。

『必殺読破!』

『烈火抜刀!』

「無の呼吸 日の型 輝輝恩光。ドライファ・フレアアクセル」

『ドラゴン!・イーグル!二冊斬り!ファ・ファ・ファ・ファイヤー!』

翼を広げ飛翔し、両足から噴射した炎を推進力に飛羽真は回転しながら突進、そのまま2体のレオ・ダスタードを斬った。

「GAME CLEAR!」

全てのダスタードとレオ・ダスタードがいなくなったことにより、元の居住スペースへと戻る

「相変わらずこの技は目が回るな。・・・おえ」

「キュイ?」

「おお、ピナ。怪我はないか?」

「キュイ!」

目が回ってふらふらしている所にピナが飛んできて肩に乗り、飛羽真を見る。そして、飛羽真の問いに力強く答えた。

「さて、次・・・と行きたいところだが、そろそろ朝飯の時間だな。いったん戻るか」

変身を解除してドライバーをしまい、月闇で空間を切り裂いたことで生まれた闇の道を通って宿へと戻った。

「今日1日は自由行動だ。部屋で休むもよし、町を探索するもよし、各自好きに行動してくれ」

朝食を食べ終えた後、飛羽真とオスカーの部屋に集合し、今日の予定を全員に伝える。

「オルクさん、シアの武器は任せます」

「完璧に仕上げるよ」

「とーくんは何をするの?」

「昨日いい物が手にはいたんで、それを使って知り合いに会いに行こうと思ってます。後、束さんにはこれを渡しておきますね」

「これって設計図?」

「とある世界で作られていたロボットの設計図です。こっちの戦力は少ないですからね。これを作って量産しておいて欲しいんです」

「へえ〜結構面白そうだね。任せて」

飛羽真から設計図を受け取った束は研究者としての血が騒いでいるのか笑みを浮かべながら設計図を一枚一枚見ていく。

「でも、作るにはちゃんとした設備がある場所じゃないと無理だね。

一度おーくんの住居に戻らないといけないかな?」

「でしたら、私が送りましょう。私も薬草等がどうなったのか確認しておきたいので」

「それならシュテル。これを渡す。育てることが可能ならこれも育ててくれ」

束と一緒に行くと言ったシュテルに飛羽真はステータスアップ効果がある果実を取り出し、渡す。

「これは、今育てているのと同じ効果を持つ物ですね?」

「ああ。昨日、ガチャを回したら当たったんだ」

「分かりました。調べて可能なら育てます」

「頼む。ゼシカ、ゼストはどうするんだ?」

「私は町を見て回ろうと思うわ」

「私はこれからの旅の事を考え食料品等を買っておこうと思います」

「そうか。シア、お前はゼシカ達に着いて行って新しい服と変えの服を買ってこい」

「は、はい」

「それと、お前は迷宮の入り口を探すために先行するハジメ達に着いて行ってもらう」

「ええ!? な、何ですか!？」

シアは自分だけ別行動する理由を飛羽真に尋ねる

「戦闘経験を積ませるためだ。言っとくが溪谷の魔物相手にてこずるようじゃ迷宮攻略なんて夢の夢だぞ?」

「うう・・・分かりました」

「んじゃ、行動開始」

飛羽真の手を叩く音と共に皆それぞれ行動を開始した。

「さて、行きますか。懐かしのあの世界へと」

全員がいなくなった後、飛羽真は1つのワンダーライドブックを取り出し、表紙を捲る。

『ディケイド異世界旅行記』

本に内包されている力が発動し、灰色のオーロラが現われる。

「・・・」

飛羽真は無言で現われたオーロラを潜り抜ける。

「・・・なつかしいな」

潜り抜けた先で見た光景はある世界で飛羽真、フェイト、シルヴィア、木乃香とあともう一人が住んでいた家の自室だった。両目を閉じ、耳を澄ませると外から子供達の楽しそうな声が聞こえてくる。換気を行うついでに視ようと窓を開けて外を見る。そこには背中に翼を生やした少女と人間、シアやフィリスのような外見をした亜人の子供が楽しそうに遊んでいた。

「この光景を見ると帰って来たって思えるな」

今いるトータスでは決して見ることの出来ない光景を見て自然と笑みを浮かべる飛羽真。暫くの間、子供達が遊んでいる光景を眺めると、この世界に来た目的を果たすべく、とある店に行くため自室から出、家から出ようとドアノブを握ろうとしたとき、ドアが開いた。開いた先にいたのは、

「・・・兄上？」

飛羽真のことを兄と呼ぶ可憐な少女だった。

第35話

レジェンドライダーワンダーライドブックの力を借りてかつて巻き込まれてやって来た異世界へと来た飛羽真。知り合いの鍛冶職人の所へと行こうと家を出ようとしたときにかつてパーティーを組み、一緒に暮らしていた少女と再会した。

「久しぶりだなエルザ。美人になると思っていたが、予想以上に美人になったな」

「……………」

「ん？エルザ？…………固まってやがる」

待っていても返事が返って来ないことに不思議がり、少女「エルザ・ランドール」をよくくみると、石のように固まっていた。

「……………」

「?!」

正気に戻すために少し強めのデコピンをエルザの額に行う。痛みで正気に戻ったエルザだったが、よほど痛いのか両手で額を抑えながら悶絶する。

「い、痛いです、兄上」

「固まっていたお前が悪い…………つと言いたいところだが、そんなに痛かったか？ほんの少ししか力は込めてないはずだが？」

『告。成長スキルはこの世界でもステータスに加算されているのでそのせいだと思われます』

「(サイですか)」

大賢者からの報告を聞いた飛羽真はならエルザが痛がるのも無理はないと納得する。

「元氣そうで安心したよ」

「…………本当に兄上なんですネ？」

「おう。真正正銘お前の義理の兄の八神飛羽真だ」

エルザの問いに飛羽真は自信満々な表情で答えた後、

「これを見れば俺が本物だって信じてもらえるか？」

火炎剣烈火が納まった聖剣ソードライバーを取り出して見せる。

「それとも、俺達しか知らないエルザの秘密を言えば分かるか？ そうだなくくいつ魔獣が襲って来るかも分からない外で野宿した時の翌朝、怖くておね・・・」

「わあ~~~~!!?信じます！兄上だって信じます！だからその話は!?!」

飛羽真が何を言おうとしたのか分かったエルザは大慌てし、飛羽真が本物だと信じた。

「う~~~~兄上は相変わらず意地悪です」

「はっ、はっ、はっ、兄の特権ってやつだ」

むくれるエルザに飛羽真がいい笑顔で言う、エルザが飛羽真に抱き着いた。

「エルザ？」

「また、またお会いすることが出来て嬉しいです兄上」

「・・・ただいま」

嬉し泣きしているエルザの頭を優しくなでながら飛羽真は帰宅の挨拶をした。

「そうですか」

泣いているエルザを連れて知り合いの武器屋に行くわけにはいかなかった飛羽真は落ち着くまでこの数年でどんなことがあったのかを互いに話し合っていた。

「じゃあ、フェイト姉様やシルヴィア姉様、木乃香姉様も元気なんですかね」

「ああ」

「良かった。ですが、兄上も災難ですね。2度も異世界に召喚されるだなんて」

「まあな。でも、召喚されてよかったって思ってるぜ。もし違うクラスだったら俺は大切なものを失っていたかもしれないかった」

「兄上」

「少し喋りすぎたな。そろそろおっさんの所に行くか」

「分かりました」

近況報告もほどほどにし、来た目的を果たすべく飛羽真はエルザを連れて何度もお世話になった武器屋へと赴く。

「らっしやい・・・って、エルザの嬢ちゃんじゃねえか。んでもう一人は・・・坊主!？」

扉を開け店の中に入るとヤが就く屈強な男が2人を出迎えた。そして、飛羽真の事を見ると信じられないような表情を浮かべる。

「お前、どうしてここに？住んでいた世界に帰ったんじゃ」

「とある物で勇者にしかできない事を出来るようになったんだよ。それより今日はおっちゃんに頼みがあつてな」

「た、頼み?」

「おう。この生地とこれらの素材で俺の新しい服とフェイト達に作つて貰った服を7着ばかり作つて貰いたいんだ」

状況が理解できず混乱してる店主を無視して飛羽真は量子ボックスからコットン生地と大迷宮で手に入れた数々の素材を取り出して頼む。

「待て、待て、待て！最初から全部説明しろ！」

自分を無視して話を続ける飛羽真に店主は待ったをかけ、説明するよう求めた。

「成程、盾のあんちゃんや他の勇者も出鱈目だったが、坊主はもつと出鱈目だったってわけか」

「人をびっくり箱のように言わないで欲しいな」

「いや、事実だろうが」

飛羽真の話聞いた武器屋の店主「エルハルト」は盛大な溜息を

吐きながら話を飲み込み、思ったことを正直に伝えた。

「んで？新しい服を作ってくれって言っていたが。今着ているその服じゃダメなのか？」

エルハルトは饒別に渡した服を着ている飛羽真を見て尋ねる。

「いや、この服もいいと言えはいんだが、な〜んかしつくりこないんだよな」

「ふむ。まあ、俺達職人は頼まれたことをやるだけだ。こうして欲しいというリクエストはあるか？」

「そうだな〜〜」

エルハルトに尋ねられ飛羽真はどんな服がいいのかを考える。そして、考えること数分、

「こういう風な服がいいな」

思い浮かべた服を紙に書いて、見せた。

「成程、剣主体で戦う坊主には合ってそうな服だな」

「んで、どれくらいかかりそうだな？」

「そうだな量が量だから・・・5日って所だ」

「5日・・・か」

エルハルトから完成までの日数を聞いた飛羽真は少し考え込む。

「(いつでも世界を渡れ、来れるようになったとしてもこの世界とトータスの時間の流れが同じとは限らない。つとになると)一度戻って説明してからまた戻ってきてこっちで5日過ごしたほうが確実だな」

「どうしたんですか兄上？」

「何、服が完成する間、ここにしようって思ったのさ」

「え!?!ほ、本当ですか!?!」

「ああ。仲間達に説明するために1度あつちに戻るが、説明を終えたら戻ってくる。んで、今日の夕飯はなにがいい？」

「兄上が作ってくれるのですか!?!」

「おう。再会を祝って豪華な物を作ってやるぞ？」

「じゃ、じゃあ、兎肉のシチューが食べたいです」

「それは構わないが、兎の肉はあるのか？」

「今から狩ってきます」

そう言うとエルザは兎を狩るため駆け足で店から出て行った。

「んじゃあ、いったん俺も戻るか。じゃあ、おっちゃん服の事頼んだぜ」

「任せておけ。今着ているのよりも最高の物を作つてやる」

エルハルトの言葉を聞いた飛羽真は店から出ると、「デイケイド異世界旅行記」の力でトータスへと戻ると、説明をするべく全員を呼んだが、ハジメ一行は大迷宮の入り口を探すべくライセンス大渓谷へと旅経ってしまった為、集まったメンバーのみに事情を説明し、本の力を使つて再び世界を渡つた。

それから5日間、飛羽真は妹分のエルザに稽古を付けたり、狩りに行ったりしながら生活した。

そして5日後、

「どうだ坊主？」

「最高です」

エルハルトから渡された服を着た飛羽真はその出来に大変満足していた。

「前と同じように体格に合うよう自動的に調整されるようにしてある。さらに、防汚、防臭といった処置も施されている。防御力の方も坊主が持つてきてくれた素材のおかげで格段に上がっている。後、頼まれた分の服と予備の服だ」

「サンキューおっちゃん」

飛羽真はエルハルトから予備の服と女性陣に渡す服を受け取つたのだが、渡す分と予備の分を合わせても頼んだ分よりも多かったのだ。

「おっちゃん、3着分多くないか？」

「そいつは坊主の故郷で待っている嬢ちゃん達のだ」

「フェイト達の？」

「ああ。生地も素材も山のようにあつたからな。問題なく作れた」

「使うことになるかは別として……サンキュー、おっちゃん」
「いいってことよ」

受け取った服を量子ボックスへとしまい、店の外に出ると村に住んでいる者達が並んでいた。その中には勿論、この世界を救った盾の勇者と呼ばれる岩谷尚文の姿もあった。

「行くのか飛羽真？」

「はい。ここでの用事も済みましたからね。あっちの世界に戻って俺のすべきことをします」

「そうか。何かあったら遠慮なく呼べ。弟分の手助けぐらいはしてやる」

「尚文さん。はい！もしもの時はお願いします」

兄貴分である尚文の言葉を聞き、飛羽真は頭を下げて言った。

「そう言えばエルザは？」

「そういえばいませんね」

「エルザお姉ちゃん、何処に行っただらろう？」

この場にエルザがいないことに気づいた飛羽真が辺りを見渡すと、自分を尚文の剣という女性「ラフタリア」と背中に翼を生やした少女「フィーロ」が飛羽真と同じように周りを見回すもエルザは何処にもいなかった。

「寂しいのよきつと。何せもう二度とあえないと思っていた人に会えたのだもの」

「そう……かもしれませぬね」

尚文の妻の一人である亜人のサディナがエルザの気持ちを伝える。因みに尚文の第一夫人はラフタリアである。

その後、飛羽真は村に住んでいる者達から薬や食材等を貰い、別れの挨拶を言い、トータスへ戻ろうとしようとしたとき、

「兄上ー」

探していたエルザの声を聞き、振り返る。そこにいたのは真新しい服を着たエルザが立っていた。エルザはそのまま飛羽真の前まで歩いて行くと、

「兄上、私も一緒に連れて行ってくださいー！」

頭を下げて飛羽真にお願いをした。

「本気・・・みたいだな」

「はい！ここにいない姉様達の分まで私が兄上を支えます」

エルザの表情と語調から本気なのだと言を聞いていた住民は理解する。

「エルザ、世界を渡るとレベルは1となり最初から鍛えなおさないといけなくなる。今の強さになるまでには相当時間がかかるぞ？それでもいいのか？」

「勿論です」

飛羽真の言葉に迷いなく答えるエルザ。

「エルザ、何かをすると決断した時、俺がよく言っていたことを覚えているか？」

「は、はい」

「覚えているならそれを俺と一緒に言うんだ。行くぞ」

「思い立ったら吉日、その日以降は全て凶日」

「つまりそういうことだ」

「っー！」

願いに対する返事を答えながら飛羽真はエルザの頭を撫でる。答えの意味を知ったエルザは目を輝かせ、笑顔になった。そんなエルザの頭をぽんぽんと叩いた後、飛羽真は本を取り出す。

「『ディケイド異世界旅行記』」

本に内包された力を起動し、オーロラカーテンを出現させる。

「それじゃあ、尚文さん、皆、お元気で！今度はフェイト達と一緒に来ます」

「皆、行ってきます！」

村の皆に見送られ、飛羽真とエルザはオーロラを潜ってトータスへと戻って行った。

第36話

「つと、言うわけで今日から一緒に行動を共にする義妹のエルザだ」
「エルザ・ランドールです。不束者ですがよろしく願います」
異世界からトータスへと戻ってきた飛羽真はその日の夕食時に皆にエルザを紹介、エルザがここに来た経緯等を説明した。

「そうだ、俺がここ（トータス）からいなくなってから何日ぐらい経った？」

「3日ぐらいです」

「ふむ、こことあそこの時間差は2日って所か。んでハジメから連絡は？」

「まだ来ていません」

「渓谷の広さを考えれば当然と言えば当然か」

「私達も赴き、一緒に探しますか？」

「いや、これはハジメへの罰だからな。俺達は気長に待ちつつ、情報を装備、戦力を整えておこう」

そして夕食後、借りている部屋で3日間のそれぞれの戦果を聞いた後、解散した。

「GAME CLEAR!」

「はあ、はあ」

「50体のグルを5分30秒・・・か。及第点って所だな」

戻ってきた日の翌日、飛羽真はエルザが現時点でどれくらい動け、戦えるのかを確認するためワンダーライドブックで呼び出した戦闘員50体と戦わせた。

「(レベルとステータスが下がっているとは思えない動きだった。今後が楽しみだ)」

エルザのさらなる成長の予感に飛羽真は笑みを浮かべる。

「お疲れさん。何か感じることはあったか？」

「そうですね・・・レベル、ステータス共に低い状態であの数相手に戦えることが出来たことに驚いています。それと、敵を倒すたびに動きがよくなつていく気がしたのですが、何か知っていますか兄上？」

「ん？知っていると聞かれれば知ってるな。だが、今はまだ教えるつもりはない。知つたら無茶をしそうだからな」

エルザの問いに飛羽真は理由を知っていると答えるも、その理由を教えないと言った。

「それより、新しい武器の使い勝手はどうだ？」

「凄いの一言です。気を纏わせていないというのに鋼を斬れる鋭さにも驚きましたが、魔力を纏わせることで更に鋭さが増し、剣速と膂力が上がった気がしました」

飛羽真の問いにエルザは手に持った片刃の長剣の刀身を眺めながら感想を言う。エルザが持つ長剣は飛羽真が昨夜作った物。ハジメがいないため零用に作製した刀のように風を纏わせたり、電撃を纏わせたりすることは出来ないがそれ以外は全て同じ方法で作られている。そして、更にオスカーが付与した神代魔法のおかげで持ち主に最適な重さになるようになっていいる。

「さて、俺は少しばかり魔物を狩ってくるがエルザはどうする？」

「勿論、お供します！」

飛羽真の問いにエルザは着いて行くといった。

「ですが、街道の魔物は訓練を始める前に私が倒してしまいました。何処で狩るのです？」

「そうだな～バイクを使ってホロアドにあるオルクス大迷宮（表）に行くことも出来るがギルドのおばちゃんの話だと勇者一行がたびたび訓練の為に訪れているみたいだから鉢合わせする可能性が高い。かといって真のオルクス大迷宮に2人を連れて行く訳にもいかなないからな」

どうしたものかと飛羽真が悩んでいると、悲鳴のようなものが聞こえてくる。気になった飛羽真は量子ボックスから双眼鏡を取り出し、フィリスの指さす方をみると、冒険者らしき風貌の2人の男と1人の少女を発見した。したのだが、

「(あの表情、何かから逃げている?だが、一体何に?)」

必死な形相で走る彼等を見て不思議に思った飛羽真はその後ろを双眼鏡で見ると、

「何だあれは?熊・・・なのか?」

彼等の後ろには30匹の小熊と3匹の大熊型の魔物が彼等の後を追っていた。何故、飛羽真が熊だと確信を持って言わなかったのか。それは、熊達の姿にあった。

「体毛の上にアルマジロのような甲羅・・・まるで作られたような魔物達だな。名前は・・・鎧熊とでも名づけようか」

名前がないと色々と不便だと思った飛羽真は取り合えず新種の魔物に名前をつけた。

「兄上、名前を付けている場合ではありません。あの魔物を倒さないで。このままでは町に被害が出ます」

「落ち着けエルザ。逃げ回っているとはいえあの3人も冒険者だ。町に被害が行かないよう考えて逃げている」

飛羽真の言う通り、鎧熊に追われている3人は鎧熊達が町へといかないように一定の場所を走っている。

「だけど、逃げ回っていられるのも時間の問題だろうからな、助けるとするか」

そう言うのと飛羽真は手のひらを逃げる3人と鎧熊に向け、タイムミングを計ると、

「アル・ファスト・ファイヤショット」

10個の火球を鎧熊達に向けて放った。威力の低い魔法だったため倒すことは出来なかつたが怯ませるだけの威力はあったのか、鎧熊は頭を何度か振るうと魔法が飛んできた方を見、飛羽真達を発見した。そして、咆哮を上げると飛羽真達に向け進軍を開始した。

「ちよ、ちよつと!?!あの子何しちやつてくれるの!?!」

「町に被害が行かないように逃げ回ってたっていうのに!?!」

「つーかこの場合、攻撃じゃなくて援軍を連れてくるのが普通だろう!?!」

飛羽真の行動に逃げ回っていた3人は飛羽真の行動に悲鳴を上げ

る。そんなことなど露知らず飛羽真は自然体な体勢で熊達が来るのを待つ。そして、全ての熊達が範囲に入るのを見た後、

「エグゼイド医療日誌」

「ステージセレクト」

ワンダーライドブックを起動し、エルザ、熊達と共に姿を消した。

「「き、消えた!?!」」

「おお、おお、困惑してるねえ〜」

街道にいたはずなのにいきなり場所が荒野へと変わったことに熊達は困惑し、辺りを見回していた。

「見たことのない魔物だから最初からギア全開で行かせてもらう。『抜刀』」

キーワードと共に刀を抜き、一瞬でトップギアへと至ると、いまだ困惑している鎧熊の1体に近づき、刀を振るい、首を斬り落とした。そして右足を軸に1回転して反動をつけ、

「無の呼吸 日の型 『円舞』」

近くにいた鎧熊をその硬い甲羅ごと真つ二つに両断した。

『ガアアアア!!』

仲間をやられ怒った鎧熊達は飛羽真に襲い掛かるも、

「せい!」

エルザが剣で甲羅に覆われていない部分を突き、怯ませると素早く得物を引き戻して鎧熊の首を斬り落とした。

「手助けしなくても余裕で反応できたんだが?」

「いえ、見ているだけというのは落ち着かないので」

「じゃあ、10体ほど任せる。残りの小型と大型は俺が狩らせてもらおう」

「分かりました」

飛羽真の指示を聞いたエルザは10体の鎧熊に魔法を当て、意識を

自分に向けさせ、少し離れた場所へと誘導、戦闘を開始した。

「まずは小物を一掃するか。無の呼吸 日の型 日暈の龍・頭舞い
”

飛羽真は龍が舞うかのように素早く動きながら小熊達を斬って周った。

「小熊の討伐完了。残るは大熊3体」

残っていた小熊を全て討伐した飛羽真は大熊を討伐すべく、走りだした。

「ん？」

少し距離が離れているのに3体の大熊は腕を上げたことに疑問を感じ立ち止まる飛羽真。3体の大熊は掲げた腕を勢いよく飛羽真に向け振り下ろした。

「つ！?グラスホッパー」

鍛え上げた直感の警報が鳴ると、飛羽真は足元に魔力の板を生成、それを蹴って空高く跳び上がった。そしてその数秒後、大熊と飛羽真の間の地面に無数の斬撃痕が刻み込まれた。

「今のは斬撃・・・いや、爪撃を飛ばしたのか？」

『解。かつて南雲ハジメが戦ったという爪熊と同じような能力を持った魔物と推測します』

「(爪熊。ハジメの話では爪から風で出来た刃を生み出すことが出来る魔物だって言ってたな。あの鎧熊達もそれと同じ能力を持っているってことか。だが、同じような能力を持つ魔物が何で此処(地上)に生息してるんだ？オルクス大迷宮の魔物もそうだったがまるで誰かによって作られ・・・、まさか)」

オルクス大迷宮に生息していた魔物のようにこの鎧熊も誰かによって作られたのではないのかと飛羽真は推測したが、それは後でオスカーに調べてもらおうと思ひ至り、倒すことに集中することにした。

「(そういえばまだ使ったことのない技能があったな。確か”複合魔法”だったか？大賢者、複合魔法についての情報をくれ)」

『了。複合魔法とは2つ以上の魔法を組み合わせ、新たな魔法を構

築することが出来る技能です。』

「ほう、ほう。じゃあ試してみるか」

大賢者から複合魔法について教えてもらった飛羽真は火と闇が一つになるようイメージしながら掌に火球を生み出したのだが、その色は橙色ではなく黒だった。

「・・・成功したのか？」

『解。成功です。火と闇が組み合わさり黒炎となりました』

「ふくくん、威力はどのぐらいだ？えくと・・・」 『黒炎弾』

飛羽真は生み出し、停滞させていた火球を1体の大熊に向けて撃ち放つ。撃ち出された火球は妨害も回避されることもなく大熊へと当たる。黒炎は瞬く間に大熊の体全体へ回り、跡形もなく焼き尽くした。

「ワオ」

あまりの威力に飛羽真は驚いてしまう。そして、対人戦では極力使わないようしようとして心で誓った。

「無の呼吸 日の型 “円舞一閃”」

飛羽真は雷の如き速さで啞然としている大熊に接近すると、両手で持った刀を振るって大熊を斬り裂くと、残り1体の懐に素早く入り込み、

「無の呼吸 日の型 “碧羅の天”」

体を捻りながら空に円を描くように刀を振るい、大熊の首を斬り払った。

『GAME CLEAR!』

飛羽真が最後の大熊を倒すと攻略完了の電子音が空間内に鳴り響いた。

「あ~~~~、日の型の連続使用はやっぱ疲れるな。体の節々が痛てえ」

『告。動きに無駄がある証拠かと。舞の時間を増やすことを薦めます』

「(言われなくてもそうするつもりだ)」

「兄上」

「怪我を負うことなく切り抜けられたみたいだな。ご苦労さん」
自分の下へと駆け寄ってきたエルザに労いの言葉を飛羽真は送っ
た。

そして、その日の夜

『飛羽真、大迷宮の入り口が見つかった』

2つ目の大迷宮への挑戦が始まろうとしていた。

第37話

ライセンス大渓谷にある大迷宮の搜索を行っていたハジメ一行から大迷宮の入口を見つけたと連絡を受けた飛羽真達は翌日の早朝、泊まっていた宿をチェックアウトすると大型車に乗って大渓谷へと向かい、ハジメが設置したのであるうビーコンの辿って大迷宮の入口まで辿り着いた。着いたのだが、

「おいでませ！ミレディ・ライセンスのドキワク大迷宮へ♪」

「何だこれは？」

「はあ~~~~」

壁を直接削って作ったであろう装飾が施された長方形型の看板を見て飛羽真達は信じられないような表情でそれを見、オスカーは溜息を吐いた。

「取り合えず、入るか」

ツツコミたいところは色々とあるが中に入らないことには何も始まらないと思い、岩壁に手を添え、押すと、壁が回転ドアの用に動く。壁の向こう側に送られた飛羽真。

「・・・取り合えず灯りが必要だな」

灯りがなくては動くことが出来ないと思った飛羽真は量子ボックスから懐中電灯を取り出そうとした瞬間、無数の風切り音が響いた。

「武技「領域」」

自身に向かって何かが飛んでくると察した飛羽真は自身の中心に3メートル先まで円状の空間を展開する。そして、自分に向かって飛来する何かを展開した空間内に入ったの察知すると、取り出した三節棍を素早く振るって領域内に入った何かを次々と叩き落としていく。攻防は飛来する何かの残弾が尽きるまで続いた。

「・・・これもまた随分過激な挨拶だな」

感覚を研ぎ澄まし、もう飛んでこないことを確認した飛羽真は今度こそ懐中電灯を取り出し、周りを明るくすると叩き落とした物を見て

苦笑いする。

「全部が黒で統一されて作られた矢・・・か。光を反射しないから奇襲、不意打ちにはもってこいだな」

金属から削りだしたような艶のない黒い矢を拾い上げようとすると、周囲の壁が淡く光だし、辺りを照らし出した。

「ここが第2の大迷宮の中ですか」

「周りに矢が散らばってるけど何かあったの？」

そして、丁度いいタイミングでシユテル達が大迷宮内に入ってきた。

「大迷宮に入ったら急に撃たれたんだ。まあ、見ての通り全部叩き落した」

「んんんんはつくん達はいないみたいだね？先に迷宮を回ってるのかな？」

「飛羽真様、部屋の中央にある石板に文字のようなものが掘られています」

「文字？」

ゼストに言われ石板に近づき、掘られている文字を見た飛羽真達は、

「ビビった？ねえ、ビビっちゃった？ちびったりして、ニヤニヤ」

「それとも怪我した？もしかして誰か死んじゃった？・・・ぶふっ

「「「「「・・・」」」」」

「はあ~~~~」

掘られた文字を見て飛羽真達は額に青筋を浮かべ、オスカーは大きなため息を吐いた。

「オルクさん。このミレディっていうのは昔からこうだったんですか？」

「ああ。結構な年月も経っているからあのうぎったい性格もなくなっている」と期待していたんだけど」

「・・・取り合えず、このうぎったい石板は粉々に砕いておくか」
そう言うのと飛羽真は三節棍を振るって砕いた。だが、

「ぎんね〜ん♪この石板は一定時間経つと自動修復するよぉ〜
〜ブークスクス!!」

砕けた石板跡、地面の部分にそう文字が掘られていた。

「……幽霊って殴ることできたっけ?」

怒りによつて身体を震わせながら飛羽真が静かに呟いた。一度、飛羽真の怒ったところを見たことのある面々はその時のキレっぷりを思い出し、少し離れる。飛羽真の怒りが収まるまでゼシカ達は装備の確認や大迷宮についての検証等をして待つことにした。

「ふう〜〜。取り合えず進むか」

怒りが納まった飛羽真はこの場でじっとしていても埒が明かないと思い、攻略を解するため動きだそうとゼシカ達に声をかけたとき、地震でも起きたかのように部屋全体が揺れ始めた。

「地震?!」

「壁の破片が落ちてくるかもしれない。魔法を主に使う面々は気を付けろ」

揺れは40秒ほどで収まった。

「何だったの?今の揺れは?」

「地震ではないようでしたが」

すると、扉の開く音が空間内に響く。

「魔獣かもしれない総員戦闘態勢」

飛羽真の指示を聞き、いつでも戦えるよう武器を構えるゼシカ達。そして、扉が完全に開き、中から出てきたのは、

「……何か見覚えはないか?この部屋?」

「……物凄くある。けど、石板がない」

「確か、一定時間経過すると修復されるって書かれてなかったっけ?」

ハジメ、恵理、ユエ、シアの4人だった。

「ハジメ?」

「飛羽真?」

扉の奥から出てきたのが知り合いだったため、飛羽真達は警戒を解き、近づこうとすると、

“ねえ、今、どんな気持ち？”

“苦労して進んだのに、行き着いた先がスタート地点と知った時つて、どんな気持ち？”

“ねえ、ねえ、どんな気持ち？どんな気持ちなの？ねえ、ねえ？”

部屋の床に文字が浮き出た。その文字を読んだ先行組4人の顔から表情が抜け落ち、微動だにせず無言でその文字を見つめる。そして、追い打ちをかけるように、

“あつ、言い忘れてたけど、この迷宮は一定時間ごとに変化します

”

“いつでも新鮮な気持ちで迷宮を楽しんで貰おうというミレディちゃん心遣いです”

“嬉しい？嬉しいよね？お礼なんていいよお！好きでやってるだけだから”

“ち・な・みに常に変化するのでマツピングは無駄です”

“びよっとして作っちゃった？苦労しちゃった？残・念！プギャー

”

「は、ははは」

「フフフフ」

「フヒ、フヒヒヒヒ」

「ハ、ハジメ？」

「「「ふっぎけるな——！？」」」

壊れたような笑い声をあげる4人に飛羽真が声をかけると迷宮全体に届けと言わんばかりの絶叫を上げた後、最初の通路に駆け込むと、ミレディの言葉通り大幅に変わった階段や回廊の位置、構造に怨嗟の声を上げたのだった。

第38話

「少しは落ち着いたかハジメ？中村？」

「ああ」

「うん。アレのお陰でね」

飛羽真の問いにハジメと恵理はとある人物を見ながら答えた。その人物とは、

「殺ルですよお・・・絶対に住処を見つけてめちやくちやに荒らして殺ルですよお」

シアだった。彼女は大槌を担ぎ、据わった目で獲物を探すように周囲を見回している。深く、深くキレているのは明らかだ。シアがここまでキレているのは理由は、ミレデイ・ライセンの意地の悪さが原因だ。飛羽真達を加え、再び大迷宮の攻略に乗り出した先行組だった、順風満帆とは行かなかった。特にシアが地味なトラップ（金タライ、トリモチ、変な匂いのする液体ぶっかけ、ごく普通の落とし穴等々）の尽くにはまり、精神的にヤバくなりキレツキレツになっていた。

「凄まじく興奮している人が傍にいますと、逆に冷静になれる”っていう言葉があるがまさにその通りだなって実感したわ」

「私も」

「・・・飛羽真は大丈夫なの？」

「何がだ？」

「・・・それ」

ユエは飛羽真の頭に突き刺さっている金タライを指さして尋ねる。普通なら頭にタライなど刺さらないがハジメの最初の探索の話が攻略前に聞いた飛羽真は何かあった時では間に合わないと思い、ライダーに変身して探索を行っているのだ。そして、尽く地味なトラップに引っかかるシアのとばつちりを受けていたのだ。

「ははは、俺は大丈夫だ。全ツ然怒ってないぞ？」

「（絶対怒ってるね／だろうが／ますね）」

仮面に着けているため表情は分からないが明らかに怒っている声だとシアを除いた全員が理解する。その証拠に、

「本人にあつたら問答無用で斬りかかるか？それとも早々にライダーキックをかますか？いや、いつそのこと破壊の力で消滅させるっていう手も」

など物騒なことをブツブツと呟いているからである。

「ミレディ。君は怒らせてはいけない人を怒らせてしまったようだね」

「今日で一週間か」

飛羽真達が大迷宮に入ってから1週間。数々のトラップとウザイ文に体よりも精神が削られていた。スタート地点に戻されること7回、致死性のトラップに襲われること48回、全く意味のない嫌がらせが169回。最初こそ、心の内をミレディへの怒りで満たしてした一行（オスカーを除く）だったが、4日目過ぎた辺りから「どうでもいいやあゝ」みたいな投げやりな心境になっていた。

「だけどここの入口が広くて助かったぜ。硬い地面に座って眠らなくて済んだんだからよ」

迷宮の入り口には飛羽真がガチャで当てたカプセルハウスが3家設置されており、1つはハジメ、恵理、ユエ、シアの4人が大型の家には飛羽真、ゼシカ、シユテル、ゼスト、束、ファイリス、エルザの7人が、3つ目にはオスカーが住んで使っている。

「そろそろ、進展があってもいいんだがな」

身体スペック的に早々死にはしないとと思ったハジメは迷宮の構造の変化を確かめるために休息しながら少しずつ進むことを飛羽真達に提案した。理由もはつきりしているし食料も余裕があるので飛羽

真はその提案を了承した。そして、ハジメにしか分からないお手製の「マーキング」で変化には一定のパターンがあり、どのブロックがどう移動するのかが解った。

「出来れば今日決着をつけたいもんだな。．．．にが」

久しぶりに自分で豆を挽いてから淹れたコーヒーは非常に苦く感じたハジメだった。その後、ゼストの用意してくれた食事を全員で食べた後、スタート地点に戻されなことを祈りながら本日の探索を始めた。勿論、その道中、数々のいやらしい数々のトラップやミレディのウザイ文が出てきたが菩薩の心境でクリアしていった。

「ここか」

そして、飛羽真達は先行していたハジメ一行が1週間前に訪れて以降、一度も遭遇することのなかった部屋へと辿り着いた。

「確か、話だとゴーレムの騎士が配置されているって話だったな？」

「ああ。そして、天元突破な怒りを覚えさせてくれた部屋だ」

「あの時のことを思い出すとむかついてきました」

「でも、妙だね？あの時、扉は閉まってただけど．．．」

「．．．今は開いてる」

「普通に考えれば罫と思われませんが」

「この迷宮自体、罫だらけなもの。今さらよね」

「んじゃあ、一気に駆け抜けますか」

そう言うのと部屋へと踏み込む飛羽真達。部屋の中央に差し掛かると部屋内に置かれていた騎士型のゴーレムが置かれている窪みから飛び出し、前方の進路を塞ぐようにする。

『ストームイーグル』

「無の呼吸 風の型 “塵旋風・削ぎ”」

だが、進路が塞がれるよりも早く、飛羽真がドライバーの中央に差し込んでいるライドブックのページを押し込み、火炎旋風を発動。それに呼吸剣術を組み合わせ、ゴーレム騎士達を斬り刻み、燃やした。更に飛羽真が斬り損ねた騎士達はハジメ達が銃撃や大槌、刀剣、棒等で蹴散らしていく。そうやって時間を稼いだ時間で更に加速し、包囲される前に祭壇の傍まで到達した。飛羽真達が奥の扉を潜るまでに

ゴーレム騎士達は追いつくことが出来ない、そう思っていたのだが、「んな!? 天上を走ってるだど!」

あろうことかゴーレム騎士達は重力など知らんとばかりに壁や天井を走っていたのだ。

「マジか!?!」

「うっそくく!?!」

「・・・びっくり」

「重力さん仕事してくださいあ〜い!!」

「興味深い現象ですね」

「どうやってるのか分解して調べてみたいなく」

これには流石の飛羽真達も度肝を抜かれたが、ゴーレム騎士達は更に度肝を抜く行動を起こした。なんと天井を走っていたゴーレム騎士の1体が、軽くジャンプすると砲弾のように凄まじい勢いで頭を進行方向に向けたまま宙を飛んできたのである。

「くそつたれ!」

自分達に向かって飛んできたゴーレム騎士を銃で素早く迎撃するハジメ。放たれた弾丸は飛んできたゴーレム騎士の兜と肩を破壊、更に頭部と胴体が別れ、更に両手に持っていた大剣と盾を手放した。しかし、本来なら地面に落ちるであろうそれらは、落ちず、そのまま飛羽真達に向かって突っ込んできた。

「無の呼吸 風の型 『昇上砂塵嵐』」

先頭を走っていた飛羽真は足を止め、ハジメ達を先に行かせると、体の姿勢を低くすると上空に向けて無数の斬撃を放ち、落ちてくるゴーレム騎士の頭部、胴体、大剣、盾を細切れにした。

だが、そのゴーレム騎士を始りに次々とゴーレム騎士達が飛羽真達に落下してくる。中には風車のように回転しながら落ちてくる物もいる。

「くそー!」

流石に49体ものゴーレム騎士を一度に捌くことなど出来るはずもなく、飛羽真は落下してくるゴーレム騎士達を時に躲し、時に刀で捌きながら前を走るハジメ達の後を追う。飛羽真の高い身体能力で

あつという間に追いついたのだが、

「ハジメ」

「もう追いついたのかよ？相変わらず出鱈目だな」

「誰かさん曰く、俺は人間を止めかけているらしいからな」

「まだ根に持つてるのかよ」

愚痴を言いながらも足を止めず走り続ける飛羽真達。そして、走り続けていると先のほうにあったある物を見て苦笑いする。

「まあ、再構築できるなら、こうなるわな」

「挟まれてしまいましたね」

「しかも、学習してるね」

前には先へと落ちていたゴーレム騎士達が落下先で再構築し、隊列を組んで飛羽真達を待ち構えていた。束が言ったようにゴーレム騎士達は盾を前面に押し出し、腰をどっしりと据えて壁を作っている。更に2列目のゴーレム騎士達が後ろで盾役のゴーレム騎士達を支えている。

「パワー勝負を考慮に入れての配置だなありや」

「なら無駄だつてことを教えてやる」

そう言うハジメはパワードスーツの左腕のみを展開して装着、更に量子化させていた武装、12連式ロケットランチャーを呼び出し、左腕に装着した。

「全員、耳をふさげ！」

「ええ〜何ですかそれ!？」

初めて見る武器にシアが目を見張る中、全員がハジメの言う通りに耳を塞ぐ。シアと同じように武器の異様さに見ていたフィリスだったが、他の皆と同じように耳に指を突っ込み、更にウサミミを折り畳んだ。

「全部まとめて吹き飛びやがれ！」

物騒な言葉と共にハジメが引き金を引くと、装填されていたロケット弾が勢いよく発射。撃ち出されたロケット弾は寸分の狂いもなく隊列を組んで待ち構えていたゴーレム騎士達に直撃。その直後、轟音と共に大爆発を起こし、待ち構えていたゴーレム騎士とその後ろに

あつた扉を纏めて吹き飛ばした。

「凄い威力」

「耳があ~~~~!私の耳があ~~~~!!」

1発で上級魔法と同等の威力を出せる武器の威力にユエは驚き、うさ耳を折り畳まず真っ直ぐに伸ばしたままだったシアはもろにダメージを受けて、耳を押さえていた。

「だから、耳を塞げって言っただろうが」

「ええ?何ですか?聞こえないですよお」

「・・・ホント、残念ウサギ」

「(聞いてなかったら私もシアちゃんみたいになってたんだね)」

全員の呆れた視線がシアに突き刺さるが、当の本人はそれに気づかず、同胞であるフィリスは聞き逃していれば自分もシアと同じようになつていただろうと思ひ。話は聞き逃さないようにしようと心に決めた。

「とくくん。扉の向こうに足場が見えるよ」

「ハジメ、今のもう1発撃てるか?」

「ああ。1発どころか10発連続して撃てるぞ」

「なら後ろから追いかけてくる連中に向かって撃つてくれ」

「あいよ!」

「ハジメがロケット弾を撃つたと同時に扉の奥にある足場に向かって飛ぶぞ!」

飛羽真の指示に従い、ハジメは後ろから追いかけてくるゴーレム騎士達に向けてロケット弾を発射、それと全員が同時に扉の向こうにある足場に向け思いつ切り跳んだ。だが、ここで予想外なことがおきた。なんと、着地しようとしていた足場が横にスライドしたのだ。

「なに!?!」

そのことに驚いた飛羽真達だったが、変身していた飛羽真は傍にいたゼシカとフィリスの手を握ると背中の翼を広げて飛ぶ。ゼストもシユテルとエルザの手を掴むとしまっていた翼を広げ、飛翔。束はパワードスーツを展開して飛ぶ。ハジメもパワードスーツを展開し、恵理、ユエの手を掴み、恵理がシアの手を掴んだことを確認した後、飛

翔して足場へと降りる。オスカーは自前のアーティファクトを使って問題なく足場へと着地した。

「おいおい。どうなってんだこの空間は？足場が浮いてる上にせつかく撒けたと思ったゴーレムまで浮いてやがる」

飛羽真達が入った部屋は超巨大な球状の空間だった。直径2km以上はありそうな空間には様々な形、大きさの鉱石で出来たブロックが浮遊し、不規則に移動しているのである。

「かんっぜんに重力を無視してるな」

「ああ。それにこの部屋に近づくにつれてゴーレム達の動きが良くなっていたのを考えると、此処のどこかにあのゴーレム達を操っていた奴がいるはずだ」

ハジメはパワードスーツに搭載されているセンサーを最大にしてこの空間を調べようとした瞬間、

「っ!?!全員!今すぐに跳べ!」

「逃げてえ!」

飛羽真とシアの焦燥に満ちた声が響く。〃何が?〃と問い返すこともなく、飛羽真とシアの警告を聞いたハジメ達は瞬時にその場から離脱した。直後、赤熱化する巨大な何かが飛羽真達の乗っていたブロックに落下してきて、ブロックを破壊。勢いを止めることなく下へと突き進んでいった。

「シア、助かったぜ。ありがとうよ」

「・・・ん、お手柄」

「後でうさ耳をもふもふしてあげるね」

「えへへ、〃未来視〃が発動してよかったです。代わりに魔力はごっそりと持っていかれちゃいましたけど・・・後、ご褒美なら飛羽真さんからのちゅくくがいいい・・・へぶ!?!」

「調子に乗るんじゃないやありません」

おなじみのコントを無視して飛羽真は落ちてきたものを確認するために下を覗くと、何かが動いたのかと思うと猛烈な勢いで上昇、瞬く間に飛羽真達の頭上に出ると、その場にと留まり光る眼光を持って睥睨した。

いいや私の正体が気になるんだったよね？間違いなく私はミレデイ・ライセンだよ。この姿の秘密は神代魔法で解決！詳しく知りたければ私を倒してみよ！……って感じかな？」

「……そうか、じゃあ、本物のミレデイ・ライセンって事でいいんだな？」

すると、これまで黙っていた飛羽真が尋ねる。

「だからそうだって言ってるじゃん。物わがりの悪い子だね〜」
飛羽真の問いに煽るような口調で答えるミレデイ。

「ふふふふ……そうか、そうか。ならとりあえず」

『必殺読破！』

「一発……蹴らせろ！」

その答えを聞いた飛羽真はドライブに納刀した剣のトリガーを2回引く、背中の翼を広げ高く跳び上がる。

『ドラゴン！イーグル！2冊撃！ファ・ファ・ファイヤー！』

そして、高熱の炎を纏わせた蹴りをミレデイに向け放った。

第39話

迷宮の最奥でミレデイと名乗る巨大なゴーレム騎士と遭遇した飛羽真達。胡散臭さはあったもののゴーレム本人？が自分がミレデイだと証言したことで一応信じることにした一同だったが、ゴーレムが自分達をさんざんおちよくった人物だと知った飛羽真は、

「1発・・・蹴らせろ！」

『必殺読破！ドラゴン！イーグル！2冊撃！ファ・ファ・ファイヤー！』

高熱を纏った跳び蹴りをミレデイへと繰り出した。

「へ？みぎやあああー！？」

質量、体格ともに数倍の差があるというのに飛羽真の繰り出した跳び蹴りはその差など、関係ないと言わんばかりにミレデイの巨体を蹴り飛ばした。蹴り飛ばされたミレデイは一定の距離に達すると何故か爆発した。

「(まあ、当然と言えば当然だな。公式設定のままならライダーのキック力は差はあれどもだからな)っーか、やっぱり怒りは収まっていなかったのか」

「・・・恨みや怒りはそう簡単に忘れられないもの。もし魔法が使えたらなら私もうやってた」

「確かに」

魔法が使えたのなら飛羽真と同じように動いてたとユエと恵理が言う。

「ふう~~~~」

「すつきりしましたか？」

「ああ。これまでの鬱憤を全部込めて蹴り飛ばした。死んでないのは解ってる、とつと戻って来いミレデイ・ライセン！」

ミレデイを蹴り飛ばし溜まっていた鬱憤を解消した飛羽真は2万本のマイクを壊す声量でミレデイの名を叫んだ。

「「「み、耳があ——!!」」」」

ゼシカ、シュテル、ゼスト、東、エルザ、オスカーの6人は飛羽真が大きく息を吸っているのを見て嫌な予感がし、咄嗟に耳を塞いで難を逃れたが、残ったハジメ達は耳をふさぐのが一瞬遅れ、先程のシアと同じ状態となってしまった。

「うるさいな〜そんな大声で叫ばないで、あれ？何でその子達は地面を転がりまわってるの？」

耳がないのに耳を塞ぐポーズを捕りながら蹴り飛ばされたミレデイが戻ってきた。

「無傷って、ちよつと自信なくすわ〜」

「この迷宮にあるゴーレム達には神代魔法の一つ“再生”を生成魔法で付与しているんだ。だから攻撃を喰らっても魔力を流すことで復活するし、損傷も直に治るんだ」

「っおーよく知ってるね〜。その通り、この迷宮にあるゴーレムは私の同士であつた稀代の錬成士であるオスカー・オルクスが作ったゴーレム！これはその中でも傑作中の傑作。そう簡単に壊せる何て思わない方がいいよ〜？」

自分の事のように自慢するミレデイに嬉しさを感じながらもオスカーはゴーレムの弱点を飛羽真達に教える。

「飛羽真君、ハジメ君、そして、皆。あのゴーレムは僕達人間で言う心臓の位置に動かすのに必要な核がある。その核を破壊するんだ」

「んな！な、何で解つたの!？」

「僕が作った物なんだ、知っていて当たり前だろう？」

「僕が作った？君、さっき私が言ったこと覚えてる？このゴーレムはこのちよ〜くぜつかわいいミレデイちゃんの仲間、オーくんことオスカー・オルクスは作った物だつて。・・・君みたいな何処の馬の骨だか知らない子が作った物じゃないんだよ」

「確かにそうだろうね。じゃあ、これならどうだい？」

ミレデイの話聞いたオスカーは幻術魔法を解いて、本来の姿に見せる。

「……え？」

「この姿なら信じてもらえるかいミレディ？」

「オー……君？う……そ、だって」

「死んだはずだろう？まあ、色々あつて生き返ったのさ」

「で、でも」

「信じられないかい？まあ、普通ならそうだろうね」

「……もし君が本当に本物のオークンなら一番の天敵が誰なのか知ってる？」

「それはあの狂った神以外でつて事かい？もしそうなら一番の天敵はヴァンドウル・シュネーだね。実力は認めるけどあのマフラーはどうかと思っている」

「オ、オ、オ、オー……く……ん!!」

今の時代の人間は絶対に知らないであろう発言に彼が本物のオスカーなのだ知ったミレディは飛びつく。

「『聖絶』」

「あいたあ!？」

が、オスカーが張った障壁によって阻まれてしまった。

「ちよ、何で防御結界を張るさ!？」

「今の君と僕の体格差を考えたのなら張るに決まっているだろう!」

「……あ!」

オスカーに言われ、ミレディは思い出したように手を叩いた。

「感動の再開のところ悪いんだが、話を進めてもいいか？」

「ん？ああ、そうだったね。君達の質問に答えた代わりに私の質問にも答えてくれるかな？」

「内容にもよるが……いいぜ」

ミレディの雰囲気我真剣なものへと変ったことに気づいた飛羽真はミレディの問いを聞き、答えることにした。

「君達は何の為に神代魔法を求めているのかな？」

嘘偽りは許さないという意思が込められた声色で、ふぎけた雰囲気など微塵もなく問いかけてくるミレディ。この世界に生きる全ての

人々の為に神に挑んだ者。託す魔法で何を為すのかを知る権利がミレディにはある。

聴覚麻痺から回復し、いつの間にか隣に立っていたハジメが飛羽真の肩を叩く。『お前が代表して答えろ』と受け取った飛羽真は嘘偽りなく自分達の目的を話す。

「俺、いや、俺達の第一目的は故郷に帰ることだ。あんた達という狂った神に無理矢理この世界に連れてこられたんだ。世界を超えて転移できる神代魔法を探している」

「第一ってことは第二もあるんだよね？それも教えてくれないかな？」

「・・・第二の目的は俺個人のものなんだが、あんた達という狂った神を討とうと思ってる。理由は命を何とも思っていない神が気に入らないから。もう一つは、ガラじゃないが俺達の住む世界を守ることだ」

飛羽真はミレディを真っ直ぐと見返しながら嘘偽りない言葉を返した。飛羽真の話聞いたミレディはオスカーを見る。ミレディの視線に気づいたオスカーは嘘は言っていないと頷いて答える。

「ん〜そっか、そっか。成程ねえ〜別の世界からねえ〜。うんうん、それは大変だよねえ〜。よし、ならば戦争だ！見事、この私を打ち破って、神代魔法を手にするがいい！」

「・・・じゃあ、遠慮なく」

ミレディの言葉を聞くと素早くミレディ・ゴーレムの胸部まで移動する。

「は、はや・・・」

「無の呼吸 炎の型 気炎万象」

飛羽真の動きの速さに驚くミレディを無視し、飛羽真は烈火を猛炎の如く振り降ろしゴーレム騎士の片腕を斬り落とす。

「無の呼吸 日の型 円舞」

そして、その場で一回りし、回転の勢いも加えた一閃をミレディ・ゴーレムの胸部に繰り出した。だが、斬撃跡を刻むことしかできなかった

「(ライダーキックを叩き込んだ時も感じたが、異様に硬いな。さらに傷を付けても瞬時に回復、厄介極まりないな)」

「飛羽真ー!」

ハジメの声を聞くと背中中の翼を広げて飛ぶ飛羽真。その数秒後、ハジメが撃った弾が飛羽真が斬り傷を付けた個所に当たるが更に奥へと進むことはなかった。

「つちー!」

「先制攻撃とはやってくれるね〜。だけど、この程度の攻撃じゃ私は倒せないよ〜」

「片腕を斬り落とされたっていうの余裕だな」

「まあその彼の速さや腕を斬り落とされたことには驚いたけど」
そう言うミレディ・ゴーレムは近くを通ったブロックを引き寄せ、砕き、その欠片を材料にして斬り落とされた片腕を再構築した。

「材料さえあれば簡単に直すことが出来るんだよねえ〜」

「なら、材料となるブロックや浮いているゴーレム達を全部壊せばいいだけの話だ」

「うん、うん、目の付け所はいいと思うけど。この空間内でのその行動は悪手だね〜」

ハジメの考えを駄目だと言いながらミレディ・ゴーレムは何処からか取り出したモーニングスターを飛羽真達めがけて射出する。

飛羽真達は散開することでモーニングスターを躲す。

「ハジメ君、ここはセオリー通り、コアの破壊を最優先にするんだ」
「ちよ、オーくんは私の味方じゃないの!?!」

「今の僕は彼等と行動を共にしている。彼らに手を貸すのは当然の事だろう? それに」

「それに?」

「君が仕掛けたあのうざいトラップには僕も頭に来ていてね。そのゴーレムでこの怒りを発散させてもらうよ」

「(オーくんの目、マジだ)こ、このゴーレムはオーくんの傑作の1つなんだよ!?!それを壊すっていうの!?!」

声色と目でオスカーがキレていることを知ったミレディは説得を試みるも、

「ハジメ君が言っていたよ、創造は破壊からしか生まれぬ」と。新しいゴーレムを作るためには古い物を破壊しないとね」

「さすがはお師匠様だ」

「君を弟子に取った覚えはないよ」

言葉ではそう言いつつもハジメの師匠呼びにまんざらでもない様子でオスカーは答えた。

「むくくミレディちゃんは激しくジェラシーになったので難易度マックス！本気で潰すことにしました。カモン、予備のゴーレムちゃん達！」

そう言うや否、ゴーレムの数が50から総数80体へと増えた。

「さあ、総数80体の無限に再生する騎士達とこの私を同時に捌けるかなあ〜？」

嫌味つたらしい口調で、ミレディ・ゴーレムがハジメに向けモーニングスターを射出する。ハジメはその場を動かずにシヨットライザーではなく錬成で作った銃「ドンナー」をモーニングスターに向けてと発砲する。

部屋内に響き渡る1発の銃声、されど放たれた弾丸は6発。早撃ちによつて放たれた弾丸は狙い違わずに豪速で迫るモーニングスターに直撃、軌道がハジメから大きく逸れた。

同時に、ミレディ・ゴーレムの背後へと移動していたブロックに乗っていたシアが跳躍、ミレディの頭上を取り、ハンマーを勢いよくハンマーを振り下ろす。

「見え透いてるよお〜」

だが、予測していたのかミレディ・ゴーレムは急激な勢いで横へと移動した。

「このー」

目測を狂わされたシアは、歯噛みしながら持ち手に取り付けた引き金を引きハンマーの打撃面を爆発させた。薬莖が排出されるのを横目に、爆発で生まれた反動で軌道を修正すると、3回転しながら遠

心力をたつぷりと乗せた一撃をミレディ・ゴーレムへと叩き込んだ。
凄まじい衝撃音と共にガードしたミレディ・ゴーレムの左腕が大きくひしゃげる。しかし、ミレディ・ゴーレムはそれがどうしたと言わんばかりに、そのまま左腕を振るって、シアを吹っ飛ばした。

「きゃあああ!?!」

「シア!」

悲鳴を上げならぶっ飛ぶシア。そんなシアを助けようと翼を広げ飛ぼとした飛羽真だったが、シアはハンマーの引き金を引き、さつきのように打撃面を爆発させ、体勢を整え、更に反動を利用して近くのブロックへと不時着する。

「ワオ、さつきの動きといい、今の動きといい咄嗟の判断とは思えない動きだな」

「どんな状況でも冷静になって対処するようにと教えたので」

「教えたって・・・あれは教えたっていうより叩きこんだっていう方が妥当だと思うんだが?」

シユテルの言葉に飛羽真は偶々見た修行光景を思い出し、シユテルに言うも、

「短時間で覚えさせるにはあれが一番効果的だったんです」

「まあ、実際に教えられた通りに出来てるから結果オーライでいいか」

教えられたことをしっかりと実演出来ていたことから飛羽真はこれ以上何も言わなかった。

「さて、問題はミレディよりもこいつらだな。普段ならボスごと叩き切ってやるって言えるんだが無限に再生にするとなるとなあ〜(いっそのこと破壊神の力で破壊するか?・・・いや、もしミレディにかすりでもすれば宿ってるであろう魂ごと消滅しかねない。何か手は・・・ん?破壊?)」

眼前を覆いつくすつとまではいかないが至る所にいる騎士ゴーレムにさすがの飛羽真もうんざりしながらも対策を考え、あることを思い出す。

「余所見はいけないよ〜?」

警戒をおろそかにしたと思ったミレデイ・ゴーレムがモーニングスターを飛羽真に向け射出する。

「無の呼吸 雷の型『稲魂』」

振り返ると共に烈火に炎を灯した飛羽真は烈火を高速で5回振り出し射出された鉄球を切り裂いた。

「何で魔法が使えないこの迷宮で魔法が使えるの!？」

「この炎が魔法で生まれた物じゃないからだ」

律儀にミレデイの質問に答えた跡、飛羽真は黄緑色のライドブックを取り出すと、

『3匹の子豚!・ふむふむ・・・』

『習得一閃!』

その本を烈火に接触させ本の力を烈火に宿らせ、トリガーを引き宿らせた本の力を解き放つと、飛羽真が3人に増えた。

『ダイケイド!・ふむふむ・・・』

『ダイケイド!・ふむふむ・・・』

『ダイケイド!・ふむふむ・・・』

自身の数を増やした後、飛羽真は別のライドブックを取り出し、烈火に読み込ませた後、分身に本を渡し、分身も本体と同じように烈火に本の力を宿らせる。

『『習得一閃』』

3人の飛羽真は翼を広げ飛び上がり宙で直列に並び、トリガーを引き烈火に宿した本の力を解放させると、烈火からマゼンタ色のエネルギーが溢れだす。

「『はあ!』」

飛羽真達はエネルギーを宿した烈火を横1回転しながら振るい、宙に浮く全ての騎士ゴーレムを切り裂いた。

「いきなり3人に増えたことには驚いたけど、ゴーレムは破壊されてもすぐになお・・・ってあれ?」

破壊されたゴーレムが戻ってこないことにミレデイは気づく。

「な、何で破壊されたゴーレムが元に戻らないの!？」

「今のマゼンタ色のエネルギーに触れたからさ」

驚くミレデイに飛羽真はさつき読み込ませたライドブックを見せながら言う。

「この本は世界を破壊することが出来る人物の力を宿している。その力を宿した剣でなら無限に再生するゴーレムを本当の意味で破壊できるんじゃないかって思いついたんだが・・・正解だったみたいだな」

「ゴーレムを破壊したぐらいでいい気にならないでよね。まだ私にはこの巨大ゴーレムがあるんだから」

「その割には気が気じゃないんじゃないか？何せ自慢の無限に復活するゴーレムを壊されたんだからな」

「な、何を根拠にそんなこと言ってるのかな？」

「根拠は・・・」

「・・・俺がここまで近づいたことにすら気づかなかったことだ」

「っへ？っんな!?!いつの間に」

予想外に近くから聞こえてきた声がかかって来たことに素っ頓狂な声を上げ、声のした方向に視線を向けると、いつの間にか懐に潜り込み、アンカーと甲冑の隙間に足を入れる事で身体を固定していたハジメがいたからだ。

「この距離での攻撃ならご自慢の装甲も壊せるかもな」

ハジメは宝物庫からロケット&ミサイルランチャーを取り出し、心臓部に突きつける。

「ん、この」

「させません」

「させないです」

ハジメを叩き落とそうとミレデイ・ゴーレムが両手を動かそうとしたがそれよりも早くエルザが片刃剣で右腕を斬り落とし、シアの極限まで強化した身体能力を以て繰り出した一撃が左腕をひしゃげさせた。

「これはおまけだよ」

そして、駄目押しといわんばかりに恵理と束がミレデイ・ゴーレムの眼に目掛けて弾丸を撃ち込んだ。

「ミレディちゃんのキュートな目がくくく!?」

「吹き飛ば」

意味不明なことを叫ぶミレディを無視してハジメは引き金を引き、ゼロ距離でミサイルをミレディ・ゴーレムに撃ち込んだ。

「ぐう」

ゼロ距離でミサイルを撃つたため、かなりの衝撃と爆風がハジメを襲う。そんなハジメをオスカーがハンド付きのチェーンで救助した。

「ハジメ／君！」

オスカーに助けられ、ブロックまで引き寄せられたハジメに恵理とユエが近寄り、安否を確かめる。

「俺はてつきりアレを使うのかとばかり思ってたんだが、ミサイルって馬鹿かお前は？」

「飛羽真君の言う通りだ。無茶にもほどがある」

「だけど、手ごたえはあったぜ」

飛羽真とオスカーに呆れられるも確かな手ごたえを感じたハジメが笑みを浮かべながら言う。だが、

「いやくちよつとヒヤツとしたよ。でも、足りないねえ」

シアによってひしゃげられた左手でブロックの端を掴み、爆風の中から現われたミレディがそう呟く。ハジメの一撃は確かにミレディの胸部装甲を破壊した。だが、破壊したのは表面の装甲のみでその奥にあった漆黒の装甲には傷一つついていなかった。

「・・・アザンチウム鉱石か」

「道理でぶった斬れない訳だ。この世界で最高の硬度を誇る鉱石も使っていただなんてよ」

「さっすが自称オーくんの弟子とオーくんの迷宮攻略者。知ってて当然だよね。それじゃあ・・・第2ラウンド行ってみよっか！」

ミレディ・ゴーレムの目が淡く光ると浮いているブロックが上下左右、あらゆる方向から襲い掛かってきた。

「いやくくくゴーレムを全部壊されたときは流石に焦ったけど、よく考えればゴーレムを壊されても私にはこのブロックがあっただよね。しかも、ゴーレムと違ってただ動かすだけだか

ら楽ちん楽ちん♪」

ミレデイ・ゴーレムはブロックをモーンングスターを大きく振りかぶり、

「君には感謝しかないよつと」

飛羽真に向け振り下ろすと同時に射出。振り下ろした勢いも加えた鉄球が頭上から迫る。

「ハジメ！ゼシカ！」

「おう！変身！」

『ショットライズ！パンチングコング！』

「任せて！バイキルト！バイキルト！」

飛羽真に呼ばれ近くまで来るとハジメはバルカンへと変身しゼシカは2人に膂力を含めた身体能力を上昇させる呪文を2人にかけて。

「「おらあ」

飛羽真とハジメはライダーの膂力＋呪文による能力上昇を加えた拳を鉄球へと叩き込み、鉄球をミレデイ・ゴーレムへと打ち返した。

「うっそお!？」

まさか打ち返されるとは思っていなかったのかミレデイは魔法で鉄球の動きを止めようとしたが、

「まだです！」

ゼストによって投げられたシアがハンマーで鉄球を強打し、さらに加速。倍の速度になった鉄球の棘部分がミレデイ・ゴーレムの胸部装甲に突き刺さった。突き刺さった鉄球を引き抜こうとするミレデイだったが、

「させません」

シアを投げ飛ばした後、ミレデイの背後に移動していたゼストが腕を振るうと隣で浮いていた巨大なアームが腕と連動するように動きミレデイ・ゴーレムを殴り飛ばした。

「・・・これは駄目押し」

殴り飛ばされブロックと衝突したミレデイ・ゴーレムにユエが持っていた武器の中に入っている水をミレデイ・ゴーレム全体に浴びせる。

「水？私に水をかぶせて・・・」

「凍って・・・凍極」

何で水を被せたのか分からないでいたミレディだったが、ユエとゼシカがミレディ・ゴーレムに手を添え、魔法の名を告げると、ミレディ・ゴーレムがみるみる凍っていく。

「嘘？！どうしてこの迷宮で上級魔法が使えるのさ!？」

「水を浴びせたおかげ」

「これなら水を凍らせるだけで済むもの。・・・それでも、ほぼすべての魔力を消費しちゃうけど」

「・・・ん」

魔力の消費が激しかったのか肩で息をするゼシカとユエ。

「おつかれさんゼシカ」

「ユエもよくやったぞ」

「このぐらい何でもないわ」

「・・・ん。頑張った」

「・・・妙だね」

2人の頑張りを褒める飛羽真とハジメとは裏腹にオスカーが呟く。

「妙って、何が妙なのオーくん？」

「ゴーレムの力を考えればこの程度の氷破るなんて簡単だ。それをしないなんて。何をしようとしてるんだいミレディ？」

「皆さん！『未来』が視えました・・・降ってきます!!」

動かず、何も言わないでいるミレディを不審がったオスカーがミレディに尋ねたとき、物凄く慌てた声で天井を指さしながらシアが叫んだ。

「(降ってくる?・・・)まさか!？」

「ふふふ、とっておきのお返しだよ。今からこの部屋の天井全てを君達の頭上へ『落とす』」

シアの言動で何かを察した飛羽真が慌てて天井を見ると、低い地鳴りのような音と共に天井から破片が落ちてくる。

「さあ！見事これを凌いでみせてよ」

そんなミレディの言葉と共に天井に敷き詰められた数多のブロッツ

クが落下してきた。

「まじかよ!? つちい」

『ヘッジホッグ! ヘッジホッグ! ヘッジホッグ!』

『なるほどなるほど』

『習得3閃!』

落ちてきたブロックを見て飛羽真は舌打ちをしながら蛍光イエローのライドブックを取り出し烈火に読み込ませ、振るうと雷を帯びた無数の針がブロックへと放たれ、ブロックを壊していくが、

「(数が多すぎる!)」

全てのブロックを壊すことは無理だった。

「飛べる奴は飛べない奴を掴んで飛べ!」

「変身!」

『ショットライズ! ライトニングホーネット! Piercing
needle with incredible force.』

飛羽真の指示にハジメは変身を解除してパワードスーツを身に纏い、ユエを抱えて飛び、恵理はバルキリー・ライトニングホーネットに変身、背中から翅を展開して飛ぶ。ゼストはシュテル、ゼシカを回収して飛び、束もISを展開しエルザを抱えて空を飛び、飛羽真はオスカーを回収しようとしたが彼の乗っていたブロックだけいつの間
に落下圏外の位置にまで移動させられていた。

遠くでオスカーがミレデイに向かって何かを言っているのが聞こえてくるが今の飛羽真達にはそれを聞き取る余裕などなく生き残るために時に避け、時に壊し等して行く。

「ふうふう終ったかな?」

そんな飛羽真達の様子を凍った状態で観察していたミレデイ。氷を力づくで破り損傷した頭部や装甲を散らばった破片を使って修復すると、ブロックの山を見る。

「うううん、流星にちよつとやりすぎちやつたかなあ?」

「ミレデイ」

「ん? なううにオーくん?」

「何で僕の乗っていたブロックを移動させた?」

「何でって、生き返ったオーくんを殺したくなかったのと、オーくんにはあの試練は必要ないって思ったからだよ？オーくんの実力は私が一番知ってるからね〜」

オスカーだけ落下圏外に移動させた理由をミレデイが教える。

「・・・そうか。そうそうミレデイ」

「今度はな〜くに？」

「彼らをあまり甘く見ない方がいい」

オスカーのその言葉と共に、破碎音と共にブロックが吹き飛び、更に

『ジャキーン!』

という音声と共にブロックが斬り裂かれ、砂塵が舞う。

『増冊!アーサー王!烈火2冊!荒ぶる空の翼竜が獄炎を纏い、あらゆるものを焼き尽くす!』

砂塵が晴れるとそこには全長2メートル半程の縦長の太筒を装備したハジメと左手に空色の太剣を装備した飛羽真が悠然と瓦礫となったブロックの上に立っていた。

「へえ〜生きてたの?それで今度はそのおもちゃで挑むつもり?」

「・・・」

ミレデイの問いに答えずに太筒、烈火と太剣を構えるハジメと飛羽真。

「何度来ても無駄だよ」

赤熱化させた右拳を飛羽真達に向かって突き出す。

『必殺読破!キングスラッシュ!』

左手に持った太剣のトリガーを5回引くと、飛羽真は赤熱化した拳に向かって跳び、太剣を振り下ろした。振り切られた太剣は赤熱した拳ごと、ミレデイ・ゴレムの右腕を両断する。

「なあ!」

ぶつかり合うことなく右腕を斬り落とされたことに驚くミレデイ。

そこへ飛羽真の肩を踏み台にしてハジメがミレデイに組みつき、装備した太筒を胸部装甲に押し当て、魔力を流し込むと紅いスパークが

放たれ始める。すると、大筒の中に装填されていた漆黒の杭が大筒の中で猛烈と回転を始める。

高速回転が奏でる旋律が部屋中に響き渡る。

「存分に喰らって逝け」

悪人のような笑みを浮かべながらハジメは吸血鬼に白木の杭を打ち込むが如く、ミレディ・ゴーレムの核目掛けて漆黒の杭を打ち放つ。凄まじい衝撃音と共に漆黒の杭がミレディ・ゴーレムに打ち込まれた。胸部のアザンチウム装甲に一瞬で罅が入り、杭はその先端を容赦なく埋めていく。

「ぐぬうううう……ふん！」

杭が打ち込まれる衝撃に耐えながら拳を握ったミレディは両拳を大筒に叩き込んだ。拳を叩き込まれたことにより大筒は破壊され、杭の進行も停止された。

「ハハハ……さんねくくん！あと1歩だったのにねえくく」

「なに勝ち誇ってやがる」

頼みの切札を壊したことで勝利を確信したミレディだったが、攻撃は終わりではなかった。

「行くぞシアー！」

「はいです！」

飛羽真の掛け声に答えるようシアは杭目掛けて全力でハンマーを打ち下ろした。更に、

「コイツも喰らっとけ！」

『必殺読破！ドラゴン！イーグル！アーサー王！3冊撃！ファ・ファ・ファ・ファイヤー！』

炎を纏った飛羽真の跳び蹴りがハンマーの反対面に叩き込まれ、速度、威力が倍となって杭を押し出す。

「な、何iiiiiiiiii!?!」

押し出された杭は核を粉々に砕いた。核が砕かれたことによってミレディ・ゴーレムの目から光が消えた。

七大迷宮が1つ、ライセン大迷宮の最後の試練が確かに攻略された瞬間だった。

第40話

「ふう〜〜〜〜」

ミレデイ・ゴーレムの活動が完全に停止したのを確認すると飛羽真はベルトに挿入しているライドブックを取り外し変身を解除する。

「よくやったシア。この大迷宮攻略のMVPはお前だ」

変身を解除した飛羽真はハンマーを支えにして息を荒げるシアの頭を撫でる。

「俺はなシユテル達の訓練をクリアしたとは言えお前が『家族の下へ帰りたい』って弱音を吐くもんだと思ってた。だけどお前は恐怖や不安、動揺、それら全てを押しつけ迷宮の深部までやってき、ゴーレムに止めを刺した。これからも頼りにさせてもらおうからそのつもりでいろ」

「は、はいー!」

飛羽真に褒められ、頼られることがよほどうれしかったのか、元気な声で答えるシア。それと同時に、

「あ、あれ? な、何ででしょう? 急に涙が」

「緊張の糸が切れたのでしよう。今のあなたを見て馬鹿にする人はここにはいません。思いつ切り泣きなさい」

「シユ、シユテルさん。ふえええええ〜」

「(初めての旅でいきなり大迷宮っていうのが相当堪えたんだろ
な)」

飛羽真の思う通り、着いて行くという決意のみで踏ん張ってきたシ
アだったが、好きになった人に褒められ、認められ、そして安堵のあ
まり涙腺がゆるゆるになってしまったシアはシュテルに抱き着き嬉
し泣きと、安堵泣き、2つの感情が混ざり合った涙を流す。

「あ、あのくくく、いい雰囲気のところ悪いんだけど、そろそろやば
いんでちよつといいかなくく」

すると、停止していたと思っていたミレディ・ゴーレムの眼にいつ
の間にか光が戻っており、その巨体を震わせながら話しかけてきた。
まだ動けたことに驚いたオスカー以外の一同は距離を取る。

「ちよつと、ちよつと、大丈夫だつてく。試練はクリア！君達の勝
ち。核に残った力で少しだけ話す時間を取っただけだよ。もう数
分しか持たないから」

「んで？何の話だ死にぞこない？死して尚、空気も読めんとは・・・
残念さでは随一の解放者つてことで後世に伝えてやろうか？」

「ちよ!?やめてよく、何その地味な嫌がらせ。ジワジワ来そうな所
が凄く嫌らしい。オーくん、何でこんな子を弟子に取ったの?」

「さつきも言ったけど彼が勝手に言ってるだけで僕は弟子にした覚
えはないよ。それよりもミレディ。彼にあの神々を殺してくれたって
言っても聞かないと思うよ?彼の目的は元の世界に戻るからだから
ね」

オスカーはミレデイが飛羽真達にあの神々のことを頼もうとしていると思いが、

「言わないよ。言う必要もないしね。話っていうより忠告かな？訪れた迷宮でお目当ての神代魔法がなくても、必ず私達全員の神代魔法を手に入れてね。君の、君達の望みの為に必要だから」

「望みねえ。全部集めたら何かが起こるのか？」

「それは、全部集めた後のお楽しみってことで」

当然のオスカーもミレデイが言っていることを知っていると聞いた飛羽真はオスカーに視線を向ける。飛羽真の視線に気づいたオスカーは教えることはできないと言わんばかりに首を横に振って、それに答えた。

「あはは、そろそろ時間かな。・・・頑張ってね」

「・・・随分と潮らしいじゃねえか。あのウザったい口調やら台詞はどうした？」

「あはは、ごめんね〜。でもさ・・・あのクロ野郎共って・・・ホントに嫌な奴らでさ・・・嫌らしい事ばかりしてくるんだよね。・・・だから、少しでも・・・慣れておいて欲しくてね」

「おい、こら。狂った神のことなんざ興味ないって言っただろうが。飛羽真はともかく、勝手に俺まで戦うこと前提に話すな」

「・・・戦うよ。君が君である限り・・・必ず・・・君達は神殺し為す」

ハジメの不機嫌そうな声に、ミレデイは意外なほど真剣さと確信を宿した言葉で返した。

「先代の神殺しを為そうとした者にそう言われるのは光栄だな」

「・・・意味が分からねえな。そりゃあ、俺の道を阻むなら殺るかもしれねえが」

笑みを浮かべる飛羽真と若干、困惑するハジメ。その様子に楽し気な笑い声を漏らすミレデイ。

「ふふ・・・それでいい。・・・君達は君達の思った通りに生きればいい。・・・君達への選択が・・・きつと・・・この世界にとっての・・・最良だから」

いつしか、ミレデイ・ゴーレムの身体は燐光のような青白い光に包まれていた。その光が蛍火の如く淡い小さな光となって天へと登っていく。死した魂が天へと召喚されていくようでとても、とても神秘的な光景に見える。

「はあ~~~~いい加減にしないかミレデイ」

そんな神秘的な光景に飛羽真とハジメを除く皆が見入っている中、オスカーがため息を吐きながらミレデイに声をかける。

「いい加減・・・について、どういうことかな・・・オーくん？」

「その無駄な演出と演技だ」

「・・・もお~~~~オーくんつてば空気読みなさすぎだよ~~~~」

オスカーの言葉を聞いたミレデイはさっきまでの途切れ途切れな話し方ではなくはつきりとした口調で話し出した。

「せっかく、驚かせようと思つてたのに〜」

「その場合、君は確実に跡形もなく壊されるよ。もしそうなったとしても僕は助けないぞ」

「そ、それは困るかな？」

今宿っているボディの貧弱さと自分の未来を想像し引きつった声で答えた。すると、ミレデイ・ゴーレムの眼の光の点滅が激しくなる。

「冗談抜きでそろそろ限界だから先に行つて待つてるね。それと、オークン。皆がミレデイちゃんをボコらないように説得お願いね〜」

そんな言葉と共に点滅していた目の光が消え、ゴーレムの機能が今度こそ停止した。

「そういう訳で皆。僕に免じてミレデイを壊すのは止めてほしい。この通りだ」

全く変わっていないミレデイに呆れつつも笑みを浮かべたオスカーは飛羽真達にミレデイを壊さないよう頭を下げ頼みこんだ。

「まあ、俺は何となく解つてたんで別にいいですよ」

「俺もだ」

オスカーの頼みを飛羽真とハジメは了承し、他の面々は条件を付けた者もいたが渋々了承した。

「兄上、あそこの壁が光っています」

一同がエルザの指さす方を見るといった通り壁の一角が光を放っていた。その光のもとまで行こうとすると、乗っていたブロックがひとりでに動きだす。

ブロックは10秒とかからずに光る壁の前まで進むと、手前5m程の場所で動きを止めた。すると光る壁はタイミングを見計らったのように発光が薄れていき、音もたてずに発光していた壁が抜き取られた。壁の奥には光沢のある白い壁でできた通路が続いていた。

飛羽真達が乗るブロックはそのまま通路を続べるように進んで行く。そうして進んだ先にはオルクス大迷宮にあったオスカーの住処へと続く扉に刻まれていた七つの紋様と同じものが描かれた壁があった。ブロックが近づくと先程と同じようにタイミングよく壁が横にスライドし奥へと誘う。ブロックは止まることなく壁の向こう側へと進んでいく。

潜り抜けた壁の向こうに進むと、

「やつほろろさつきぶりーミレデイちゃんだよー」

ちっこいミレデイ・ゴーレムが飛羽真達を出迎えた。

「……壊さないって約束したけど」

「その顔と反省の色が見えない声を聴いたら無性に腹が立ってきました」

ミレデイの今の姿は巨体版とは異なり人間らしいデザインだった。華奢なボディに乳白色の長いローブを身に纏い、白い仮面を付けている。

「あ、あれ？そんな怖い顔してどうしちゃったのかな？ちよつと、オーくん！説得しておいてつてお願いしたよね!？」

ハンマーや杖を構える女性陣に困惑しながらミレデイがオスカーに尋ねる。

「お願いはしたよ。だけど、君の登場の仕方と、その表情等がダメだったんじゃないか？」

オスカーの返答を聞いたミレデイは迫ってくる女性陣に頭をカクカクと動かし、言葉に迷う素ぶりを見せると意を決すると、

「テヘペロ」

可愛く微笑んだ。その言葉に切れかかっていた女性陣の堪忍袋の緒が完全に切れ、無言でミニ・ミレデイに襲い掛かった。

「はくく、魔方阵の中に入ってくく。それじゃあ起動するよくく」

所々凹んだ頭部をさすりながらミレデイが飛羽真達に魔方阵の中に入るよう指示を出す。全員が入ったことを確認するとミレデイは

魔方陣を起動、飛羽真達の脳に神代魔法の知識と使用方法が刻まれていく。

「……思ってた通りだな」

「ん……重力操作の魔法」

「そうだよくん。ミレデイちゃんの魔法は重力魔法。うまく使ってね……って言いたいところだけど、君とウサギちゃんは適正ないね……もうびつくりするレベルでないね」

「やかましい。それくらい想定済みだ」

ミレデイの言葉にハジメはやけくそ気味で答えた。

「オーくんも彼と同じで適正なしつと。でもまあ、オーくんだから何とかするでしょう。その彼と短髪の子、銀髪の子に、うさ耳付けた子は使えるね。残りの褐色ちゃんとツインテちゃん、金髪ちゃんは適正ばつちり。修練すれば十全に使いこなせるようになるよ」

ミレデイは残った面々を指さしながらそれぞれの適性を教える。

「後、これも渡しておくね」

懐から攻略の証である指輪を取り出し飛羽真に向かって放り投げた。指輪を渡し終えるとミレデイは大量の鉱石類を出現させる。その鉱石を目を光らせながら調べていくハジメ。

「……ミレデイ、君はこれからどうするつもりなんだい？」

「どうって……一緒に行きたいのは山々だけど……私は負けちゃったし。それに、みんなの了承もなくあいつと取引しちゃったから」

そう言いながらミレディは過去のことを思い出す。後世に託すためとはいえ仲間の了承も無しに勝手に狂った神々と取引をしてしまったことを。

「何を言っているんだ。君があいつらと取引したからこそ、僕達は迷宮を造り、託すための準備を行えた。それに、皆は解っていたと思うよ、君がどんな思いで取引をしたのかをね」

そう言うオスカーはしやがんで目線をミニ・ミレディと合わせる。

「ミレディ、あの狂った神々を倒し、世界を変えよう。そして、皆と約束した自由な意思の下に生きられる世界を今度こそ作ろう」

「……ふふふ、あの時と逆になっちゃったね〜」

過去にオスカーを解放者に勧誘したことを思い出し笑うミレディ。

「そうだな。君の厄介さにはほとほと困ったよ。」

オスカーも当時のことを思い出し、笑みを浮かべる。

「さて、答えを聞かせてもらおうかミレディ・ライセン？この手を握り一緒に戦うのか？それとも、この誰も来ない迷宮で待つのか？」

立ち上がったオスカーはミレディに手を差し伸べ、尋ねた。

「もっちらろん、一緒に行くよ。あの狂った奴らを倒すために。ベルとの誓いを果たすためにね！」

差し伸べられた手をミレデイは何の迷いもなく掴んだ。

「美少女魔法使いミレデイちゃん！復・活！！」

準備があるからとオスカーを連れて唯一あつた部屋に向かったミレデイ。部屋に入るとオスカーの叫び声が聞こえてきたが、何があつたのかは本人たちしか知らない。2人が部屋に入ってから5分後、部屋から疲弊したオスカーと元気なミレデイが出てきた。

「大丈夫ですか？」

「色々な意味で疲れたよ」

「(部屋の中で一体何があつたんだ?)」

「みーちゃん、東さん達と一緒に行くのはいいけど迷宮の方は大丈夫なの？」

「みーちゃん……か。あだ名で呼ばれるのも懐かしいな。うくくくん、大型のは予備の核を入れれば問題ないけど、中型のはストックを含めて全部壊されちゃったからなくく」

東の問いにミレデイは人差し指を顎に添えて考える。

「なら大型のゴーレムの改修と中型の騎士を造っていこう」

「何体ぐらい作るんですか？」

「う〜〜くん、ストックも含めて100体あれば大丈夫だと思う」

「100体か。まあ、何とかなるか。凄腕の錬成師が3人もいるんだからよ」

「なんていうか禍々しくなったね」
ライセン大迷宮の攻略を果たしてから3日後。ミレデイは設置された新たなゴーレムを見てそう言った。

「そして、こっちはまったくの別物になってるんだけど」
そして、生まれ変わった巨大ゴーレムを苦笑いする。

「ハジメのロマンが全部詰め込まれた物になったな」
ミレデイ・ゴーレム改めスーパーミレデイG（ハジメ命名）を眺めながら飛羽真が言う。

「俺の持つ知識とアイデアを全部つき込んだ一品だ」
スーパーミレデイG略してSMGを見上げながらハジメがどや顔で言う。

「いくら何でもこれはやりすぎなんじゃないか？」
飛羽真はSMGの詳細が書かれた紙を見ながら言う。国どころかうまくいけば神すら殺せそうな武器の数々に冷や汗を掻く。

「ま、まあ、攻略に来る人なんて早々いないだろうから大丈夫だと思

うよ」

別世界の言語で書かれているため内容は解らないが大丈夫だと言
い張るミレデイ。だが、絶対とは言えないのかその声に覇気はなかつ
た。

「そ、それより、そろそろ出発しようか」

「そうだな。3日もロスしちまったからな」

ミレデイの言葉に頷いた飛羽真は高笑いし続けるハジメを引き
づつてミレデイの部屋に戻る。

「全員いるね？」

「ああ。だがどうやって迷宮から出るんだ？」

「それはこうやってだよ」

ミレデイはジャンプして天井にあつた縄を引っ張る。すると、轟音
と共に四方の壁から途轍もない勢いで水が流れ込んできた。水は瞬
く間に部屋を満たし、同時に部屋の中央にある魔方陣を中心に蟻地獄
のように床が沈み、ぽっかりと穴が開いた。

「い、これは?」

白い部屋、窪んだ中央の穴、そこに渦巻くように流れる大量の水。
紛れもなく便所だ。

「ミレデイ、てめえ! こういうのは前もって教えやがれ!!」

「ごめ〜〜ん。作ったはいいけど使うの何気に初めてで、どうい
うのか忘れてた〜!!」

もがくも激流には勝てず、飛羽真達は水と一緒に流されていった。

第41

無事ライセン大迷宮をクリアした飛羽真達一行。新たな旅仲間、ミレディ・ライセンも加わって迷宮から脱出したのだが、その方法が“便所”にとっても似た方法だった。

激流で満たされた地下トンネルのような場所を猛スピードで流される飛羽真達。息継ぎが出来るような場所など当然なく、壁に激突して意識を失うような下手を打たないよう身体をコントロールしながら水中を進む。

「ん？」

と、その時、自分達を追い越していく幾つもの影を飛羽真達は捉えた。それは、魚だった。どうやら他の川や湖と？がつている地下水脈に流されているようだ。流されるだけの飛羽真達と違い魚達は激流の中を逞しく泳いでいるので、次々と飛羽真達を追い越していく。

「・・・今晚のおかずに何匹か捕まえていくか」

活きがいい魚を捕まえるべく飛羽真は量子ボックスから自作の取り網を取り出して魚を捕まえようとするが、流されているのに加え、動きにくいということもあって中々取れないでいた。

「(落ち着け飛羽真。逆らうのではなく水と動きを合わせて)」

最低限の力で網を持ち、激流の流れに任せた結果、捕獲に成功した。

「よし」

手ごたえを感じた飛羽真はそれからも魚を取りまくっていったのだが、魚ではない何か横を通り過ぎる。気になった飛羽真が見たのは、

「.....」

白目をむき、口を開いた状態のシアだった。

「(何やってるんだこいつは!?)」

慌てて足を掴んで自身の下へと引き寄せた。

町と町、あるいは村と村をつなぐ街道を1台の馬車と数頭の馬がり

ズミカルな足音と共にのんびりと進んでいた。勿論、馬上には人が乗っている。冒険者風の出で立ちをした男が3人と女が1人。馬車の方には卸者台に15、6歳の女の子と化物……。もとい巨漢の漢女が乗っていた。

「ソーナちゃん、もうすぐ泉があるから其処で少し休憩するわよお〜」

「了解です。クリスタベルさん」

クリスタベルと呼ばれた漢女はブルツクの町で服飾店を経営している店長で、ソーナと呼ばれた少女は家族で宿を経営している宿の看板娘である。

この2人、現在、冒険者の護衛を付けながら隣町からブルツクへの帰還中なのだ。クリスタベルはその巨漢からも分かる通り鬼強いので、服飾関係の素材を自分で取りに行くのが多く、今回も仕入れ等のために一時町を出たのだ。それに便乗したのがソーナだ。隣町の親戚が大怪我を負ったと聞き、宿を離れられない両親に代わって見舞いの品を届けに行ったのだ。冒険者達は元々ブルツクの町の冒険者で任務帰りなのでついでに護衛しているである。

ブルツクの町まであと1日といった所。クリスタベル達は、街道の傍にある泉でお昼休憩を取ることにした。

泉に到着したクリスタベル達は馬に水を飲ませながら自分達も泉の畔で昼食の準備をする。ソーナが泉から水を汲もうと傍までやって来、いざ水を汲もうと入れ物を泉に浸けたその瞬間、突如、泉の中央が音を立てながら泡立ち一気に水が噴き出始める。

「きゃあー！」

「ソーナちゃんー！」

悲鳴を上げ、尻餅をついたソーナにクリスタベルが一瞬で駆け寄り庇うように抱き上げ他の冒険者達のもとへと戻る。その間にも噴き上げる水は激しさを増していき、遂には高さ10m以上はありそうな水柱となった。

すると、

「おおおおおー！？」

「どわああああー!?」

「んっー!?」

「きゃああああー!?」

「ひやつほ〜!!」

噴き上がる水の勢いのまま、11人の人が歓喜、悲鳴を上げながら飛び出してきた。あまりのことにクリスタルベル達は目が飛び出るほど驚く。飛び出してきた11人の人間は10m近くまで吹き飛ばされると、そのままクリスタルベル達の対岸側に音を立てて落下した。

「ゲホッ!ガホッ!ひでえ目にあつた。恵理、ユエ、無事か?」

「ケホッ!ケホッ!なんとか」

「・・・大丈夫」

悪態をつきながら恵理とユエの安否をハジメが確認すると、先に岸に上がっていた飛羽真が人数分のタオルを取り出し、投げ渡す。

「サンキュー飛羽真。所でミ・・・ベルの馬鹿は何処だ?」

「あの馬鹿なら今、オルクさんから制裁を受けてるぞ」

飛羽真の指さす方にハジメが向くと、

「ベ〜〜〜ル〜〜〜!君はいつも!いつも!もう少しまともな脱出手段を用意できなかったのか!」

「あやまる!ちゃんと謝るから〜!能力込みアイアンクローはー!!」

オスカーの技能込みのアイアンクローを喰らい、痛みを悶えていた。

「・・・シアはどうしたんだ?」

ミレディへの制裁はオスカーに全部任せることにしたハジメが敷いたタオルに寝かせられているシアについて尋ねる。

「知らん。しかしまずいな、呼吸をしてない」

仰向けに寝かせられたシアは顔面蒼白で白目をむき、呼吸と心臓が停止していた。いつからこの状態になっていたのかが分からない今、

一刻も早く心肺蘇生をおこなわないと命に関わる。

「……しゃーない」

同性に任せるのが一番なのだが、今は一刻も争う事態。意を決した飛羽真は大迷宮で頑張った褒美も兼ねて自ら心肺蘇生を行い始める。

「(……まったく、いろいろと残念な奴だよお前は)」

悪態をつきながら心臓マッサージと人工呼吸を交互に行っていく。そして、何度目かの人工呼吸の後、遂にシアが水を吐き出した。水が気管を塞がないように顔を横に向け、今度は心臓が動いているのかを確認する。耳を澄まし心臓が動いていることを確認し終えた飛羽真は安堵の息を吐く。

「ケホッ！ケホッ！……飛羽真さん？」

「気が付いたか。まったく、こんなところで死にかけるじゃ……ん!?」意識を取り戻したシアに呆れと、安堵が混じった表情を見せる飛羽真。そんな飛羽真をボーと見つめていたシアは突如、飛羽真に抱き着きそのままキスをした。気を緩ませていたのとまさかの行動に避け損なう飛羽真。

「んっ!?んー!?」

「あむっ、んちゅ」

シアは両手で飛羽真の頭を抱え込み、両足を腰に回して完全に体を固定すると遠慮容赦なく舌を飛羽真の口内に侵入させた。予想外のシアの剛力に中々振りほどくことができない。

「わっわっ、何!?何ですかこの状況!?す、すごい……濡れ濡れで、あ、あんなに絡みついて……は、激しい……お外なのに！ア、アブノーマルだわ!?!」

そこへやってきたのは妄想過多な宿の看板娘ソーナちゃん。

「あら？あなたたち確か……」

そして、体をくねらせながらシュテルと束を除いた女性陣を記憶から呼び起こすクリスタベル。そして、嫉妬の炎を瞳に宿し、自然と剣にかかる手を必死に抑えている男の冒険者達とそんな男連中を冷めた目で見ている女冒険者だった。

飛羽真は未だ、吸いてくるシアを体ごと持ち上げるとシアのムツチ

りした尻を思いっきり引つ叩いた。

「ひゃん!？」

突然尻を叩かれたシアはあまりの痛さに驚き、キスを止める。その一瞬の隙を逃さず、飛羽真はシアを引きはがすと、

「目覚めて早々発情してるんじやねえ!この阿保鬼が!」

怒鳴りながらシアを泉へと放り投げた。

「うきやああ!？」

「蘇生直後に襲い掛かってくるなんて・・・流石の俺でも読めねえ」
悲鳴を上げて泉に落ちたシアを尻目に、深呼吸して荒くなった呼吸を元に戻す飛羽真。

「うううう酷いですよおうう飛羽真さんの方からしてくれたんじやないですか」

「あれはれっきとした救命措置で・・・って、お前、意識あつたのか?」

「うううん、なかったと思うんですけど・・・何となく分かりました。飛羽真さんにキスされているって、うへへ」

「その笑い方はやめろ。それとハジメ、その笑みは何だ?」

飛羽真はジト目でニヤニヤとした表情で自身を見るハジメに尋ねる。

「別にうう深い意味はない」

その返答とニヤニヤした表情にイラついたのか、飛羽真は音もなくハジメに近寄ると、腹部を思いっきり殴る。そして、痛みに悶えながら何かを言ってくるハジメを無視して量子ボックスから鎖を取り出し、ハジメに巻き付けると先程のシアと同じように泉に放り投げた。

「てめえ!飛羽真!何しやがる!？」

「さうううて、何が釣れるかなうう?」

「俺は餌か!？」

のんびりと釣りをしようとする飛羽真とぎやあ、ぎやあと文句を言っているハジメの後ろでは恵理達がクリスタベル達と話しながら情報入手、冒険者の男たちはここぞとばかりに女性陣にアタックするも飛羽真によって鎖に巻かれ、ハジメと同じように魚の餌にされ

た。

第42話

「それでは始めましょうか」

「おう」

「今日は全部避けられるかな?」

迷宮から脱出し、ブルツクの町に戻ってきてから2日目。町から少し離れた場所でBJを纏ったシユテルと飛羽真、束、ミレデイが向き合っていた。

『エグゼイド医療日誌』

『Stage Select』

レジエンドライダーブックを起動し、別空間へと移動する4人。場所が変わったのを確認すると飛羽真を除く3人が宙に浮かびあがり、一定の場所まで上昇する。

「準備はいいかな?」

「〃抜刀〃」

ミレデイの問いに抜刀という行動で返事をする飛羽真。

「緋槍・百輪」

飛羽真の抜刀を合図にミレデイが炎槍を100本作り撃ち出す。普通なら逃げるのだが、飛羽真は重力魔法で自身を宙に浮かし、突っ込んでいく。迫りくる炎槍の弾幕は飛羽真は最小限の動きで躲し、躲すことのできないと判断したものは太刀で斬り払いながらシユテル達のもとへと進んでいく。

「パイロシューター」

「アステロイド」

「い!?!」

あと少しですべての炎槍を捌ききり、シユテル達のところまでたどり着けると思った瞬間、無数の火球と無数の魔力弾が飛羽真に降り注ぐ。

「緋焔刃、無の呼吸 日の型 灼骨炎陽〃」

炎を纏わせた太刀を両手で握った飛羽真はそのまま太陽を描くように太刀を振るうと、焔が水平方向に渦巻くように放たれ、火球と魔

力弾を斬り払った。

「(行ける!)」

今度こそ辿り着けると思った時、飛羽真の前の前に蒼い炎が巻き付いた黒い球体が現れ、

「渦巻く蒼穹の星」

ミレデイのフィンガースナップと共に球体が爆発した。

「つく」

風の障壁を発動し爆発から身を守った飛羽真だったが、生まれた爆風によって、縮めた距離を離されてしまった。

「ブラストファイヤー!」

「ポジトロンブラスター!」

そんな飛羽真に炎の砲撃と魔力砲が上空から放たれ、飛羽真を飲み込んだ。

『GAME OVER』

「くそくそくそくそ!今日は行けると思ったのによくそ」

地面に仰向けになって倒れている飛羽真が悔しそうに表情で地面に拳を振り落とした。その際、地面が軽く窪んだ。まあ、飛羽真の膂力を考えれば当然なのかもしれないが。

「いや、いや、あの弾幕の中、あれだけ動けるのは凄いなと思うよ。私じゃ絶対に無理だもん」

ミレデイがからかうことなく本気で飛羽真を称賛する。この特訓は飛羽真と束の重力魔法の特訓とミレデイのリハビリ、そして、とある者との戦いを想定しての特訓だ。

「飛羽真君、剣で魔法を切り裂くのは極力やめた方がいいって言ったよね?人形が撃ち出す銀の魔弾には分解能力があるって」

「そんなに危険なんですか?」

「アザンチウム鉱石でも攻撃を受けたり、防いだりしても傷を負っちゃうんだよ。普通の鉱石だと触れただけで塵になっちゃうよ」

「(だとしたら鬼徹や烈火での戦闘は無理だな。不壊である斬神刀皇でも耐えきれるかどうか。もし耐えきれたとしても確実に切れ味は落ちるな)」

飛羽真はミレデイの説明を聞きながら分解への対処法を模索する。

「ステータスも高いうえに無限に供給される魔力、全属性への適性」

「出鱈目すぎですね」

「まったくだよ」

ミレデイの話を聞きシユテルが思ったことを言うとその通りだと頷く。

「さて、今の反省点を踏まえてもう一回やってみよう」

「次こそは辿り着いて見せる」

反省会を終えると飛羽真達は日が暮れるまで回避の特訓を続けた。

「はあ〜〜結局、1回もたどり着けなかった」

その日の夜、宿泊している宿の部屋で深くくため息を吐きながら落ち込む飛羽真。彼の肩にはピナが乗っており、遅めの晩御飯を食べている。

「大丈夫か飛羽真？」

「肉体的にも精神的にも疲れてるが寝れば問題ない。んでハジメはフューレンには馬車で行くってことでいいんだな？」

「ああ。おばちゃんにはギルドの一室を無償で貸してくれた恩もあるからな目的地関連の仕事を受けてもいいって言ったら商隊の護衛依頼があつて空気が1人分あつた。同伴はいいかって聞いたら2人なら問題ないって言われたから、俺、恵理、ユエの3人で先に行こうと思ってる。馬車でどのぐらいかかるかって聞いたら約6日の距離だつて言つた。他の冒険者と足並みを揃えるのは手間だつて思つたんだが、急ぐ旅でもないし、それに冒険者のノウハウを知っておけば何かの役に立つこともあると思つてな」

「お前がそれでいいって決めたんならそれでいいじゃねえか？んで？出発は？」

「明日の早朝だ」

「それはまた急だな。準備は？」

「帰りしてきた。ついでにユエがどうしてもって言うからあのクリスタベルの店に寄ったんだが、町を出るって言った際、襲い掛かられた」

「・・・よく生きて帰ってきた」

「お、おい、まさか残りの3人って「スマ・ラヴ」なのか!」

「マジかよ!? 嬉しさと恐怖が一緒くたに襲ってくるんですけど!」

「見ろよ俺の手。さつきから震えが止まらないんだぜ？」

「いや、それはお前がアル中だからだろ？」

翌日の早朝、ハジメ達を見送るため共に正面門にきた飛羽真達を商隊のまとめ役と護衛の冒険者達が出迎えたのだが、ハジメ達を見て一斉にざわついた。

女性陣の登場に喜びを顕わにする者、股間を両手で隠し涙目になる者、手の震えをハジメ達のせいにして仲間につっこみを入れられる者等、様々な反応だ。いやそうな表情をしながらハジメが近寄ると商隊のまとめ役らしき人者がハジメに声をかけた。

「君達が最後の護衛かね？」

「正確には俺とこの2人だ。これが依頼書だ」

ハジメは依頼書を懐から取り出し見せる。それを確認して、まとめ役の男は納得したように頷くと、自己紹介を始めた。

「私の名はモットー・ユンケル。この商隊のリーダーをしている。君達のランクは未だ青だそうだが、キャサリンさんから大変優秀な冒険者と聞いている。道中の護衛は期待させてもらおうよ」

「(なんか栄養ドリンクみたいだな名前だ)」

「まあ、期待は裏切らないと思うぞ。俺はハジメだ。こっちは恵理とユエ」

「それは頼もしいな。．．．ところで、その兎人族を．．．売るつもりはないかね？それなりの値段を付けさせてもらうが」

挨拶もそこそこにウンケルは値踏みするような視線でシアを見る。兎人族で青みがかかった白髪を超がつく美少女、商人の性として珍しい商品に口を出さずにはいられないといった所なのだろう。首輪から奴隷を判断し、即効で所有者であろうハジメと飛羽真に売買交渉を持ちかけるあたり、相当優秀な商人なのだろう。

「う」

その視線を受けてシアは飛羽真の背後に隠れ、女性陣のウンケルを見る視線が厳しくなる。

「ほお、随分と懐かれていますな。．．．中々、大事にされているようだ。ならば、私の方もそれなりに勉強させてもらいますが、いかがですか？」

「貴方は優秀な商人のようだ。けどな、俺の答えはもう解ってるんじゃないか？」

そう言うのと飛羽真はシアの横に並びに肩に手を添えると抱き寄せる。

「こいつはもう俺の者だ。手放す気はないし、もし強引にでも手にしてうっていうんなら商人だろうと、国王だろうと神だろうとぶつ飛ばす」

「．．．仕方ありませんな。ここは引き下がりました。ですが、その気になりましたならば是非、我がウンケル商会をご最真に願いますよ」

飛羽真の本気度を理解したウンケルは一礼すると商隊の方へと戻っていった。すると、胸部に柔らかい感触を感じ、さらに腕が腰に回され抱きしめられた。

「ウザったい交渉を手早く済ませるために言っただけだ。勘違いするなよ？」

「うふふ、分かっていますよおっく、うふふふ」

「．．．でも、まあ、頑張り次第では言ったことが本当になるかもな」「っ!？」

シアのことはそれなりに気に入っている飛羽真は本気にさせてみるとシアだけに聞こえる声量で囁き、その囁きの意味を理解したシアは飛羽真に抱き着く力を強めた。

「じゃあ、6日後に」

「おう、フューレンで会おうぜ」

商隊の護衛で先行するハジメ達を見送ると、飛羽真は未だ抱き着いているシアに話しかける。

「いい加減離れろ」

「もう少しこのままでもいいさせてください〜」

「この3日間ですべておくことは一杯あるんだ・・よー」

「うきゃ〜!」

飛羽真はシアの脇腹を軽く擦り、力が抜けた瞬間、首根っこを掴んで放り投げた。投げ飛ばされたシアは驚いたものの宙で体勢を整えると体操選手のように華麗に着地した。

「そう遠くない未来、シアも飛羽真と同じ領域に入るかもしれないね」

「そうかいあんた達も行くんだね？」

「ええ、この町にいる間、お世話になりました」

ハジメ、恵理、ユエの3人がブルツクの町を出発してから2日目の昼。最短で本日受けた討伐依頼を終えた飛羽真とエルザはキャサリンに依頼完了の報告と明日、町を出るということを伝える。

「寂しくなるねえ〜。2日前に行つちまった3人にも言ったけどあんた達が戻ってきてから賑やかで良かったんだけどねえ〜」

「賑やかすぎだったの間違いじゃないですか？泊ってる宿屋の看板娘の奇行に、服飾店の巨漢の乙女、踏まれたいと言って土下座してくる変態、お姉さま”って連呼しながらストーキングする変態、決闘

を申し込んでくる阿保共……この町で出会った人達の7割が変態で2割が阿保、とんでもない町だったすよ」

「ふふふ、それハジメって呼ばれてた男の子も言ってたよ」

飛羽真がハジメと同じことを言ってたと笑いながら告げるキャサリン。

「まあ、何だかんだで活気があったのは事実さね。それで、あんた達は何処に行くんだい？」

「2日前に出発した3人と同じでフューレンさ」

「だったら、一緒に……ああ、さすがに全員一緒ってのは」

「無理だったんだなこれが。んで、配送の依頼ってないっすか？」

「うーうーくん、今のところそういった依頼は無いねえー」

「そうですか」

依頼は無いと聞いた飛羽真は移動ついでに資金も稼げればと思っていたがそれが出来ないと知りため息を吐く。

「あの子達にも言ったけど体に気を付けて元気でやりよ？この子に泣かされたら何時でも家においで。あたしがぶん殴ってやるからってここにいない子達にも言っておいておくれ」

「はい」

「あんたもこんないい子達を泣かすんじゃないよ？精一杯大事にしないと罰が当たるからね？」

「忠告とお気遣いありがとうございます」

キャサリンの言葉に飛羽真は苦笑いしながら返答する。そんな、飛羽真にキャサリンが1通の手紙を差し出した。

「これは？」

「あの子達もそうだけど、あんたも色々と厄介なものを抱えてそうだからね。町の連中が迷惑をかけたお詫びのようなものだよ。他の町でギルドと揉めた時は、その手紙をお偉いさんに見せな。少しは役に立つかもしれないからね。それと、これはおまけだよ」

キャサリンは渡されていた飛羽真のステータスプレート返す。

「おいおい、勝手にこんなことしていいんですか？」

返されたプレートを見ると赤だったランクが紫に変わっていた。

「問題ないよ。金とまではいかないけど黒にまで上げてもいいとあ
たしは思ってるんだよ?」

「そんなことしたら上にいるお偉いさんが黙ってないんじゃない?」

「大丈夫、大丈夫、上もあたしがそう判断したのならそうなんだから
うって思うから。おっと、詮索は無しだよ? いい女には秘密がつきも
のさね」

「・・・解りました。手紙とランクアップ、有難く頂戴します」

「素直でよろしい!色々あるだろうけど死なないようね」

謎多き片田舎の町のギルド職員キャサリン。ハジメ達同様、そんな
彼女の愛嬌のある魅力的な笑みと共に飛羽真達は送り出された。

第43話

ハジメ、恵理、ユエの3人がブルックの町を出発してから3日後。飛羽真達は予定通りフューレンへ向けて出発した。出発するさい、一悶着あったが何とか納めることが出来た。

「キャンピングカーだった車がトレーラーハウスに進化していたとは」

更に広くなった車内で飛羽真が呟く。

「これからのことも考えると設備は充実してた方がいいかな〜〜として思っ。ここ数日で作り上げたのだ〜！」

飛羽真のつぶやきが聞こえたのか東が胸を張って答える。その際、2つの大山が揺れ、ミレディが周囲を見回した後、親の仇でも見るような目になったのはここ最近のお約束だ。

東がオスカーの協力の元、造ったこのトレーラーハウス、キャンピングカー同様、空間魔法で内部を拡張しており収容人数は50人と増え、トレーニングルーム、物を作る工房、薬や成長増長の食物を育てるための農場等々キャンピングカーにはなかったものが設置されている。

「ふむ、これを見るに南雲君たちはようやく半分まで進んだって所だね」

「では、車の走る速度をギリギリまで落としましょう。追いついてこれを見られでもしたら面倒ですの〜」

「そうだね〜。シーちゃんを売ってくれて言ってきたあの商人ならこれの有能性を1発で理解しそうだし〜」

画面に映し出されるトータスの地図とハジメ達が今どこにいるのかを示す赤い丸を見ながらオスカー、シユテル、東が速度の調整を行う。

「そうだ！シーちゃん、ドリユッケン貸して」

「へ？ドリユッケンをですか？構いませんけど、何するんですか？」

「シーちゃんに切り札を上げようと思っね」

シアからハンマーを受け取った束はあくどい笑みを浮かべながら質問に答えると、工房へと向かっていった。

「シユテル、束さんがぶっ飛んだものを作らないよう見張っておいてくれないか？」

「仕方ありませんね」

シユテルとしても教え子であるシアに変な装備を追加されて、支障をきたされても困るため束の見張るために工房へと向かっていった。

「んじゃあ、俺はトレーニングルームに行ってみるか。ピナ、○○○
○、行くぞー！」

「きゆるー！」

「カゲー！」

「おお」

トレーニングルームに入った飛羽真はその広さに驚き、声を上げた。

「これだけの広いなら模擬戦も可能だな。よし、ピナ、ヒトカゲ。体力をつけるためにこの部屋を何周か周ってこい」

「きゅい」

「カゲ」

飛羽真は頭の上に乗っているピナと足元にいる動物、ヒトカゲにそう言う。2匹は飛羽真に言われた通り、それぞれの方法で走り込みを始めた。

「それにしても生まれてきたのがヒトカゲだったとはな〜」

走っているヒトカゲを笑みを浮かべながら眺める飛羽真。ガチャで手に入れたポケモンの卵、その卵から孵ったのが目の前にいるヒトカゲだ。生憎ポケモン図鑑がないため、覚えている技、性別などは解らないが雄だと飛羽真は思っている。

「さて俺も走るか・・・ってなんだこのタッチパネルは？」

2匹に交じって部屋で走り込みをしようとした飛羽真は壁に見慣れた機器が設置されていることに気づいた。気になった飛羽真は画面をタッチすると画面が光、映像が映し出される。

「トレットミルにベンチプレス、ダンベル等々ジムにある機器だ。それに、これは6本腕の騎士人形に特殊訓練用装置?」

表示された映像を一通り見た飛羽真はベンチプレスをタップすると、何台出すのか?が表示されたので「1」と入力し「OK」のボタンをタップすると、トレーニングルームに1台のベンチプレスが現れた。

「どこから出てきたんだこのベンチプレスは?」

『解。部屋自体に量子化の処置が施されています』

「成程」

大賢者からの説明を聞き、ベンチプレスが現れた仕組みを知る飛羽真。試しに出したただけなのですぐしまった。そして、気になっていた特殊訓練用装置をタップする。

「何々、倍率を決めてください?取り合えず10にしておくか。

「訓練を始める前に周りに誰もいないことを確認してください?人は・・・いないな」

ピナとヒトカゲはいるが人はいないこと確認した飛羽真は「開始ボタンをタップした。すると、

「うお!」

身体に異常なまでに付加がかかり、床に叩きつけられた。

「な、なんだ、こ、りゃあ」

『告。部屋全体の重力場が発生しています』

「じゅ、重力、場?なんで、そん、な、もん、が?・・・ま、さか、あの、特殊、訓、練って」

『告。まずはピナとヒトカゲを何とかしたほうがいいと思われま
す』

「きゅ、きゅる」

「カ、カゲ」

大賢者に言われ、2匹の方を見ると飛羽真と同じように動けないで

いた。

「ぐぐ、身体強化腕部」

魔力で腕部を集中的に強化した飛羽真はボールに手を取り2匹をボールに戻した。2匹をボールに戻すと身体強化を腕部から体全体へと変え、立ち上がり、パネルをタッチして重力を解除した。

「はあ、はあ、はあ」

仰向けになって床に寝っ転がりながら息の整える飛羽真。

「し、死ぬかと思った」

『告。失神又は骨折をしていないだけましだと思います』

「設定した重力は“10”。俺の体重は大体50〜55、その10倍……下手すれば死ぬな。大賢者、重力を使って修行する場合、何倍から始めたほうがいい？」

『解。1.5〜2Gから始めることを進めます』

飛羽真の問いに大賢者は現在の飛羽真に適した重力を伝えた。そして、小休止した後、大賢者の提示した重力下での鍛練を始めた。

そして、その日の晩、

「……………」

精魂尽き果てた飛羽真が死人のようにソファーに寝っ転がっていた。

「だ、大丈夫ですか飛羽真様？」

「だ、だいじよばない」

ゼストの質問にとある少女の口癖を真似して答えた。

「ねえ、ねえ、さっきトレーニングルームの使用履歴を見たんだけど、誰か特殊訓練用の装置使った？」

すると、工房でシアの武器の改造を行っていた束がやってきて全員に尋ねた。

「特殊訓練用の装置というとあれかい？設定した分だけ重力を増減させる」

「そう、それ」

オスカーの問いに束が頷いて答え、全員を見回しているとソファーに倒れている飛羽真を見つけた。

「・・・もしかして、とーくん」

「・・・俺だ」

「因みに、設定した数字は？」

「・・・1.5」

「確か飛羽真の体重は50〜55kg。その1.5倍というと」

「75〜83、力士1人分の重さだね。どのくらい使ってたの？」

「3〜4時間ぐらい」

飛羽真の答えを聞いた束はそれだけの時間使用してればそうなるねと呆れ。力士というものがどういったものか分からなかったゼシカとトータスの面々はゼストから力士について教えてもらい、呆れた視線を飛羽真に向けた。

「厳しい環境に身を置くことで人は強くなれるんだよ。実際、俺はそうやって強くなってきたからな」

「ですが、限度があります。今後は時間に十分気を付けて使用してください」

「・・・はい」

シユテルに正論に飛羽真は素直に頷いて答えた。

「995、996、997、998、999、1000」

重力発生装置で痛い目に遭ってから2日後の朝。今日、つというよりここ数日、特殊訓練用装置を使つての鍛錬をしている。

「ふう〜この重力にもだいぶ慣れてきたな」

ほぼ1日、重力の働いた部屋で過ごしたおかげかスムーズとまではいかないが基礎トレーニングに加え素振りを一定のリズムで行えるようになった飛羽真。長時間の使用は控えるようにと言われたのに使うあたり、最初から約束を守る気はなかったらしい。

「これも自動回復と超回復のお陰だな」

ガチャで手に入れ、覚えたこのスキル。この2つのスキルは〃ON

エルザが焦っていたことを察していた飛羽真は昔のようにエルザの頭を優しくなでながら論ず。

「さて、それじゃあ今日の鍛錬の仕上げと行くか」

充分に休憩を取った後、飛羽真はライドブックを使い、仮想空間を展開しようとしたとき、

『敵襲です！数は百以上！森の中から来ます』

シアから魔物の襲撃を知らせる車内放送が聞こえてきた。

「今日の鍛錬の仕上げは魔物狩りだな」

「これまた随分と多いな」

こつちに向かつてくる魔物の大群を前に飛羽真は呑気な声で話す。

「飛羽真、確認したところすべてが狼型の魔物です」

「どうするの飛羽真？」

「・・・ゼスト、全ての魔物を岩の壁で覆うことはできるか？」

「難しいです。ですが、一箇所に纏めて下されれば可能かと」

「なら、ゼシカ、ベル。重力魔法で魔物達を一箇所に集めてくれ。ゼ

ストは集まり次第、土魔法で奴らを天井以外を覆ってくれ」

「はい、はくくい。行くよゼシちゃん」

「ええ」

「引天」

飛羽真の指示を聞いたゼシカとミレディは重力魔法で引力球を作り、放つ。放たれた引力球は一定の距離で停止すると魔物達を引き寄せ始めた。前進していた魔物達は突然の出来事に慌てるも必死になつて前に進むもうとするが出来ず、ゼシカとミレディが放った引力球に引き寄せられる。

「ゼスちやくくん、襲い掛かってきた魔物は一箇所に集まったよ」

「分かりました。では」

レーダーで魔物達が一箇所に集まったことを束から教えられたゼストは土魔法で大地を操作、円状の土壁を作つて魔物達を囲い、動き

を封じた。

「よくやったゼスト。んじゃ止めと行くか」

魔物が土壁に囲われたのを確認した飛羽真は右手を上に掲げる。

「ドライファ・サンダーバースト」

魔法の名と共に掲げた右手を降ろすと、土壁に囲われ、動けない魔物達に向け極大の雷が降り注いだ。魔物達は瞬く間に灰となって消え去った。

「殲滅完了。んで・・・」

ゼストの造った土壁が崩れ、黒焦げとなった魔物達を見て飛羽真はそう口すると、スマホを取り出し、ガチャのアプリを開いて所持しているチケットの枚数を確認する。

「ガチャ券ゲットつと」

一気に100以上のチケットを入手したことに笑みを浮かべた。

「さくて、何が当たるかな〜?」

そして、持っているチケットの半分を使用してガチャを引く。ここ数日は鍛錬や冒険者の仕事で忙しくチケットを入手しても引いていなかったため少しワクワクしている。

「ほう、ほう、これは、これは・・・いいんじゃない」

大当たりだったのか飛羽真は笑みを抑えることが出来ていなかった。

今回、飛羽真がガチャで手に入れたアイテム

―スキル “全刀剣適正”

―烈龍刀 (SDガンダム 超SD戦国伝)

―アサルトウルフプログライズキー＋アサルトグリップ

―エクシードリング (FFBE)

―スキル “アイテムメイカー”

―アイテムレシピ (FFBE)

―晶石セット (各20個入り) ×10 (FFBE)

―素材セット (FFBE)

―ウルトラマン超闘志激伝全巻

―パールペンダント+4 (FFBE)

―異世界魔法の教科書 (失格紋の最強賢者)である。

第44話

「これは使えるな」

車にある工房で新しく手に入れたアイテムを鑑定していた飛羽真はその有能性に舌を巻いていた。

「エクシードリング。装着した者のHP、MPを30%、攻撃、防御、魔力、精神が50%アップするか。この場合はHPは体力、MPは魔力、攻撃は筋力、防御は耐性、魔力は魔法を使った際の威力、精神は魔耐って所かな？それが上昇するか」

まじまじと見ていた指輪を机に置き、今度はペンダントを手に取り、

「こつちのペンダントはハンマーを使っているときのみ攻撃が100%上昇。これはシアに渡したほうがいいな。魔導書については大賢者に頼んで全員の適性を調べてもらって渡したほうがいいな」

手に入れたアイテムをどうするかを決めた後、飛羽真は机に置いてある2冊の本を見て頭を悩ませる。

「漫画と『異世界魔法の教科書』、どっちを先の読むか。目下の悩みはこれだな」

腕を組んで悩む飛羽真。

「・・・大賢者、速読した内容をすべて記録できるか？」

『解。可能です。さらに魔法が書かれていた場合、その魔法の習得も可能です』

「ならこつちから先に読むか。漫画はじっくりと読みたいからな」

大賢者からの回答を聞いた飛羽真は『異世界魔法の教科書』を手に取り、読み始める。そして、速読すること30分。全ページを速読した飛羽真が本を閉じると、

『告。新たに『魔力撃』、『斬鉄』、『鋭利化』、『強韌化』等、本に書かれていた魔法を習得しました。更に付与魔法についての知識も習得しました。これにより魔剣の製作、及び強化が可能です』

「強化ってことはこれも強化することが出来るのか？」

大賢者の話を聞いた飛羽真は愛刀である『斬神刀皇』とハジメが

付与、飛羽真が製作した専用の刀を量子ボックスから取り出して尋ねた。

『解。可能です』

「でも、俺の愛刀もだがこっちの刀も限界まで強化してるんだぞ？出来るのか？」

『告。付与は刀ではなく魔石にです』

「魔石に？」

『解。魔法を付与した魔石に魔方陣を刻み、鏝などに嵌め込みます。そして装着させた魔石に魔力を流すことで付与した魔法が発動します。武器に直接付与することも出来ませんが効果によって流す魔法を変えなければならず、魔法を込めすぎると武器が耐えきれず、壊れる危険性があります。魔石に付与する場合、手間はかかりますが、魔方陣が魔法の変化を自動で行うため、魔力を流すだけで効果を発揮し、消費する魔力も少なくなります。ですが、付与が下手だと付与した効果が弱くなります』

「だが、俺は生成魔法の適性が高いから十二分に発揮できるってわけか」

『告。その通りです』

大賢者の説明を聞いた飛羽真はさつき倒した魔物から手に入れた魔石を取り出し、錬成魔法で小石ほどの大きさに加工すると魔石に魔法を付与し魔方陣を刻んだ。そして、刀のはばきに穴を開け、魔石をはめ込み、抜け落ちないようにしっかりと固定した。

「完了つと。さて、試し切りでもするか」

作業を終えた飛羽真はトレーニングルームに行き、試し切り用の岩を量子ボックスから取り出す。

「.....」

刀を正眼で構え、鏝にはめ込んだ魔石に魔力を流し、岩に向け刀を振るう。すると、まるでバターを斬るかのようにも容易く岩を両断した。

「おお」

斬った岩の表面を触ると、滑々だったことに驚く飛羽真。

になるのは間違いないだろう。だが、店主が一癖も二癖もある人物なのだ。皆が世話になったというのもありお世話になったお礼と町から出ることを言いに行つたとき、最後のチャンスとばかりにいい男を襲う巨漢となって襲い掛かってきたのだ。勿論、撃退した。後にそのことをハジメに言うところ「お前もか」っと同情された。

さらに都市に入る際、側に馬がないことを不審がられどうやってここまで来たのか？何故、飛羽真以外、身分証明書にもなっているステータスプレートを持っていないのか？シアは何処でどうやって手に入れたのか？等々、延々と尋ねてくる門番にキレた飛羽真は威圧することで強制的に質問を終わらせ都市内に入った。

「つたく、延々と質問してきやがって」

「まあ、まあ」

門番への怒りがいまだ収まらずイライラしている飛羽真をオスカーが宥める。

「取り合えず、先に到着しているハー君達と合流しよっか」

「・・・そうっすね」

ミレデイの話聞き、飛羽真達は予め決めていた合流場所である冒険者ギルドへと向かった。

「さすがに商業都市に構えているだけあってデカいな。さて、ハジメはっつ」

冒険者ギルドの大きさに関心しながら中に入る飛羽真達。飛羽真達が入ると、ギルド内にいた冒険者達が値踏みでもするかのように一斉に振りむき、舌打ちをした。そんな冒険者達を無視してギルド内を見回していると、

「いたいた」

ギルド内にあるカフェらしき場所で軽食を取っているハジメ、恵理、ユエの3人を見つけた。更に3人が座っている席には見知らぬ女性もいた。

「飛羽真、こっちだ」

飛羽真達がギルドに来たことに気づいたハジメが手を振るう。

「6日ぶりだなハジメ、中村、ユエ。馬車での旅はどうだった？」

「それなりに楽しめたぜ。男どもが煩かったのと恵理の手料理を食わせたことを除けば・・・な」

「ははは、そうか。それより、両手に花だつていうのにナンパか？」

「んなわけねえだろう？この人は・・・」

「初めまして。私はフューレンで案内人の仕事をしているリシーと言います」

ハジメが女性のことを話そうとするよりも早く、席に座っていた女性が立ち上がり飛羽真達に自己紹介をした。

「案内人？」

「悪いがもう一度案内人についてとフューレンについて説明してもらってもいいか？」

「はい。まずフューレンについてですが・・・」

ハジメの願いに嫌がることなく女性「リシー」はフューレンについての飛羽真達に説明を始めた。

都市の様々な手続き関係の施設が集まっている中央区、娯楽施設が集まった観光区、武器防具は勿論、家具類などを生産、直販している職人区、あらゆる業種の店が並ぶ商業区の4つのエリアに分かれている。東西南北にそれぞれ中央区に続くメインストリートがあり、中心部に近いほど信用のある店が多いというのがフューレンの常識だ。メインストリートからも中央区からも遠い場所には闇市的な店が並んでいる。値段は高いが時々とんでもない掘り出し物が並ぶことがあり、冒険者や傭兵のような荒事に慣れている者達が出入りしている。

そして、案内人とは観光などで訪れた者達の要望等を聞き案内等を行う。都市が巨大であるため需要が多く、案内人とはそれなりに社会的地位が高い職業でもある。

「以上がフューレンと案内人についての基本事項です。何かご質問はありますか？」

「いや、非常にわかりやすかったですよ」

「ありがとうございます。南雲様達はお泊りになる宿をお探しのことですが、八神様達も同じでしょうか？」

「ああ」

「でしたら、観光区へ行くことをお勧めしますわ。中央区にも宿はありますが、中央区で働く方々の仮眠場所という傾向が強いのでサービスは観光区のそれとは比べ物になりませんから」

「成程」

「ならここは素直に観光区の宿にしておこつか。リシーさん、おすめの場所つてありますか？」

恵理は何処の宿がおすすめなのかをリシーに尋ねる。

「お客様のご要望次第ですわ。様々な種類の宿が数多くございますから」

「そうだな・・・俺は料理が美味しくて、風呂があれば文句なしだが。皆は他になにかあるか？」

代表して飛羽真が要望を言い、他に何かないかと皆に尋ねる。

「ほぼ飛羽真と同じだからな。あるとすれば・・・責任の所在が明確な場所がいいな」

「せ、責任の所在ですか？」

飛羽真の要望を聞き、脳内でオススメの宿をリストアップしていたリシーがハジメの言葉に首を傾げ、尋ねる。

「ああ、例えば、何らかの争いごとに巻き込まれたとして、こっちが完全に被害者だった時に、宿内での損害について誰が責任を持つかってことだな。どうせならいい宿に泊まりたいが、そうすると備品なんか高そうだし、後で賠償額をふっかけられても面倒だからな」

「えーと、そうそう巻き込まれることはないと思いますわ」

困惑するリシーにハジメ、飛羽真、オスカーが苦笑いをする。

「まあ、普通なそうなんだろうけど、見ての通り僕達の同行者は奇麗所が多いだ、まあ、一人性格に難があるけど」

「もう、オーくんだったら」

オスカーに綺麗と言われ、ミレディが顔を赤く染めながら身体をくねらせる。どうやら最後の言葉は耳に入らなかったらしい。

「まあ、そういう訳で観光区だとハメを外す人が多いだろうし、商人根性逞しい人なんかは強行に出ないとも限らない」

「まあ、あくまで『出来れば』だ。難しければ考慮しなくてもいい」
3人の話を聞きリシーは軽食を食べる恵理とユエ、飛羽真やオスカーと一緒にいる女性陣に視線を移し、納得したように頷いた。全員が美少女で目立つ。現に今も周囲の視線をかなり集めている。他の女性陣にも視線がいつているが一番視線を受けているのはシアだ、兎人族で髪の色が他の者と違う。他人の奴隷に手を出すのは犯罪だが、しつこい交渉を持ちかける商人やハメを外して暴走する輩がいらないとは言えない。

「しかし、それなら警備が厳重な宿でいいのでは？そう言うことに気を使う方も多いのでいい宿をご紹介できますが？」

「それでもいいですけど、欲望に目が眩んだ人っていうのは時々、とんでもないことをするんでね。警備も絶対ではない以上、最初から物理的説得を考慮したほうが早いんですよ」

リシーからの提案に肩をすくめながら答える飛羽真。ブルツクに戻ってから泊まっていた宿の看板娘がいい例だ。

「ぶ、物理的説得……ですか。成程、それで責任の所在なわけですね」

完全にハジメが言ったことを理解したりリシーは、案内人根性が疼いたのか、やる気に満ちた表情で了承する。そして、他の面々に視線を移し要望がないかを尋ねた。

「商業区に近いところがいいわ」

「宿とは関係ありませんが、食材が安く、そして質のいいお店を教えてください」

「・・・お風呂があればいい、但し混浴、貸し切りが必須」

「えっと、大きなベッドがいいです」

ゼシカとゼストの要望はまだいい。だが、ユエの付け加えた要望とシアの要望を組み合わせると自然とある意図が透けて見えた。

「風呂の混浴はまだしも貸し切りは無視していいですよ」

ユエの意図が何となく分かった飛羽真が先にくぎを刺した。その

ことに抗議の視線をユエは飛羽真に向ける。

「風呂はゆつくりと入るものだ。頭で考えていることをする場所じゃない。もしそういうことをしたいんだったらあそこに行け」

「・・・解った。じゃあ、貸し切りは無しで」

飛羽真にそう言われ、貸し切りを断念するユエだった。

それから、他の区について話を聞いていると不意に強い視線を感じた。特に女性陣に対しては今までで一番不躰で、ねっとりとしたが向けられている。こういった視線に慣れていた女性陣だったがあまりに気持ち悪い視線に僅かに眉を顰める。

「(何だ?)」

気になった飛羽真はその視線の先を辿ると・・・豚がいた。肥えた体に脂ぎった顔、豚鼻と頭部にちよこんと乗っているベツトリした金髪。身なりだけは良いようで、遠目でもわかるほどいい服を着ている。そんなブタ男が女性陣に欲望に濁った瞳で凝視していた。

ブタ男は飛羽真達のいるテーブルのすぐ傍までやって来ると、ニヤついた目で女性陣を見やり、シアの首輪を見て不快そうに目を細めた。そして、今まで一度も目を向けていなかった飛羽真、ハジメ、オスカーにさも今気づいたような素ぶりを見せると、

「お、おい。ひゃ、百万ルタやる。この兎をわ、渡せ。そ、それとこの女どもはわ、私の妾にしてやる。い、一緒に来い」

傲慢な態度で一方的な要求をしてきた。ドモリ気味のきいきい声でそう告げて、女性陣に触れようとした瞬間、その場に凄絶な殺意が降り注いだ。周囲のテーブルにいた者達ですら顔を青ざめさせて椅子からひっくり返り、後ずさりしながら必死に飛羽真達から距離を取り始めた。

「ひ、ひい!？」

そして、その殺意を直接受けたブタ男は情けない悲鳴を上げながら尻もちをつき、後退することも出来ずにその場で股間を濡らし始めた。瞬時に意識を刈り取ることなどザラではないがそれでは意味がないので十分に手加減をしている。

「場所を変えようか」

飛羽真の言葉に頷き席を立つハジメ達。突然の展開にリシーが混乱気味に目を瞬かせた。困惑するリシーを他所に周囲を威圧しながらギルドの出入り口へと向かう飛羽真達。威圧を解いてギルドを出ようとした矢先、2人の大男が飛羽真達の進路を塞ぐような位置取りに移動し、仁王立ちした。ブタ男とは違う意味で100キ口はありそうな巨体である。全身筋肉の塊で一人は腰に長剣を差し、もう一人は戦斧を背負っており、歴戦の戦士といった風貌だ。

その巨体が目に入ったのか、ブタ男がきいきい声で喚きだした。

「そ、そうだ、レガニド、ダーガス！そのクソガキ2人と眼鏡男を殺せ！わ、私を殺そうとしたのだ！鬨り殺せ！」

「坊ちゃん、さすがに殺すのはヤバイですぜ。半殺し位にしときましようや」

「やれえ！いいからやれえ！お、女は、傷つけるな！私のだあ！」

「了解ですぜ。報酬は弾んでくださいよ？」

「い、いくらでもやる！きつさとやれえ！」

仁王立ちする2人の大男、レガニドとダーカスはブタ男に雇われた護衛らしい。飛羽真達から目をそらさずにブタ男と話、報酬の約束をすると笑った。珍しいことに女性陣は眼中にないらしい。見向きもせずにもらえる報酬にニヤついてるようだ。

「おう、坊主に優男。悪いな、俺達の金の為にちよつと半殺しになつてく・・・」

「どけ」

拳を構え鬨気を噴き上げた、瞬間、飛羽真の繰り出した正拳突きによつてダーカスは殴り飛ばされた。殴り飛ばされたダーカスはギルドの扉を突き破つてもなお勢いは止まらず、そのまま向かい側の建物の壁と激突すると、そのまま気を失った。

「・・・」

「隙だらけだぞ？」

何が起こったのか分からずにその場で固まるレガニド。そんな隙を逃すハジメではなく、拳を振るおうとしたとき、

「・・・ハジメ、待って」

「ユエ？」

ユエが制止の声をかけた。なぜ止めたのか？それを尋ねるよりも先にユエがハジメとレガニドの間に割って入った。訝しそうなハジメにユエは背を向けたまま答えた。

「・・・私とシアで相手をする」

「え？私ですか？」

シアの質問をさらりと無視するユエ。ユエの言葉にハジメが返答するよりも、正気に戻り、話を聞いたレガニドが爆笑する方が早かった。

「ガツハハハ、嬢ちゃんが相手をするだって？中々笑わせてくれるじゃねえの。何だ？夜の相手でもして・・・」

「・・・黙れ、ゴミクズ」

下品な言葉を口走ろうとしたレガニドに辛辣な言葉と共に神速の風刃が襲い掛かりその頬を切り裂いた。

「……………」

ユエの言葉通り黙り込むレガニド。

「・・・私達が守られるだけのお姫様じゃないことを周知させる」

ユエは何事もなかったかのように未だ意図が分かっていないシアに向けて話した。

「ああ、成程。ですが、それなら全員でやった方が・・・」

「・・・それだといじめ、もといオーバキルになる。ここは戦いなんて無縁な存在であろう私達の方がいい。私達に手を出せば手痛いしっぺ返しがかかることをこれを利用して周知させる」

先程とは異なる厳しい目を向けてくるレガニドを指さしながら言うユエ。

「まあ、言いたいことは解った。確かに、お姫様を手に入れたと思ったら、実は猛獣でしたなんて洒落にならないだろうからな。幸い、目撃者も多いし・・・いいんじゃないか？」

「・・・猛獣はひどい」

「ハジメ君はこの後、お仕置きだね」

「っ!？」

恵理からのお仕置き宣言に固まるハジメ。そんなハジメを無視してユエは先に行けと目で合図を送る。それを読み取ったシアは、背中に担いでいた大槌に手を伸ばすと、重さを感じさせずに一回転させ、手に収めた。

「おいおい、兎人族の嬢ちゃんに何が出来るってんだ？雇い主の意向もあるんで大人しくして欲しいんだが？」

「腰の長剣を抜かなくていいんですか？手加減はしますけど…素手だと危ないですよ？」

「はっ！兎ちゃんが大きく出たな。坊ちゃん！わりいけど傷の一つや二つは勘弁ですぜ」

レガニドは気づくべきだった、常識的に考えて愛玩奴隷という認識が強い兎人族が大槌を持つていることの違和感に。

すでに言葉はないと、シアは大槌を腰だめに構え…一気に踏み込み、レガニドの眼前に出現する。

「っ!？」

「やあー」

可愛らしい声音に反して豪風と共に振るわれた超重量の大槌が表情を驚愕に染めるレガニドの胸部に迫る。直撃の寸前、レガニドは辛うじて両腕をクロスさせて防御を試みたが、

「(重すぎるだろ!?)」

踏ん張ることなど微塵も叶わず、咄嗟に後ろに跳んで衝撃を逃がそうとするもスイングが速すぎてほとんど意味がなく、結果、生々しい音を響かせながら勢いよく吹き飛び、ギルドの壁に背中から激突した。

「へっ？」

まさかの展開にシアは拍子抜けしてしまう。

一方、レガニドは冒険者ランク「黒」にまで上り詰めた自分が兎人族の少女に手加減までされ、なお、拍子抜けされたという事実に笑うしかなかった。そして、何とか立ち上がった。だが、立ち上がったことは果たしていい事だったのか？

「(坊ちゃん、こりや、割に合わなすぎだ)」

半ば意地で立ち上がったれたレガニドだったが、氷の如き冷めた目で自分を見、右手を突き出してユエを見て、心の中で盛大に愚痴った。その直後、レガニドは生涯で初めて、「空中で踊る」という、貴重で最悪な体験をすることになった。

「舞い散る花よ、風に抱かれて碎け散れ『風花』」

詠唱と共に放たれた魔法でレガニドは空中に打ち上げられ、サンドバツクとなった。

「へえ〜、風魔法の『風爆』と重力魔法を組み合わせか〜。仮に体勢の立て直しが出来たとしても宙を移動する手段がない相手だったら無敵かもしれないね」

ユエが放った魔法を興味深そうに見ながら解説するミレデイ。

そして、空中での一方的なリードによるダンスを終えると、レガニドはそのまま嫌な音を立てて床に落ち、動かなくなった。

第45話

「これはまた」

ユエの魔法によってレガニドと呼ばれていた冒険者。ちゃんと生きているのかを確認するために近づいた飛羽真は攻撃を受け続けた部位を見て顔を青くする。脈を図り生きていることを確認した飛羽真はポケットに手をいれ、回復薬を取り出すとレガニドの身体全体にかけた。

「まあ、気休め程度だが、何もしないよりはましだろう」

そして、自分が殴り飛ばしたダーガスにも同じような処置をしようと思ったが、回復魔法士らしき人物が治療を行っていたのを見た後、ユエに近づき、

「やりすぎだ」

「・・・ふみゆ!?!」

少し強めのデコピンをくらわした。

「・・・っ!?!」

よほど痛かったのかユエはデコピンされた個所を両手で押さえながら痛みを悶える。

「・・・やりすぎっていうなら飛羽真も同じはず」

「俺はちゃんと加減してる。だけどお前は違うだろう? 男の急所ばかり狙いやがって。再起不能になったりでもしたらどうするつもりなんだ?」

「・・・クリスタベルのような漢女になればいい」

「あれを量産するな」

ユエの返答に飛羽真が本気で困っていると、

「ぎゃあああああ!?!」

男の悲鳴がギルド内に響き渡った。悲鳴の上があったほうに振り向くと、そこには、顔の至る所から血を流し、気を失っている豚男がおり、その傍にはハジメが立っていた。一部始終を見ていたオスカーとミレディの顔が引きつっていることからえぐいことをやったのだろ

う。

「~~~~♪」

それをやった本人は機嫌がよくなったのか鼻歌を口ずさみながら戻ってくる。

「じゃあ、案内人さん場所を移して続きを頼むよ」

何事も無かったかのように笑顔で話の続きをお願いした。

「はひーい、いえ、その、私、何といいますか」

ハジメの笑顔に恐怖を覚えたのかしどろもどろになるリシー。

「(まあ、こうなるわなあ)」

リシーの態度に飛羽真は苦笑いする。リシーの表情はこれ以上関わりたくないと見て取れる。ハジメもそれを察しているがこの騒ぎの後に新しい案内人を探すのが面倒なので逃がすつもりはなかった。そんなハジメの意図を悟った恵理とユエがリシーの両脇を固める。

これ以上はリシーの精神が持たないと判断した飛羽真がやめろと言おうとしたとき、

「あの、申し訳ありませんが、あちらで事情聴取にご協力願います」傍観者に徹していたギルド職員が今さらながらやって来た。

「そうは言ってもな、あの豚が俺達の連れを奪おうとして、断ったら逆上して襲い掛かってきたから返り討ちにしただけだ。それ以上説明することはない。そこにいる案内人や、その辺にいる男連中も証人になるぞ。・・・特に、近くのテーブルにいた奴らは随分と聞き耳を立てていたようだしな？」

「それは分かっていますが、ギルド内で起こされた問題は、当事者双方の言い分を聞いて公正に判断することになっています。・・・規則ですので冒険者なら従って頂かないと」

「公正ねえ？容姿はあれだがあの男の着ている服はかなりいいうえに高そうな指輪をもっていることから貴族つてところか？この都市でどれだけの権力を持っているかは分からないが、地位しだいでは根回しされてこつちが負けになるってことも考えるんだがどうなんだ？」

「そ、それは」

飛羽真の問いにギルド職員はありえないと断言することが出来な

かった。

「それに、あの2人：いや、俺がぶつ飛ばした奴も含めると3人か。その3人が目を覚ますまでこのギルドで待ってっていうのか？被害者である俺達か？」

「えっと、その」

飛羽真の言葉にギルド職員はどういえばいいのか分からずに焦り始める。すると、

「何をしているのです？これは一体何事ですか？」

眼鏡をかけた理知的な雰囲気を漂わせる男性が厳しい目で飛羽真達を見ていた。

「ドット秘書長！いい所に！これはですね・・・」

ギルド職員達はこれ幸いとドットと呼ばれた男性のところへと向かい、何があつたのかを話始めた。職員達から話を聞き終えたドットは飛羽真達に鋭い視線を向ける。

「話は職員達から聞かせてもらいました。証人も大勢いることですし嘘はないでしょうね。やり過ぎな気もしますが死んでいませんし許容範囲としましょう」

ドットは眼鏡を押し上げながら落ち着いた声音で飛羽真達に話しかける。

「取り合えず、彼らが目を覚まし一応の話を聞くまではフューレンに滞在してもらうとして、身元証明と連絡先を伺っておきたいのですが・・・それまでは拒否されたりはしないでしょうね？」

「(飛羽真、これって)」

「(これ以上は譲歩しないってことだろうな。今いる中では信用できそうだからいいんじゃないか?)」

念話でドットの言外の意味を確認しあうとハジメは肩を竦める。

「ああ、構わない。そこで寝ているブタがまだ文句を言うようなら、むしろ連絡して欲しいくらいだからな。今度はもっと丁寧な説得を心掛けるよ」

ハジメの話を聞きドットは呆れた顔をしながら差し出されたプレートを受け取る。

「連絡先は、まだ滞在先が決まってないからな。後でそこにいる案内人に聞いてくれ。彼女の薦める宿に泊まるだろうからな」

「ふむ、いいでしょう。……青が2人に、紫が1人ですか。外と向こうで伸びている彼等は、黒、何ですがね。……そちらの方達のステータスプレートはどうしました?」

「俺達以外は紛失してしまいましたね、再発行はしてないんですよ。高いですから」

正確には最初から持っていないが正しいが、それを知っているのは飛羽真達だけなので嘘とほんの少しの真実を織り混ぜて言う飛羽真。

「しかし、身元は明確にしてもらわれないと。記録をとっておき、君達が頻繁にギルド内で問題を起こすようなら、加害者、被害者のどちらか関係なくブラックリストに載せることになりますからね。良ければギルドで立て替えますが?」

「(さて、どうしようかねえ)」

身元証明は必要不可欠。だが、この場でステータスプレートを作成すれば、隠蔽前の技術欄に固有魔法やゼストの正体、神代魔法が確実に表示され騒ぎになることは間違いない。根掘り葉掘り聞かれ今後の予定に支障をきたす恐れもあるうえ、最悪の場合、教会に情報が洩れるかもしれない。

「兄上、キャサリンさんから貰った手紙を見せてはいかがでしょうか?」

「ギルドで揉めた時にでも出しって言われてもらったあの手紙か」

エルザに言われ、飛羽真は量子ボックス内にしまっていた手紙を取り出し、ドットに渡そうとするとハジメも同じようなものをドットに差し出す。

「何だ、お前も貰ってたのか?」

「ああ。ドットさん? つでよかったよな? 身元証明の代わりになるかわからないが、知り合いの職員に『困ったらギルドのお偉いさんに渡しな』って言われたんだが」

「知り合いのギルド職員にですか? ……拝見させてもらいます」
服装の質からそれほどお金に困っているように思えなかったドット

トは、ステータスプレートの再発行を拒むような態度を示す飛羽真達に疑問を覚えたが、飛羽真から差し出された手紙を開いて流し読みする内に驚愕の表情を浮かべると、ハジメの手紙も開き流し読みする。そして、飛羽真達の顔と手紙の間で視線を何度も彷徨わせながら手紙を何度も繰り返し読み込む。目を皿のようにして手紙を読む姿からして手紙の真贋を見極めてるように思える。

「この手紙が本当なら確かな身元証明になりますが……この手紙が差出人本人のものなのか私一人では少々判断が付きかねます。支部長に確認を取りますので少し別室で待っていてもらえますか？その時間は取らせません。10〜15分とくらいで済みます」

ドットは手紙を折りたたみ、丁寧に便箋に入れ直して、そう言った。

「(マジでキャサリンって何者なんだ?)」

予想以上の反応に飛羽真達は軽く引いてしまった。

「ま、まあ、それくらいなら構わないな。解った待たせてもらうよ」

「別室にはほかの職員に案内させます。では、後ほど」

傍にいた職員に別室への案内を言付けると、ドットは颯爽とギルドの奥へと消えていった。その後、お役目ゴメンですよねという眼差しを向けてくるリシーに待っているようお願いした後、ギルド職員に応接室まで案内させられ、待つこと10分、扉がノックされた。

「どつぞつ」

飛羽真の返事から一拍子置いて扉が開かれ、金髪をオールバックにした鋭い目つきの男性とドットが部屋に入ってきた。

「初めまして、冒険者ギルドフューレン支部支部長のイルワ・チャングだ。ハジメ君、恵理君、ユエ君、飛羽真君、ゼシカ君、シユテル君、ゼスト君、束君、シア君、オルク君、ベル君……でいいかな?」

簡潔な自己紹介の後、確認がてら飛羽真達の名前を呼び、握手を求め支部長イルワ。飛羽真は握手をしながら返事をする。

「ええ、構いませんよ。俺達の名前は手紙に?」

「その通りだ。先生からの手紙に書いてあったよ。随分と目にかけてられている……というより注目のされているようだね。将来有望、ただしトラブル体質なのでできれば目にかけてやって欲しいという

旨の内容だったよ」

「トラブル体質って」

「まあ、間違つてはない・・・ね」

イルワの言葉に恵理はブルツグの町で巻き込まれたトラブルの数々を思い出し苦笑いする。

「まあ、それはいい。肝心の身分証明の方はどうなんだ？それで問題ないのか？」

「ああ。先生が問題のある人物ではないと書いているからね。あの人の人を見る目は確かだ。わざわざ手紙を持たせるほどだし、この手紙を以て君達の身分証明とさせてもらおうよ」

「あ、あの・・・キャサリンさんって何者なのでしょうか？」

今いるメンツの中で一番キャサリンに懐いていたシアがおずおずとイルワに尋ねた。

「ん？本人から聞いていないのかい？彼女は王都のギルド本部でギルドマスターの秘書をしていたんだよ。その後、ギルド運営に関する教育係になつてね。今、各町に派遣されている支部長の5、6割は先生の教え子だ。私もその一人で先生には頭が上がらないのさ。その美しさと人柄の良さから当時は僕らのマドンナ的存在、あるいは憧れのお姉さんのような存在だった。その後、結婚してブルツクの町のギルド支部に転勤したんだよ。先生曰く『子供を育てるには田舎の方がいい』って言つてね。彼女の結婚発表は青天の霹靂でね、ギルドどころか王都全体が荒れてしまったよ」

「はあ・・・そんなすごい人だったんですね」

「・・・キャサリン凄いい」

「只者ではないと思つていましたが」

「まさか、中枢の人だったなんてね・・・。これには東さんもびっくりだよ」

「(つていうか、そんなにモテたのに今は・・・いや、止めておこう)」

聞かされたキャサリンの正体と経歴に感心する飛羽真達。ただ一人、ハジメは時間の残酷さに遠い目をしていた。

「身分の証明は出来たわけですし、もう行ってもいいですよね？早く宿を取って一息つきたいんで」

身分が証明された以上、この場に留まっている理由はないので後しようとする、

「少し待ってくれるかい？」

イルワが瞳の奥を光らせながら飛羽真達に待ったをかけた。

「実は、君達の腕を見込んで1つ依頼を受けてほしい思ってる」

「ことわ・・・」

「取り合えず話だけでも聞いてもらえないかな？聞いてくれるなら、今回の一件は不問にしようと思ってるんだが」

イルワが依頼の提案をした瞬間、被せるように断り、席を立ち、部屋から出て行こうとしたハジメだったが、続くイルワの言葉に思わず足を止めてしまった。

「さすが大都市ギルドの支部長を務めるだけあっていい性格してるぜ）話だけでも聞こうぜハジメ。依頼を受けるか受けないかは聞いた後でいいだろう」

「・・・ちっ」

どっちが自分達にメリットがあるのかを考え、結論に至ったハジメは舌打ちをしながらソファアに座った。

「聞いてくれるようだね。ありがとう」

「あくまで聞くだけです。ハジメにも言った通り、依頼を受けるか受けないか聞いた後で決めます。ああ、それと受けるのを断ったからと言って、不問の件をなしにするのは通用しませんからね？この場にいる全員が聞いてますし、この通り言質も取っておりますので」

そう言うのと飛羽真はさっき言ったイルワの言葉を再生して、この場にいる全員に聞かせた。

「いい性格をしているね」

「誉め言葉として受け取っておきます。んで？依頼というのは？」

「うむ、今回の依頼内容だが、そこに書かれている通り、行方不明者の搜索だ。北の山脈地帯の調査依頼を受けた冒険者一行が予定を過ぎて戻ってこなかったため、冒険者の一人の実家が搜索願を出し

た、つというものだ」

イルワから聞かされた話を要約すると、

最近、北の山脈地帯で魔物の群れを見たという目撃例が何件か寄せられ、ギルドに調査依頼がなされた。北の山脈地帯は一つ山を越えるとほとんどが未開の地域となっており、大迷宮の魔物程ではないがそれなりに強力な魔物が出没するので高ランクの冒険者がこれを引き受けた。ただ、この冒険者パーティーに本来のメンバー以外の人物がいささか強引に同行を申し込み、紆余曲折あつて最終的に臨時パーティーを組むことになった。

この飛び入りがクデタ伯爵家の三男「ウィル・クデタ」という人物らしい。クデタ伯爵は家出同然に冒険者になると飛び出していった息子の動向を密かに追っていたそうなのだが、今回の調査依頼に出た後、息子に付けていた連絡員も消息が不明となり、これはただ事ではないと慌てて搜索願を出したようだ。

「伯爵は、家の力で独自の搜索隊も出しているようだけど手数は多い方がいいと言い、ギルドにも搜索願を出した。つい昨日のことだ。最初に調査依頼を引き受けたパーティーはかなりの手練でね、彼等に対処できない何かがあったとすれば、並みの冒険者では二次災害だ。相応以上の実力者に引き受けてもらわないといけない。だが、生憎とこの依頼を任せられる冒険者は出払っていてね。そこへ、君達がタイミングよく来たものだから、こうして依頼しているというわけだ」

「その前提として、俺達にその相応以上の実力がないと駄目なのは？ 調査依頼した冒険者達のランクが何かは知りませんが最低でもランク「黒」が受けるべき案件だと思っうんですが？」

「その「黒」であるレガニドとダーガスを瞬殺したばかりだろうか？ それに、ライセン大渓谷を余裕で探索出来る者達を相応以上と言わずして何と言うのかな？」

「っ!?!なんでそれを知って・・・」

「(手紙に書かれていた？ だけどそんな話をした覚えは一度も・・・)」

イワンの発言にハジメは両目を見開いて驚き、飛羽真は何故キャサリンがそのことを知っているのか考えていると、

「あ、あの〜」

おずおずとシアが手を上げた。

「何だシア？」

「えつと、その〜ついでに話が弾みまして・・・てへ」

「・・・後で尻を千叩きだ」

「!?ユ、ユエさんもその場にいました！」

「・・・シア、裏切り者」

「2人纏めて尻を千叩きだ」

「・・・ハジメ、恵理、助け・・・」

「大人しく罰を受けろ」

「自業自得だね」

キャサリンがライセンス大渓谷のことについて知っていた原因はユエとシアだったようだ。飛羽真のお仕置き宣言にハジメと恵理に助けを求めたユエだったが、あっさりで見捨てられたことにショックを受けた。そんな様子を見て苦笑いしながら、イルワは話を続けた。

「生存は絶望的だが、可能性はゼロではない。伯爵は個人的にも友人でね、できる限り早く捜索したいと考えている。今は君達しかいないんだ。引き受けてはもらえないだろうか？」

懇願するようなイルワの態度には、単にギルドが引き受けた依頼という以上の感情が込められているようだ。伯爵と友人ということは、もしかするとその行方不明となったウィルとやらについても面識があるのかもしれない。個人的にも、安否を憂いているのだろう。

「そう言われてもな、俺達も旅の目的地がある。ここは通り道だったから寄ってみただけなんだ。北の山脈地帯になんて行つてられない。断らせてもらう」

「報酬は弾ませてもらうよ？ 依頼書の金額はもちろんだが、私からも色をつけよう。ギルドランクの昇格もする。君達の実力なら一気に『黒』にしてもいい」

依頼を断ることを見越していたイルワが報酬の話をする。

「いや、金は最低限でいいし、ランクもどうでもいいから・・・」

「なら、今後、ギルド関連で揉め事が起きたときは私が直接、君達の

後ろ盾になるといふのはどうか？ フューレンのギルド支部長の後ろ盾だ、ギルド内でも相当の影響力があると自負しているよ？ 君達は揉め事とは仲が良さそうだからね。悪くない報酬ではないかな？」

「何でそこまでするんですか？ こう言っただけでは何ですが、ご友人の息子とはいえ肩入れしすぎかと？」

何が何でもこの依頼を自分達に受けてもらいたいと感じ取った飛羽真はイルワに尋ねる。すると、今まで崩れなかったイルワの表情が崩れた。

「彼・・・ウイルにあの依頼を薦めたのは私なんだ。調査依頼を引き受けたパーティーにも私が話を通した。異変の調査といっても、確かな実力のあるパーティーが一緒なら問題ないと思った。実害もまだ出ていなかったしね。ウイルは、貴族は肌に合わない、昔から冒険者に憧れていてね・・・だが、その資質はなかった。だから、強力な冒険者の傍で、そこそこ危険な場所へ行つて、悟つて欲しかった。冒険者は無理だと。昔から私には懐いてくれていて・・・だからこそ、今回の依頼で諦めさせたかったのに・・・」

イルワの独白を聞きながら、飛羽真は僅かに思案する。思っていた以上に、イルワとウイルの繋がりには濃いらしい。すまし顔で話していたが、イルワの内心はまさに藁にもすがる思いなのだろう。生存の可能性は、時間が経てば経つほどゼロに近づいていく。無茶な報酬を提案したのも、イルワが相当焦っている証拠なのだろう。

「・・・・・・・・」

話を聞き飛羽真は考える。町に寄り付くたびに身分証明を持っていない面々についての言い訳をするのは、難しくなっていく。なにせ、聖教教会や王国に迎合する気がゼロである以上、いつ、異端のそしりを受けるかわからない。その場合、町では極めて過ごしくくなるだろう。個人的な繋がりや、その辺りの問題を解決できるのであれば嬉しい誤算だ。

大都市のギルド支部長が後ろ盾になってくれるというなら、この際、自分達の事情を教えて口止めしつつ、不都合が生じたときに利用

させて貰えばいい。ウイル某とは、随分懇意にしているようだから、仮に生きて連れて帰れば、そうそう不義理な事をするともないだろう。

「(どう思う大賢者?)」

『解。依頼を受けるべきだと推奨します。更に受ける際に……つとと言う条件も加えると』

「……あなたが提示してくれた報酬以外に2つ条件があります」
「条件?」

「そんな難しいことではないですよ。俺、ハジメ、中村以外の全員分のステータスプレートを作って欲しい。そして、そこに表記された内容について他言無用を確約すること。更に、ギルド関連に関わらず、貴方の持つすべてのコネクションを使って俺達の要望に応え、便上を図ること。この2つです」

「それはあまりに……」

「なら依頼は無しつてことで。俺達はお暇させてもらいます」

席を立とうとする飛羽真にイルワもドットも焦りと苦悩に表情を歪めた。一つ目の条件は特に問題ないが、二つ目に関しては、実質、フューレンのギルド支部長が一人の冒険者の手足になるようなものだ。責任ある立場として、おいそれと許容することはできない。

「何を要求するきかな?」

「そんなに気負わなくてもいいですよ。要求と言ってもそんなだいたいそれたものじゃありません。俺達は少々特異な存在なんで、教会あたりを目をつけられると……いや、これから先、ほぼ確実に目をつけられると思ってます。その時、伝手があった方が便利だと思っただけです。面倒事が起きた時に味方になってくれればいい。指名手配されても施設の利用を拒まないとかそんな程度の要求ですよ」

「指名手配されるのが確実なのかい? ふむ、個人的にも君達の秘密が気になって来たな。キャサリン先生が気に入っているくらいだから悪い人間ではないと思うが……そう言えば、そちらのシア君は怪力、ユエ君は見たこともない魔法を使ったと報告があったのを考えると他の皆も何かあるのだろう。その辺りが君達の秘密……か。そ

して、それがいずれ教会に目を付けられる代物だと。……大して隠していないことからすれば、最初から事を構えるのは覚悟の上ということか。そうなれば確かにどの町でも動きにくい、故に便宜をつとということか」

「(流石は大都市のギルド支部長。頭の回転が速いな)」

イルワの頭の回転の速さに飛羽真が感心していると、意を決したように飛羽真に視線を合わせた。

「犯罪に加担するような倫理にもとる行為、要望には絶対に応えられない。君達が要望を伝える度に詳細を聞かせてもらい、私自身が判断する。だが、できる限り君達の味方になることは約束しよう。これ以上は譲歩できないが……どうかな？」

「それで充分です。報酬は依頼が達成されてからで構いません。本人、もしくは遺品あたりで構いませんよね？」

飛羽真としては皆のステータスプレートを手に入れるのが一番の目的だ。この世界では何かと提示を求められるステータスプレートは持つていない方が不自然で、いつかは入手しようと思っていた。

問題は最初にステータスプレートを作成した者に騒がれないようにするにはどうすればいいかという事だったのだが、イルワの存在がその問題を解決した。ただ、条件として口約束にしても、やはり密告の疑いはある。いずれ、全員の特異性はばれるだろうが、積極的に手を回されるのは好ましくない。なのでステータスプレートの作成を依頼完了後にした。どんな形であれ、心を苛む出来事に答えをもたらした飛羽真達をイルワも悪いようにはしないだろうという打算も勿論入っている。

「本当に君達の秘密が気になってきたが……それは、依頼達成後の楽しみにしておこう。飛羽真君の言う通り、どんな形であれウィル達の痕跡を見つけてもらいたい……宜しく頼む」

イルワは最後に真剣な眼差しで飛羽真達を見つめた後、ゆっくり頭を下げた。大都市のギルド支部長が一冒険者に頭を下げる。そうそう出来ることではない。キャサリンの教え子というだけあって、人の良さがにじみ出ている。

「任せときな」

そんなイルワの様子を見て、飛羽真は立ち上がると気負いなく実に軽い調子で答えた。

その後、支度金や北の山脈地帯の麓にある湖畔の町への紹介状、件の冒険者達が引き受けた調査依頼の資料を受け取り、部屋を出た。そして、休憩スペースで待っていた案内人に急用ができ、おすすめの宿への案内はまた今度お願いすると言うと、ギルドから出て、手分けして買い出しを行い、湖畔の町へと出発した。

第46話

広大な平原のど真ん中に、北へ向けて真っ直ぐに伸びる街道がある。街道と言っても、何度も踏みしめられることで自然と雑草が禿げて道となっただけのものだ。この世界の馬車にはサスペンションなどというものはないので、きつとこの道を通る馬車の乗員は、目的地に着いた途端、自らの尻を慰めることになるのだろう。

そんな、整備されていない道を有り得ない速度で爆走する一つの影があった。凸凹の道を苦もせず突き進むそれは、束が開発、魔改造したトレーラーハウスだ。そのトレーラーハウスの屋根の上に一人の人物が寝っ転がっている。

「ふわあ〜〜。天気は快晴。暖かな日差し、魔法で心地いいまでに調整された風。昼寝するには最高の環境だな」

その人物とは勿論、飛羽真。心地よい風と暖かな日差しを全身に浴び、目を細めながら欠伸をしながら、現在地と目的地を示す地図が表示されたディスプレイを見る。

「（このペースならあと一日って所か。運転してるハジメのことだ・・・このままノンストップだろうな。それにしてもこうして屋根に寝っ転がるのも随分久しぶりだなく〜。まあ、寝っ転がってたのは車じゃなくて馬車だったけどな）」

「こんな所でよく寝っ転がっていられるわね」

車内へと続く道のドアが開き、ゼシカが顔を出す。そして、振り落とされないようにゆっくりと屋根の上に登ってくる。飛羽真の隣に腰かけた。

「よいしょつと。大丈夫だってわかっていても怖いものね」

「そうか？慣れればたいしたことないぞ？」

「貴方はそうなのかもしれないけど、私は初めてなのよ。落ちちやうんじやないかっていう不安が心にあるの」

「さいですか」

正論を言うゼシカに飛羽真はそれ以上何も言わず、日光浴を楽しん

でいると、

「何を考えているの?」

ゼシカが飛羽真に話しかけてきた。

「考えているって?」

「貴方とハジメは極力面倒ごとには首を突っ込まないようにしていた。なのに、今回は積極的に動いている。疑問に思うのは当然でしょう?」

「そんなたいした理由じゃないさ。亡骸や遺品を持っていくより生きていく奴を連れ帰ったほうが感じる恩は大きくなる。これから先、数えきれないほどの衝突が待っているだろうからな。後ろ盾は多いに越したことはない」

「・・・本音は?」

「いちいち相手にするのが面倒くせえ」

「だと思っただわ」

飛羽真の本音にゼシカはため息を吐く。

「まあ、実際、イルワ・チャングの後ろ盾がどの程度機能するか分からないし、もしかしたら何の役にも立たないのかもしれないが、保険は多いほうがいい。それに楽しみもあるしな」

「楽しみ?」

「買い出しをしながらあることを聞いたんだ。どうやら、今向かっている町は湖畔の町で水源が豊か、そのせいか町の近郊は大陸一の稲作地帯なんだとさ」

「稲作っていうとお米?」

「そう。まだ余裕があるとはいえ限りがあるからな、町の人と交渉して仕入れたいんだ。食い盛りの若者が多いからな」

「(いつもたくさん食べてるのは飛羽真なんだけどね)そういうえばまだ町の名前を聞きたいなかったわね。何て名前の町なの?」

「どの口が言うのよ」と心の中で思っていたゼシカは向かっている町の名をまだ聞いていなかったことに気づき、飛羽真に尋ねる。

「湖畔の町・ウルだ。(そう言えば、今あの町にはあの人がいるってギルドの情報盤に書いてあったな。・・・会ったらどうしていた

のとか、ゼシカ達は一体誰なのかとか色々聞いてきそうでも面倒だからなくくく会わないことを祈る)」

ゼシカの問いに答えながらギルドで得た情報を思い出し、思う飛羽真だった。だが、

「(どうしてこうなった)」

大人数が一緒に座れ、食べれるテーブルに席を尽き、自分達を睨んでくる少女「畑山愛子」に溜息を吐く。

事の発端はこうだ、ウル町の町に着き、宿泊場に着いたまでは良かったのだが、飛羽真、ハジメ、恵理の名前と聞き覚えのある声色を聞いた愛子が閉じていたカーテンを開いて飛羽真達の前に現れたのだ。愛子を見た瞬間、飛羽真はさっさとその場から退散しようとしたのだが、ハジメの呟いた「先生」という言葉で元の見た目とかけ離れてしまったハジメが自分の知る南雲ハジメなのだと確信し、詰め寄ってきたのだ。

「(んで、面倒ごとを起こした本人はのんきに料理を食べながら先生からの質問に答えてやがる)」

美味しそうにこの世界のカレーを食べながら愛子の問いに答えるハジメに飛羽真は呆れながら、別のテーブルに座り、自分を睨んでくる優花にどうしたものかと頭を悩ます。

すると、
「真面目に答えてください!!」

ハジメと恵理の適当な答えに怒った愛子が頬を膨らませながら怒鳴るが、全く迫力がなかった。

「むうくくく八神君!」

「ん?なんつすか?」

「南雲君と中村さんにした質問に代わりに答えてください!一緒にいるってことは知ってるはずですよね」

「知ってますけど、話す気があるなら兎も角、話す気がないっていうんなら俺も話す気はないですよ」

自分も話す気はないと言うと、飛羽真は作って貰った料理を食べよ

うとしたが、

「おい、お前達！愛子が質問しているのだぞ！真面目に答えろ!!」

飛羽真達の様子にキレた愛子専属護衛隊隊長のデビッドが拳をテーブルに叩きつけながら大声を上げた。

「食事中だぞ？行儀よくしろよ」

ハジメはチラリとデビッドを見ると溜息を吐きながらそういった。

「ふん、行儀だと？ その言葉、そっくりそのまま返してやる。薄汚い獣風情を人間と同じテーブルに着かせるなど、お前達の方が礼儀がなっていないな。せめてその醜い耳を切り落としたらどうだ？ 少しは人間らしくなるだろう」

相手にする気が全くないといった物言いに元々、神殿騎士にして重要人物の護衛隊長を任されているということから自然とプライドも高くなっているデビッドは、我慢ならないと顔を真っ赤にした。そして、何を言ってもものりくらりとして明確な答えを返さないハジメから矛先を変え、視線をシアへと向けていった。

侮蔑をたつぷりと含んだ眼で睨まれたシアはビクツと体を震わせた。ブルツクの町では、宿屋での第一印象や、キャサリンと親しくしていたこと、飛羽真達の存在もあって、むしろ友好的な人達が多かったし、フューレンでも蔑む目は多かったが、奴隷と認識されていたからか直接的な言葉を浴びせかけられる事はなかった。

つまり、シアは旅に出てから初めて、亜人族に対する直接的な差別的言葉の暴力を受けたのである。有象無象の事など気にしないと割り切ったはずだったが、少し外の世界に慣れてきていたところへの不意打ちだったので、思いの他ダメージがあったシアは顔を俯かせる。

よく見れば、デビッドだけでなく、チエイス達他の騎士達も同じような目でシアを見ている。彼等がいくら愛子達と親しくなろうと、神殿騎士と近衛騎士である。聖教教会や国の中枢に近い人間であり、それは取りも直さず、亜人族に対する差別意識が強いということでもある。何せ、差別的価値観の発信源は、その聖教教会と国なのだから。

デビッド達が愛子と関わるようになって、それなりに柔軟な思考が出来るようになったといっても、ほんの数ヶ月程度で変わる程、根の浅い価値観ではないのである。

あんまりと言えばあんまりな物言いに、思わず愛子が注意をしようとするが、その前に俯くシアの手を握ったユエが、絶対零度の視線をデビッドに向ける。最高級ビスクドールのような美貌の少女に体の芯まで凍りつきそうな冷ややかな眼を向けられて、デビッドは一瞬たじろぐも、見た目幼さを残す少女に気圧されたことに逆上する。普段ならここまでキレやすい人間ではないのだが、思わず言ってしまった言葉に、愛しい愛子からも非難がましい視線を向けられて軽く我を失っているようだった。

「何だ、その眼は？ 無礼だぞ！ 神の使徒でもないのに、神殿騎士に逆らうのか！」

思わず立ち上がるデビッドを、副隊長を務めるチェイスが諫めようとするが、それよりも早くユエの言葉が騒然とする場にやけに明瞭に響き渡った。

「……小さい男」

それは嘲りの言葉。たかが種族の違い如きで喚き立て、少女の視線一つに逆上する器の小ささを嗤う言葉だ。唯でさえ、怒りで冷静さを失っていたデビッドは、よりによって愛子の前で男としての器の小ささを嗤われ完全にキレた。

「……異教徒め。そこの獣風情と一緒に地獄へ送ってやる」

無表情で静かに呟き、傍らの剣に手をかけるデビッド。突如現れた修羅場に、生徒達はオロオロし、愛子やチェイス達は止めようとする。だが、デビッドは周りの声も聞こえない様子で、遂に鞘から剣を僅かに引き抜いた。

その時、

「ぐあ!?!」

今まで事の成り行きを静観していた飛羽真がこの場にいる全員が目視できないほどの速さでデビットに近づき、顔面を鷲掴み、持ち上げた。

「つが!?!あああああ」

突然の出来事に唾然とした面々だが、デビットの呻き声を聞いて我に返る。そして、飛羽真がデビットを攻撃していると察した騎士達が剣に手をかけて飛羽真に殺気を放つ。だが、その直後、騎士達が放つ殺気などとは比べるのもおこがましいほどの殺気が騎士達に放たれた。その殺気を受けた騎士達は床に膝をつき、体を震わせる。

「俺達はこれでも忙しい身なんですよ。今は関わりたいとも、関わって欲しいとも思っていないんです。そして、これまでであった事や、これからの事をいちいち話すつもりもありません。ここには仕事で来ただけで、それが終わればまた旅に出ます。それでお終い。もし旅先でまた会ったとしても互いに不干渉ってことで」

飛羽真は愛子を見てそう言うのと、鷲掴んでいる力を少し緩めデビットに話しかける。

「なあ、あれなんだか分かるか?」

鷲掴んでいない方の手を床を指さす飛羽真。指さした場所にはニルシツシルと呼ばれているこの世界のカラーが落ちていた。

「アンタさつき、思いつ切りテーブルを叩いたの覚えてるよな? 叩いた衝撃で落ちて食べなくなっちゃったんだよ」

「そ、それが、ど、どうしたと、いうのだ。料理など、また、注文、すれば、いい、だけの、こと」

「また注文すればいいだと?」

「がああああ!?!」

デビットの言葉を聞いた飛羽真は再び鷲掴むちからを強める。

「オーナーの話だと、材料が切れちゃって、出せるのは今出さされている料理だけだって申し訳そうな顔で言ってたぞ? だよな皆?」

飛羽真がハジメ達に尋ねると全員が頷いて答える。

「さて、この話を聞いたうえで、俺に何か言うことはないか?」

「う、薄汚い獣風情を同じテーブルに着かせる奴に言うことなどない」

「・・・そうか。一言謝るならこれ以上は勘弁してやろうと思ったんだがな。意地でも謝らないっていうんなら・・・。一片死んで来い」
そう言うと、デビットの頭を床に叩きつけた。

「食べ物への恨みは怖い。その身をもって償え」

第47話

「……………」

あまりの衝撃にその場にいた全員（ハジメ達除く）が目を見開いた状態で硬直する。デビットの頭部を鷲掴んでいた飛羽真が容赦なくデビットの頭部を床に叩きつけたのだから。

「床が木造作りだったことに感謝するんだな」

そう言うと、掴んでいたデビットの頭から手を放し、オーナーの下に行く。

「オーナー、これ食事代と迷惑料、そして修繕費です」

食事代を含めた代金をオーナーに渡す飛羽真。飛羽真から代金を受け取ったオーナーは貰った代金から食事代だけを抜き取り、残りは飛羽真へと返した。

「オーナー？」

「私も先ほどの騎士様の発言や行動には思うところがありました。貴方様のお陰でスッキリしました。です。でお代は食事代だけで結構です。残りの迷惑料と修繕費は教会に払ってもらいます」

オーナーの言葉に話を聞いていた騎士達が目を見開く。

「おや？お払いにならないと？でしたら、教会の騎士はマナーが悪いうえに幼い子供に怒られ、殺そうとしたと色々な人に言わないといけませんねえ」

「……教会を脅すというのですか？」

「脅すだなんてとんでもない。私は事実を言うだけです」

「……解りました。迷惑料と宿の修繕費はこちらからいたします」
不利だと悟った副隊長は迷惑料と宿の修繕費を払うことを了承した。

「ん？『不届き者を成敗した証としてスペシャルガチャ券1枚をプレゼントします』……何じゃこりゃ？」

差出人不明のメールが飛羽真の携帯に届き、差出人不明と書かれた

内容に不審がるも、

「・・・本当に入ってる」

アプリにスペシャルガチャ券1枚が確かに入っており、不気味がる飛羽真だったが、腹の虫が鳴ってしまっただめ考えるのを止め、宿から出ようとする。

「ちよーや、八神君、何処に行くんですか!？」

「何処って・・・夕飯用の材料を捕りに行くんですよ」

「捕りに行くなって何処にへ」

「何処でもいいでしょう？ハジメ、中村、後は頼んだ」

後のことを2人に任せると飛羽真は宿から出ていき、人気のないところまで行くと、量子ボックスからトレーラーハウスを出現させ、車の中に入り、今ある食材を確認し、夕食を作ろうとした矢先、ノック音が聞こえてきた。

「(ゼスト達・・・ではないな。もしかしてさっきの騎士が報復にもでもきたのか?)」

騎士達だった場合、ドアを開けた瞬間に襲い掛かってくる可能性もあるため、飛羽真は意識を戦闘モードへと移し、直ぐに動けるようにしてからドアを開けると、そこにはいたのは・・・

「・・・園部？」

優花だった。

「えっと、その、ひ、久しぶりね八神」

「・・・そうだな。立ち話もなんだ、上がれよ」

「う、うん。お、お邪魔します」

周囲を探り優花以外に誰もいないことを確認し終えた飛羽真は優花を車の中へと入れると、車を周囲の景色と同化させる装置を作動させた。車の中に入ると、優花は目の前の空間が信じられないのか、辺りを見回しては頬を抓るを繰り返す行い、何度目かの抓りで目の前の空間が現実のもののだと理解した。

「ううう」

「つたく、ほれこれを頬に当てて冷やしな」

抓り赤くなっただ頬を両手で覆いながら少し涙目になっている優花

に苦笑いした飛羽真は氷を入れた袋を手渡し、冷やすようにいう。

「あ、ありがとう」

「どういたしまして。改めて、久しぶりだな園部。元気そうで安心した」

「や、八神も元気そうで安心したわ。でも、無事だったのなら知らせの一つや二つぐらい欲しかった」

「城から追い出された身だからな、おいそれと近づくわけにはいかなかったのもあるが色々やることがあったんだよ。俺としては園部が城から出ている方に驚いた。あの一件以来、死ぬのが怖くて城に引きこもっている面々が多かったからな」

「・・・怖くないっていえば嘘になるけどじっとしていてもどうしようもないもの。だから、愛ちゃんの護衛のお手伝いをすることにしたの。まあ、天然で鈍感な愛ちゃんをあの騎士達から守るっていう意味もあるんだけど」

「もしかしてと思ったんだが、やっぱりそうだったのか」

デビットの発言と黙るように言われたときと軽蔑するような視線を受けたときの過剰なまでの反応で愛子に好意を抱いているのではないかと思っていた飛羽真だったが、優花から話を聞いてその考えが当たっていたことに苦笑いする。

「ならさっきの行動と発言で好感度は0を乗り越してマイナスに入ったな絶対」

「でしようね」

「ざまあ」と2人して笑っていると、飛羽真の腹の虫が再び鳴り響いた。

「・・・」

「そういえば、八神は夕飯を食べられてなかったわね」

「ああ。あの糞騎士様のお陰でな」

「・・・食材はあるの?」

「ん?ああ、食材に香辛料、一通りの物は揃ってるぞ」

「・・・そう。・・・よし。八神、ちよつとキッチンを借りるわよ」

「お、おう」

飛羽真から許可を貰った優花はソファアールから立ち上がるとキッチンへと向かうと、棚を開け、何処に何が入っているのかを確認した後、冷蔵庫を開けて必要な材料を取り出すと、調理を始めた。そして数分後、

「お待ちどうさま」

完成したオムライス、サラダ、スープを飛羽真の前に置いた。

「家の定番メニューよ。さすがにソースまでは作るのは無理だったけど、この手作りケチャップをかけて食べて頂戴」

「うまそうだ。んじや、頂きます」

目の前に並べられた品々から漂ってくる匂いを嗅いだ後、飛羽真は優花が作った料理を食べ始めた。

「ぷはあくくく美味かった！ご馳走様でした」

腹が減っていたせいもあったのか飛羽真は10分弱で優花が作った料理を完食、満足そうな表情で腹をさする。

「ゼスト以外の料理を食べるのは久しぶりだったけど、美味かったぜ園部。料理の腕、上がったんじゃないか？」

「そう・・・かな？」

飛羽真に褒められたのがうれしいのか優花は指で髪をいじり始めた。

「や、八神、今まで何をしていたのか教えて。私も何をしていたのかを教えるから」

「・・・そうだな。園部になら話してもいいかもな」

今日までのことを教えて欲しいと優花に頼まれ、少し考えた後、飛羽真、これまでの事（トータスの事実を除いて）を話し始めた。

「私達が挑んだオルクス迷宮がただの本当の迷宮に挑むための試みに作られた場所だったなんて」

「しかも、一度入ったら攻略できるまで出ることが出来ないから」

「よく攻略できたわね」

「運が良かったんだよ。んで、俺がいなくなってからそっちは何があつたんだ？」

優花に自分達のこれまでの旅をかいつまんで教えたあと、城を出て

から起こった出来事を飛羽真は尋ねた。

「ふくくん帝国の皇帝が雫に求婚をねえ・・・」

雫が帝国の皇帝に求婚されたことを聞いた飛羽真の機嫌は一気に下がり、額に青筋がいくつも浮かびあがる。

「ふうくくくさて、飯も食べたことだしそろそろ宿に戻るとするか」

「もつと話していたかったけど、八神は明日速いんだったね」

「おう。詳しくは言えないが仕事で北の山脈に行くんだ」

ステルスを解除してから車を降りると、飛羽真は車を量子ボックス内へと収納する。あれだけ大きかったものが一瞬で消えたことに優花は目を見開く。

「え？え？」

「行くぞ、園部」

「ちよ、八神。ここにあったトレーラーハウスは何処に行ったの!？」

「ん？悪いが企業秘密だ。それより早く行くぞ。これ以上遅くなったら先生に何言われるか分かったもんじゃないからな」

「ちよ、待つてよ八神」

そう言うのと飛羽真は宿へ向かって歩きだし、優花は慌てて飛羽真を追いかけ、追いつくと一緒に宿まで戻っていった。

第48話

北の山脈の調査に向かった冒険者の探索のため、山脈に比較的近い町「ウル」に辿り着いた日の夜、ベッドに寝っ転がった飛羽真はデビットを成敗した時に獲得した「スペシャルガチャ」について調べていた。

「へえくくくスペシャルが付くだけあつていい券だな。これ一枚で好きなスキル、武器、召喚石と交換できる・・・のはいいんだが、多すぎないかこれ？」

投影される無数のスキル、武器、召喚石の数々に眩暈を覚える飛羽真。

「・・・いつそのこと直感に身をゆだねてみるか？」

『告。部の悪すぎる賭けになるかと』

「普通はそうだろうな。だが、俺は俺の運と直感に賭ける」

そう言うのと飛羽真は投影ディスプレイを操作してルーレット版を出現させる。すると、ホログラムでできたダーツが飛羽真の現れ、ルーレットが回り始めた。

「・・・！！ここだ！！」

両眼を閉じ、神経を研ぎ澄ました飛羽真は直感が示したタイミングでダーツを投げる。ダーツがルーレット版に刺さると、回っていたルーレットの回る速さが遅くなっていき、数秒後に完全に停止した。

「さてさてさくくして、何が当たったかなくく？」

何が当たったのかを飛羽真が確認すると、そこには「恋人（ラバーズ）」というスキルが表示されていた。

「何々くくく？スキル「恋人」は親しい女性の数に応じてステータスが加算される。魅了無効、大切な存在を守る為の戦闘時、ステータスが超上昇、親愛となった女性に魅了無効とステータス上昇効果を与える。・・・とんでもねえスキルが来ちゃったな」

スキルの効果説明を読んだ飛羽真はあまりの効果に頬を引きつら

せる。すると同時に通知音が鳴る。スマホの電源を入れると新しいアプリがインストールされたと表示されており、どんなアプリか気になった飛羽真はそのアプリを起動させる。

「好感度チエック？」

アプリを起動するとアプリの名が表示され、その後、フェイトやシルヴィア、木乃香といった女性陣の名前が表示され、現在の好感度レベルが表示される。どれだけの女性がいるのかを見ていると、

「何で、ラフタリアにフィード、メルティの名前まであるんだ？しかもレベル5で最大値になってるし」

共に戦った、戦友である女性陣の名前が登録されていた。

『解。愛にも色々あるからだと思われませう。彼女たちの場合友愛ではないかと思われませう』

「友愛・・・か。ならレベル5が最大なのも納得がいくな」

大賢者の解説に納得する飛羽真だったが、あることに気づく。

「このスキル、女性と親しくなればなるほど強くなっていくってことだろうか？チートじゃね？」

『告。チートを通り越してバグだと思えます。ですが、神と戦うのであれば大きな力になるかと』

「確かに、相手の力は未知数。強化は必然・・・か。取り合えず、このスキルのことは秘密にしておくか」

「恋人」の事は自分の胸の内にしまっておくことを決めた飛羽真。だが後日、とある者達は全ステータスが異様に上がっていることに気づき困惑するのであった。

そして翌日の早朝、北の山脈の調査に赴き、行方不明となった冒険者達とウィルの搜索をするため準備を整え、水妖精の宿から出る飛羽真達一行。その手には移動しながら食べられるようにと握り飯が入った包みを持っている。

「極めて早い時間だっというのに嫌な顔一つせずに用意してくれるなんて。さすが高級宿」

「飛羽真の包みは私達のと違って少し大きいわね」

「オーナーのフォスさんが『昨日召し上がつれなかつたので他の皆さまより大きめにお作りいたしました』だとさ」

飛羽真の包みだけ大きかったことに気づいたゼシカが飛羽真に尋ねると、飛羽真はその理由を教えた。

「・・・何となく想像はつくが、一応聞いておこう。・・・何してるんですか？」

北の山脈へと通じる北門までやって来た飛羽真達は北門の傍でたむろっていた愛子達に気づく。そして、ため息を吐きながらハジメが愛子に尋ねた。

「私達も一緒に行きます。行方不明者の捜索ですよ？人数は多いほうがいいです」

「却下」

愛子の言葉にハジメと恵理が声を揃えて答えた。

「行きたきゃ勝手に行けばいい。が、一緒は断る」

「な、何故ですか!？」

「単純に足の速さが違うからだよ。先生達に合わせて進んでなんていられないので」

「(人数分の馬がいるが、乗馬できんのか?)」

愛子達の後ろにある人数分の馬を見て、飛羽真は疑問を覚えた。

「ちよ、ちよつと。そんな言い方しなくてもいいじゃない。南雲や中村が私達の事よく思っていないからって、愛ちゃん先生にまで当たらないですよ」

ハジメと恵理の言葉にカチンときたのか優香が食ってかかる。

「はあ~~~~」

的外れな物言いにハジメは呆れた表情で溜息を吐くと無言で“宝物庫”から魔導駆動二輪を取り出した。

『?!』

何の前触れもなく大型バイクが出現したことに愛子達は驚く。

「理解したか？お前等の事は昨日も言ったが心底どうでもいい。だから、八つ当たりをする理由もない。そのままの意味で、移動速度が違うと言っているんだ」

「こ、このバイク。南雲が作ったのか？」

「まあな。飛羽真、行こうぜ」

「ああ」

ハジメの言葉に飛羽真は量子ボックス内からトレーラーハウスを取り出す。ハジメが出した大型バイクと同じようにいきなり車が出てきたことに愛子達（優香除く）は目を見開く。

「ま、待ってくださいー！」

啞然としている愛子達を無視して出発しようとする飛羽真達。すると、正気に戻った愛子がハジメの腕にしがみついた待ったをかける。

「いい加減にしてくれないか先生。行方不明者の搜索は先生達には関係ないはずだ。何でそんなに一緒に着いて行こうとする？」

しがみつく愛子をはがすことなど今のハジメには造作もないことだ。だが、それをしないのは体裁が悪いのと残っている少しの優しさからだ。

「じ、実は・・・」

話を聞いてくれると知った愛子は飛羽真達に着いて行きたい理由を話す。その理由は現在、行方不明になっている清水幸利の事だ。八方手を尽くして情報を集めているが、近隣の村や町でもそれらしい人物を見かけたという情報が上がってきていない。しかし、そもそも人がいない北の山脈地帯に関しては、まだ確な情報収集をしていなかったと思いが当たったのだ。事件にしろ自発的失踪にしろ、まさか北の山脈地帯に行くとは考えられなかったので当然ではある。なので、これを機に自ら赴いて、ハジメ達の搜索対象を探しながら清水の手がかりもないかを調べようと思ったのである。

「・・・清水が」

知る名前が出てきたことにハジメの心が揺らぐ。飛羽真、恵理、幸利。この3人はハジメにとって大切な友人だからだ。

「南雲君、先生は先生として、どうしても南雲君達からもっと詳しい話を聞かなければなりません。だから、きちんと話す時間を貰えるまでは離れませんし、逃げれば追いかけます。皆さんにとって、それは

面倒なことではないですか？ 移動時間とか搜索の合間の時間で構いませんから、時間を貰えませんか？ そうすれば、皆さんの言う通り、この町でお別れできますよ……一先ずは」

愛子はハジメに身を寄せると小声で決意を伝える。ハジメは、話の内容が内容だけに他に聞かれないよう顔を寄せた愛子の顔を見る。よくよく見ると化粧で隠してはいるが色濃い隈があることに気がついた。きつと、ハジメの話を聞いてからほとんど眠れなかったのだろう。

そして、愛子の瞳が決意に光り輝いているのを見て、昨夜の最後の言葉は失敗だったかと少し後悔した。愛子の行動力（空回りが多いが）は理解している。誤魔化したり、逃げたりすれば、それこそ護衛騎士達も使って大々的に搜索するかもしれない。

「先生の行動力を見くびっていた俺達の負けだハジメ」

「飛羽真。はあくく分かったよ。先生達の同行を許す。つと言つても話せることなんて殆どないけどな」

「構いません。ちゃんと南雲君達の口から聞いておきたいだけですから」

「はあく全く、先生はブレないな。どこでも何があっても先生か」
「当然です！」

ハジメが折れたことに喜色を浮かべ、胸を張る愛子、だったが、
「どうせならこの世界に来た時もその力を発揮して欲しかったもんだがな」

「はう!？」

飛羽真の言葉に撃沈してしまった。

「……連れて行くの？」

「ああ、この人は、どこまでも『教師』なんぞな。生徒の事に関しては妥協しねえだろ。放置しておく方が、後で絶対面倒になる」

「だね」

「ほえ、生徒さん想いのいい先生なのですなえ」

ハジメ達が折れた事に、ユエとシアが驚く。そして、ハジメの苦笑い混じりの言葉と、それに同意する恵理の言葉に愛子を見る目が少し

変わり、若干の敬意が含まれたようだ。飛羽真達も、ブレずに自分達の“先生”であろうとする愛子の姿勢を悪く思っていないかった。例え、既に生徒やクラスメイトというカテゴリーに何の価値も見出していないかったとしても、数少ない敬意を払うべき貴重な大人の一人であるとは思っているのだ。

「ハジメ、先生と他を乗せるのは頼んだぞ」

「ああ？ちよつと待・・・」

「待たない〜」

愛子のことをハジメに丸投げし、飛羽真は車に乗ろうとすると、

「飛羽真、さすがにこの人数は乗せられねえ」

「しようがねえな。じゃあ、誰か1人、こっちに乘れ」

「じゃ、じゃあ、俺が」

飛羽真の言葉にすかさず、男子2人が立候補する。あわよくばゼシカ達女性陣にお近づきになれたらいいと下心まるだしなのは明らかであった。

第49話

「ふむ、恋人「ラバーズ」の現状の効果はこんな感じか」
飛羽真はキャンピングカーにある自分の部屋の中で昨夜手に入れたレアスキル「恋人「ラバーズ」」の効果を確認していた。

フェイト・T・ハラオウン 好感度レベル30

近衛木乃香 好感度レベル30

シルヴィア・リユネハイム 好感度レベル30

エルザⅡランドール 好感度レベル25

ラフタリア 好感度レベル5 (MAX)

フィーロ 好感度レベル5 (MAX)

メルティⅡメルロマルク 好感度レベル5 (MAX)

リーシアⅡアイヴイレッド 好感度レベル5 (MAX)

エクレールⅡセーアッド 好感度レベル5 (MAX)

その他 セーアッド領に住む女性陣6人 好感度レベル5 (MAX)

八重樫雫 好感度レベル25

園部優花 好感度レベル11

ゼシカ・アルバート 好感度レベル20

シユテル・シユタークス 好感度レベル20

ゼスト 好感度レベル20

篠ノ之束 好感度レベル20

シア・ハウリア 好感度レベル18

フィリス・ハウリア 好感度レベル15

中村恵理 好感度レベル5 (MAX)

ユエ 好感度レベル5 (MAX)

「・・・自分のステータスを見たくないと思えたの今日が初めてだ」
好感度一覧を見た飛羽真は初めて自身のステータスを見るのが怖くなった。

「だが、以外だったのは園部だな。俺は女友達として見ていたんだ

が、あつちは俺のことを好きでいたただなんて」

どうしたものかと飛羽真が頭を悩ませていると、

『八神？私だけど、入ってもいいかな？』

「(なんちゆうータイミングでくるんだよ) お、おう、いいぞ」

その本人がやって来た。

「んで？どうしたんだ？何か問題でも起きたのか？」

「問題は起きてないわ。ただ、もうすぐ着くから来て欲しいって」

「分かった(さて、鬼が出るか蛇が出るか、不謹慎だが楽しみだな)」

飛羽真は心の中で少しワクワクしていた。

「ここが搜索隊とウィルが来た、北の山脈地帯・・・か。フェアベルンもそうだったが、ここも凄いな」

北の山脈地帯。標高千メートルから八千メートル級の山々が連なるそこは、どういいうわけか生えている木々や植物、環境がバラバラという不思議な場所だった。日本の秋のような色彩で溢れかえっているかと思えば、別の場所は真夏の木のように青々とした葉で一杯、逆に枯れ木ばかりという場所もあった。

また、普段見えている山脈を越えても、その向こう側にも山脈が広がっており、北へ北へと幾重にも重なっている。現在、確認されている4つ目までの山脈まで。

その見事な色彩を見せる自然の芸術に誰もが見惚れるなか、飛羽真はキャンピングカーを量子ボックスにしまうと、手を叩いて見惚れている全員の正気を戻した。

「ほれ、いつまでも見惚れてないでさっさと行くぞ」

そう言うと、飛羽真は山脈を登り始めた。

「そうだな。時は金なりっていうからな」

「束さん、映像は取ってあるんですよね？」

「もちのろん。後で撮った映像をお風呂場に映せるようにしないとね」

「それはいい案ですね。この景色を見ながらお湯に浸かる。この上ない贅沢ですね」

飛羽真に続くようにハジメ達も山を登り始める。

「ま、待って下さ〜い!？」

置いて行かれまいと慌てて飛羽真達を追いかける愛子達。

「あの、八神君。まずは何処に向かうんですか？」

「魔物の目撃情報があった中腹より少し上の六合目と七合目辺りですかね〜」

愛子の問いにそう答えながら飛羽真達は冒険者も通ったであろう山道をハイペースで進む。

「ここが六合目か」

そして、進むこと約1時間とちよつと、飛羽真達は六合目に到着した。早々に行方不明者の搜索を始めたかったのが、

「はあ、はあ、きゅ、休憩ですか・・・?けほ、はあはあ」

「ぜえー、ぜえー、だ、大丈夫ですか・・・愛ちゃん先生?ぜえー、ぜえー」

「うえつぷ、もう休んでいいのか?はあはあ、いいよな?休むぞ?」

「・・・ひゅーひゅー」

「ゲホゲホ、や、八神はまだ分かるが、な、南雲達は化物か」

想定以上に愛子達の体力がなく、休む必要があったからだ。

「体力がなさすぎじゃないか?」

「いや、今の僕達と皆を比べるのは酷だと思うよハジメ君」

「まあ、先生達は置いて行かれまいと殆ど全力疾走だったし、こういうのも当然と言えば当然だろう」

愛子達の体力の無さにハジメが辛抱気味にいうが、恵理と飛羽真は苦笑いしながら愛子達をフォローする。

「(一先ず休憩にするか)先生、俺達はこの先にある小川に行つて休みます。息が整え終えたら来て下さいね。つと、その前に」

「ぜえー、ぜえー、きゅ!?や、八神!？」

愛子にそう告げると飛羽真は四つん這いで必死に息を整えている

優花をお姫様抱っこすると、小川へと一足先に向かった。後ろで愛子が何か言っていたが、無視した。

「はあ~~~~いい音です~~~~」

優花を連れ、山道から逸れて山の中を進む飛羽真達。シャクシャクと落ち葉が立てる音を楽しみながら木々の間を歩いていると、川のせせらぎが聞こえてくる。大森林に住んでいたシアにとっては何じみのある心地よい音、その証拠に耳が「ピッコピッコ」と嬉しそうに跳ねていた。

そうして飛羽真達が辿り着いた川は、小川と呼ぶには少し大きい規模のものであった。

「・・・綺麗」

飛羽真に抱えられている優花は小川と木々の色彩のコラボレーションにそう呟いた。

「・・・飛羽真さん、周囲に魔物の気配はありません」

「俺も飛ばした無人偵察機で周囲を探したが、シアのいう通り魔物はいないみたいだ」

「なら一先ずは安心だな」

シアとハジメからの報告を受けた飛羽真は優花を川岸の岩に座らせると、量子ボックスから空のペットボトルを取り出し、水を汲みあげ、飲み始めた。

「ふう~~~~」

「や、八神。愛ちゃん先生の所に戻ったほうがいいんじゃない。今、魔物に遭遇したら、何もできずに食べられちゃうわ」

汲んだ水を飲み干し、一息ついている飛羽真に愛子達の身の心配をする優花。

「先生達なら問題ない。置いていく際、オルクさん作のゴーレムを何体か置いてきてもらったからな」

「オー君のゴーレムは強いから、大丈夫だよ」

「っほ。ならよかった」

飛羽真とミレディの説明を受けた優花は息をこぼした。

「さて、搜索方針を話し合うとするか」

「ウィルと行方不明の冒険者達がここに来たのも想定を探さないといけないな」

「川沿いに上流に移動した可能性もあるね」

「ああ。だから、役割分担をしようと思う。東さんは衛星を使って森の中を、ハジメは負担はかかるかもしれないが無人偵察機を使って上流を探ってくれ」

「了か〜い」

「分かった」

飛羽真から指示を受けた東はパソコンを取り出し、衛星から送られてくる映像を処理していき、ハジメは無人偵察機を飛ばして手がかりを探し始めた。

「残り面々は軽食の準備だ。腹は減っては何とやらだからな」

「私は、火をおこすための薪と食べれそうな山菜を拾ってくるわ」

「ゼシカ、私も手伝います」

「じゃあ、僕は魚を探ってくるね。ユエ、シアも一緒に来て」

「・・・ん」

「はいです」

「では私は白米を炊きます。飛羽真様、ライスクッカーをお願いします」

「あいよ」

「私達はどうかオー君？」

「僕はこの周辺を周りつつ薪や山菜を探ってくるよ」

「ん〜じゃあ〜私はユエちゃん達と一緒に魚を探ってこよおつと」

「・・・採りすぎて生態系を壊すなよ？」

「壊さないよー！」

飛羽真達は一端別れ各々が出来る事を始めるのだった。

第50話

「まあ、こんなもんかね」

そんなに長い間いるわけではないが拠点はあつたほうがいいと思つた飛羽真は量子ボックスに閉まっているワンタッチ式のテントを取り出し、設置していた。

「飛羽真、薪を拾ってきたわ」

「食べれそうな山菜も採ってきました」

「ご苦労さん、んじゃあ、火を起こしますか」

テントの設置が終つたタイミングで、薪を拾いに行つていたゼシカとシュテルが戻つて来た。飛羽真は2人から薪を受け取ると組み立て、火をつけた。

「飛羽真様、これを」

「おう」

いい感じに火が起こり始めると、ゼストが研いだ米をライスクッカーに入れて持ってきた。それを受け取つた飛羽真は、火の中心にライスクッカーを置き、炊き始める。

「後は汁物でも作るか。ゼスト、野菜を渡すから切つておいてくれ」
「畏まりました」

飛羽真は量子ボックス内から取り出した野菜をゼストに渡すと、コンロを取り出しその上に鍋を置いて小川から汲んできた水をいれる。ゼストが切つた野菜と出汁もいれ、火をつけ煮始める。

「お魚を捕ってきましたー！」

「・・・ん。大量」

「ふっふっふん！私達にかかれば朝飯前だよ」

魚を捕りに行つていたシア、恵理、ユエ、ミレデイが戻ってきた。言葉通り、大量の魚が浮いている。

「随分捕つてきたな。所で、何でシアはずぶ濡れなんだ？」

恵理、ユエ、ミレデイの3人が濡れていないのに対し、シアは全身

ずぶ濡れだった。

「あははは私には恵理さん達と違って魔法が使えないのでドリユツケンで水面を叩いて、水を打ち上げて捕まえていたんです」

「天気がいいとはいえ山の中で何やってんだ。ゼストからタオル貰って身体を拭いたら、焚き火で身体を温めろ」

「はい。へっくち」

「言わんこつちやない。ゼスト」

「はい。シア様、こちらに」

飛羽真に言われ、ゼストはシアを連れてテントの中に入っていた。

「まったく。だけど、こんなにあってもなく。取り合えず、人数分を焼いて、残りは内臓を取り出した後、冷凍するか」

「や、八神、手伝うわ」

「悪いな園部。じゃあ、人数分の魚を串にさしてくれるか」

「ええ」

魚の串さしを優花に任せた飛羽真は残りの魚を次々と捌き、内臓を取り出す。

「ふうふうこんなもんか。んじゃあ、お2人さん、頼んだ」

「・・・ん」

「ははは」

捌いた魚はユエとミレデイの氷魔法で冷凍され、量子ボックス内へと収納された。

「それにしても先生達遅いな。息を整えるのにどれだけかかっているんだ？」

未だにこない愛子達の様子を見に行こうとした飛羽真だったが、その数秒後、オスカーと共にやって来た。

「何で一緒？」

「ん？薪や食べれそうな山菜を探して近くを通ったら、護衛に残してきた騎士達と睨みあいをしていたんだ」

「・・・プラカードでも持たせておけばよかったか？」

「シユールな光景だね」

飛羽真の案を聞いたオスカーは苦笑いを浮かべた。すると、

「八神君！南雲君！中村さん！動けない私達を置いて行くななんて、良心というものはないんですか!？」

「ここに来る前に言いましたよね。着いてこれないようなら容赦なく置いて行くつて。それを実行したままでです。それと、良心が無いのかつて言ってみました。が、護衛と案内役を兼ねた騎士型のゴーレムも置いてきたんですよ?。」

「で、ですが」

「はあ~~~~先生。これ以上、ぎやあぎやあ騒ぐなら強制的に町に戻しますよ」

ぎやあぎやあ言ってくる愛子が煩わしくなったのか飛羽真は無言を言わせぬ表情で言う、1冊のライドブックを取り出し、起動させる。

『ブックゲート』

本が起動すると、飛羽真達の目の前に人並みの大きな本が現われ、ひとりでに開く。

「この本は今、ウルの町の正面門と繋がってます。この本に先生を放り込めばウルの町に逆戻り。清水を探せなくなる、それが嫌ならぎやあぎやあ、喚くな」

「は、はい」

飛羽真の迫力に愛子はそう答えることしかできなかった。愛子の言葉を聞いた飛羽真はライドブックを解除し、ハジメと束の元へと向かう。

「何か手掛かりになりそうな物は見つかったか？」

「いや」

「こつちは大きな足跡を見つけたくらいかな〜」

「足跡?」

「うん。これだよ〜」

飛羽真は束に近づき、衛星で見つけた足跡を見せる。

「これは随分でかいな」

映し出された足跡は大きく、象、以上の大きさだった。

「多分これがあのギルドマスターが言ってた謎の魔物じゃないかな
〜」

「ありえそうだな」

「この足跡、博物館で見た恐竜の足跡並みにでかいな」

「つまり恐竜並みにでかい魔物がいるってことか」

「どうするんだ飛羽真？」

「ハジメ、負担がかかるのは分かっているが、偵察機を動かせるだけ動かして手がかりを探してくれ」

「分かった。流石の俺も恐竜クラスの魔物とは戦いたくないからな」

飛羽真の指示に従い、ハジメは今、操作できる分の無人偵察機を飛ばそうとすると、

「皆さま、軽食の準備が整いました」

「・・・取り合えず、飯食ってからでいいか？」

「構わん」

タイミングよく軽食が出来上がったので、先に腹ごしらえをすることにした。

「んじゃあ、シユテル、ゼスト、ベル行くぞ」

「はい」

「はいは〜い」

軽食を食べ終えた飛羽真達は本腰を言えれて行方不明者達の捜索を始める。束が発見した巨大な足跡の魔物との遭遇を考え、隊を2つに別けることにした。単独での飛行が可能な飛羽真、シユテル、ゼスト、ミレデイの4人が飛んで七合目まで行き、そこから戻る形で捜索、ハジメは無人偵察機を操作して引き続き川辺の捜索、束もハジメと同じように衛星からの捜索に加え、飛羽真達4人のサポートも行う。残った面々は動けないハジメと束の護衛だ。

飛羽真の出した案に愛子は納得のいかない表情をしたが、着いてく

る条件を思い出し、渋々納得した。

そして、いくつかの取り決めを決めた後、飛羽真、シユテル、ゼスト、ミレデイの4人は飛んで七合目まで行く。

「ゼスト」

「承知しました」

飛羽真のめいにゼストは頷くと、片手を地面につけ、魔法で数体のゴーレムを作ると、森の中へと放った。

「どんな些細な事でもいい。発見したら教えてくれ」

「分かりました」

「そんじゃあ搜索を始めるぞ」

飛羽真達4人はそれぞれの方法で行方不明者達の搜索を始めるのだった。

第51話

「さて、受動探知」

本格的に行方不明者の探索を始めた飛羽真達一行。山脈の七合目まで一緒にやって来たシュテル、ゼスト、ミレデイの4人と別れた飛羽真は魔導書を読んで覚えた探知魔法を使い、目的の人物たちを探そうと試みたが、

「……覚えたてだから探知範囲が狭いな」

覚えたてのため探知範囲が狭く、困っていた。

「しゃくくしない。探知魔法を発動し続けながら歩くか」

この場に留まっても範囲が広がるわけでもないので移動することを決めた。そして、歩くこと数分、飛羽真はあることに気づいた。

「……人はまあ、いないの当然だが、魔物どころか動物すら探知できない？覚えたてで精度が低いせいだからか？……シュテル、応答してくれ」

『どうかしましたか飛羽真？』

「ちよつと、情報を共有したくてな。俺は覚えた探知魔法を使いつつ、歩いて探してるんだが、魔物どころか動物の反応も捉えられないんだが、そっちはどうだ？」

『飛羽真もですか』

「俺も？つてことはそっちも同じなのか？」

『はい。送られてくる映像に生物が映っていないのです』

シュテルに連絡を取った飛羽真は自分が得た情報を教えると、同じだと答えられる。シュテルの話聞いた飛羽真は他の2人とも情報を共有しておくべきだと判断し、連絡を取ると、同じ答えが返ってきた。

「どういうことなんだ？」

『考えられるのは野生の本能で何かを察し逃げたか。圧倒的捕食者に食べられた。この2つですね』

『どうしますか飛羽真様?』

「……」

ゼストの問いにどうしようか飛羽真が悩んでいると、地震でも起きたかのように、地面が揺れ、吐息のようなものが背後から聞こえてきた。嫌な予感を感じながら後ろを振り返った飛羽真の両眼にはあつち(メルロマルク等の転移した世界)でも数回しか見たことのないドラゴンが映っていた。

「……マジ?」

『どうしたのですか?』

「通信で話していた圧倒的捕食者であろうドラゴンが俺の目の前にいるんだよ。おっと」

圧倒的捕食者である白いドラゴンが目の前にいることをシユテル達に伝えた飛羽真はドラゴンの尻尾での薙ぎ払いを跳び上がって躲す。

「相手は待ってくれなそうなんで通信切るぞ。あと、このことはハジメ達に伝えておいてくれ」

『とう……』

「さて、本来ならパーティーを組んで戦うべき相手と1人で戦おうなんて無理ゲーもいいとこだが……やるしかねえな」

飛羽真はソードドライバーを取り出し装着する。

「相手が相手だからな、加減は無しだ」

『ブレイブドラゴン』

『ストームイーグル』

『西遊ジャーニー』

『烈火抜刀!』

そして、3冊のライドブックをドライバーにセットし、火炎剣烈火を引き抜く。

「変身!」

『語り継がれし、

神獣の、

その名は、

クリムゾンドラゴン!』

『烈火三冊! 真紅が悪を貫き、全てを燃やす!』

飛羽真の背後に巨大化した3冊のライドブックが現われ、開くと同時に龍、鷹、筋斗雲が飛びで、飛羽真の周りを回った後、右肩、胸部、左肩へと宿った。

「更に身体強化」

ライダーへの変身が完了すると、飛羽真は魔法による身体強化を發動する。

「行くぞ」

全ての準備を終えた飛羽真は背中の翼を広げると、飛び上がるとドラゴンへと向かう。

「グルアア!」

「っふ、はあ!」

ドラゴンの爪での一撃を横へと回転して躲した後、無防備な胸部へと剣を振るうが硬い鱗によって傷一つつけることが出来なかった。

「やっぱ硬いなっつと」

ドラゴンの鱗の硬さに悪態をつきながら急上昇して噛みつきを上昇して躲し、ドラゴンの攻撃範囲外で止まると飛羽真は一冊のライドブックを取り出す。

『ジャックと豆の木

・・・ふむふむ』

『習得一閃』

烈火にライドブックの力を読み込ませると、烈火を振るう。すると、剣から拳大の豆の弾丸が放たれ、ドラゴンの周りの地面に着弾する。そして、飛羽真が指パッチンをすると、地面に埋め込まれた豆から伸びた蔓がドラゴンに巻き付き、身体を自由を封じ込めた。

「お次はこれだ」

ドラゴンの動きを封じた飛羽真は烈火をドライバーに納刀し、トリガーを1回引く。

『必殺読破!』

『月闇居合!』

更に、左腰の必殺ホルダーに納刀している闇黒剣月闇のトリガーを引く。

『烈火拔刀！ドラゴン、イーグル、西遊ジャー！三冊斬り
ファ・ファ・ファ・ファイヤー！』

『読後一閃！』

烈火を右手で、月闇を左逆手で同時に抜刀し、必殺技を発動。ドラゴンに接近し、十字を描くように2本の剣を振るい、強烈な一撃を与えた。

「グルアアア!?!」

さすがのドラゴンも今の一撃は効いたらしく悲鳴を上げる。

「(このまま押し切る)」

反撃の隙を与えずに畳みかけようとする飛羽真だったが、ドラゴンは縛っている蔓を力づくで破ると、飛羽真にブレスを放った。

「しま……」

斬撃の威力を上げるためにトップスピードでドラゴンへと向かっていた飛羽真はまさかの攻撃に驚き、飲み込まれそうになる。だが、

「『黒渦』」

漆黒の渦が飛羽真へと放たれたブレスを飲み込んだ。

「これは」

「いや……危ないところだったね……とーくん」

「ミ……レア」

間一髪の飛羽真を助けたのは別行動を取っていたミレディだった。

「助かった。あのままだったら死にはしないがかなりのダメージを受けていただろうからな」

「どういたしまして……。それにしてもドラゴンって言ってたからもしかしてって思ったけど……やっぱり、竜人族だったんだね……」

「竜人族?」

「うん。吸血鬼族と同じでこの世界では希少な種族だよ。でも、生き残ってた何てね……」

「どういう意味だ?」

「後で話すよ」

含みのあるミレデイの言葉に飛羽真は尋ねるも後で話すと云われた。

「ふむふむ・・やっぱり。この子、誰かに操られてるね」

「何で分かるんだ？」

「魂が正常じゃないからね」

「レア、言ってることが本当なら討伐するのはまずいですね」

「シュテル、お前も来たのか。ゼストは？」

「とあることで少し遅れてきます。まずはあのドラゴンをどうにかするかが先です。レア、竜人族と言うことは人の姿もあるんですよ？」

シュテルはミレデイに尋ねる。

「うん。ちゃんと人としての姿もあるよ」

「なら、正気を戻させて人の姿に戻ってもらうか、気絶させて強制的に元の姿に戻す、取れる手段はこれだけです。つという訳で飛羽真、お願いします」

「やっぱ俺がやるのね。なら、動きを封じてくれ。巨体だから大丈夫かもしれないが、念には念を入れてな」

「分かりました。レア」

「はいはーい」

「ルベライト」

シュテルに言われ、ミレデイは重力魔法でドラゴンの周囲の重力を倍にして動きを停止させ、シュテルは拘束魔法で動きを封じる。

「んじゃあ、行きますか」

『龍騎インミラーワールド』

『必殺読破！ドラゴン。イーグル、西遊ジャー！三冊撃！』

ファ・ファ・ファ・ファイヤー！』

「おまけにコイツもだ」

『ブレイブドラゴン』

シュテルとミレデイの2人がドラゴンの動きを止めたことを確認すると、飛羽真は烈火をベルトに納刀し、龍騎インミラーワールドのライドブックを取り出し、起動させると背後に出現したライドブツ

クから真紅の龍「ドラグレッダー」が現われる。それを行ったあとベルトに納刀しトリガーを2回引いて必殺技を発動。さらにブレイブドラゴンのライドブックに触れてブレイブドラゴンを呼び出す。

「こぉ~~~~っ!」

独特の構えを行った後、周りを旋回する2匹の龍と共に空高く跳び上がると、ムーンサルトから蹴りの体勢に入る。そして、ブレイブドラゴン、ドラグレッダー、2匹の放つ火炎放射を受けて身に纏う。

「はあああ!」

そして、威力+速度が上がった跳び蹴りを動けないドラゴンに叩き込んだ。

「っ!?!」

飛羽真のライダーキックをまともに受けたドラゴンは悲鳴を上げることなく蹴り飛ばされ、爆発した。

「・・・やりすぎたか?」

「どっからどう見てもやり過ぎだよ!っというか、あの時も思たけど何で爆発するの?」

「知らん、そういう仕様だ」

ミレディの問いに答えた後、吹き飛んだドラゴンの元に向かい、生きてるかどうかの確認をすると、

「ふう〜よかった、ちゃんと生きてる」

ちゃんと息をしており、ほっとした。

「やった本人が言うのもなんだが、とりあえず傷を癒しておきますか」

飛羽真は回復薬を取り出し、ドラゴンに浴びせると、傷だらけだった身体が一瞬で治った。

「後は、目を覚ますまで・・・」

傷を癒し、ドラゴンが目覚めるまで待とうと言おうとした瞬間、ドラゴンの身体が輝き、繭のようなものが現われ、身体全体を覆う。そして、繭はだんだんと小さくなっていき、人1人が入れるくらいの大きさになると、霧散し、中からチャイナ服を着た銀髪の女性が現われた。